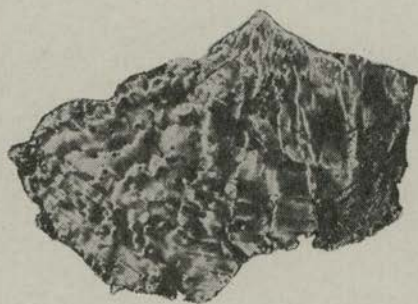


# 山 岳



LXXIX



エーデルワイス・マークの

# 好日山荘®

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

- 東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7千104 ☎03(561)3600・スキーショップ☎03(561)0966  
■大阪店 大阪市北区曽根崎1-2-8千530 ☎06(364)0933代 ■梅田店 大阪市北区曽根崎2-7-2千530 ☎06(315)7985代  
■セルシー店 豊中市千里中央<セルシー1階>千565☎06(833)0123 ■大阪三越店 大阪・北区三越新館2F ☎06(203)1331代  
■福岡店 福岡市博多区須崎町1-1☎092(281)3440・(291)6211

山 岳

一九八四年



山岳 一九八四年 目次

エヴェレスト・ライト・エクスペディション（一九八三年秋）	遠藤 晴 寛行	一
エヴェレスト無酸素登頂（一九八三年秋）	川村 昇 巳一	二
秋期ルートエから冬期エヴェレストまで	高橋 和 之	三
ヒムルン・ヒマール初登頂	堀 弘	四
好きな風に登ってくれ ―シヴリン西稜・南壁登攀―	関 政 久 樹 雄	五
サトパント西峰初登頂（一九八三年春）	大宮 求	六
ジヨギンI峰	青柳 かおる	七
西北ネパール・チャンラ山脈主峰試登（一九八三年）	遠藤 京 子	八
マツシャブルムアルパイン・スタイル	南 裏 健 康	九
ゴーリー・シャンカル西壁試登	富田 雅 昭	一〇
ナンガ・バルバート西面ディアミール壁登頂	高塚 武 由	一一
マツキンリー南壁アルパイン・スタイル	和田 昌 平	一二

彩られた高峰——試論・女性登山史ノート……………江本嘉伸…… 全  
 中国横断山脈東南縁部踏査紀行……………松本徑夫…… 次

☆

追悼  
 辻村太郎氏(小野有五)、成瀬岩雄氏(中屋健次・望月達夫)、角田吉夫氏(秋元常夫)、渡辺漸氏(田口二郎)、加藤恭平氏(島田 巽)、折井健一氏(山崎安治)、林和夫氏(橋本誠二)、大塚 武氏(望月達夫)、今井雄二氏(今井喜美子)、牧野文子氏(佐藤テル)、山下久男氏(太田義一)、皆川文弥氏(五十嵐恵紀)、樋口明生氏(斉藤淳生)、柳沢幸弘氏(雨宮 節)…………… 101

☆

図書紹介  
 日本山岳協会登山隊・NHK取材班著『喬戈里峯登頂記』、小西政継著『砂漠と氷雪の彼方に』(高橋善教)、嶋 満則・秋子著『ザイルの二人』(室井由美子)、植村直巳著『エベレストを越えて』(山田 新)、水野 勉著『登山家素描』(杉田 博)、栗師義美編『ヒマラヤ文献目録』(水野 勉)、リカルド・カシ著『大岩壁の五十年』(雨宮 節)、N. Clinch 著『A Walk in the Sky』(平井一正)、C. Bonington & C. Clarke『Everest: the Unclimbed Ridge』(末田達彦)、清水建美著『原色新日本高山植物図鑑(Ⅰ)(Ⅱ)』(松崎中正)、藤田和夫著『日本の山地形成論』(岩田修二)…………… 119

会務報告(一九八三年六月〜一九八四年五月)…………… 119

英文梗概…………… 卷末(1)

山岳と山村の変貌——南アルプス・スーパー林道が示すもの…………… 細 田 浩……………(13)

日本人による遠征・登攀ノート…………… 編集委員会編……………(14)

△編集後記…………… 卷末

写真・図版

- エヴェレスト・ライトエクスペディションに関するもの 写真6  
ローツェ・エヴェレストに関するもの 写真5  
ヒムルン・ヒマールに関するもの 写真4、図版1  
シヴリンに関するもの 写真4、図版2  
サトバントに関するもの 写真4、図版1  
ジヨギンI峰に関するもの 写真2、図版1  
チャンラに関するもの 写真4、図版2  
マツシャブルムに関するもの 写真3、図版1  
ゴーリー・シヤンカルに関するもの 写真5  
ナンガバルバートに関するもの 写真4、図版1  
マツキンリーに関するもの 写真4、図版1  
彩られた高峰に関するもの 写真5  
中国踏査紀行に関するもの 写真3、図版1  
追悼 写真——辻村太郎氏、成瀬岩雄氏、角田吉夫氏、渡辺 漸氏、加藤恭平氏、折井健一氏、  
林 和夫氏、大塚 武氏、今井雄二氏、牧野文子氏、山下久男氏、皆川文弥氏、  
樋口明生氏、柳沢幸弘氏
- 山岳と山村の変貌に関するもの

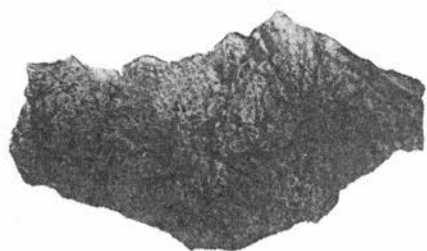
図版14

表紙カット

一原有徳

目次及び文中カット

一原有徳・児玉 茂





エヴェレスト・ライト・エクスペディション 一九八三年秋

——無酸素登頂 栄光と悲劇——

無酸素登頂を目指して

エヴェレストの歴史を語る時、一九五三年のイギリス隊の初登頂以前より論議されてきている無酸素でのエヴェレスト登頂の可否の問題を語らねばならない。

初登頂の約三十年前の一九二〇年代、イギリスはエヴェレスト初登頂を目指すべく遠征隊を組織した。それはチベット側の北東麓からによるもので、チベットが鎖国されるまで延べ七回の試登が行われた。その七回の試登のうち三回が、無酸素で八五〇〇呎を越えた。だが、残り三〇〇呎が当時は問題であった。

その時代の酸素擁護論者であったイギリスのフィンチ教授は、エヴェレスト登山での酸素の必要性を次のように説く、

「酸素補給の助けを借りずに、登山者がエヴェレストの頂上に達することが不可能なことは、我々科学的意見の最も強調している」と

遠藤 晴行  
鶉飼 寛

ころである。そして、エヴェレスト初登頂という登山隊の簡明卒直な真の目的は、なにがなんでも頂上に立つことにある」

酸素使用反対論者であり、イギリスのエヴェレスト委員会の長であったヤングハズバンドは、この意見に反論する、

「酸素に味方する人々は、もし遠征隊がすべての努力を酸素に、そしてそのみに集中したならば頂上に達し得たかも知れないと言いつ張る。なるほど理窟だ。それに違いないだろう。しかしその場合、人間がどの高さまで順応し得るかという貴重な発見は出来なかつたであろう。我々は未だに人間はどの点までその能力をのばし得るかを知らない。そして我々は山を登るために、我々自身の生まれつきの力をためす代りに、おそろくだんだんと人工的な援助に頼ることになるだろう。我々はおそらく我々の裡に力に充ちた行動力のあることを悟らなくなるだろう。科学の一部門が成功を勝ち得るで

あろうことは疑いのないことである。しかしその時、人間は自己を知るといふチャンスを失つてしまふであらう」そしてさらに「酸素なしのエヴェレスト登頂は、酸素の助けを借りた登頂に比べ、比較にならないほど高い値打ちがあるろう。それは人間の身体の可能性とその適応の能力を、学者に示すことにならう。そして我々、山を愛する人間は、酸素登山よりも更に大きな満足を中心に覚えるだろう」

だが、一九五三年の初登頂時に酸素使用を決定的にさせることが起きた。それは、その一年前のスイス隊がエヴェレストのネパール側の南東稜を八六〇〇<sup>メートル</sup>まで無酸素で登つたが敗退したことに関連する。そのスイス隊の報告の中に「超人ならいざ知らず、一般の人間が酸素器具なしでエヴェレストに取組むのは自殺行為に等しい。酸素器具なしで人間の到達し得る生理的限界は八五〇〇<sup>メートル</sup>前後であらう」とあった。だが、このこと以上にイギリス登山界にとって酸素使用を決定的にさせたのは、八次に及ぶ遠征隊を送り込み、多大な費用をかけたエヴェレストの頂を他国の登山隊に先を越されることこそ、酸素使用を決定づけた最も大きな要因ではないだろうか。

一九五三年春、エヴェレストは酸素を使用して初登頂された。ヒラリーとテンジンの登頂記、そして、隊長であったハントの報告の中には、酸素なくしては二人は頂上に達し得なかつたことが書かれてある。この初登頂によってエヴェレストは、酸素なくしては登れない山ということになり、以降一九七八年春のメスナーとハーベラーの無酸素登頂に至るまで、エヴェレストのみならず、八〇〇〇<sup>メートル</sup>峰において酸素は寵児の如くなつた。そして事実、七五〇〇<sup>メートル</sup>以上の睡眠中、あるいは行動中に酸素を吸えば登高が楽になり、登頂

の可能性が増すことが、これ以降の多くの登山隊によって確認されている。だが、これは登山家を随落させた。前述したとおり、一九二〇年代に、人間は八五〇〇<sup>メートル</sup>まで無酸素で到達できることが明らかになつてゐることからだ。

一九二〇年代に問題であつた残り三〇〇<sup>メートル</sup>に答えを出したのがメスナーとハーベラーであつた。この無酸素登頂という冒険は、戦前からの五十年以上にわたる酸素論議に、明解な答を出した。彼らの功績はそれだけではない。物量作戦に頼り、ロジスティクスが複雑にならざるを得ない酸素使用の登山が、酸素を使用しないことで、より少数で経済的に行えるようになった。これは登山隊の資金集めとその能力という非登山的な部分が解消され、真に登山者の能力が重要視されることになつた。よりフェアに、よりサヴァイヴァルになつたといふべきであらう。

エヴェレストの南東稜。そのルート自体には、すでに探險的要素もないし、ヒマラヤニストをとりこにする魅力もない。一九八三年に至るまで南東稜は、二十二隊・一〇五人が登頂している。サウス・コルの八〇〇〇<sup>メートル</sup>のキャンプ地には無数の酸素ボンベと登攀用具が転がっている。南東稜ルート上にも、空になつた酸素ボンベと背負子等が置き去りにしてある。

そんな登り尽されたルートに、私たちは何の意味を持たずに登ろうとは思わないし、価値を求めようとは思わない。私たちは、山が、ルートが困難であればあれこそ自分の生の躍動を感じ、燃焼できることを知つてゐる。この思想が、死に向かい、自己を破壊しよう

する危険な思想であることを充分認めている。だが、困難な山に、ましてやヒマラヤにまで出掛けようとする登山者は、少なからずこの思想を、心の片隅に持っているのではないだろうか。

国内で、ヒマラヤを目指して厳しい登攀を続けていても、結局ヒマラヤに出掛けてやっていることは、ヒマラヤの巨大さと、厳しい環境に適応できず、敗退していることが少なくない。そのため、次は必ず登頂できる手段として、物量作戦がたてられた。この物量作戦を持ってすれば、もはや今日、人間が登れない山はない。

つまり、これは岩登りでいうボルトと言替えることができるだろう。エヴェレスト南東稜は、ボルトの連打で登られた代表的な工ルートといえるのではないだろうか。メスナーが「フェアな手段で」という意味はここにある。そして、私たちもより少ないボルトでエヴェレストに挑もうとしたのだ。ボルトとは、酸素でありシエルパである。

一九八三年、吉野 寛を隊長とし禿 博信、沢上 登、遠藤晴行の各隊員と、医師として鶴飼 寛を加えたイエティ同人エヴェレスト登山隊が、組織された。合計五名という、エヴェレスト登山史上稀にみる少人数登山隊になったが『少人数による短期間のエヴェレスト無酸素登山』これが、幾多の登山隊を送り出してきた、イエティ同人の目的の集大成であり、何よりも、参加したメンバーすべてが、強くこの新しい登山を望んでいた。

しかし、その結果は、十月八日に四名がサウス・コルの第四キャンプを出発。夕刻、遠藤、禿、吉野の三名が登頂に成功したが、帰

路八八〇<sup>①</sup>付近にて禿が転落行方不明、その付近でビヴァークした吉野も翌朝滑落死するという残念な結果に終わってしまった。

この登山の行動概略や登頂前後については、報告書（EVEREST 1983）および『岩と雪』（一〇〇号）に詳しく書いたので、ここでは多言をしない。そこで、現在、私が遠征を振り返ってみて、高所登山の諸問題の中でも高所順応と高所障害について、素人ながら感じたことを書いてみたい。

七五〇<sup>②</sup>を越えるころから、登山者は体の中に微妙な変化を示す。それは、以前から順応の限界は、七五〇<sup>③</sup>前後といわれてきたことと、関連するのかもしれない。事実、七五〇<sup>④</sup>の第三キャンプまで、体力的に私より圧倒的に強かった吉野、禿そしてシエルパ二人でさえ、ほとんど私と同じスピードにペース・ダウンしてしまった。これは、私が高所に順応しやすいというよりも、七五〇<sup>⑤</sup>付近で体内に何らかの変化が起きるからではないだろうか。

サウス・コルまでルート作業を終え、全員がアドヴァンスト・ベース・キャンプである第二キャンプに集結し、アタック前の休養をとった。第二キャンプは標高六四〇〇<sup>⑥</sup>で、休養するには少し高いかもしれないが、アイス・フォール通過の危険と、アンナプルナI峰の経験からここに決定した。だが、この六四〇〇<sup>⑦</sup>という高度での回復力に差があったように思う。それは、第二キャンプを出発してから第三、第四キャンプを経て頂上に至るまで、まさにこの回復力の違いによって登行順序が決ったようなものであるからだ。

最終キャンプのサウス・コルには、アタック前日の午後四時から翌日の午前二時までの九時間滞在した。そのうち四時間が食事など

に費やされたが、残り五時間のうち私は四時間以上の睡眠をとった。吉野、禿は不明だが二〜三時間は眠ったのではないだろうか。沢上はほとんど眠っていない。この八〇〇〇呎以上での睡眠については、良悪の判断はつきにくい。私自身としては睡眠は、なるべくとることが疲労を回復させる、というよりも睡眠をとらない時よりも体力の消耗が少ないように思う。

高度をさらに上げると、八五〇〇呎付近でやはり何らかの変化が現れる。前述したエヴェレストの試登時代、無酸素で登られたのがこの高度であるというのに、私は興味を覚えた。そして、酸素を吸ってエヴェレストを三回登った加藤保男氏でさえ、八五〇〇呎付近で空気の層の違いがあると述べている。実際、私たちのスピードは衰え、それまで一時間に九十呎程の標高差を稼いでいたのに、八五〇〇呎以上では五十呎以下のスピードに落ちてしまった。八五〇〇呎付近は、七五〇〇呎付近と同様に、人間の体に大きな変化をもたらす何かがあるのではないだろうか。

登頂後、私は二人に出会った。禿の場合、登頂前のヒラリー・ステップの下で会った時とは違い、かなり疲労をしているように見えた。吉野は登頂者の中でも一番遅れていたにもかかわらず、私と元気な声で会話した。

その一時間後、暗闇に包まれてビヴァークせざるを得なくなつた時、八八〇〇呎のヒラリー・ステップ上にいた禿は、大きな叫びを残して、その後、転落してしまつたらしい。私は、彼が叫ぶところは見たが、転落するところは見ていない。翌日登ってきたアメリカの二次隊々員がヒラリー・ステップに禿のアイス・アックスを

発見したことが、彼がその時点で転落してしまったことを確実にした。

私は、ヒラリー・ステップの下、標高差にして四十呎、距離にして二〇〇呎程離れた南峰と頂上とのコルで一人ビヴァークした。吉野は、ヒラリー・ステップの下でビヴァークした。そこは禿が転落した場所だ。たぶん吉野は、目の前で禿が転落するのを、目撃したのである。吉野のその時の心境はどうであろうか、私には想像がつかない。狭いテラスに腰掛けた姿勢で一晩耐えた吉野は、翌朝、私を見かけ行動を開始した。だが、この行動に、いつも慎重な吉野とは思えない所があつた。チョゴリ(K2)の体験で彼は、超高所でのビヴァークが及ぼす危険性と身体に受ける障害を知っているはずだからだ。吉野は、私が待っていた南峰に辿り着く前に滑落してしまった。その直接の原因は、凍傷による平衡感覚の欠如や、視力障害などが考えられる。彼はチョゴリの八三〇〇呎でのビヴァーク後に、これが発症している。それとともに、目の前で禿の死を知っている吉野にとって、死の恐怖と、すべての判断力を失わせる超高所の苛酷なビヴァークが、吉野を危険な行動に移らせた原因かもしれない。

私自身、吉野よりも好条件でビヴァークしたが、翌朝は、まるで酔払いのように足どりが定まらなかつた。南峰で吉野がくるのを待っていたが、こなかつたので単独で下降した。ようやく第四キャンプに戻つた。午前十一時という早い時間にもかかわらず、もうこれ以上は下降できなかった。約三十時間の超高所での登攀中、飲まず食わずで行動した反動が、この時一気に吹出たのだろう。幸いシエ

ルバの介抱によって何とか体力を維持でき、八〇〇〇呎以上での三晩目の夜を切抜けることができた。

翌朝、極度の疲労状態の中で、吉野と禿の遭難を感じた。二晩続けて八〇〇〇呎以上で、着の身着のままのビヴァークはどんな人間でもできない。私自身、体力の消耗度からいって、これ以上高所で滞在することは死を意味するのを感じていた。私は迷わず下降を決意した。

下降するにつれ、私の意識だけは、はつきりしてきた。私は、夢遊病者のように、いや医師の鵜飼のことばを借りれば、生きているのが不思議な程、ボロボロになって第二キャンプに辿り着いた。翌日、吉野の遺体と禿の登山靴が南西壁基部の六五〇〇呎付近で発見され、私たちのエヴェレスト遠征は幕を閉じた。

以上でエヴェレスト遠征後、私が感じたことを書連ねてきた。これらをまとめると、八〇〇〇呎峰の無酸素登山は、経験、体力、技術は必要欠くべからぬものだが、その他に高所順応力と低酸素に対する脳の細胞の抵抗力といったものがある。

順応力については、私は以前よりいわれたきた順応と衰退の曲線が交差する高度が、七五〇〇呎付近ということに賛成である。その高度を超えると激しい消耗との戦いになる。その個人個人の消耗度と体力との関係によって限界高度が決るように思う。ただ、それ以外に意志・意欲・判断力といった精神的なものを見落してはならないだろう。それが備わった人ならば、八五〇〇呎付近までは無酸素で登れるであろう。八五〇〇呎以上はまさに死の地帯である。脳の働きは著しく低下し、安全登山というものは期待しにくい。その脳

の抵抗力については、現在何もわかっていない。

ただ現在はつきりしていることは、その死の地帯をより早く脱出できるもの、つまりよく順応していて、体力のあるものほど危険は少ない。これは明白な事実である。

ヒマラヤ登山も、よりスポーツ的になってきた今日、高峰の自然の脅威に対抗できるのは自らの肉体でしかない。より困難を、より安全を目指すのなら、順応力や脳の抵抗力といった不確実なものより、体力の強化以上に優れているものはない。経験、技術、判断力といった基本的なものが備わった上での話だが。(遠藤晴行)

#### ザ・ロンゲスト・デイズ——第二キャンプにて

十月六日、目覚めてみると、いつものパタパタというテントのはためく音がしない。無風である。やっと天候が安定期に入ったようだ。待ち望んでいた頂上アタックに向けて第二キャンプを出発できる日があったのだ。皆、淡々と仕度を整え、各自バラバラにテントを出発する。いかにもイエティ同人数しい出発風景だと思ふ。私も第三キャンプまで同行するつもりで出発する。途中、遊覧飛行機がウエスターン・クウムの谷間から山肌すれすれに飛んできて、頭上で旋回後、あつという間に去ってしまう。エヴェレストの登山を空から見物とは、すごい時代に入ったものだどつくづく感じる。第二、第三キャンプ間の一一〇〇呎の高度差は、基礎体力のない私にとつて致命的で、あと一〇〇呎の所で、第三キャンプに着いた禿から、「明日またおいでよ」と声がかかり、やむなく夕日の中を一人寂しく第二キャンプに下る。

天候のよみは当たつたようで、快晴の続く中、全メンバーが予定通り元気に第四キャンプ入りする。

十月八日、いよいよアタックの日。留守本部として、トランシーパーに耳を傾ける。テントを出て空を見上げると、輝くばかりの満天の星。しかも無風である。今日一日持つてくれと祈る。午前二時半「これから出発します」という吉野の元気な声が聞えてくる。

空が明るくなるにつれ、エヴェレスト、ヌプツェの稜線がくつきりと姿を現す。その稜線から雪煙がまったくなく、まさに無風快晴である。天候の読みは当たった。これで半分成功したようなものだと思ふ。開放にしてあるトランシーパーからは何の連絡もなく、イライラした気持になるが、これも全員順調に登高を続けている証拠と一人で納得する。午前七時、第三キャンプにいるサーダーから「八三〇〇付近に登高中」との報が初めて入ってくる。私のいる第二キャンプからは、アタックのコースが丁度死角になり、トランシーパーでしか連絡の手だてがない。やはり肉眼でアタック隊の行動を直接見られる第三キャンプまで登っておくべきだったと今更ながら後悔する。

午前九時、第三キャンプより第四キャンプに向うサーダーから、「八五〇〇付近に登高中」の報が入る。まずまずのペースである。この分では午後二時頃には登頂の声が聞えるであろう。隣のカモシカ隊の人々も「まず成功間違いないよ」と激ましてくれる。だが、アタック隊からの交信はまったくなく、こちらから何度呼びかけても一向に応答がない。時代遅れのトランシーパーに見切りをつけ、以後は最新FM式の同志会のトランシーパーが唯一の情報源と

なる。この時ほどトランシーパーの性能の違いを見せつけられたことはなかったと同時に、同志会の木本氏に本当にお世話になった。

午前十時、またまた驚くべき情報が入ってくる。なんと東稜からアメリカ隊が登高してきて合流し、今十名で登っているとのことであった。エヴェレストも新しい時代に入ったという思いを強く感じるとともに、人数が増えた分だけ安全度が高まるような気分になり、この情報を歓迎した。

正午、サーダーから苛立った声で「ベース・ダウンし、まだ八六〇〇付近」との情報が入る。第四キャンプにいるサーダーもまったくアタック隊との連絡がとれず、肉眼で行動を追うしかないようだ。このペースだとビヴァークになるかどうかのタイム・リミットすれすれである。なんととしてもビヴァークは避けてもらいたいという。

午後二時過ぎ、同志会のトランシーパーより「南峰に到着した。遠藤もいる」という鈴木隊員の声が聞えてくる。ただ、他のメンバーが少し遅れているらしい。それが気かりだが、空を仰ぐと、ギラギラ照りつける太陽だけで、一点の雲もなく無風。真にアタック日和である。まず疑いなく絶頂まで行くだろうが、そのあとが気かりになってくる。もうすべてが時間との競争になった。

突然、隣のカモシカ隊でなにやらどよめきがあった。高橋隊長自慢の一三〇〇超望遠レンズが、南峰とヒラリー・ステップとの間のコルに人影をとらえたのだ。思ってもみなかったことだが、アタック・ルートのうちここが唯一ネパール側を捲くらしい。駆けつけてファインダーをのぞくと、膝から上の人間がはっきり見える。し

かも羽毛服の色から、同志会・イエティ隊と確認できた。

空身の体がスローモーションのように視野を横切る。そうこうしているうちに、今度は酸素ボンベを背負った人間が、三人上から降りてきた。アメリカ隊に違いなからう。アタック隊は二三分姿を現しただけで、また中国側に消えて行った。

それから約三十分後、今度はヒラリー・ステップの上と思われる所に、二人の姿が、また突然とび出た。一人は黄色、もう一人は青色の羽毛服を着ている。川村隊長と遠藤か。ほんの数十秒で、視野から消えて行った。時刻はすでに、午後四時にならうとしている。ビヴァークは、もはや必至となってきた。

午後四時二十分、突然元気な声が同志会のトランシーバーに入ってくる。川村、鈴木、鈴木、鈴木の両隊員がついに絶頂に立ったのだ。五十メートルに遠藤、その後には禿も続いているという。しかし、一番気になる吉野、沢上に関しては不明という。先程のレンズでも四人しか確認できなかったし、私もこの時点では、南峰で二人は引き返したものと判断する。南峰までならサウス・コルにいるサーダーから見通せるはずだ。何度も交信を試みるがまったく雑音が聞えるのみで腹が立つてくる。

谷間にある第二キャンプの夜は駆け足でやってくる。あつという間に薄明りが真暗に変化する。しかし、稜線はまだ夕日を浴びて赤く染まっている。早く、少しでも下へ降りてくれと祈る。

わが隊のトランシーバーに見切りをつけていた私は、その夜同志会の木本氏に頼んで、私のテントに泊ってもらうことにする。どんな情報でもよいから何かをつかみたかった私にとって最後の綱であ

った。成功の喜びよりも、不安がどんどん拡がっていくのをどうしても抑えきれず、重苦しい雰囲気が漂う。

結局、その夜の情報は「同志会は八三〇〇付近でビヴァークしている。恐らくイエティもすぐ上でビヴァークしているだろう。しかし、全員登頂したかどうかは不明」というにとどまる。

一夜明けて翌十月九日、朝六時半ごろ待ちに待った沢上の声がトランシーバーより聞える。一語も聞漏すまいと全神経を集中する。その時の情報では「沢上のみ南峰より引返し、昨夜遅くサウス・コルへたどりついた」ということであった。ここで初めて吉野もアタックしたことが確実となり、南峰付近で三人がビヴァークしている見通しが、ほぼ確実となった。

昼過ぎになり、今度は遠藤がサウス・コルに帰りついたという情報が入る。この分ではあとの二人もまもなく第四キャンプへ帰るだろうと信じきっていた。その後、またトランシーバーの調子が悪く、第四キャンプとの交信が絶たれてしまう。だんだん夕やみが近づき、少しづつ天候が崩れ始めるのが分ったが、もう今頃は吉野、禿の二人もきつと第四キャンプに帰り、シェルバに介抱してもらっていると信じる。

明けて十月十日、第四キャンプより連絡が入り、吉野、禿の二人が帰っていないことを確認できる。八〇〇〇以上での二晩のビヴァークはまず絶望的。唯一の望みは、二人がルートを誤り、アメリカ隊のテントに迷い込むことであるが、その可能性は、状況からいってほとんどないであろう。この時点で、二人の遭難は九分九厘不動のものとなる。ここで本来なら救援隊出動となるのだが、全員出

はらっているものでどうしようもない。少人数隊の弱みが一気に露呈する。

第四キャンプに無事帰った遠藤、沢上も一刻も早く第二キャンプまで降ろさねば危険であった。テントその他をそのままにして、遠藤、沢上は各々シエルバに助けられながら第二キャンプに下ってくる。

二人とも夢遊病者のように、立っているだけが勢一杯であるように私の目には映った。人間のポロボロの姿であった。二人のシエルバがいなかったら彼等もどうなったか分らなかった。心からシエルバに感謝した。第二キャンプに到着してから二人は、ほとんど体を起すこともできず、寝袋にくるまっていたが、食べるほうだけは頑張ってくれたのでうれしかった。とにかくベース・キャンプまで頑張ってくれと祈る。

十月十一日、シエルバが南西壁基部の六五〇〇に遺体らしきものがあると報告してきたので、急いで現場に行く。衣服、身体から吉野と確認。禿の登山靴もその近くで確認される。全身に虚脱感が走り、運命のいたずらを怨む。

十月十二日、天候が明らかに変わり、冬の到来を告げるかのようにものすごいブリザードが第二キャンプを襲う。午後、同志会、カモシカ隊の友情のもとで、吉野の葬儀を行う。ネパールの式にのっとり、静かに遺体をクレヴァスに埋葬する。

情報を総合すると、二人は十月九日早朝ヒラリー・ステップ付近から滑落したことに、まず間違ひなからうという結論に達する。改めてエヴェレストの持つ恐ろしさを目のあたりに見せつけられ、ま

た、二人の思い出が次々に頭に浮び眠れぬ一夜を過す。

十月十三日、帰らぬ二人を残して、第二キャンプを撤収する。遠藤、沢上も頑張り、ウエスタン・クウム、アイス・フォールを下り、なつかしいベース・キャンプへ無事帰ることができた。コックが涙をうかべて迎えてくれる。彼の憔悴しきった顔が、この一週間の悪夢のようなできごとを象徴しているようであった。

(鵜飼 寛)

#### △記録概要▽

隊の名称 イエティ同人エヴェレスト登山隊

活動期間 一九八三年九月～十月

目的 少人数による南東稜からの無酸素・全員登頂

隊の編成 隊長Ⅱ吉野、寛(33)、隊員Ⅱ禿、博信(31)、遠藤晴行(26)

沢上、登(31)、医師Ⅱ鵜飼、寛(32)

#### 行動概要

九月五日ベース・キャンプ設置。アイス・フォール帯のルート工作は山学同志会、その保守をカモシカ同人が受持つ。十四日登山活動開始。十九日第一キャンプ(六一〇〇)設置。二十四日第二キャンプ(六四〇〇)設置。

二十八日第三キャンプ(七五〇〇)設置。十月一日第四キャンプまでのルート工作完了、アタック態勢に入る。六日第二キャンプを出発、第三キャンプに隊員四人、シエルバ二人入る。七日第三キャンプを出発、サウス・コルに第四キャンプ(七九八五)設置。六人が入る。八日午前二時半、吉野、禿、遠藤、沢上の四人が第



記録発表

四キャンプを出発、頂上アタック。沢上八七〇〇に付近で登頂断念、第四キャンプに戻る。遠藤、禿、吉野が、午後四時半から五時の間にそれぞれ登頂。帰途八八〇〇に八七五〇の間で別々にビヴァーク。シエル、パ、二人が第四キャンプに入る。禿、午後七時頃ヒラリー・ステップより転落行方不明。九日早朝、吉野、南峰付近より転落。遠藤第四キャンプに午前十一時帰着。沢上、シエル、パ一人とともに第三キャンプに下降。十一日南西壁六五〇〇に付近で吉野の遺体と禿の登山靴を発見、二人の遭難を確認し登山中止。十二日吉野、禿の葬儀。十三日第二キャンプ撤収。十七日ベース・キャンプ撤収。

遠藤晴行編 EVEREST 1983—イエティ同人エベレスト登山隊・無酸素登頂の記録 イエティ同人エベレスト

登山隊 東京 一九八四

遠藤晴行 エヴェレスト無酸素登頂—手記1 岩と雪

一〇〇号 二十八—三十二頁 一九八四

江本嘉伸・山学同志会隊・イエティ同人隊 三隊十人が

挑んだエヴェレストの長い一日 山と溪谷 五六八号

十八—二十五頁 一九八四

遠藤晴行 エベレスト八三・一〇・八「生と死を分けた

七人の男たち」イエティ同人隊 岳人 四三九号 九—

十四頁 一九八四

## エヴェレスト無酸素登頂 一九八三年秋

川村晴一  
鈴木昇己

私たち山学同志会エヴェレスト登山隊は予想もしなかったカトマンドゥでの、二十六日間の長期滞在にいささかうんざりしていた。

やっと待ちに待った隊荷を手にすることができた。八月十六日の早朝、バスとトラックに分乗し、カトマンドゥの街を後にする。

現在では、ラムサングーから更に段々畑の続く尾根筋のスカイラインを走り、キランティチャップまで、車で入ることが可能だ。

八月十七日、To Everest Base Camp と書かれた案内板に導かれ、トレッキングでもあり、ネパール山行の楽しみのひとつでもあるキャラヴァンが始った。

標高約五四〇〇呎のベース・キャンプまで、十五日間のハイキングをしているような気楽な解放された気分で、各自思い思いに歩いて行く。

私にとって、ネパールの山奥を旅するのは、ジャヌー行、カンチ

ェンジュンガ行に続いて三度目になるが、いつ訪れても、木々や畑の緑、清浄な大気が都会でのストレスをそっと洗い落してくれ、心がなごむようである。

そして、素朴で可愛い子供たちを眺めていると、八八四八呎の頂へと登る過程において起るであろうと想像し得る様々な苦しみ、辛さ、厳しさをほんの短い間でも脳裏から消し去り、リラックスさせてくれる。

日常生活のなかでは、移動の手段として交通機関を使用する場合は殆どで、一日中歩くという行為はめつたにないが、ネパールの山奥に入ると自分の足で、その日の泊り場所へと歩いて行くのがあたりまえのことである。そんな時、峠の木蔭で腰をおろし一息ついて、辿ってきた路を振り返ると、遙か遠くに昨夜のキャンプ地が見え、人間の足って偉大だなあと感じ入ってしまう。キャラヴァンの

中間地点ジュンベシの村までのコースは、ネパールの山旅といった雰囲気であるが、ここから先はシルパ族の住んでいる村が殆どであり、また、谷の奥には白い鎧をまとったヌンプールが顔を出し、エヴェレスト登山の文字が頭に入ってくる。

この頃には、隊員のコンディションも徐々に向上し、ベース・キャンプへ絶好の体調で入れるように気を配り、ベース・キャンプ入りのプログラムの作成を始める。私のジャヌーからチョゴリ(K2)までの経験から高所での行動を考えると、有る余力と、技術に裏打ちされた自信満々の若い隊員よりも、しっかりとした基礎体力と、基礎的な技術を身につけている高所経験の豊富な人の方が、精神的にも余裕があり、行動力も遙かにあるように思えるので、各自コンディション作りをまかせておけば、心配することはない。だが、経験のない、若い隊員は高所順応の自分自身のペース配分もつかめないで、最適と考えられるプログラムに沿って、しっかりと段階を踏むようにしなければならない。

今までの遠征がそうであったように、今回も、五人全員が無酸素で頂上を目指す登攀隊員となる構成なので、誰かが調子を崩すと、それだけ一人一人に負担がかかってくる結果に陥るから、慎重にならざるを得ない。

九月三日、キランティチャップを出発してから十八日間のキャラヴァンと高所トレーニングを順調に消化し、全員ベースに近い状態でベース・キャンプへ到着した。すでに高所順応トレーニングで、六一〇〇㊦の第一キャンプまで一気に登っても大丈夫な体を作りあげてあり、危険極まるアイス・フォールを、短期間で突破しようと

いう意気込みで、九月七日エヴェレスト・アタックの本格的な一歩が始った。

ベース・キャンプへ入る前に、カラ・パタールの丘へ登り、空高く聳え、周囲を圧倒しているかのようなエヴェレストと初対面した時は、流石に押しつぶされそうな圧迫感に全身を包みこまれてしまった。

その頂は余りにも高い所にあり、私の力では手が届きそうにも思えなかったのである。

超人的な力もない、私の生身の姿で果たして登れるのだろうか。私にとって、最初の八〇〇〇㊦峰であったカンチェンジュンガでも、八六一㊦のチョゴリへ出かけた時でも感じたことのない、八四八㊦の高さに対する不安な気持が体をよぎって行った。

しかし、半日近く丘の岩に腰をおろして、眺めていると徐々に心の中から不安な気持は霧散し、いつもの平常心に戻ってくるのを感じた。私が襲われた不安な気持の根源は、直感としてエヴェレストは八〇〇〇㊦の山ではなく九〇〇〇㊦に近い山と感じたからなのである。

カラ・パタールの丘を下る頃には、天候と、山のコンディション、それから私たちのコンディションが最高の状態でアタックすれば、何とかなるだろうという確信に近い気持に変っていた。

アイス・フォールのルート工作は想像以上に進展し、経験豊かなシルパの予想していた半分の日程で、九月十二日ウェスターン・クウムの台地へと抜けた。全隊員が三日から四日間交代でロープを固定し、より安全と直感したルートに路をつけて先へ高みへと

登り、シエルパにはハシゴ、丸太等の荷あげに専念してもらう。

シエルパの人数は、サーダー以下十名。当初の予定では五名となっていたが、同時期に入山しアイス・フォールを通過する三隊（イエティ隊、カモシカ隊）のなかでは、最初にアイス・フォールへ入りルートワークを引受けるので、かなりのアイス・フォール用物資を荷あげしなければならず、五名のシエルパを増員した。

結果的には、隊員の疲労を圧え、短期間で第一キャンプの台地にあられたので大変良かった。

さらに、彼らの存在は最終アタック時のエネルギーにも微妙な効果をもたらしてくれたように思う。

九月十三日には、約六二〇〇に第一キャンプを設営し、二日後には南西壁の基部のモレーン上、約六四〇〇に第二キャンプを設営した。翌日からは第三キャンプへとルートワークを始めた。私と鈴木隊員は、第三キャンプへ十五日に入り、最終アタックが終るまで一度も下のキャンプへは降りなかった。

小西隊員は単独で行動し、豊富な経験を生かして高所順応も早かったのだが、後方で荷あげ等の管理をしてもらうケースが多く、前線のパーティィは安心してルートワークに専念することができ、大いに助かり励みにもなった。最初のパーティィ編成では、経験のある隊員と若い隊員の組合せでスタートしたが、経験からくる順応力に差があり順調に回転しなくなってしまう、必然的に経験豊富なパーティィがルートワークを受持つことになってしまった。

若い岡野、木本の両隊員は、一週間から十日間くらい順応が遅れ、最終的には七九五〇の第四キャンプへ達しただけに終ってし

まった。一度でも八〇〇〇に近い高所へ、自分たちの心肺機能だけで登った経験があれば、順応の速度も上がり最終アタックのチャンスが巡ってきただろうと思うと残念ではあるが、今回の遠征は良い経験になったことだろう。

第三、第四キャンプへのルートは傾斜約四十度の蒼氷部分と雪壁で構成されていて、所々岩が混じっている。順調にロープをのびし、九月二十四日、約七四〇〇の氷壁を削ってボックス・テントを埋めこんで第三キャンプを設営、二十八日には、標高七九五〇に付近の岩陰にテントがやっと一つ張れると思える場所を第四キャンプとし、最終キャンプとした。

落石と強風でテントが壊される恐れがあり、テントは頂上アタックの時に設営することに決める。

小西隊員も最終アタックの順応をすませ、第二キャンプへ下山してきたので、登頂パーティィの組合せを決定する。初めてウエスターン・クウムへ上がった頃はうだるような照返しで暑かったが、アタック態勢に入り十月の声を聞くと秋の気配が濃く、日に日に気温が下って行くのを感じる。第二キャンプの環境も申し分なく、モレーン上のテント生活はベース・キャンプに居る様な錯覚に陥るくらいで、長期間にわたる滞在中の休養の日など、のんびりと体をのばせ精神的にも解放感が味わえたことは随分と助かった。第一次は私と鈴木隊員シエルパの、パサン・テンバ、第二次は小西隊員とシエルパのアン・ニマ、頂上への夢が断られた岡野、木本隊員はアタック・パーティィが休養中に最終キャンプまで登っていた。

当初は南西壁を登る計画であったが、カトマンドゥでの長期滞在

が響き、途中から南稜へ変更し、そして最終的にはアメリカン・メディカル・ルートから南東稜に抜けてしまい、私自身も不本意でありイェティ隊にも申し訳なく思っている。登頂の項は第一次隊の鈴木隊員の生々しい手記に引継ぐことにします。第二次隊は、八七〇〇呎を越した地点から適確な判断を下し引き返した。また、第一次隊で行動を共にした、パサン・テンバの事故は返す返すも残念であり、深く反省をし今後の教訓にしなければなりません。大自然に囲まれた高峰においてまったく危険の存在しない登山などあるはずはないのですから、その場、その時の状況をつかみ適確な判断を下し、無事に山を降りてこなければならぬと痛切に感じます。

人間の生理的ぎりぎりの限界線で行う高所登山では、体力、技術、経験、精神力、状況判断力、自分に対して第三者の立場でコントロールする能力など、総合的な力を必要とするものと思う。

(川村晴一)

南稜から南東稜へ 「いまはただ、すべての線が合わさる究極点が、不思議な力でぼくを引きつけていた」

一九七八年五月八日、メスナーとハーベラーは、ついに無酸素で地球の極点に達したのだった。この成功により、超人「メスナーの地位を不動のものにした。

人はメスナーを「超人」と呼ぶが、ぼくはそうは思わない、確かに人並以上の体力と精神力には敬意を表するが、経験に裏打ちされた計算能力と慎重かつ大胆な行動力に加えて、神も味方するほど運の強い男だと思つづくと思う。

ぼくは以前から人間がエヴェレストの頂に、自分の肺と心臓で登り得ると思つていた。なぜか。答は至極簡単だ。人間の生理的限界と地球の物理が一致しているからだ。なんの科学的根拠もないが、ぼくはそう信じている。もし、いま突然九〇〇〇呎の山ができたとしたら、いきなり無酸素で登るのは不可能だと思う。しかし、その山が大昔からこの地上に存在していたとすれば、人間は必ず無酸素登頂を試みたであろうし、それは可能にちがいない。八八四八呎という高さは、人間が肺と心臓だけで登ることができるようにつくられているような気がしてならなかった。

そして、ようやく自分にもそれを試すチャンスがまわってきた。

先駆者の実績があるとはいえ、いざ自分の番になるとやはり不安はかくせないのが正直なところだった。

いま、ぼくたち三人は、高度約七九五〇呎のボックス・テントの中で、寝袋に入つてうずくまっている。眠れない、というより眠らない方が賢命だった。出発予定が夜中の一時ということになっていたので、起きられなくなるのが心配だったからだ。時計が夜の十二時を差したとき、二人を起して寝袋から脱けだす。ガス・ストゥヴに火をつけ、冷えきったテント内を温める。二杯の紅茶を胃に流し込み、一人三枚の餅をそれぞれ好みにあわせて食べた。ぼくは味噌汁に入れ、川村とシェルパのパサン・テンバは海苔餅だ。テンバは食べたばかりの餅を吐きだしてしまった。あまりコンディションはよくないようだ。

酸欠を防ぐため半開きしておいたテントの吹き流しから外をのぞくと、満天の星が輝いていた。頂上に立てるかどうか疑問だが、

行けるところまで行こうというのが、ぼくらの気持だった。特製のビヴァーク・サック（綿入りの寝袋とルックサックが一体）にビヴァーク・テントとトランシーバーを入れる。川村は八リムービー・カメラとビデオのセット。テンバは七リ三十リのロープ一本にガス・ストゥヴとクッカー、紅茶入りの魔法びんを持つ。すべての出発準備を終え、第四キャンプをあとにしたのは午前二時四十五分だった。ぼくらの位置から直線で一\*ほど離れたサウス・コルには、暖かそうなテントの灯りといくつかのヘッド・ランプの動きが目に入った。彼らと一緒に頂上に立てればいいなあとと思った。

ぼくらは当初、南西壁からの登頂を目ざしていた。しかし、ネパールの政変でインポート・ライセンスの取得に手間どり、カトマンドゥで三週間以上の足止めを余儀なくされた時点で、南西壁をあきらめ、南稜入のルート変更を登山局に申入れた。

しかし、現地入りしてみると、南稜の核心部といわれるロック・バンドは今秋の寡雪で岩が露出し、簡単に迎え入れてくれそうになかった。時間と戦力の少なさを考えると、とうてい不可能な気がした。もうこうなればルートはどうでもよい。とにかく無酸素で世界最高峰に立ちたい。それほどまでにエヴェレストに魅力があった。ぼくらは袋小路から脱出するように、南稜から南東稜に抜け出した。八一年秋にアメリカ医学調査隊が登ったルートである。

**アメリカ隊と遭遇** サウス・コルから登ってきたイエティ隊の隊列に合流する。先頭の遠藤から「鈴木さんですか」と声をかけられ、「そうだけど、ルートわかるの」ときく。まだあたりは暗闇に包まれていた。その時の歩行順序は遠藤、ぼく、パサン・テンバ、

川村で、それ以降は闇のために見当がつかなかった。高度は約八一〇\*だった。

この付近はチベット側とネパール側の風の通り道になっているらしく、雪面はクラストしていた。克蘭ボンズをきませながらゆっくり進む。数十歩進んでは立ち止まり、雪面に腰をおろして休んだ。チベット側の地平線上にオレンジ色をした太陽がゆっくり昇りはじめ、ローツェの東斜面を真赤に染めた。これほどまでに荘厳な日の出を見たことはなかった。ぼくはしばらくその場に立ちすくむ。

死の匂いがするといわれるサウス・コルにも日があたり、青空が一面に広がった。八四〇\*付近にはテントが一張くらい張れる雪棚があり、ぼくらはそこを目ざして右方向にトラヴァースする。遠藤はそのままダイレクトに進んで行った。川村、パサン・テンバ、ぼくの三人はそこで紅茶を飲み、二十分ほど休憩する。誰がいつ置いて行ったか知らないが、古い背負子が雪に半分うもれていた。それにルックサックを固定しデポした。日没前になんとかここまで降りられる胸算用があったからだ。

ぼくはカメラとトランシーバーを首にさげて再び登り始めた。すると突然稜線上に人影があらわれた。最初なんてこんな所に人がいるのか不思議に思った。そのうちに人影は二人三人となり、ぼくらの存在を知ったのか手を振っている。数十分ののち、三人の外国人と遠藤が休憩している南東稜上八五〇\*の平らなところに出た。彼らは、なんとチベット側のカンシュン氷河から東壁を登ってきたアメリカ人だった。お互いに感激のあまり握手をしたり抱きあったりして喜びを表現した。興奮がおさまると、チベット側の山並みや

ローツェ、マカルー、アメリカ隊の記念撮影をする。

トランシーバーのスイッチを入れると、第二キャンプにいる木本とコンタクトできた。ちょうど十時だった。ぼくと遠藤のコンディションはともよかった。「これなら頂上はルンルン気分に登れるさ。きつと明るいうちに降りられるよ」こんな会話が出るほどの余裕が、このときにはあった。

酸素ボンベを背負ったアメリカ隊が先行して、そのすぐあとに遠藤、ぼくの順に進んだ。ここからしばらくナイフ・エッジが続く。慎重に歩かなければいけないと自分にいひかせる。傾斜はゆるいが、歩くスピードが急に落ち込む。二十歩歩くのが限界だ。アメリカ隊は酸素を吸っているの、ほとんど休みなく快調なテンポで力強く登って行き、ぼくらとの差はどんどん開いていくばかりだった。

徐々に傾斜は増し、急な南峰の登りが待っていた。ネパール側は岩が出ていたので、チベット側の四十五度ぐらいの雪の斜面を登る。時々ラッセルがあり苦しい。もうアメリカ隊の姿は見えない。ぼくと遠藤との差は二十分ぐらいたった。彼が休憩しているところに着くと、彼はすぐに腰を上げ、ぼくが休むというくり返しが続く。

随分と長く急な登りのせいか、もうぼくは腹がへって体に力が入らない。休憩のたびに雪面に突き差したアイス・アックスに身体をもたせかけて、コックリコックリと睡魔におそわれることがたびたびである。何度も下りたいと思ったが、二度とこんなチャンスにめぐまれることはないと思われ続ける。十五歩ぐらい歩くのが精一杯だ。心の中で、一、二、三と、たえず数をかぞえ、十五歩をノルマにして歩いた。頭が痛いとか目がかすむという症状はなかった。とに

かく腹がへった。いま、うまいものをたくさん間べることができた。勢いよく歩ける気がした。行動食として用意した数個のアメとチョコレートはもうなくなっていた。ただ、頂上へ行きたいという執念だけが本能的に働き、降りることをこぼんでいた。

ぼくのとには三十分離れて川村が、やはり苦しうに登ってくる。南峰の手前で傾斜はゆるくなり、適当なところに腰をおろして川村を待った。

ついにやった。南峰からは、正面にヒラリー・ステップが見える。そこから先の稜線から頂上までは、まだまだはるか遠くに感じられたが、ここまで来たからには絶対に頂上に立つまで帰らない。どんなに時間がかかろうとも、つらくても頂上に立つてみせる。帰りのことなんかどうでもいい、と思った。まるでエヴェレストがもつ、目に見えない不思議な力に引かれていくようだった。

南峰のゴルに下ると遠藤が用を足していた。こんな高所がよく踏ん張りがきくなと思った。ここで先頭を入れ替った。チベット側には、昨冬、加藤、小林パーティがビヴァークしたと思われる窪地があった。

鋭い稜線がヒラリー・ステップの下まで続いている。ネパール側はスッパリ切れ落ち、チベット側は雪庇が波打って頂上まで続いていた。問題のステップは浅い凹状になり、中には雪と氷が詰っていた。古い固定ロープが二本露出している。高さは十分ぐらいだろうか。取付で一呼吸入れて、一気に乗越えようと、頂上に登ってきたアメリカ隊がドドドッと降りて来た。二人が先に降り、一人がルックサックからロープを取り出してステップに固定する作業を始めた。

腹がへっているからなんか食べ物をもっていないかときいたら、親切にも十本入りのビーフ・スティック・パックをくれた。名前はキム・モームだといった。この春ジョン・ロスクリーとチョモランマ西稜にきた人だとピンときた。ここから頂上までの時間をきくと、二時間かかったという。時計はいま午後三時三十分だ。ステップの下では川村が順番を待っている。

まだまだつらく苦しい登りは続くが、天気は快晴無風。申し分ない。アメリカ隊のトレイルもあり、登頂は確信に満ちたものになった。トランシーバーで、あと一時間で着くと報告する。頂稜は鋭いナイフ・エッジになっているが、ネパール側の雪の斜面にトレイルがあつて心強い。傾斜もなく、山腹をトラヴァースする感じで登っていく。急に体が軽くなり、足どりも早くなったような気持で歩いた。ときどき後ろを振り返り、登ってくる川村に向けてカメラのシャッターを押す。立止まるのはそのときぐらいで、あとはほとんど休まず頂上直下に迫つた。

一步一步を踏締めるように登ると、突然チベット側の山々が視界に飛込んできた。そこから先は急な斜面となつて落ち込んでいた。ついにやつた。涙があふれてきた。七六年のジャヌーのときも、八〇年のカンチェンジュンガのときも涙はなかつたのに、今回ばかりは不思議に出してしまった。これが感激というものかもしれない。川村に向つて「ここが頂上ですよ」と叫ぶ。すぐにトランシーバーのスイッチを入れる。「こちらドーシ。ショウミです。十六時二十分無酸素でエヴェレストの頂上に立ちました。チベット、ローツェ、マカルー、三六〇度全部見えます」ベース・キャンプの小西夫

人より応答があつた。「どうもおめでどう。意外に元気な声なので安心しました」やがて川村も頂上に着き、交替した。

中国隊が立てたポールはなく、ただ一本の細長い竹の棒が差してあるだけだった。こうしてただ立っていると、酸素が薄いとは感じられなかった。あるいは神経が無感覚になつていたのか、ぼくには息苦しいとは思われなかった。あの鋭峰で名高いアマ・ダブラム、カンテガ、タムセルクは、はるか下にモクモクうねりを上げている雲間にはつきり見える。チベット側はネパール側と対照的に、雪のついたなだらかな丘稜が幾重にもつらなつて見えた。

いつまでも頂上にいたいと思つたが、下降の途中で暗くなることは明らかだった。午後四時四十分、荘厳なヒマラヤの光景をカメラにおさめて、別れを惜しむように下り始めると、すれちがいに遠藤が登ってきた。「すぐそこが頂上だから」と声をかける。ネパール側の岩の露出した斜面で立止り、アイス・アックスで岩をたたき割り、友達から頼まれたプレゼント用の石を拾つた。

快適なピヴァーク 登っているときは足元しか見えなかつたが、下りは高度感があり身震いする。こんなところでスリッパしたら一巻の終りだと思ふと慎重に歩かざるを得ない。何度も振り返り、ぼくはあそこに立ったんだ、ああ夢ではない、と頂上を見ては安心する。十分ほど下つた頂稜上で禿と会つたが、彼は元気がなさそうだった。その十分後に今度は吉野が登ってきた。川村と吉野は二言三言話をしていた。吉野の顔には微笑があり、元気な様子だった。

ヒラリー・ステップを固定ロープにすがつて下り、急な南峰の下りにさしかかるころより薄暗くなり始めた。ルートをまちがえない



ように、一步一步トレイルを確認しながら下った。アメリカ隊と会った八五〇〇の地点に着くと、もうそこからはなんの不安もない。ただ足を谷側に向けてサウス・コルに続く広い雪の斜面を下るだけだった。考えることはなにもなかったが、荷物をデポしたところまで降りたいという意志だけは働いていた。そこにはビヴァーク・テントがあり、ストーヴがあるのだから。そしてパサン・テンバも待っていることだろうと思つた。尻もちを何度もつきながらやつとの思いで、ぼくらはデポ地に着いた。彼の姿はなかった。たぶんサウス・コルにあるイエティ隊のテントか、ぼくらの第四キャンプまで下つたと思ひ込んだ。

ヘッド・ランプを取り出しルックサックを担いで再び歩きます。今朝、登るときにぼくはビヴァーク地を決めておいた。それはルートからチベット側に十ほどはずれたところにあつた。すでに日はとっぷり暮れ、ヘッド・ランプの光だけで急な斜面を横切るには危険すぎたので、しかたなく八三五〇の付近の雪の斜面を削つた。すぐに岩が露出し、二人がやつと腰かけられる程度の棚しか作る事ができなかつた。それでもビヴァーク・テントをかぶり、ガス・ストーヴをたくと生気がよみがえってくるようだった。時計を見ると午後七時。雪を溶かし、さ湯を作つて飲んだ。ガスのカートリッジは三個あるので、全開で使つても朝まで充分にもつはずだ。イエティ隊の三人も頂上に登つて快適なビヴァークをすごしているにちがいないと確信していたので、それほど気にならなかつた。ストーヴを落さないよう両手やかかえて一晩中燃やし続けた。体勢が悪いことを除けば、この高度にしては快適といえた。日本の冬山でビヴァ

ークしているような錯覚さえした。

最初はなかなか寝つくことができず、早く朝が来てくれることを祈つたが、やがて羽毛上衣が燃えているのにも気づかないくらいよく眠ることができた。朝五時ごろに目が覚める。身体の節々が痛かつたが、足の指も冷たいと思わなかつたし、寒さも感じなかつた。頭の動きもしっかりしていて、なんの高所障害もなく一夜を明かすことができた。

やがて、昨日見た日の出とまったく同じ光景が目の前に広がつた。これでやつと無事に、生きて帰れる実感が湧いてきた。長い間、夢の世界でしかなくなつたエヴェレストの頂。ついに自分の手と足と心臓と肺だけで登ることができたんだ。そう思うと再びぼくの喉は涙で潤んできた。

危険だから！ カンチエンジュンガ、K2、エヴェレスト、世界三大峰の無酸素登山が現実となつた今日でも、危険だとか無謀だとか、世間の論議はつきないようだ。

登山は、まったく個人の主張であり自己満足の世界である。危険だと思つたら酸素を使つたつてかまわないが、無酸素登山に挑戦したいと思つたら実践すべきだ。人がやりたいと思つたことを誰が止められるだろうか。

ヒマラヤには空気の薄さだけでなく、雪崩や落石、ヒドン・クレヴァス、アイス・フォールの崩壊など、数えあげたらきりがなくいろいろな危険がある。少なくともヒマラヤに登ろうとする人なら、他の山で幾多の危険や困難に遭遇し、それらを乗り越えてきたはずだ。力量あるクライマーが、過去の体験を土台として、ヒマラヤの高峰に

挑むためにやって来るはずだ。チャレンジ精神の旺盛なクライマーなら、危険を認識し、それを承知のうえで高所登山を實踐しているはずだ。無酸素登山は、ヒマラヤのもつ危険な要素の一つにすぎない。

帰国してから見たある新聞に、ぼくたちの登山に対する、ある有名な女流ヒマラヤ登山家のコメントがあった。

「私だったら、無酸素登山は危険だから絶対にやりません」

それはそれでけっこうだ。目ざす世界がぼくたちとはちがうのだから。しかしこれは、ハイカーがクライマーに「岩登りは危険だからやりません」といっているレベルの内容である。貧困な発想と、自分にはできないという嫉妬心をさらけだしているようなものだ。

登山とは、ぼくにとって冒険であり遊びである。冒険とは字のとおり危険を冒すことだが、まったく無防備な形で危険に突入するわけではない。できる限り危険を回避する知恵を働かすことは当然なのだ。それが技術・精神・経験なのだ。そして、たかが遊びだからこそ一生懸命にやる必要があるのだ。未知への冒険ほどエキサイティングで創造性に富んだ行為はない。(鈴木昇己)

### △記録概要▽

隊の名称 山学同志会エヴェレスト登山隊一九八三

活動期間 一九八三年八月～十月

目的 エヴェレスト南西壁からの無酸素登頂(南稜からに変更)

隊の編成 隊長 川村晴一(35)、隊員 鈴木昇己(21)、岡野孝司(32)

木本 哲(27)、小西政継(44)

### 行動概要

九月五日ベース・キャンプ設置。七日からアイス・フォールのルート工作開始。十三日第一キャンプ(六二〇〇)設置。十五日南西壁基部六四〇〇に第二キャンプ(アドヴァンスト・ベース・キャンプ)設置。南稜ヘルトをのぼす。二十四日第三キャンプ(七四〇〇)設置。二十八日 AMREE ルート七九五〇を第四キャンプ予定地と決定。十月七日第四キャンプ設置し、川村、鈴木、テンバの三人が入る。八日午前二時三十分、三人が第四キャンプを出発。南稜上部をあきらめて、南東稜ヘトラヴァース、イエティ隊と合流し頂上に向う。八四〇〇にルックサックをデポ。午後四時十五分～二十分鈴木、川村の順で登頂。八三五〇でビヴァーク。テンバは登高中転落行方不明。九日小西、アン・ニマが第二次アタック、南峰で断念、八五〇〇でビヴァーク。十二日全員ベース・キャンプ集結。十五日ベース・キャンプ撤収。江本嘉伸・山学同志会隊・イエティ同人隊 三隊十人が挑んだエヴェレストの長い一日 山と溪谷 五六八号 一八―二十五頁 一九八四

鈴木昇己 エヴェレスト無酸素登頂―手記? 岩と雪 一〇〇号 三十二―三十七頁 一九八四

永田秀樹構成 生身で感じた八八四八m 岳人 四三九号 二八―三十三頁 一九八四

川村晴一 エヴェレスト装備ノート 岩と雪 一〇一―一〇四―一四五頁 一九八四

## 秋期ローツェから冬期エヴェレストまで

高橋和之

「厳冬期エヴェレスト」私がこの計画を考えたのは、一九七七年だった。当時冬のエヴェレストは許可されておらず、ネパール政府が許可するかどうかも不明であった。ただ、そろそろ許可がでそうだと、噂されているだけであった。

私の計画は、「厳冬期エヴェレスト」だけではなく、「ローツェ・エヴェレスト縦走」であった。一九七五年、ダウラギリIV峰を登り、一九七九年、ダウラギリII・III・V峰縦走が成功したら、次は八千峰の縦走、それも世界最高峰。私にとってエヴェレスト以外には眼中に無く、是非とも許可をとり実現したい計画であった。しかし、「ローツェ・エヴェレスト縦走」の計画は、最初の段階であっけなくつぶれてしまった。ネパール政府が許可を出す考えが、まったくなかったのだった。

一九七九年、ダウラギリII・III・V峰縦走も、妻、通子が隊長と

なり無事成功した。私たちカモシカ同人は、ダウラギリII・III・IV・V峰を登頂し、いつのまにか誰が言うともなく「ダウラギリのカモシカ同人」と言われるようになり、次はダウラギリ主峰登頂、と自然にそのような雰囲気となってきて、私の計画する「厳冬期エヴェレスト」の話は顧みられず、同人の中心メンバーは、私にダウラギリ主峰ペアー・ルートの隊長になるよう強く勧め始める始末。私にその気がないと知ると、今さらエヴェレストでもないだろう。エヴェレストよりもダウラギリを……と言って、説得しようとした。しかし、登山とは、しよせん自分の楽しみ、自分の夢であり、つまり自己満足そのもので、一定のルールさえ守れば、他人からとやかく言われるものではないと、信じる私なので、私の考えを変えさせることができないと知ると、説得することをあきらめた。

一九七九年、ダウラギリ縦走隊の成功を祝うため、カトマンドウ

まで迎えに行つた。その時、ネパール政府観光省登山局を訪れ、正式に「厳冬期エヴェレスト」の登山許可を申請し、そして、加藤保雄君に託された手紙を渡して、彼も私と同じ希望を持っていることを伝えた。彼は単独で、それまでできる限り早い冬に、許可を希望した。私は、一九八三年〜八四年を希望した。残念ながら、私たちのレベルと装備の開発を考えると、どうしてもあと五年を必要とした。

冬期の八千以上のヒマラヤでは、スピードが勝負である。行動できる日が非常に限られ、そして短い。エヴェレストでは、ベース・キャンプ〜第一キャンプ間のルート工作は十一月二十日より、第一キャンプ建設は十二月一日と決められているため、スピード化がより安全につながり、登頂の条件でもある。そして日数がのびればのびるほど、登頂のチャンスは遠のき、事故の確率も高くなる。ノーマル・シーズンとは違い、気温も低く、風も強烈で、日一日と体力を奪われていく。

エヴェレストでは、より短時間に効率良く成功させるため、エヴェレスト以前、つまり一九八三年秋に八千峰で、高所順応を済ませ、そのまま冬のエヴェレストへ繋げることにした。そして、どうせ登るのなら秋も魅力のある山、ローツェに決めた。すでに秋のエヴェレストの許可を取得していた、山学同志会、イエティ同人の了解を取った。

秋にローツェに登るメリットは、エヴェレストのノーマル・ルート（南東稜）と大半が同じで、いきなり冬の南東稜に行くより、シーズンに違いがあるが、ルートに慣れることができる。日本の山で

も、初めてのルートより二度目、三度目となると、精神的にも、肉体的にもかなり楽になると同じことで、実際にかんがりの成果があった。

しかし、トレイニングの山としては、ローツェの標高は、八五一六メートルあり、巨大な山であり、トレイニングとしてよりも、ローツェそのものに全力でぶつかり、そして全員登頂を目指し、中途半端な考えは捨てた。せつかく通子を中心として、ダウラギリⅡ・Ⅲ・Ⅴ峰の縦走で育ったメンバーを生かすために、貫田、大蔵を中心とした縦走隊のメンバーを同時期に、中国側からエヴェレスト北壁にルートを取り、頂上を目指すことにした。

最終的に、ネパール隊は、高橋和之を隊長とし、メンバー九名、ドクター二名、ベース・キャンプ・マネージャー二名の総勢十三名。中国側は、高橋通子を隊長とし、総勢十七名。ネパール側は南東稜、中国側は北壁と、二隊を、エヴェレスト南北両面に展開し、冬期同時登頂を目指した。

しかし、秋のローツェから冬のエヴェレストへと一口に言っても、いくつもの大きな問題があった。果して、八千峰を二つも連続し、秋、冬両シーズンにわたり、同一隊で登ることができるか。

この問題には、一九八二年のカモシカ同人がダウラギリ主峰（秋）へ、宮崎、山田、鈴木、村上が参加し、続いて、宮崎、鈴木が加藤隊の冬期エヴェレストへ、山田、村上が冬期マナスル隊へと参加し、秋、冬の八千峰へ連続することへの、体力、気力、精神力（ストレス）、高所順応への効果を試し、ローツェから、エヴェレストへの裏付けとした。

もう一つの問題は、休養のことだった。この問題は、非常に重要であり、休養する高度を間違えると、とんでもない命とりになるおそれがあった。一九六〇〜六一年にかけて、ヒラリー隊が行なった越冬実験では、六千呎で長期間滞在し、登山を行なったが、惨澹たる結果で、高所に滞在しなかったメンバーに比べ、大きな差があった。いろいろ考えて、検討した結果、秋のローツェを終え、冬のエヴェレスト開始までに三週間を取ることにした。場所は三九〇〇呎の高度にある、エヴェレスト・ヴェー・ホテルにした。休養する高度は非常に重要で、あまり高過ぎては、充分な休養にはならず、かといって、カトマンドゥまで降りてしまうと、脱順応、健康管理などを考えるとできず、結局エヴェレスト・ヴェー・ホテルにした。

その理由は、高度も適当と思われ、生活環境も非常に良く、幸か不幸か、当時ホテルは閉鎖されており、借切りにできたことなどを考えると、最高に良い条件であった。ネパール・サイドならではないと思ふし、現実かなり贅沢をし、そして心身共にリラククスすることができた。

最初の計画では、一週間目は、完全な休養をとり、二週間目は、軽い筋力トレーニング、三週間目は、近くの丘へトレッキングと計画をたてたが、実際には、高橋、山田が冬のパーミッション、および食糧、酸素など、装備の補充のためにカトマンドゥまで、宮崎、尾崎、堀がルクラまで下り、あと数人がゴーキョ・ピークへでかけ、結局計画倒れとなってしまった。

休養三週間という期間は、ローツェを十月二十日までに終らせ、十一月二十日から冬のエヴェレストを開始することからでた計算期

間である。それが長過ぎたのか、短過ぎたのか、休養期間中のトレッキングにしても、高度の問題にしても、もつと低所で休養すべきであったのか、これらのことは今後の研究課題である。また、カトマンドゥで、二週間滞在していた山田、一週間滞在していた高橋、そしてヴェー・ホテルで休養していたメンバーとの間に差は、あまりなく個人差もかなりあり不明である。

ただ明らかなことは、「ローツェから冬のエヴェレスト」を成功させるための、いろいろな発想に基本的な間違いはなかったわけで、これにより、ローツェも、冬期エヴェレストもネパール側においては、パーフェクトな形で成功したといえる。

#### ローツェ登頂

九月九日、五三五〇呎のローツェ（エヴェレスト）ベース・キャンプに全員が集合した。秋の各登山隊は、ネパールの予期せざる国内事情により、日本から送った荷物の受取りが、大幅に遅れた。特に七月から八月にかけてが最悪で、山学同志会はルートを変更（南西壁から南稜へ、最終的にはよりイージーなアメリカン・メデイカル・ルート）を余儀なくされ、イエティ同人も日程が大幅に遅れた。ネパール政府は、ルートがオーヴァラップする場合、原則として許可は、一隊にしかない。今回の私たちローツェの場合でも、山学同志会、イエティ同人と共に、同じアイス・フォールを通過するために、許可を取得するのは、非常に難しかったが、両隊の同意と好意を得て、ネパール政府から特別に許可がおりた。

私の頭の中では、すでにローツェをトレッキングとしてではな

く、ひとつのエクスペディションとして考えていた。副隊長の宮崎は私以上に、このプランに積極的で、現場においても一人でも多くの隊員を登頂させるため、タクティクスを組替え実行していた。

三隊の話合いにより、第二キャンプまでの役割を決めた。まず同志会が、ルート工作。カモシカ同人が、ルート整備と保持。そしてイエティ同人が、第二キャンプと第三キャンプ間のルート工作を受け持ち、無用のトラブルを避け、各隊のスピード化を計った。

私たちが、ベース・キャンプに到着した時には、すでに山学同志会はアイス・フォールに、ルート工作中で、カモシカ同人も九月十二日より、本格的に登山活動を開始した。

ローツェのベース・キャンプ入りする前に私たちは、四二〇〇呎のペリチュで、五千呎までの高所順応トレーニングを二日間行い、四九〇〇呎のロブチュでは、六千呎弱のトレーニングを行なった。ベース・キャンプの五三五〇呎入りをスムーズに行うと共に、ベース・キャンプと第一キャンプ間によこたわるアイス・フォールの危険を考え、この間を順応のために何回も往復し、アイス・フォール帯に長時間身をおくことをできるだけ避け、必要最少の荷あげのための行動をするにとどめた。実際には各員共、三日以上往復した。

ローツェへのルートは、ノーマルな初登ルートの西壁から、つまりローツェ・フェースにルートをとって、登山形式もほとんどオートドックスな極地法を採用。酸素も第三キャンプと第四キャンプで睡眠用、頂上アタックのみを行動用として使用した。

ローツェに関しては、より安全に、より完璧を求め、余裕ある登頂を目指し、冬のエヴェレストに継続させようとした。つまり今回

の遠征は、ローツェ・エヴェレストを切離したのではなく、両方を確実に登頂することが目的であり、そのことがかなり困難な課題であったので、登り方そのものは極地法という古典的なものとした。

秋のエヴェレスト・ベース・キャンプは、三十と四十張のテントで大賑いで、まるで北アルプスの涸沢にでも行ったような錯覚をおこさせるほどだった。エヴェレスト西稜からのアメリカ隊——この隊はジム・佐野（日系三世）を隊長とする男女混成のヨセミテ・チーム——。山学同志会（川村隊長）。イエティ同人（吉野隊長）。そして私たちカモシカ同人（ローツェ）と今までもあまり例がないほど、大賑いであった。

登山が開始されても、第二キャンプまで日本の三隊は同じルートなので、それぞれの隊員に加え、シエルバも加わり各ルートはけっこう賑やかで苦しい荷あげも楽しく、各隊のシエルバも互いに助け合って行動した。

しかしそんな雰囲気も、イエティ同人、山学同志会が共に、第二キャンプより上部にルートがのびるにしたがって、少しずつ変わってきた。

山学同志会は、日程の遅れにより南西壁から南稜にルートを変更したが、さらに南稜基部を回り込む、いわゆるアメリカン・メデイカル・ルートをとって、サウス・コルに出そうになってきたためだ。アタックする数日前に吉野隊長は、第二キャンプで私たちにその悩みを打明けた。彼は、山学同志会にアタックをずらしてもらうことを彼らに言えず、私たちに相談してきた。同じ日に、吉野隊長と入

れ換るようにして、山学同志会の川村隊長が、私たちのテントに遊びにきた。そしてなんとルートを変更することを、雑談のなかで話す。しかし、吉野氏の悩みを、私は川村氏には言えず、雑談で終始してしまった。今思うに、吉野氏も川村氏も、私たちは共に親しい山仲間で、それだけに言いだせない遠慮があったのだろう。

十月二日、第四キャンプ（七九〇〇<sup>ギ</sup>）を建設し、十月九日、山田、尾崎、村上の第一次隊がアタック。そして登頂。十月十日、宮崎、香川、シエルパのダワ・ノルブの第二次隊登頂。十月十一日、ナワン・ユンデン、アン・ソナの両シエルパの第三次隊は第四キャンプ入りするが、天候悪化のためアタック断念。第四次隊高橋、鈴木、サーダーのペンバ・ノルブは悪天の合間を縫うようにして登頂。しかし、第五次隊秦、川田は、悪天による時間切れでアタックを断念。第三次、第五次は登頂を逃したが、隊員七名、シエルパ二名、計九名の登頂は、酸素を使用し、極地法でしかもノーマル・ルートとはいえ、完璧な成功で、冬のエヴェレストへ大きなはずみがついた。

### 冬のエヴェレスト

冬のベース・キャンプ周辺は、秋の賑いがうそのように静かで、わびしささえ感じさせる。

十一月二十日より登山活動開始。冬のエヴェレストは、秋の白い雪の世界から、青黒く、晴れていても暗く、無気味な世界に変わる。アイス・フオールも動きが激しく、クレヴァスはより広く、口を開け、氷のブロックが散乱し、セラックも鋭く、ルート保持にも苦労

した。しかし、ルート工作は非常に早く、三日で第一キャンプまで到達、ルートは秋とほぼ同じルートをとる。

荷あげも順調で、十二月一日の第一キャンプ建設まで、すべての荷あげは終り、あまりにも順調に荷あげが進んだため、三日間も臨時休養をとる。このまま快進撃を続けたいところだが、ネパールの登山規則で、第一キャンプ建設は十二月一日と決りがあるため、ひとまず休戦。秋に雇ったサーダーやシエルパは、働きの悪いシエルパとアイス・フオール・ポーターと替えたためか、秋の時よりシエルパと隊員たちのチーム・ワークも、志気もかなり高く、冬のエヴェレストへ、より自信を深めた。

しかし、不安がまったくなかったわけではなく、充分な休養をとったと思ったが、ベース・キャンプ入りしたとたん、尾崎隊員は体調を崩し、ナムチェまで下る。カトマンドゥに三週間以上滞在した山田も、ベース・キャンプですでに顔がむくむしまつ。もちろん、二人共秋のローツェでは、そのようなことはなく、絶好調であったが、やはり三週間では充分な休養は、とれないのかもしれない。

十二月一日、第一キャンプ（六一〇〇<sup>ギ</sup>）、十二月三日、第二キャンプ（六五〇〇<sup>ギ</sup>）、十二月八日、第三キャンプ（七五〇〇<sup>ギ</sup>）、十二月十三日、第四キャンプ（七九〇〇<sup>ギ</sup>）

ルートは非常に早いペースでのびた。しかし、ルートのものびとは裏腹に、シエルパも隊員も故障者が続出した。宮崎は第三キャンプへのルート工作中、強風に吹飛ばされてきた落石が胸に当たり、肋骨を三本も折る。山田は、ローツェ・フェースでロープを持ったまま強風にあおられ、氷面に肘を強打する。打撲、捻挫したシエルパ、

それにローツェで凍傷になったサーダー。心臓発作がおこり死ぬ思いをし、ドクター・ストップの隊長の私。まさに満身瘡痍のカモシカ同人隊だった。

最初の計画では、第五キャンプを八五〇〇の地点に建設する予定であったが、ローツェが終了した時点で、第四キャンプを最終キャンプとした。変更した最大の理由は、第五キャンプのキャンプ・サイトとしての、風に対する安全性からで、もし悪天候、強風などで閉じ込められた時、成すすべがないことである。五年間のデータからも弱風時がそれほど長くなく、一日か二日であり、圧倒的に強風の期間が長いことから、結果的にはこの作戦が射的を射ていた。

十二月十六日午前二時三十分、山田、尾崎、村上、ナワン・ユンデンの四名が第四キャンプを出発。中国側ベース・キャンプに設置したファクシミリからは、天候の変化を、高橋通子隊長、大蔵から夜を徹して、トランシーバーを通じて送られてくる。私と宮崎、そしてアタック隊員にとって、中国から送られてくる天候(風)の情報は、登頂への見通しと裏付けに、大いに役立ち、励みにもなった。

午前八時すぎ、尾崎が頂上に立つ。それから一時間後、九時四十五分に山田が、そして十時三十分、村上、ナワン兩名がそれぞれ登頂した。山田はあとから来る村上、ナワンを小一時間も頂上で待った。兩名の疲労度からみて、登攀隊長の山田は、ヒラリー・ステップにロープをはり、登頂後も、安全圏の第三キャンプまで、二人に付き添って下降した。尾崎は、第三キャンプがいっぱいになることを考え、その日のうちに私たちのいる第二キャンプまで降りてきた。それにしても、素晴らしいスピードであり、うれしい誤算であ

った。

しかし、非常に苦しい遠征だった。あの強靱なシエルバたちでさえ、顔はむくみ、故障者も少なくなかった。私も第二キャンプで、四名が登頂するまでの一週間は、一日ほんの数時間の睡眠しかとれず、精神的にも肉体的にも限界であった。もし十二月十六日のアタックが失敗に終わっても、私は再度アタック隊を出す気はなく、そのことを宮崎副隊長に伝えた。彼も私と同じ考えで、二人共どちらに転んでもさばさばした気持であった。ただ、たとえ失敗しても、一人も失いたくはなく、気がかりはそれだけであった。

私も宮崎も、第四キャンプから四名を送り出した午前二時三十分から、彼らが登頂するまで、一睡もできず、長い時間だった。九時四十五分、山田からの第一声が入った。雑音がひどく、良く聞きたれなかったが、断片的に「頂上……」と叫んでいるようだ。もちろん、中国側もこの通信を傍受していた。おまけに、ベース・キャンプから双眼鏡で山田の姿まで見えるという。

私たちは、この瞬間を手にするため、五年間準備した。長く苦しい五年間だった。準備期間にも、いろいろなことがあった。冬のエヴェレストのポーランド隊の成功、植村隊の失敗、そして親友の加藤隊の遭難。私たちが入山してからも、イエティ隊の事故。悲しいことが多かった。

総予算二億五千万円、気の遠くなるような金額だった。私たちチネパール隊が出発しても、中国隊は、まだ不足している金集めのために奔走した。その他の準備においても中国隊におんぶすることが多



かった。中国隊から氣象フックス、そして勵まし、彼らの協力がなかつたら、私たちネパール隊の成功はなかつただろう。

十二月二十五日、ベース・キャンプを撤収。私と山田は、一足先に十二月二十日、登頂フィルムを持ってカトマンドゥへ出発。後ろ髪を引かれる思いでベース・キャンプをあとにした。ロブチエで中国隊の通子と最後の交信をする。あのロー・ラを越えて中国隊を助けに行きたかつた。再登頂も狙ひたかつた。しかし、私も隊員も、シエルバも肉体的にも精神的にも限界だつた。

七月に日本を出発してから、もうすでに五ヶ月、長い長い遠征だつた。心身共に疲れ果てた。

ローツェ登頂後、香川は脳血栓——現地では脳浮腫と思われ、帰国後脳腫瘍と診断された——になり日本に帰国した。精密検査では、脳腫瘍で手遅れとの連絡が入る。冬のエヴェレストが始つてまもなく、手術は成功し、頭を開けてみたら、脳血栓だつたという。一時は完全に諦めていただけに、奇跡だと思つた。ただられしかなかつた。

登頂した尾崎も、ふらふらでようやくベース・キャンプに着いた。彼は、個人装備の入つたリュックサックを背負う力もなく、いつクレヴァスに転落するか気がきでなかつた。村上也に登頂後、第二キャンプへの下降でスリップ、大腿部へひどい打撲をおい、ベース・キャンプへ着いたとたん、ストレス性の胃潰瘍となり、一時はヘリコプターの出動も考えたほどだつた。

どの遠征隊にも、成功なり失敗なり、それぞれの要因がある。私たちネパール隊の成功要因もいくつかあるが、その中でしてあげ

れば、次のことだ。

第一は、発想(計画)の正しさだろう。冬のエヴェレストをより早く、短時間で登頂するための、ローツェからエヴェレストへの発想。

第二は、やはり人選である。宮崎副隊長のリーダーシップ力。山田隊員の登攀力。尾崎隊員の登頂時にみせた、ルート・ファインディングのセンスの良さ。隊員のそれぞれの力とチーム・ワーク(人間性)は抜群だつた。サードを含め、シエルバの人選も数年も前から着手し、なおかつローツェ終了時に数名のシエルバを入れ替え、よりシエルバの質の向上をはかつた。

第三に、テントを含め、数々の装備の開発、リチウム電池(午前二時半の頂上アタック出発を可能にした)などの最先端技術用品の導入、ソ連製の酸素器具(頂上アタック用、ネパール隊のみ)その他、五年間にわたる冬のエヴェレスト周辺の氣象データの分析、もちろんつきもあつた。

いずれにせよ、困難な課題が今回は「秋のローツェから冬のエヴェレスト」と大きければ大きいほど、小さなポイントが一つ欠けても成功しないわけで、すべての条件がそろつていても、最後のつきがなかつたら成功しないと思う。それほど課題が大きくない山であれば、登り方によつては、いくつかのポイントを失なつても成功する確率は高いと思う。

もちろん今度の遠征で、反省すべき点もいくつかあつたが、特にその中で一番感じたことは、金がかかりすぎたことだ。次からは、あまり金のかからない、数人の隊員で、短い日数で出かけたと思

う。

一時は、失敗かと諦めた時もあったが、「ついでに男・ダンブ」  
(私のニック・ネーム)で終った遠征だった。

△記録概要▽

隊の名称 カモシカ同人チヨモランマ・エヴェレスト登山隊

活動期間 一九八三年八月～一九八四年一月

目的 ポスト・モンズーン期ローツェ登頂と冬期エヴェレスト  
南北両サイドからの登頂

隊の構成 隊長⇨高橋和之(40)、副隊長⇨宮崎 勉(36)、登攀隊長  
⇨山田 昇(33)、隊員⇨森 国雄(36)、鈴木 繁(30)、  
尾崎 隆(31)、村上和也(28)、香川 毅(27)、川田修三(26)  
医師⇨浅地 徹、宗 時栄、ベース・キャンプ・マネー  
ジャー⇨堀 勉、鍛冶真理子⇨ネパール・サイド隊員  
のみ

行動概要

ローツェ——九月九日ベース・キャンプ設営。十七日第  
一キャンプ(六一〇〇<sup>m</sup>)、二十一日第二キャンプ(六  
五〇〇<sup>m</sup>)設営。三十日ローツェ・フェース七五〇〇<sup>m</sup>  
に第三キャンプ設営。十月二日第四キャンプ(七九〇〇<sup>m</sup>)  
に設営。九日山田、尾崎、村上登頂。十日宮崎、香川、  
ダワ・ノルブ登頂。十四日高橋、鈴木、ペンバ・ノルブ  
登頂。いずれも初登ルート経由。二十日ベース・キャン  
プ撤収。

エヴェレスト——十一月十六日ベース・キャンプ帰

記録発表

着。十二月一日第一キャンプ(六一〇〇<sup>m</sup>)、三日第二  
キャンプ(六五〇〇<sup>m</sup>)、八日第三キャンプ(七五〇〇<sup>m</sup>)  
に、十三日第四キャンプ(七九〇〇<sup>m</sup>)設営。十六日  
南東稜より山田、尾崎、村上、ナワン・ユンデン登頂。  
二十五日ベース・キャンプ撤収。

大蔵喜福 エヴェレスト冬期登頂 岩と雪 一〇三号

三十五—四十頁 一九八四

カモシカ同人隊 初めて日本人が登頂した世界四位の高  
峰「ローツェ」 山と溪谷 五六九号 二十一—二十五頁

一九八四

カモシカ同人隊 地を這うエベレストの冬の風—カモシ  
カ同人冬季チヨモランマ・エベレスト登山隊の記録から

山と溪谷 五七一号 十四—二十頁 一九八四

山と溪谷 五七一号 十四—二十頁 一九八四

山と溪谷 五七一号 十四—二十頁 一九八四



▲ 7950m付近よりエヴェレスト南峰，頂上はこの奥，1983年10月7日午後3時：South Peak of EVEREST seen from 7950m at 3:00 P.M. October 7 1983. The summit is hidden behind it. *Photo by Haruyuki Endo*



▲ 8200m付近を登高中の日本隊，1983年10月8日午前7時：Japanese following me at 8200m on the Southeast Ridge of EVEREST at 7:00 A.M. October 8 1983. *Photo by Haruyuki Endo*



▲ 8500mで出会ったアメリカ隊員。後方にエヴェレスト南峰が見える。10月8日午前10時：I came across an American at 8500m on the Southeast Ridge of EVEREST at 10:00 A.M. October 8 1983. In the back lies the South Peak of EVEREST. *Photo by Haruyuki Endo*

8500m地点から後続する仲間を見る。上から順に鈴木隊員、川村隊長、禿隊員、バサン・テンバ、吉野隊長、沢上隊員、手前の足は一緒に休憩しているアメリカ隊員のもの、10月8日午前9時10分：Climbers on the Southeast Ridge of EVEREST seen from 8500m at 9:10 A.M. October 8 1983. H.Kawamura, H.Kamuro, Pasang Temba,

▼ H. Yoshino and N.Sawagami. Seated climber in foreground is American. *Photo by Haruyuki Endo*





▲ エヴェレスト頂上で日本とネパールの国旗をうつす。10月8日午後4時35分：Lonely summit of EVEREST at 4:35 P.M. October 8 1983. *Photo by Haruyuki Endo*

10月8日午後4時40分、頂上に近づく禿隊員、後方はローツェ：H.Kamuro comming  
▼ nearing the summit of EVEREST at 4:40 P.M. October 8 1983. *Photo by Haruyuki Endo*







▲ 雪煙をあげる冬のエヴェレスト南東稜, 7900m付近より望む: EVEREST in the plume. A view from 7900m on LHOTSE Face. There is surprisingly little snow in winter. *Photo by Kamoshika Dojin Lhotse-Everest Expedition*

右上: エヴェレスト第3キャンプから第4キャンプに向う:  
Above right: Climbing to Camp 3 during winter ascent of EVEREST.  
*Photo by Kamoshika Dojin Lhotse-Everest Expedition*

右下: ローツェ頂上直下の第一次アタック隊: Below right: First assault climbers belaying just below the summit of LHOTSE.  
*Photo by Kamoshika Dojin Lhotse-Everest Expedition*



▲エヴェレスト頂上、平和メッセージ・カードを持つ山田隊員、1983年12月16日午前9時45分：N Yamada holding "a peace message card" on the summit of EVEREST at 9:45 A.M. December 16 1983. Photo by Kanoshika Dojin *Lhotse-Everest Expedition*

▶冬のエヴェレスト南東稜頂上周辺のアタック隊、先頭に尾崎隊員、続いて山田隊員、ナロン・ユンデン、1983年12月16日午前8時：Climbers below the summit of EVEREST. T. Ozaki leading followed by N Yamada and Nawang Yonden Sherpa at 8:00 A.M. December 16 1983. Photo by Kanoshika Dojin *Lhotse-Everest Expedition*



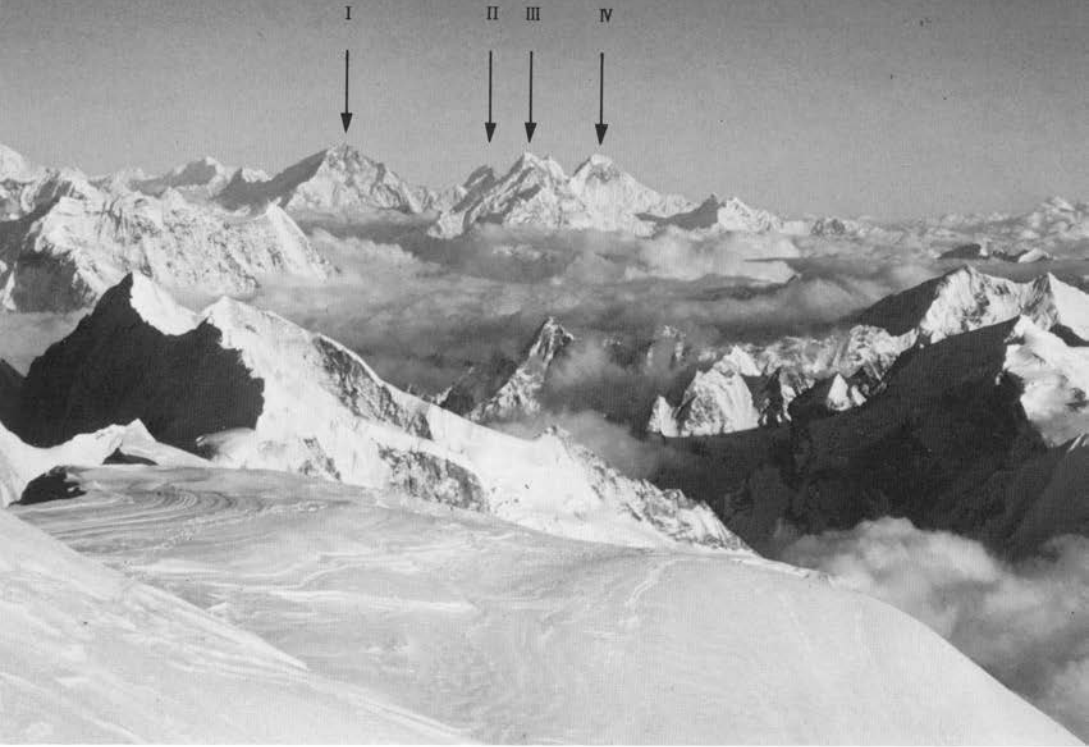


▲ 右氷河上よりヒムルン・ヒマール南面：  
HIMULUNG HIMAL's South Face seen from  
Right Glacier. *Photo by Hiroshi Hori*



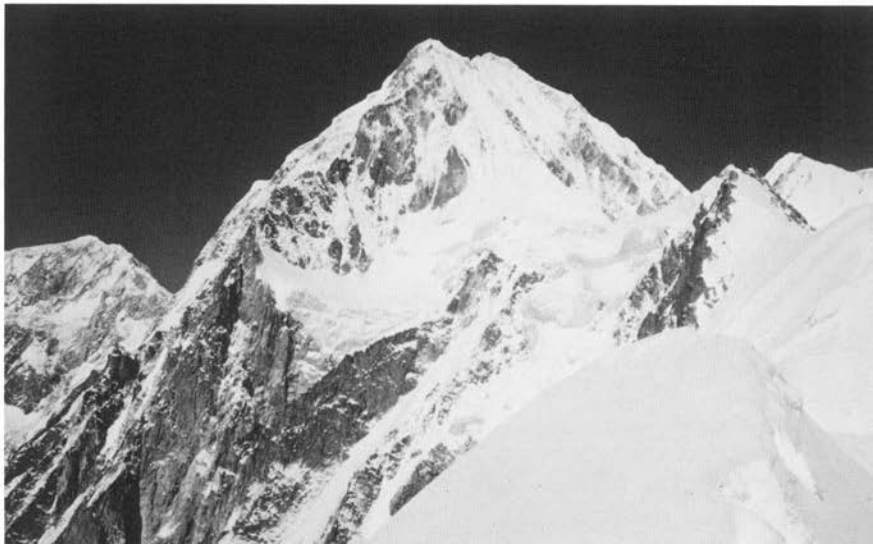
▶ 第2キャンプ直下を登る：Following a ridge just  
below Camp 2 on HIMULUNG HIMAL. *Photo by  
Hiroshi Hori*

Ganesh Himal



▲ヒムルン・ヒマール頂上より東方を望む。左から右へ、ガネッシュ・ヒマール I, II, III, IV 峰：A view to the east from the summit of HIMULUNG HIMAL. Peaks in center are, left to right, Ganesh Himal I, II, III and IV. Photo by Hiroshi Hori

第2キャンプよりヒムルン・ヒマール南東壁を見る。右のスカイラインが東稜：HIMULUNG HIMAL'S Southeast Face seen from Camp 2. East Ridge on skyline at right. Photo by Hiroshi Hori



## ヒムルン・ヒマール初登頂

はじめに 日本人が初めて登った八〇〇〇峰マナスル。ここから南へ向つてのびる尾根上には、マナスル三山と呼ばれて日本人に親しまれている山々が連なる。P. 29、(編注1)ヒマルチュリ、パウダの三山である。ではマナスルの北側は、知る人ぞ知ると言う程でもないがあまり知られてはいないのではなかるうか。そうだ、我々の山ヒムルンは、このマナスルの北側にあるのだ。

この山——ヒムルン・ヒマール(七二二六峰)(編注2)への最初の試みは、一九六三年の日本隊(電々九州隊)によつて始められる。翌年オランダ隊も挑んだが失敗。これから十八年後に我々弘前大学隊が試みたが、うち続く悪天のため断念。翌年の春のシーズンの仙台市役所隊も失敗に終つた。

これまでの記録からすると、春のシーズンのこの地域は大量の降雪があるのが普通らしい。そこで我々は翌年(一九八三年)の秋の

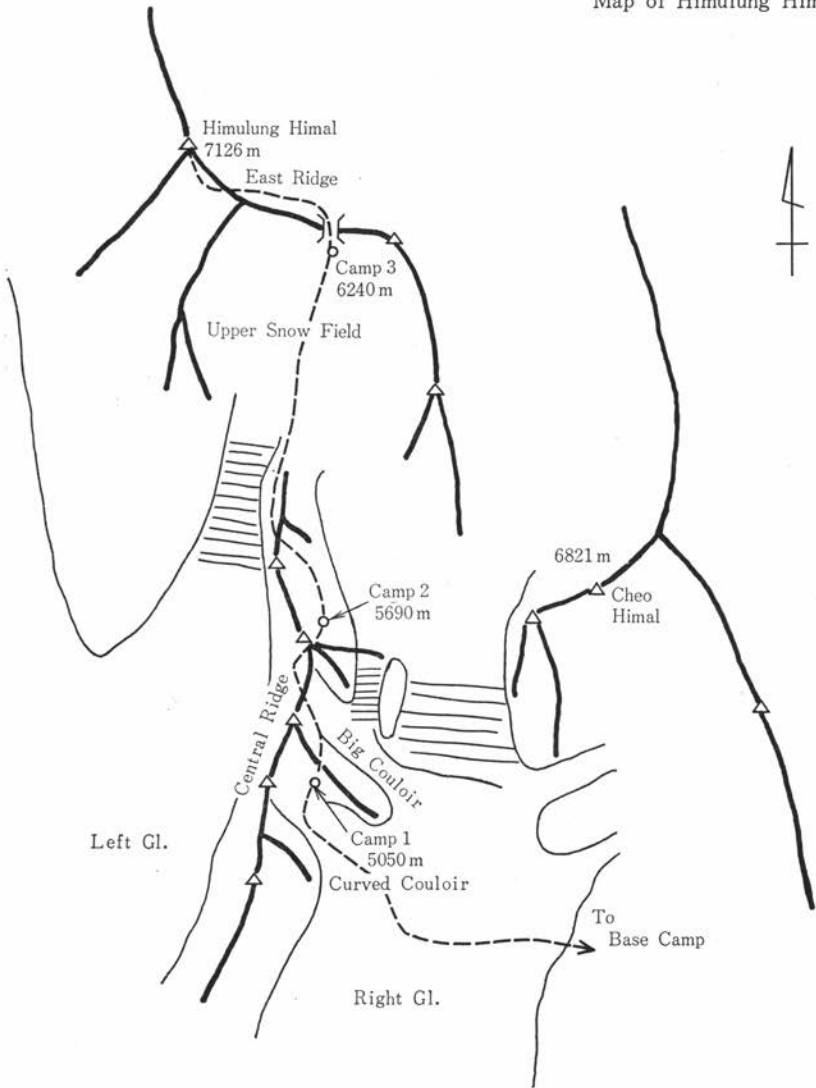
堀

弘

シーズンに小規模な隊で初登頂を目指すことにした。いわば前年の雪辱戦のようなものだ。このピークは初登されるまではネパール人との合同隊にしなければならぬとされているので、シェルパ三名をネパール側隊員とすることで準備を進めた。

アプローチ 八月二十四日、空路カトマンドゥへ到着。カトマンドゥで準備と手続を終え、陸路バスでキャラヴァン出発地デムレへ向けて九月三日出発した。モンズーンの雨の中を十日目にしてトングジュに着く。ここより大マルシャンディは西へ大きく流路を変え、そのまま西へ向えばマナンを通つてムクチナートへ抜けられる。我々はここよりマルシャンディを離れ、支流のドゥド・コーラ沿いに北へ向う。いよいよマナスルの北西側へ入込むのだ。昨春の我々のベース・キャンプを越えてヒムルン右水河左岸の気持の良い四三〇〇峰の平地にベース・キャンプを設けたのは九月十四日だつ

Map of Himulung Himal



By H.Hori

た。

登山開始 二日間をベース・キャンプの整備と休養に当て、十七日より登山活動に入った。

ベース・キャンプから先は氷河の上を歩くことになる。春と較べると氷河上は雪がまったくない。ヒドン・クレヴァアスに落ちる心配はないが、逆に口を開いたクレヴァアスを越えるのに苦労する。

ヒムルンの南面は電々九州隊により中央岩稜と命名された岩稜と、中央岩稜に隔てられた右氷河、左氷河によって取囲まれている。左右両氷河はヒムルンの手前で険悪なアイス・フォールとなる。中央岩稜自身は岩のナイフ・リッジで、いくつものピナクルを連ねていてこれを登るのは論外である。

こうして手堅く守られた山容の中で唯一安全であろうルートを、一九八二年冬の偵察の時に見付けていた。それは右氷河のアイス・フォールと中央岩稜との間に入込んでいるクローワールをたどるものである。八二年春の時も、このルートから上部雪田へと抜けていた。今回も同じルートを使うことにしていた。

右氷河のクレヴァアスとアイス・フォールからのデブリに苦労させられながら、登路となる「く」の字クローワールに入って驚いた。昨春は単なる雪の斜面だった所に上下二段の滝が露出しており水が流れているではないか。上の滝は四十呎、下のは三十呎位だろうか。フィックス用のロープを最小限の二千呎と見積っていた我々は、ロープが不足するのではないかと心配になる。でも何としてもここを越えなければならぬのだ。斉藤隊員の強引なリードでここを越えて荷あげ可能なルートに仕上げた。

ここから上もルート上に雪はなく、急で不安定なガレ場が続いている。困難ではないが一番危険な個所であったと思う。雪のない「く」の字の屈曲部に石垣を積んで平地を作り第一キャンプ（五〇〇呎）とする。九月二十六日であった。この頃になってやっと終日晴天の日が訪れるようになる。これまでは連日のように雨か、曇りが降っていた。やっとモンズーンも明けたのだろうか。

第一キャンプより先、ルートは雪の大クローワールを登って中央岩稜に出る。大クローワールに入ると傾斜が急に強くなる。ここにはすべてロープを張る。大クローワールを抜け中央岩稜に出るあたりは、岩ではなく氷の上に雪の乗った不安定なリッジとなっている。このリッジあたりから南方の視界が開け、ラムジュン・ヒマール、アンナプルナの山々が我々の目を楽しませてくれる。ここから第二キャンプまでの間には、この年の春の隊のフィックス・ロープが露出している。「く」の字クローワールでロープを使ってしまうので取外して使わせていただく。

第二キャンプは中央岩稜の東側に雪が堆積して平になつた部分の五六九〇呎に設けた。昨年はここに張ったテントが大雪で埋められそうになり苦労した。そこで今回は雪洞を掘って第二キャンプとする。この高度でスコップを振るうと息が切れるが、二時間半位で結構まとものが出来上った。雪洞の入口からは正面にチエオ・ヒマールが良く見える。ここから南東を見るとマナスルが大きい。目を下に向けてベース・キャンプも見える。このマナスル、いくらこちらが高度を上げてもちっとも形を変えようとしなない。さすがは八千呎峰と言ったところか。

ここまで登っても、まだ先は長い。このままの傾斜で一氣に頂上まで続いてくれば良いのだが、この先に上部雪田という曲者が控えている。高所登山では適度な斜面が頂上まで続いているのが理想とされる。傾斜がきつ過ぎれば技術的な困難さも増し当然不向きである。逆に高所で平坦な場所が続くというのも消耗させられ良くないのだ。

第二キャンプからルートは一担中央岩稜の東側へ四〇〇<sup>m</sup>下降する。ここもフィックス・ロープが欲しいところだが、手持ちのロープすべてを上部に回さなければならぬので、ここはがまんする。そのために後でえらい目に会うのだが。

堀パーティがベース・キャンプへ下り、入れ換りに斉藤・パーティが第二キャンプへ上る。その日より三日連続で風雪となる。ベース・キャンプでも一時間毎の除雪が必要な程の降りだ。やっと雪もおさまり、十月十四日に堀パーティは第一キャンプへ向う。この日第二キャンプより上部へ向って行動していた斉藤・パーティは第二キャンプ直下の例の斜面で表層雪崩に遭遇し、天候も悪く暗くなって第二キャンプの雪洞が見付からないと、トランシーバーで伝えて来た。斉藤・パーティは第二キャンプ付近でビヴァークして、翌朝第二キャンプの雪洞に戻った。しかし、消耗が激しいのでベース・キャンプへ下って休養することにする。入れ換りに堀パーティが第二キャンプへ入る。

第二キャンプから先は、四〇〇<sup>m</sup>下降した後再び中央岩稜の西側へ登り返す。ここからルートは一氣に平坦になる。途中クレヴァス帯を何とか切り抜けて上部雪田へ出た。この上部雪田をなんとか

荷あげで往復して十八日に第三キャンプを作った。ここは雪田の一番奥、ヒムルン東稜のゴル直下六二四〇<sup>m</sup>である。

東稜へ一ピッチ半の急な氷壁を越えると東稜のゴルへ出る。ここまで登るとチベットの山々も見えてくる。ヒムルンの北側には上部雪田よりさらに広大な雪原が広がっている。右氷河はここまでつながっているのだ。

東稜は四分の一位まではネパール側の雪の斜面を比較的楽に行ける。そこから北面をトラヴァースしてミックス壁を越えてリッジを進む。そして第二の岩稜帯を再び北側から登ってジャンクション・ピークへ抜ける。ここまで一週間にわたってルート工作した後、いよいよアタックの日がやって来た。この時点でルート工作に消耗した堀は頂上攻撃からリタイアしていた。

十月二十六日に高橋、南は六五九〇<sup>m</sup>まで登ってビヴァーク。斉藤とネパール隊員のキルクンは翌二十七日に第三キャンプからスタート。どういう訳かビヴァーク組に途中で追付き、同時に頂上に立った。ジャンクション・ピークから先はチベット方向に雪庇の張出したゆるい稜線が続いている。その雪庇の中の一番高いところが頂上だ。十月二十七日、午後四時六分であった。

手をのびせば届きそうな近さに見えるマナスルには、冬の訪れを告げるような雪煙が舞っていた。ずい分手間取ってしまったが、よりシンプルな隊で初登頂に成功した。さあ皆の待っているカトマンズドゥへ帰ろう。

(編注1) 一九八四・五・二六の山名改訂により Peak は *Nyathi Chuli* となった。

(編注2) 善行久親 ヒムルン・ヒマールの試登 山岳 五十九 一九六四

△記録概要▽

隊の名称 ネパール・弘前大学ヒムルン・ヒマール合同遠征隊

活動期間 一九八三年九月～十一月

目的 ヒムルン・ヒマール(七一二六m)の初登頂

隊の編成 隊長||黒滝淳二(31)、隊員||堀 弘(26)、斉藤 涉(26)、

高橋 堅(25)、南 真木人(22)、西岡 崇(20)、ネパー

ル隊員= Ang Kami Sherpa (32), Kirkin Lama (27),

Dorje Sherpa (23)

行動概要

九月十四日四三〇〇mにベース・キャンプ設営。十七日

中央岩稜へ至るクローワールに向つて登攀活動開始。二

十六日第一キャンプ(五〇五〇m)設営。十月一日中央

岩稜五六九〇mに第二キャンプ設営。十八日上部雪原、

東稜のコル直下六二四〇mに第三キャンプ設営。二十七

日斉藤、高橋、南、キルキン・ラマが東稜経由で午後四

時六分登頂。十一月一日ベース・キャンプ撤収。

弘前大学体育会山岳部合同遠征隊 ヒムルン・ヒマール

初登頂 ヒマラヤ 四九号 十四—二十頁 一九八四



Allan

## 好きな風に登ってくれ

——シヴリン西稜・南壁登攀——

ドーンという音がした。

シヴリン西稜にかかる懸垂氷河が壊れブロックナダレが起きた。ナダレは右の氷壁を落下し西稜の折れ曲った部分、ちょうど最終キャンプ（五八五〇<sup>メ</sup>）のある辺りにぶつかり跳ね、やがて下部氷河に呑みこまれた。

今朝の三時半、寝ていた僕たちのテントを襲ったのと同じやつだ。その時、康子は運悪く氷のブロックを胸にくらい負傷してしまつた。今日はアタック日だというのに！

「私なら大丈夫、ここで待ってるから二人で行ってよ。その方が早いし」結局、彼女は一人最終キャンプに残りアタックから外れた。

「キャンプ、大丈夫ですかね」と相棒の速藤が聞いた。『やはり下つたほうが良かったんじゃないかな？』と一瞬、不安と迷

いが走つた。

「まあ平気だろう。そんなに大きいナダレじゃなかったしな。とにかく早く登って下ろうぜ」

目の前には西稜の最後の難関、懸垂氷河が立ちはだかっている。これさえ越せば頂上は俺のものだ。登っている最中に、また、氷河が崩れたら……。よそう悪いことを考えるのは、不安を消すように僕は登るピッチを上げた。

ガンゴトリ・キャンプの計画は、パミールの国際キャンプをもじって名付けた遠征だ。インド・ガルワール・ヒマラヤにあるサト。パント峰（七〇七五<sup>メ</sup>）とシヴリン峰（六五四三<sup>メ</sup>）この二つの山を、隊員の好み・力量に応じてルートを選び、自由なスタイルで登ろうという計画だ。

関 久 雄  
中 尾 政 樹



アルバイン・スタイルで登れる人はそれなりに、フィックスト・ロープの必要な人は張って登ればいい。それは自分で決めることだ。出発前に僕はこう言った、

「みんな好きな風に登ってくれ。ただし、すべて自分の責任においてだが」と。結局で上がったプランは、サトパントを初登ルート（北稜）からオソドックスに登り順応をすませ、次にシヴリンをカプセル・スタイルで西稜と南壁に分れ登攀し、頂上でランデブーしよう、というものだった。

「せいぜい二流の上ぐらい」と評された僕たちのレベルでは妥当な線というもんだらうけれどとにかく自分が面白く登れて、ちょっとは気のきいた遠征をやりたいかったんだ。

七月二十一日ベース・キャンプに入りその直後高山病になった隊員のヘリコプター救出活動や、悪天で日程は遅れたものの、八月二十三、二十四日の両日でサトパントを登頂し、次の目標シヴリンに向った。

### シヴリン西稜

九月一日、モンズン明けを思わせる晴天の下、南壁と西稜に分れ登攀を開始。三日タポバン（四三〇〇呎）のベース・キャンプからメルレー氷河をつめ西稜の下部に設けたキャンプ（五〇六〇呎）に入る。四日、雪と岩のミックしたガリーを五ピッチズ登り雪壁をつめ、更にガレ場を登り西稜上に出た。ここには過去の登山隊のキャンプ跡があり僕らもテントをここに張る。標高五四五〇呎。ここから先は僕と康子と遠藤の三人で行動した。

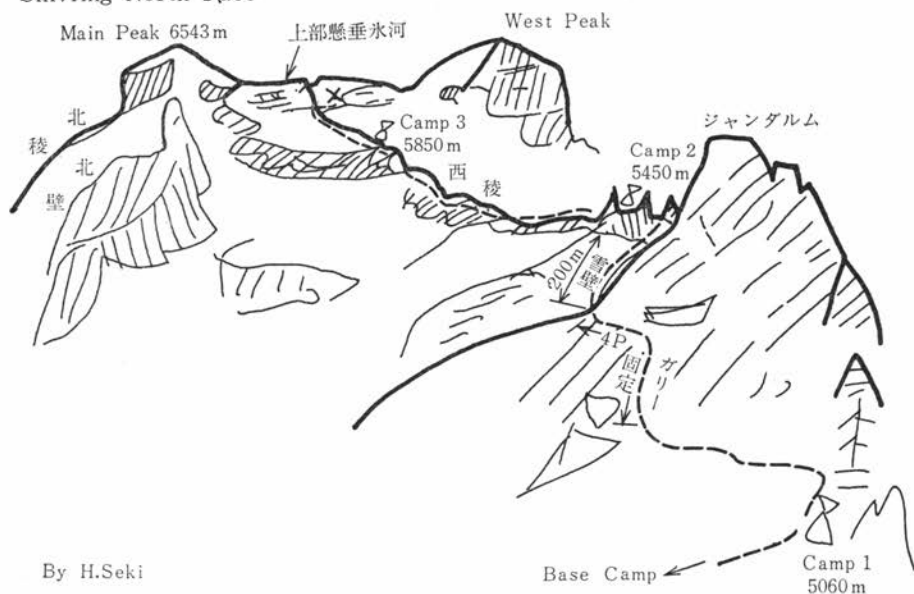
五日、上天気の下、ルートに残るピトンやボルトに導かれ、日本の既成ルートを登っているような気易さで僕らは快適にピッチをのびした。垂壁を含む標高差三五〇呎の岩稜を、ルート工作と荷あげをくり返し、夕方五八五〇呎の雪稜に抜けた。氷を削ってテント・サイトを作る。ビヴァーク・テントを張り終える頃にはシヴリンの二つ耳は夕陽に燃え上がり、やがて夜の闇に追たてられ消えた。

狭いビヴァーク・テントの中で夕食の仕度が始まった。疲れていたけれど僕たちは核心部を一日で抜けたことに気をよくしていた。春の穂高にいるような感じ、そうこんな感じで登りたかったんだ。周りには僕らの外は誰もいない。なんて贅沢なんだろう。明日は頂上に向う。登れても、登れなくてもこれっきりのアタックだ。日数に余裕はあったが何せ疲れがたまっていて、何度も登り返す気にはなれなかった。

息苦しさに目をさました。起きてベンチレーターを開ける。この高度はサトパントの第二キャンプと同じくらいだというのにどうしたんだろう。「関さんも眠れないんですか」と遠藤も起きた。時計はまだ十一時半。外は風もなく一面の星空で、明日の好天を約束してくれている。それからしばらく浅い眠りにおちた。

突然、ドーンという音にハッと起こされた。「ナダレか！ まあここは稜の上だし大丈夫だろう」と再び眠ろうとした時、バサッと音がし、「キヤー！」と康子が恐ろしい悲鳴を上げた。ギョッとして跳起き「オイッ康子どうした。しっかりしろ！」と彼女をゆさぶるとグツタリと気絶していた。「落石！ それにしてもどこから」

# Shivling North Face



By H.Seki

西稜の懸垂氷河は絶望的な様相で、「尾根のどんづまりは丁度よい具合にクローワール状になっていて、これなら登れそうである」と一九七九年兵庫労山隊の書いたルートは今は跡形もなかった。西稜が氷河に消える所から、右へ三十メートルヴァースしてテラスに着き、そこからスラブとかぶった氷壁を直登するルートを選ぶ。標高差七十メートルはある氷河の中では一番距離が短い。遠藤に確保を頼み登り始めた。スラブの直登をさげ、右へトラヴァースし氷のつまったチムニーに入る。コの字ピトンを幅広のクラックに打込みダブル・アックスで抜け氷のテラスに出る。ここから左に戻って直登するが見るからに悪い。アイス・ピトンを一本打ちアプミをかける。アイス・アックスがスカスカ抜けて決らず、次のピトンを打つのもままならない。そこで氷の突起を削ってテープを回しアプミをかける。次に打ったピトンも効いているか不安で、やはり氷を削ってアプミをかけた。腕はパンパンになりノドはカラカラだ。「このままじゃヤバイな」とアックス・ハンマーとアイス・アックスにぶら下がったまま必死にルートを捜す。足がふるえてきた。左上にクラック

ふとビヴァーク・テントの横腹がカギ形に裂け、康子のそばに頭ほどの大きさの白く光る水のブロックが転がっているのを見つけた。さっきのナダレが西稜にぶつかりくだけ散り、その一つがテントを襲ったのだ。  
正気に戻った彼女ははきけと胸の痛みを訴えた。三時半だった。夜明けを待って彼女の様子を見たが大丈夫そうなので彼女はここに残り六日の朝八時半、僕と遠藤の二人はアタックに出発した。



▲シヴリン南壁6100mで荷あげ中の山形隊員。左手にシヴリン西峰が見えるが、ルートはリτζが消える地点からバンドをトラヴァースする：SHIVLING'S SOUTH FACE. M.Yanagata raising his goods at 6100m. In the left soars SHIVLING'S West Peak. We traversed to the left through the band above. *Photo by Keiji Ohara*

▶シヴリン南壁。岩と雪のミックスマス・リτζに登る中尾隊員。ルートはリτζが壁に消えるところから、ほぼ水平にトラヴァースしてコルに出る：M. Nishio leading a mixed rock and ice ridge on SHIVLING'S South Face. We traversed from above this ridge to the col. *Photo by Keiji Ohara*



▲ 9月5日、シヴリン西稜を登攀する関康子隊員、この岩壁は3級程度、部分的にIV+ A1となる：  
Y.Seki climbing SHIVLING's West Ribge on September 5. This part was not difficult. *Photo by Yuetsu Endo*





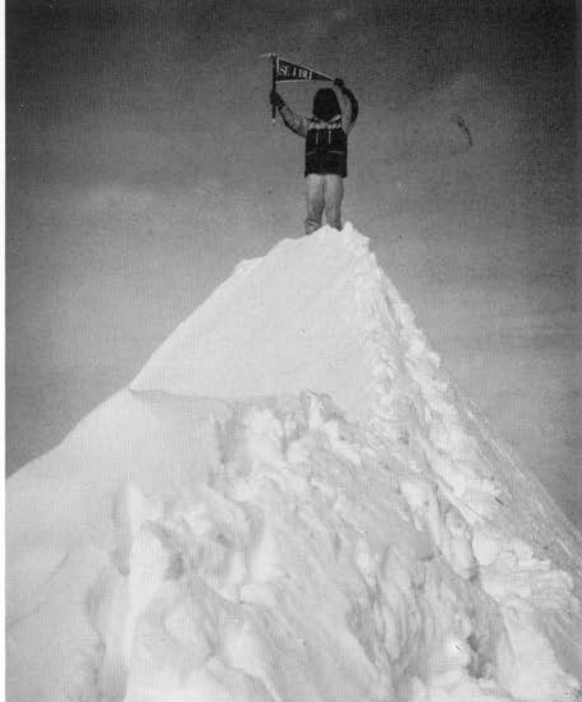
▲バギラティII峰頂上直下5mを登る久松隊員、背景はチャトゥランギ山群とチャトゥランギ氷河：H.Hisamatsu reaches the summit via the North Ridge of BHAGIRATHI II. The Chaturangi group and Chaturangi Bamak are in the background. *Photo by Motomu Omiya*



9月10日、西稜上部懸垂氷河の下降、西稜パーティのルートはもっと右：After making the summit of SHIVLING, climbing down a hanging glacier on the West Ridge on September 10. *Photo by Kenji Ohama*

◀スンドル氷河から見るサトパント北面、左が主峰、右が西峰：North Face of SATOPANTH seen from Sundar Glacier. The main peak is on the left and the West Peak is on the right. *Photo by Hiroto Hisamatsu*

サトパント西峰7045m頂上に立つ大宮隊長：▶  
M.Omiya posing on the summit of SATOPANTH's  
West Peak. Photo by Akira Suzuki



◀  
サトパント北西稜6500m付近の氷壁  
を登る久松隊員(左), 鈴木隊員(右):  
Ice wall on the Northwest Ridge of  
SATOPANTH at 6500m. H.Hisamatsu  
(left) and A.Suzuki (right) using double  
axe technique. Photo by Motomu Omiya

クが走っているのを見つけた。スノー・ピッケトを一本差し込みハンマーでたたき込む。ハンマーを振る度に身体が壁からはがれそうになり「落ち着け、うまくいくぞ」と必死に自分に言聞かせた。ピッケトは意外に効いた、と思った。何度かチェックしてアプミに乗り、ようやく助かったと一息つく。

「関さん、そこ大丈夫ですか」「オーバッチリよ。いやあショツパかったよ」「じゃ写真撮りますから」とパチリ。「じゃ、また登るから頼むね」と僕はアイス・ピトンを再び打込み始めた。あと二メートルで傾斜は落ちる。

その時、忘れもしないズバツという恐しい音を残してピッケトが抜け、僕は空中にすつ飛んだ。足と全身にショックを受け、次は頭を下にしてスラブを滑り落ちていた。

「しまった、落ちた！」スラブと下の氷河が見える。岩にぶつかり痛みが走る。「もつと強い痛みがあつて俺は死ぬのか」一瞬、後悔に似た感情がわき、次の瞬間ロープにぶら下がっていた。全身が痛む。息苦しい。

「セキさーん」「セキさあーん」遠藤のうわずった叫び声が聞えた。僕はゆっくりと頭を振る。ン！頭はぶつけてないな。足も動く。おつ、手も大丈夫だ。しめた、動ける。腹がむかつき、苦しいのが気になるが何とかなるだろう。「セキさーん」再び遠藤が絶叫した。「オーイ、大丈夫だあ。ユマールで上がるから、とにかくロープ固定してくれ」これだけ叫ぶのが苦しい。「わ・か・り・ま・したー」と声がした。二十分程の墜落だった。

どれだけの時間が過ぎただろうか。ロープにかけたユマールとプ

ルージックを交互に滑らせながら三十分、五十分とずり上げ続けた。曲がったクランポンズの爪がスラブをガリガリと引つかいた。取付に戻り、自己確保を取るとへばり込んでしまった。遠藤は西稜までロープを固定してくれ午後一時半やつと西稜に戻った。

ベース・キャンプと南壁隊とにトランシーバーで交信し登攀断念を伝える。「クソツ失敗した」という思いがこみ上げてきた。それにしてもよく死ななかつたな、どうしてだろう。幸運を喜ぶよりもその疑問が僕の頭を支配した。オロクツても不思議じゃない場所だったのに……。何が俺に何かを教えようとしたのかもしれない。笑われるかもしれないがそう思った。

康子の負傷した時点で下るべきだった。二度目のナダレはそれと氷壁のモロサを警告していた。そして墜落、事故は起こるべくして起きたのかもしれない。それを感じないまま登っていればいつか確実に死ぬだろう。

やがて僕はゆっくりと西稜を下り始めた。最終キャンプに戻り、康子と遠藤の三人で長く苦しい下降を続けた。時々激痛が走り、一ピッチ下ると十分くらい動けない。夕焼けがシヴリンを染め出した。ぼんやり眺め、それから重い腰を上げ懸垂下降を続けた。

「好きな風に登ってくれ！」と大見栄を切ったのに、また決めそこなつたな。まあいいさ、俺にはまだやることあるんだと思っておこう。それが何だかつかみ切れていないが。今はとにかく五五〇分のキャンプまで下ることだ。

シヴリン西稜に黄昏がせまっていた。

(関 久雄)

## シヴリン南壁

まづ夢があった。ビック・ウォールをできるだけシンプルなスタイルで登りたい。うまくまとめるのではなく、はみだしてしまいうほどに冒険的に。

そして、手にした舞台はシヴリン。問題は南壁の真ん中に走るリッジを選んだ。ダグ・スコットが撮った、その南壁の写真（マウンテン誌に掲載）が実にすつきりとして見事だったからだ。僕にその答がうまく出せると思っていたわけじゃない。できることをやるより、やりたいことをできるようにしたいと思っただけだ。

そして、その壁の前に立つまでの数ヶ月、頭の中で何度も登攀は繰り返され、いつしかその壁を登れると信じるようになっていた。

その間、オーストリア隊がそのラインをあと少しを残して敗退したというのを聞いてホッと、僕たちと同じ時期、ポニントンが南壁を狙ってやってくるという情報を聞き、心はゆれた。そしてもし南壁が先に登られたら、北東壁に切替えるという案を受け入れた。登りたいラインより初登攀が大事だったのか、あるいは未登のラインに登りたい所だったのか、とにかく野心が一つの力になっていたのは確かだ。自分の求めるものを失わない限り、登る動機などなんでもいいと思う。終わったときには事実しか残らないんだし、真実はそこからしか語れない。

登る条件はこうだ。

期間が二週間、メンバーは三人。

そのことがスタイルを決めた。カプセル・スタイルによるワン・

プッシュのアタック。

僕たちには、この登り方しかできなかった。

九月一日、タポバン、四三〇〇呎。空は蒼くすみわたり、草原を吹く風は芳しい。モンズーンが終わったのだ。そして僕たちのクライミングは始まった。

その日、東稜のコルまで偵察を兼ねて荷あげをすると、翌日ベース・キャンプを出た。

「じゃあ、上で逢いましょう」西稜のメンバーと堅く握手。

「こっちが先に登ってサポートってことになるんじゃない」とか。

「もうすぐポニントンも来るだろうから、頂上で待伏せしてサイン貰うってのどお」などと気分は楽天的、すっかり登れる気である。

「固定ロープは二〇〇呎にしよう」

「あつ、そー、いいんじゃない」といった感じだ。

昨日初めて南壁の全貌を見たとき、雪も付かずに露出した岩壁には水が流れ、写真とはずいぶん違うなあ、と一人前に考え込んだりしたのだが。だからどうした、これ以上何も持って行けるか、と強気で行く。

二〇〇呎のロープでカプセル・スタイル、実際どうなるかはわからない。

食糧は八日分。七日で登って一日で降りれば充分という計算だ。

ピトンはロック三十、アイス三十（スノー・ピッキト、デッドマン含む）。フレンズ三にナッツ十。快適なビヴァークを期待してテントを上げる。ついでに付け加えるとEBシューズとボルト三十も持っていた——もつとも、どちら共使わなかったけど——。これに個人





装備を加えると、けっこうな重さだ。

その日、それらをひきずるようにして東稜コルを越え南壁へと入った。岩と雪の悪い所だったが、これからのことを考えるとアプローチの感覚だ。高度五一九〇呎。

翌三日、本格的な登攀が始まった。

氷河を詰め、雪壁にロープをのばす。ルート工作はさして大変だとは思わない、薄い空気の中でも登攀は楽しめたから。だけど荷あげしながらのユマリーングは大変だった。なんでもない雪壁を必死に登る。荷あげには、苦勞したとか、一生懸命やったという感覚しかない。わずらわしい部分だ。

次の日は、水の流れる岩壁を手袋をしぼりながらロープをひきずり、クローワールを雪崩の合間を縫うようにして渡る。楽しかった。ここしかないんだからという理由の中、危険と引替に面白さを買っていく、ほとんど冒険の世界だった。

小リッジを越えると、めざすリッジへと続くバンドを見つけ、簡単にリッジへと道上がることができた。そこには下から続く残置ロープが、さらに上へのびていた。たぶんオーストリア隊が残して行ったのだろう。まだ充分使えそうだった。

翌五日、降り続いた雪もやみ、晴れ間が広がった。じゃまだなあ、なんて言いながらできるだけ使えるものは使うことにした。

この先の登攀に対して、その喜びを語ることは何もない。僕たちは美しい花崗岩のリッジを時間に追いかけられるようにして登ったのだ。手前は選ばなかった。残されたロープにプロテクションをとる、あるピッチでは完全にそれにすがった。一日六〜七ピッチズ。

アルバイン・スタイルの三倍の時間はかかると思われるカプセル・スタイルでの登攀では早い方だろう。その裏には、そういった理由もあったのだ。

切れかかったロープ、肩の痛みをこらえての荷あげ、寝返りのうてない夜、止まらない咳、そんな記憶の残る数日間の登攀は、垂壁のトラヴァースを残置ロープに助けられて頂稜へ抜けることで終りを迎えた。そこが南壁の最終ピッチであることを確認すると、頭は様々な思いに混乱し、気が抜けたようにぼんやりと曇って行った。

僕たちは頂へと急ぎすぎ、もっと重要なものを得られぬまま来てしまったのではないだろうか。クライマーが頂を目指す時代は、このヒマラヤでも終ったのだ。登攀の危険も喜びも同時に楽しみきってしまうという、登攀そのものを目指す、よりシンプルな登り方こそ重要ではなかったのか。

だから僕はこの登攀に対して、一つの夢も語れない。

次の日、雪壁をトラヴァースして頂稜をたどり主峰に立った。九月九日午後四時二十二分、ベース・キャンプを出てから八日目、五十一ピッチズの登攀の末に。

納得のいかない登り方だったと言うのに、いやになるくらいうれしかった。結構いい登攀だったのかもしれない。だけど、この山ならもったいいい登攀ができたはずだ。

翌日、降積もる雪に南西峰アタックのチャンスを失い、北西稜を下降した。

懸垂氷河をなんとか降りると、今までのパーティが残して行ったロープやピトンが、至る所に残って下降を楽にした。冒険心を失う

と、ルックサックの重みが苦痛になってくる。捨てていかれたロープに助けられながらも、何かに怒りをぶつきたい気持だった。

その日、降りきれずに最後のビヴァークをする。

そして次の日、薄く雪の被った岩稜を疲れた足取りで降りていった。雪が霧雨へと変る頃、遠くの方から仲間たちの呼ぶ声が山に響き、僕たちのクライミングに終りを告げた。  
(中尾政樹)

### △記録概要▽

隊の名称 <sup>パナカレユウ</sup> 婆娑羅衆ガングトリ・キャンプ 一九八三

活動期間 一九八三年七月～九月

目的 サト・パント峰、シヴリン峰の登頂およびガンジス上流域の民俗、環境調査

### 隊の編成

シヴリン西稜隊 隊長 関 久雄(32)、隊員 遠藤雄悦(27)、関 康子(24)、三原洋子(42)、戸井田恵美子(33)、三宅清子(33)、南壁隊 隊員 山形正己(29)、大浜健次(34)、中尾政樹(24)以上はサト・パントにも参加。高本信子(42)、野崎真知子(32) サト・パントのみ

### 行動概要

サト・パント北稜 七月三十一日ナンダンバン(四五〇〇)にベース・キャンプ設営。八月二日野崎が高山病でブジュバスに下り、四日ヘリコプターで病院に収容。五日行動再開、ヴァスキ・タール四八五〇に前進ベース・キャンプ設営。七日第二キャンプ(五一〇〇)設営。十二月第二キャンプ(五八五〇)設営。十七日第三キャンプ(六三〇〇)設営。二十三日関(久)、遠藤、

中尾が午前十時三十分登頂。二十四日山形、大浜、三原、戸井田、三宅、関(康)が登頂。

シヴリン西稜 八月二十八日タポバン(四三〇〇)にベース・キャンプ設営。九月三日第一キャンプ(五〇六〇)設営。四日西稜上に第二キャンプ(五四五〇)設営。五日第三キャンプ(五八五〇)設営。六日午前三時半頃、上部ハンギング・グレッツシャーが崩壊し、一部ブロックがキャンプ・サイトを襲い、関(康)が負傷、関(久)、遠藤の二名でアタックしたが、氷河を人工登攀中、支点にしたスノー・ピッケトが抜け関(久)転落、登攀中止。第二キャンプに下る。七日ベース・キャンプ帰着。

シヴリン南壁 九月二日東稜のコル(五三〇〇)を越えて南壁の五一九〇にキャンプ。三日五五〇〇に到着。四日雪壁をトラヴァースし目的のリッジに達し五六〇〇でキャンプ。五日五七二〇。六日雪稜五九〇〇にキャンプ。七日六一〇〇。八日コルに荷をデポし、五九〇〇にキャンプに戻る。九日六十六度五度の氷雪壁を登り、大浜、中尾、山形が主峰に登頂、西峰は断念。下降路は北西面に取り、西稜隊第二キャンプに帰着。十四日両隊ともベース・キャンプ撤収。

### 記録発表

婆娑羅衆ガングトリ登山隊 SHIVLING—南壁初登頂の記録 岩と雪 九九号 四十四—四十七頁 一九八三

## サトパント西峰初登頂（一九八三年春）

——インド・ガンゴトリ山群——

### 大 宮 求

私の所属する山学同志会では、一九七九年のガンゴトリ山群解禁、というニューズ以来、リーダー会の集まりでは常に、帰り際の雑談で「近いうちに行きたいな」という話を持ちあがっていた。しかし、会員の中で誰ひとり、インドの山に行つた者はいない。入山手続きもよくわからないうえ、当時カンチェンジュンガ（八五九八<sup>メートル</sup>）のようなでかい遠征をかかえていたので、ズルズルと後まわしになつていたのであった。

そんな折、八二年秋にシシヤパンマ（八〇一二<sup>メートル</sup>）から帰つたばかりの時のこと。会の若手で、国内の壁をバンバン登っている久松君と、同志会の集会帰りの車中「来年（八三年春）、インドあたりへ行こうじゃないか」と、話がまとまってしまったのである。

許可取得手続き 話は決つたものの、困つたことに私も彼も、また身内の会員たちにもインドについてわかる者がいない。そんな

時、私の仕事先に登山教室の講師として来ている鈴木 章君（東洋大OB）が詳しい、ということを知り、早速あたってみた。

話はしてみるもので、ちょうど彼の知合が八三年春のインド・ガンゴトリ山群・サトパント峰の登山許可をとっている。しかし、パーティーのメンバー不足で、キャンセルしようというところだったのだ。至急、そのパーティーと、インドのIMFとの両方に連絡を頼み、メンバーについて我々同志会々員が登れるよう変えてもらうことができた。

かくして漠然と「行きたいから」パートナーが決まり、山が決る。後は、いつも苦勞する遠征費用の問題だ！ 二人で頭をひねり、アイディアを出合つた。その結果、

一、今回は、アナカンをやめる

二、アタック食以外、すべて現地食とする

三、新規の装備は購入しない（八一年のナンガ・パール部隊が、イスラマバードにデポしてある古い装備を使う）  
 といった申合せができた。

こうして、日本出、帰国まで約四十日間の、サヴァイヴァルの遠征が始った。

イスラマバードにて 安くあげようと、現地デポ装備を使う、というものの、我々の行く先はインドのニュー・デリー。装備が待つのはバキスタンのイスラマバードなのだ。一番暑い時期に、片道およそ八百<sup>マイル</sup>を、カートン・ボックスさげて往復するとは……。

同じくサトパントに入山する鈴木 章君が、東洋大山岳部の八四年夏の許可取得交渉で、デリーからイスラマバードへ行くと言う。そこで彼にも手伝ってもらうことにした。約六十<sup>マイル</sup>の隊装備は、どうにかデリーに運ばれることになる。

イスラマバードの知合の日本人宅へ、装備を取りに立寄った時のことだ。少々時間があつたので、観光省にも顔を出すことにした。顔なじみの担当者に「来年（八四年）、ナンガ・パールバート（八一二五<sup>マイル</sup>）の冬期を計画しているの、インドから帰国し、正式申請を出した時にはパーミッションをもらえるか」と尋ねてみる。すると、少し考えた後、「OK」という答がかえってきた。たとえ口約束でも、こんな大きなプレゼントは、私を有頂天にさせた。

何しろ、ナンガ・パールバートの主、カール・M・ヘルリヒコッフア<sup>ー</sup>、世界登山界きつてのポーランドのアンジュジェイ・ザヴァダをもつてしても、冬のバキスタン・八千<sup>マイル</sup>峰の許可は取得できていないのだから。

デリーでの出会い まだ山にも入っていないのに、真黒に日焼けして、ブーゲンビリアの咲きみだれるデリーに戻る。後発の久松君とも、うまく合流できた。装備のことも完了、食糧の買出しも済ませて、またちょっと時間が作れそうだ。そこで、IMFで住所を尋ね、インドのナンバー・ワンの登山家、ナリンダル・クマール大佐宅を訪れた。約束もせずに、「まず会えないだろう」と半分あきらめていたのだが、運よく在宅だった。

八〇年にネパールのカンチェンジュンガ頂上で私たちが撮った写真を、日本から持参していた。それを彼にプレゼントすると、そこに写っているインドの国旗が、七七年、クマール大佐が隊長で登った時のものだと言ひ、メチャ喜んでくれた。そして最大級のもてなしを受け、インドのこれからの山の話などがはずんだ。

バスで山に向う デリーでは、カシミール・ゲートを夜に発つガヴァメント・バスに乗りこんだ。チャーター・バスよりずっと安いが、立ったまま八時間ばかり揺られてインド平原の北の果て、リシケシに着いた早朝は、パテバテ。

乗換えてバス・キャラヴァン二日目の夕方、山の中の町、ウッタールカシに到着。ここでは一日滞在し、残りの買出しだ。山の上のネルー登山学校にも足をのばし、植村さんや、イギリスのダグ・スコットらから贈られた記念品を見せてもらった。

登山学校の職員宿舎は庭が広く、なかなかステキな建物である。花に見とれていると、鈴木君が「下山の時にはこの三軒の宿舎すべて、大宮さんの物ですね」と笑って言った。見ればなるほど、右側のハウスより、入口にカンチェンジュンガ、バギラティ、サトパン

トと名前がつけてある。既にカンチェジュンガは登っているので、今回許可をとった残り二つを登れば、「三冠王」というわけだ。

午後、レストランでまったく肉の入っていない食事をしていると、ちょうど五月一日だったので、全員赤い小旗を持った、整然たるメーデーデモを見物できた。

翌早朝、雇ったポーター、キッチン・ボーイも乗せて、チャタール・バスにてガンゴトリをめざし、出発。だが、例年より多い残雪に阻まれ、目的地まで歩いて二日かかるハルシルで、降ろされてしまった。

いよいよ山へ ハルシルから一日目のキャラヴァンの宿、ランカまでは、今風「森林浴」という道。松の香のせて、爽やかな五月の風が吹く。

二日目、三時間で「聖なる地」ガンゴトリに着いた。昼寝の後、隣のテントの鈴木 章君の誕生日を、アルコール抜きチャイ・パーティーで祝う。

その翌日は、ゴウムクまでの本格的キャラヴァン。コーナーを曲るたび、バギラティ、シヴリンのピークが、迫って来た。

しかし、すばらしい壁とピークがズラッと並んで見えているにもかかわらず、今一つ燃えてこないのが不思議だ。これまでに、パキスタン、ネパール、中国など他の山を見すぎて、ひとつの「飽き」の状態がきているのだろうか？

ベースキャンプにて キアラヴァン最終の宿は、ブジュバスの、夏は巡礼者が泊る立派な小屋だった。寝袋で寝て、次の日夜明けと共に出発。残雪が多くガレ場もスタスタ歩け、昼前にはベース・キ

ャンプ予定地のナンダンパン（四五〇〇呎）に着いた。

我々同志会隊のすぐ下には、バギラティI峰を登りに来ている埼玉のボンビックス・アルパイン・クラブが何日か前からベース・キャンプを張っている。すぐ隣は東洋大、鈴木 章君だ。とにかくめずらしいことに、今回は酒なしなので、ベース・キャンプ到達祝い、チャイ・パーティーである。

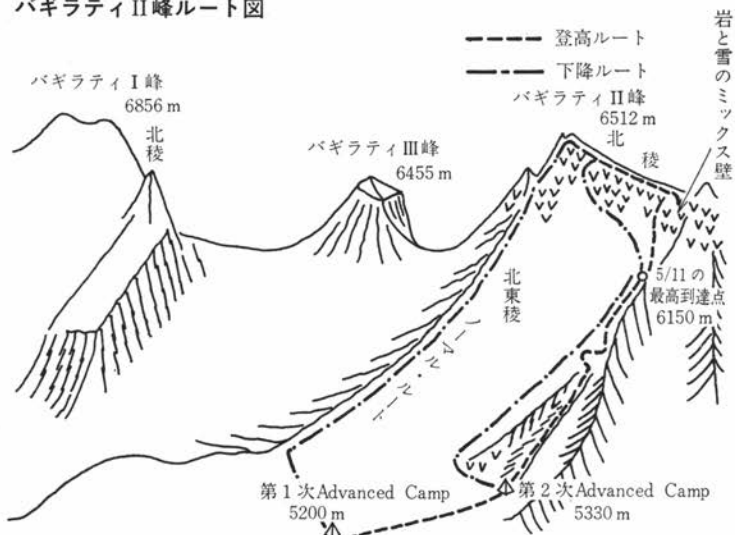
小高いサイド・モレーンの上に張った我々のベース・キャンプは、何と見晴しの良いことだろう。テントのフラスナーをパッと開ければ、目の前に「ドン」とシヴリンがそびえ、首を左に向ければバギラティII峰、III峰の壁がそそり立つ。ベース・キャンプの景観をホテル・グレードに例えれば、さしずめ「星四つ」あたりというところか。

ベース・キャンプ入りして元気の無い久松は、翌休養日も一日中寝ていた。初めてのヒマラヤで、やはり一気に四五〇〇呎の高度は、少し無理があるようだ。

場数を踏んでいるためか、何ともない私は、一応それなりの荷を持ち、二日目より荷あげ兼高所順応を始める。久松は三日目も、ひたすら寝ている。

四日目もまだ具合が悪いので、一度、ブジュバス（三七九二呎）に降ろすことにする。「降ろす」と言っても、隣のボンビックス・クラブのハイ・ポーターが下山するので、一緒に本人が自力で下るだけで、私が背負って降ろす訳ではないのだが……。私の考えでは、もうあと一日も寝ていれば、たぶんそのまままで治るのだが、四日間もずっと頭痛のする者に「そのまま何日か居れば治る」と言う

バギラティII峰ルート図



サトパント北西稜ルート図



のは、難しいことだった。

順応とアタック プジューバスよりベース・キャンプに戻って来た久松と、バギラティII峰の六千位まで高所順応に行つて来た私とで、テント・食糧一式を背負い、アタックに出る。四五〇〇位のベース・キャンプより、四八〇〇位の第一キャンプまで登り一泊。二日目、五三三〇位まで登りテント設営、昼前に行動を打ち切り、午後は次の日の頂上アタックに備えて休養とする。

五月十五日、がんばって早起きし、五時過ぎに出発。ひたすら登り続ける。昼頃、頂上稜線に出た。そつと反対側をのぞくとスパツと切れ落ちたナイフ・リッジだった。北東稜を慎重に進み、午後一時半頃、鈴木君、私、久松の順にバギラティII峰頂上に立つ。

スポンサーの写真は何枚か撮つた後、五三三〇位のアタック・キャンプまで一気に下り、出向えに来てくれたリエゾンにも、荷物を分担してもらい、テントを撤収して夕方、四八〇〇位の第一キャンプまでさらに降りた。

こうして、苦しみながらもバギラティを終え、三日間休養した。次はサトパントだ！

一応、新ルートの北西稜より行きたいが、その決定はスノー・プラトールに入つてみてからにしようということになる。スندانル氷河で一泊の後、スノー・プラトールに上つたら、北西稜のキー・ポイントとなると思われていた懸垂氷河が簡単に突破できそうなので、そのまま新ルートで行くことにした。二日目は、六一〇〇位の北西稜のコルにテントを設営。

五月二十一日。今日中にサミットして六一〇〇位のキャンプまで

戻るぞ、と三人でアタックに出る。が、午後から降り始めた雪のラッセルで、頂上直下で暗くなりビヴァーク。

ほとんど眠れぬ夜を過ぎ、二十二日、夜明けと共にビヴァーク・テントをはがす。ノロノロ登り、約一時間後、サトパント西峰頂上に立った。

頂上にいるうちに雪が舞い始めたので、主峰はあきらめ下山にかかった。六四〇〇位地点ですごい降雪で下山ルートがわからなくなり、ビヴァーク・テントをかぶり、一時間ぐらい横になる。ほんの少しガスが切れたすきに動き、夕方六一〇〇位のキャンプに戻つた。

二十三日。今日はゆっくりと起き、夕方までかけてヴァスキ・タール下の、リエゾン・オフィサーとキッチン・ボーイの待つ第一キャンプへ。

我々の姿を見つけると、遠くから「サクセスか？」と叫ぶのでそうだと答えると「コングラチュレーション」を連発しながら駆登つて来て抱きついた。第一キャンプで何回目かのサクセス・チャイ・パーティを開き、次の日、下山のために上つて来たポーターの待つ、ベース・キャンプに向つた。

こうして、我々のシンプルな遠征は、無事に終つたのだつた。

#### △記録概要▽

隊の名称 山学同志会サトパント登山隊

活動期間 一九八三年五月

目的 ガンゴトリ山群のサトパント峰とバギラティII峰の連続

登頂



隊の編成 隊長Ⅱ大宮 求(34)、隊員Ⅱ久松宏人(31)  
 行動概要

五月六日、ナンダンバン(四五〇〇呎)にベース・キャンプ設営。六日、第一キャンプ(四八〇〇呎)設営。十日アタック・キャンプ(五二〇〇呎)入り。十一日、大宮、鈴木(東洋大)東面の新ルートを六一五〇呎まで試登。十四日アタック・キャンプを五三三〇呎に移設。十五日大宮、久松、鈴木午前五時アタック、北稜六四五〇呎に出たのち北稜をたどり午後一時三十分バギラティⅡ峰に登頂、第一キャンプに帰着。

十九日ヴァスキ・タールを越えスندگان氷河上で泊。二十日サトパント北西稜のコレ六一〇〇呎にテント設営。二十一日頂上直下六九〇〇呎でビヴァーク。二十二日午前六時四十五分、大宮、久松、鈴木サトパント西峰(七〇四五呎)に初登頂、天候悪化で主峰はあきらめ、コレの特ントに下降。二十三日第一キャンプへ下降。二十六日ベース・キャンプ撤収。

記録発表表

久松宏人／鈴木 章 シンプル・エクスペディション  
 クライミング・ジャーナル 八号 二十八―三十一頁  
 一九八三  
 鈴木 章 サトパント西峰初登頂―八三年春のインド・ヒマラヤ遠征 岳人 四三五号 二十五―二十九頁 一九八三  
 大宮 求 バギラティⅡ&サトパント―一九八三年の記録 ヒマラヤ 一四四号 十八―二十二頁 一九八三

## ジ ヨ ギ ン I 峰

インド・ヒマラヤの処女性豊かなインナー・ライン付近の未解禁峰の一部が、解禁されそうな気配ありとの情報を得、ガンゴトリのチャトウランギ氷河東部の二峰、後にヒマチャル・プラデシユのバラ・シグリ氷河最奥部の三峰を申請したが、国内からの通信による打診ではどうも決まりきった「未解禁」の解答しか得ることができず、資料入手、研究も含めて相当の時間を費やしたが結局徒勞に終わった。

隊員の時間的事情から既存の解禁峰に的をしぼり、一九八三年の秋期にナンダ・デヴィ山群のムリットゥニー、デヴィトリ両峰の許可を得、具体的な準備を進めてきた。

ところが一九八三年二月末、IMFより突然ナンダ・デヴィ山群の入山禁止通告があり、振出しに戻ってしまう。

急拠ガンゴトリI・II・III峰を申請するが、ナンダ・デヴィ山群

から転進を図る他隊との競争が激しく、いずれも既に他隊に許可済み、続いてジョギンI・II峰、六五六八峰を申請、ジョギンII・六五六八峰の許可を得る。そして出発直前にジョギンI峰との交換が認められるという、不始末と不運が重なり、めまぐるしい情勢変化に終始した二年間が過ぎ去った。

九月一日、午後リシケシへ向けてチャーター・バスがデリーを出発。今年にはモンズーン明けがはっきりしなくて、雨がしつこく残り、病気がはやっていくという情報を聞く。

九月二日、ウツタルカシ着、ポーターの手配、食糧、石油などの購入を済ませる。我々が登山活動中、キッチン・ボーイが生野菜購入のため、二度ベース・キャンプとこの街を三、四日間往復している。夜半より大雨となる。

九月三日、道路が土砂くずれで寸断され行くも戻るもできず、開

青柳 かおる

通はいつになるかわからないという。午後二時、出発、街を出てまもなく復旧工事中でストップし本当に進めるのかどうか不安になるが午後五時ランカ着。

九月四日、デリー以来体調をくずす者が多く、下痢、嘔吐、高熱、せきなどの症状がある。昨夜から特に戸川がひどく、丸山、野村、中田の四人を医者のあるウツタルカシへ戻し、隊をA、Bに分けるが、その後この隊編成のまま登頂態勢を組むことになる。A隊は徒歩でパイロンガティまで行き、バスをチャーターしてガンゴトリに着く。エージェントの社員二名とポーター四十四名はベース・キャンプに先行するためにケダル・ガンガへ進む。

ジョギン・グループはI・II・III峰を有し、いずれもインド隊の登頂記録があり、I峰は東南稜をルートとしている。我々は四七〇〇呎にある氷河湖ケダル・タールをベース・キャンプとし、西の氷河から頂稜に出て未踏の北稜から全員登頂をめざした。

ケダル・ガンガはバスの終点ガンゴトリ(三〇〇〇呎)から急激に高度を稼ぐためベース・キャンプに至るまでも高所順応が必要となる。

九月五日、空身で四二〇〇呎まで登りガンゴトリへ戻る。

九月六日、朝、ベース・キャンプまで荷あげに行つたポーター一行が降りてくる。我々はリエゾン、コック、キッチン・ボーイと七名のポーターとともに四〇〇〇呎のブジャ・カラクまで登る。

九月七日、ベース・キャンプに入る予定が、四五〇〇呎地点のケダルガンダ・カラクに全荷物が置かれていたため、以後三日がかりで荷あげを余儀なくされる。九月八日、ベース・キャンプ建設。

登山活動 九月九日、十日、五〇〇〇呎まで偵察、初めてジョギン・グループを展望する。

九月十一日、トランシーバー交信の便を考え、ベース・キャンプと登路が直線で中継できる四九〇〇呎のモレーン上に前進ベース・キャンプを建設。

九月十二日、五〇〇〇呎から氷と雪の世界が始まる。いきなりがちのアイス・フォールで、側壁からひんぱんに落石がありそれを避けながら荷あげルート確保のため試行錯誤をくり返し、約一〇〇呎の高度差に四〇〇〇呎のロープを固定。アイス・ピトンが不足で要所は六〇〇呎のスノー・ピットを小クレヴァスに固く打ちこむが、日中の気温上昇で午後以降の下降時には毎日必ず打ち直さなければならぬ。

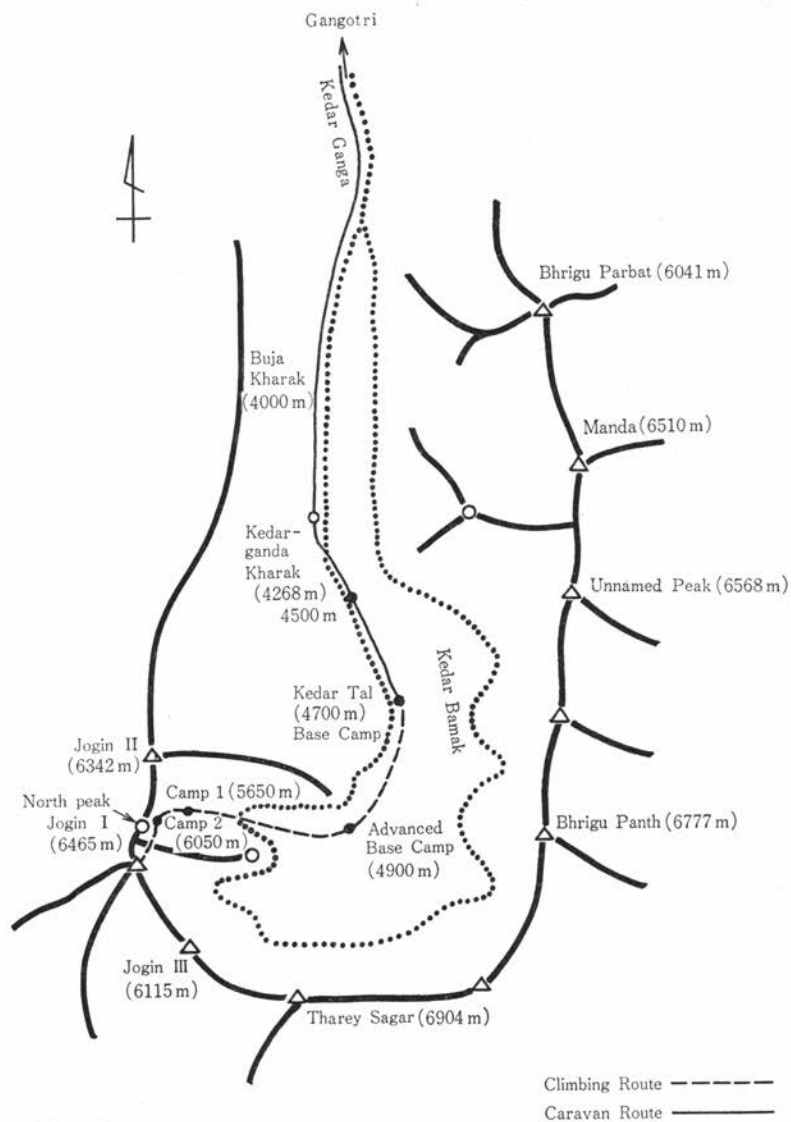
九月十三日、アイス・フォールの落ち口はずたずたのクレヴァスでジョギンII峰から続く右壁からは落石が絶え間ない。氷河を左に約二〇〇呎横断し、クレヴァスの少ない部分を選び五二五〇呎の氷河の安定するところまで慎重にロープを固定する。

九月十五日、野村、中田がベース・キャンプに入るのにあわせて休養。戸川の調子が悪く丸山と共にデリーまで戻つたことを知る。

ケダル氷河流域の山々は障壁になって氷河に対してしているのが多いため、ジョギン・グループは小規模ながらふところの深い氷河をもつ。ジョギンIとIIの間にゆるくつき上げる氷河に入り、約五四〇〇呎で左手懸垂氷河より青氷のブロック崩壊のデブリの列が連なつて並んでいる。氷河内はどこでもこの危険性がある。

九月十八日、第一キャンプは稜線からの表層雪崩とジョギンIIか

## Map of Kedar Bamak Range



By K.Aoyagi

らのブロックの直撃が避けられそうな五六五〇に建設。

九月二十日、丸山、二十一日、戸川がベース・キャンプ入りしたことを交信で知る。第二キャンプへのルートは新雪にかくされた小クレヴァス群に神経を使いロープを固定。

九月二十二日、ピラミダルな雪稜をもつ北峰に続く雪原状の水河を遡り北峰北側の稜線直下に第二キャンプ（六〇五〇）を建設。

稜線ごしに西側の山並み、ジャオンリ、ガンゴトリ三山と目ざすジョギンI峰北稜が眼前に迫る。はるか南方、平野部上空にわき上がる雲がゆっくりと北上してくるのが見え、今までほとんど毎日午後から曇るわけがわかった。前進ベース・キャンプまで下る。夕方より風雪になり二十三、二十四日と、ベース・キャンプ建設以来初めての本格的な荒天が続く。ガンゴトリ山城の現地情報では例年二十日頃に悪天ドカ雪があり、その後寒くなる、その通りになった。

九月二十四日、ベース・キャンプまで下り全員がランカ以来二十日ぶりに再会する。

九月二十五日、A、B両隊に分けての登頂態勢で、全員そろって前進ベース・キャンプへ。

九月二十六日、A隊は北稜の工作、B隊は高所順応を目的として行動する。荒天時の湿雪のラッセルでひどく消耗する。

九月二十八日、A隊は第二キャンプを掘り起こした後、午後より北峰へとりつく。基部の岩塊の上部へ出たとたん足もとからジョギンI峰まで気の抜けないナイフ・エッジが延々と続く。北峰の頂上（六一〇〇）までロープを固定し第二キャンプへ戻る。

九月二十九日、浮石だらけの不安定な岩稜の突破に大幅に時間を

とられ、最後の岩稜の工作を残して、行動を終る。明日は登頂だ。夕方より雪がちらつく。

**登頂** 九月三十日午前七時出発、最後の岩稜はトラヴァースで突破するが予想以上に時間がかかる。まもなく固定ロープが尽き、二人ずつロープを結びあって進む。北稜は、西側はわずかな雪尻もちバツサリとルドゥガイラ水河へヒマラヤひだを落し、東側も同様ニケダル水河へ岩まじりの雪壁を落し、基部が見えない。天候は雲がゆっくりと北上してきているが、風はほとんどなく登高に専念できる。ベース・キャンプから終始ルート工作の先頭に立ち荷あげでも気を吐いてきた大島と津田が交互に平均台のような雪稜に力強いステップをきめ、青柳、鈴木がそれに続く。ビレイ用のアイス・アックスもすかさずかだつたり入らなかつたのだが、慎重に確保しながら登高を続ける。頂上直下は不安定な両雪尻で、その中央に乗切るのが微妙であった。頂上の広い雪尻の一角で一休みしてから、そこよりわずかに高い頂上に到着する。午後二時二十六分。薄いガスの中であった。ガスの切れ間に第二キャンプまで来ていた中田の姿が点に見え、交信で登頂を喜びあい四十分間滞在した頂上をあとにする。流れる足もとに気を配りながら固定ロープまで戻り緊張をほぐす。

十月三日、ベース・キャンプ入りが遅れたため高所順応が不足だった雪盲で苦しんでいた野村、中田、戸川もそろそろくずれかかってきた天候のなか十一時五分登頂した。第二キャンプより登頂の瞬間をガスの切れ目から望遠でとらえる。午後二時、三名が第二キャンプに戻ってきた。

丸山が不調で登頂できなかったのは残念であったが、それぞれの力を發揮し、天候に恵まれ、インド・ヒマラヤ登山を満喫して、タレイ・サガール、ブリグパントに見送られながらケダル・タールを後にした。

#### △記録概要▽

隊の名称 帯広畜産大学山岳部インド・ヒマラヤ登山隊一九八三

活動期間 一九八三年九月～十月

目的 ジョギンI峰(六四六五<sup>1</sup>)未踏の北稜からの登頂

隊の編成 隊長Ⅱ青柳かおる(33)、副隊長Ⅱ鈴木真隆(27)、隊員Ⅱ

中田 滋(31)、丸山史郎(27)、野村弘道(26)、戸川 浩

(26)、大島義広(24)、津田則広(22)

#### 行動概要

九月八日ケダル・タール四七〇〇<sup>1</sup>にベース・キャンプ  
設営。十一日前進ベース・キャンプ(四九〇〇<sup>1</sup>)設営。

十八日第一キャンプ(五六五〇<sup>1</sup>)設営。二十二日第二  
キャンプ(六〇五〇<sup>1</sup>)設営。三十日青柳、鈴木、大島、

津田七時間三十分を要して北稜より登頂。十月三日野

村、中田、戸川登頂。六日ベース・キャンプ撤収。



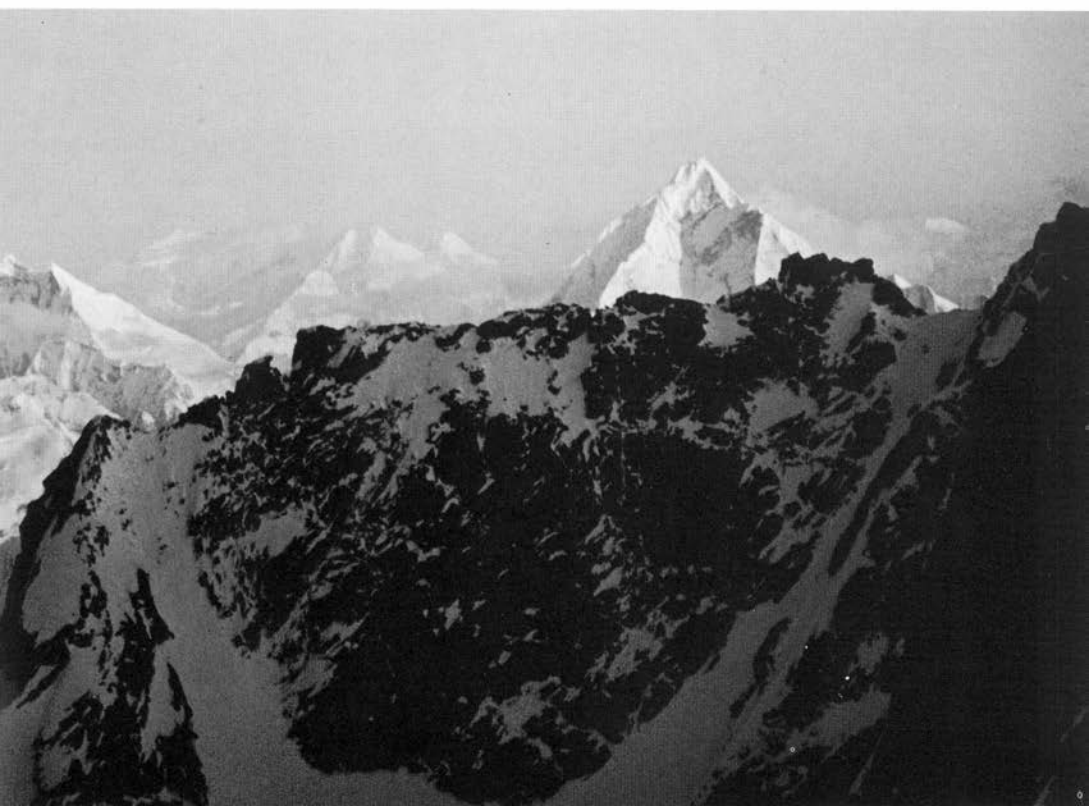
▲ 第1キャンプより望む周辺の山々、左よりブリクパント西稜、メルー（中央後方）、タレイ・サガル北壁：Mountains seen from Camp 1 on JOGIN I, left to right: BRIGUPANTH's West Ridge, MERU and THAREY SAGAR's North Face. *Photo by Kaoru Aoyagi*

▼ 第2キャンプよりジョギンI峰北稜：JOGIN I's North Ridge seen from Camp 2. *Photo by Kaoru Aoyagi*





▲ チャンラ主峰より北方の山々、ドザム・コーラ西岸4900mより眺める：Distant mountains viewed to the north of CHANGLA from 4900m hill of the west side of the Dozam Khola. *Photo by Tokiko Koyama; 1982 reconnaissance party*







▼ 南方に見える遠くの山：Distant mountains viewed to the south from Camp 4 on CHANGLA. *Photo by Kyoko Endo*



第4キャンプから見たチャンラ主峰南西稜、▶  
頂は残った：Southwest Ridge of CHANGLA main  
peak viewed from Camp 4. Photo by Kyoko Endo



チャンラ主峰の西隣りの山：Southeast Face  
of neighboring peak (c.6500m) seen from the  
Southwest of CHANGLA main peak. Photo by

▼ Masako Uchida



西北ネパール・チャンラ山脈主峰試登 一九八三年

遠藤京子

知られざる山と谷、そこに住む珍しい民族との出会いを求めて、はるかに遠いネパール北西部に入った。

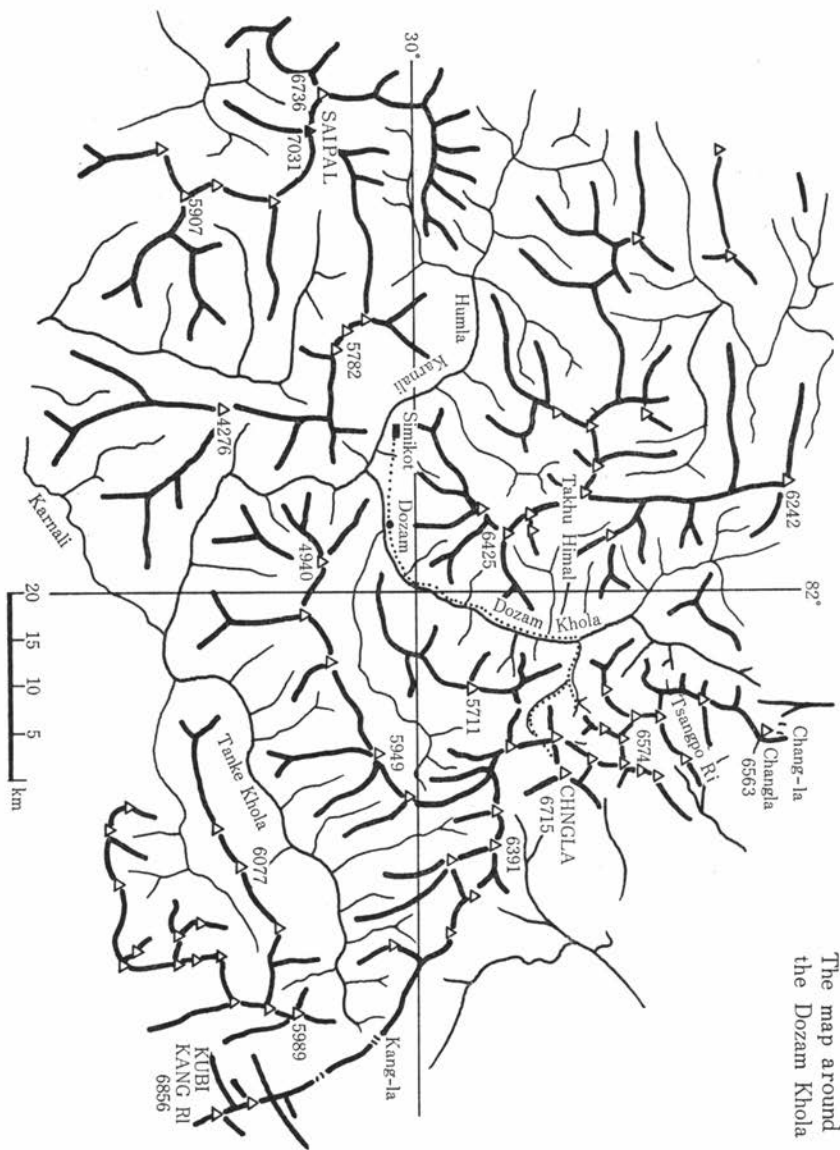
秘境、未踏查地域、未登峰への熱い想いは男も女も変りない筈だが、女性、特に日本女性の高所登山は立遅れているため、まず、許可の取易い山、登れる山、そして、高度への可能性の追求という方向からスタートしてきた。マナスルもエヴェレストも登れた今、ブリミティヴな欲求に従って、女もまた未知の山を求めめる。

私たちの同人ユングフラウでは、マナスル登山の準備中から、組織作り、資金作りの困難に押し潰されそうになりながら、しばしば、「こんなに苦勞ばかり多くて、所詮、他人の足跡を追うだけの登山なんか早く終えて、次は未登峰へ行きたいなあ」という想いが、マナスルに逝った故鈴木貞子から吐露されていた。マナスル以後、そのサミッターの内田昌子を代表にして、目標を未登峰、とりわけ

未踏查地域の山に絞って機会を窺ってきた。

欲を言えば、七千以上の高峰がほしいが、許可を取るのがたいへんだ。目標が二転、三転しているとき、一九八一年、ネパール政府は、新たに山を開放した。その中に、Changba という見慣れない山名があった。カルナリ河の上流らしいが、学研発行の『世界山岳地図集成』には、めぼしい山がない故か、この付近が抜けている。「まさに地図の空白部やなあ」と冗談を言いつつ、この見知らぬ山に傾倒していった。

位置と地形 ネパールには、インド測量局の一インチ一マイルの地図や、他に精度の高い地図があるらしいが、一般には見ることができない。私たちは、アメリカ製の五十分の一地図と、『岳人』三一八号（一九七三年十二月号）に、五百沢智也氏が発表している



The map around the Dozam Khola

地図と空撮のスケッチ、さらに、ランドサット衛星が撮影した写真を参考にして計画を練った。

チャンラという山は、フムラ県のカルナリ河の支流であるドザム・コーラの東部源流で中国とネパールの国境を形造っているチャンラ山脈の中にあることがわかった。

私たちは、その山脈のほぼ中央部にある、氷河を抱いた大きな山、標高六七一五呎の主峰に申請をして許可を得た。許可証にも、その標高が銘記されている。

この登山を終えた後、一九八三年八月に、ネパール政府が発表した許可峰リストでは、多くの山の標高が変わり、また、はじめて経度、緯度を付記して発表されたので、今までの地図と比べて、かなり山の位置の変化が見られるということが、薬師義美氏によって、『岩と雪』一〇〇号に詳しく発表されている。

チャンラの標高は六五六三呎、北緯三十度十八分十一秒、東経八十二度七分四十四秒となっている。これは、チャンラ山脈の北端をなすチャン峠の南にあるピークに相当する。私たちが狙った主峰はこれより約十度南にある。一九八二年春に送った二名の偵察隊員が、シミコット駐在の警察署長から聞いた話では、チャン峠の南に美しい山があり、地元の人々は、五〇〇〇呎の峠の雪がとける七、八月には、チベットとの交易を行うが、その折に、親しく眺める山だという。だから、中央の奥深く鎮座する主峰よりはこのピークの方が許可の対象になることは理解できる。しかし、ドザム村の村人の話では、ドザムという名前はネパール語であって、自分たちチベット族はチャン村と呼び、このあたりの山はみんなチャンラ山だと

いうことだ。実際、偵察隊員が一番高いチャンラを求めて、ドザム・コーラを越った時、地元のポーターは、峠のチャンラよりも緯度にして十度南に位置する谷を東へ入ると、その奥に高い山があると教えてくれた。

偵察隊は、四月中旬、連絡官とポーター二名が残雪が深いため、三七〇〇呎付近でストップし、シェルパ一名と残り二名のポーターを連れて、さらに一日ドザム・コーラを廻り、西岸の四九七〇呎まで登って対岸の奥に並ぶ山々の写真を撮ってきた。チャンラ主峰と思われるピークが四、五座見えているが、どれが本命かわからなかった。

本隊も、ドザム・コーラ本流と分れて東へ入る谷の入口で写真を撮っているが、その時はまだわからず、数日後、ベース・キャンプから左の谷（北の谷）へ偵察に入ってはじめて、その谷の奥に障壁を造ってそそり立つ主峰の姿を確認した。

主峰から南西方向に尾根がのび、雪庇が北西側へ張出している。その下は雪と氷と岩の絶壁。北方にのびている尾根は、上部は厚い雪を乗せて丸味があるが、その下は黒々とした絶壁だ。しかし、雪のついたやや斜度のゆるい尾根状部も見えるので、どうしてもこの谷から登らなければならない場合は、これがルートになるかもわからない。

この南西稜も北稜も、中ネ国境になっている。私たちは、ランドサットの写真から推測して、右の谷（南の谷）に入ることにしていた。南の谷は、先きの南西稜がくの字形に南へ折れたところで行止まり、この尾根を乗越して、長い長い国境稜線を頂上へとたどらね

ばならなかった。南の谷の第二キャンプ（五四五〇呎）からチャンラ主峰の頭頂部が眺められる。美しい雪の南稜が右側へ落ちていく。「これなら登れるぞ」と、感激の場面だが、残念ながら、南稜は中国稜なので越境はできない。

#### 学術隊の編成

トニー・ハーゲンの『ネパール』に、チョンマゲを結った男の写真がある。また、一九六三年にナラカンカールを探してフムラ・カルナリ河を遡った北大隊の記録にも、シミコットで、チョンマゲを結ったツピア族をポーターに雇ったとある。シミコット周辺にはこんな珍しい民族が住んでいるということが、私たちを益々チャンラへひきつけたもう一つの要因だった。こんな辺境に入山できる機会に、登山だけでは惜しい。できれば医学、薬学、民族学、植物、動物、地質などの専門家の参加を得て学術隊をつくりたいと考えた。女子登山隊もいくつかあったが、学術登山隊はほとんどない。ぜひとも実現させたいと、AACKの先生方に相談した結果、五人の医学班ができ上り、シミコットで一ヶ月、診療所を開き、歯科、産婦人科、および一般診療と、薬学の調査ならびに診療活動を行なった。他にも民族学、地質学に女性の研究者をみつけたが仕事の都合で参加してもらえず残念だった。

学術班々長 岩坪吟子（編注）（歯科医師・47）、班員 大湊 茂（産婦人科医師・37）、田中節子（薬剤師・42）、鈴木恵三（歯科医師・35）、養島良子（歯科衛生士・24）、石倉隆二（写真・36）、ダワ・ツェリン・シエルパ（通訳・30）

（編注）岩坪吟子、ヒマラヤ診療旅行一村人に虫歯はなかった。中央公論社 一九八四

ネパール女性との合同登山 チャンラはネパール人三名以上を含む合同隊にだけ許可される。その三名に、できれば女性を選びたいと考えた。かつてマナスル登山をやった時にもシエルパニを雇いたいと考えたが、一九七四年当時には山に登る女性はシエルパ族の中にすらいなかった。しかし、近頃、マナンの登山学校で基礎訓練を受けたシエルパニがいると聞いて、本気で探すことにした。

カトマンドゥに住むサーダー・サンゲの奥さんでアン・リタ（三十五才）が、一九八二年、韓国女子隊と共にラムジュンに登る予定だということだったので、彼女を中心にしてあと二名の女性の人選をサンゲに頼んでおいた。

二名のシエルパニを紹介されたが、トレッキングのお供をしたことがあるくらいで登山の経験はない。結局、彼女たちの方から参加したくないと断ってきた。だから、サンゲとその配下のカミ・リンジン（男、二十五才）をメンバーとして加え、他にシエルパ一名、コック一名、キッチン・ポリー一名をカトマンドゥから、またメイ・ランナー二名を現地雇った。

アン・リタはおとなしい笑顔よしたが、英語ができないので、いつもご主人のサンゲとペアで動くよう気遣いをしなければいけない。ラーメンなど日本食がだめで、ツアンパがないと登れないと言って、第二キャンプから降りたが、技術的にもその上に立ちほだか壁に登るのを遠慮したのかもしれない。

カトマンドゥにもサリーをぬいで、バイクを乗りまわすインテリのおてんば嬢が現れた。雪の山に登ってみたいという勇敢なお嬢さんが出現するのはいつだろうか。

長いアプローチ フムラ県の行政中心地であるシミコットまで、ポカラから直線距離で約三〇〇キロ、山また山を越えて歩けば一ヶ月以上を要するだろう。インドとの国境にある町ネパールガンジから、一九六三年の北大隊は歩いた。四十日かかっている、ジユムラまで空路を使って、そこから歩けば十日くらいで行けるらしい。それが一番近い方法かと思っていれば、シミコットに七年前空路が開かれていると聞いた。偵察隊は、ネパールガンジからロイヤル・ネパール航空のトゥイン・オッター機でシミコットに入ってみた。標高三〇〇〇メートルの山腹に未舗装の滑走路が開かれていた。給油のためネパールガンジ経由となるが、空路ならばカトマンドゥから、一日か二日で行けるのだ。

決して長いアプローチではない。それが、私たちの場合、二週間もかかってしまった。そのわけは、数ヶ月前から予約しておいたトゥイン・オッターが飛んでくれなかったから。予約が当てにならない国なのだ。それというのも、たった七機しかない小型機が二機も故障している。残り五機で数多い小空港への便をやりくりしている。故障している二機の修理ができるまで待つてくれというのだ。「待つ」というストレスは、朝の体操やジョギングでごまかしても、一週間が限度のようだ。イライラの極に達している頃、インド経由でなくても、ネパール国内の道路だけを通ってネパールガンジへ行けるという情報ももらった。プトワールから先はまだ工事中で、雨期にはとても通れるものではないらしいが、四月ならまだ定期バスも通るといふ。

一歩でも前進したい気持ちで、陸路輸送隊を作ることにしたところ、悪路をも暑さをもいとわず隊員志願者が続々と現れたのは驚きだった。隊荷三トン、ネパール人全員、日本人の半数が、トラック一台と、バス一台をチャーターして四月十四日カトマンドゥを出て、十五日の夜ネパールガンジに着く。その旅の様子は、報告書『ドザム・コーラの人と自然』に、ドクター・チームの診療活動や登山活動と共に、詳しい。川の中を走ったり、ヘッドライトめがけて飛び込み自殺した虎の子の見事な昇天ぶりに仰天したり、けっこう楽しそうだが、その後のネパールガンジ空港脇での四十度を越える炎天下のテント生活は一週間におよび、その間、現地人から急性肝炎のウイルスを貰うはめになった隊員が三人も出たことは、登山の失敗にもつながることになった。

一方、空路の方もやっと飛ぶ見通しはついたものの、四月半ばの異常な大雪でシミコット空港が閉鎖されてしまった。雪がとけてからもグランド・コンデイションが悪い間は飛ばない。そこで軍の大ヘリコプター「ビューマ」を借りることにした。二度も約束の日がのびた末、ようやく四月二十一日と二十二日の二日間、五回のフライトで全隊員と隊荷がシミコットに運ばれた。マナスル三山、アンナプルナ連峰、ダウラギリと、ヒマラヤのジャイアンツが次々と形を変えてゆく様を眺める空の旅は、二時間で八十万円の豪華版だ。「カネオクレ」のSOS電を日本へ打たねばならなかった。

チヨンマゲ・ポーターたち 一週間前の大雪でシミコットをとりまく山々は真白だった。空港横の草地にテントを張った。物見高い

見物客にとり囲こまれるのはいつものことだが、その中にいた！

チョンマゲだ。白い山をバックに天高く聳えるチョンマゲ。と言っても、せいぜい十〜十五<sup>センチ</sup>の高さ。マゲはやや前傾している。前頭部の毛髪がない。ハゲているのか剃っているのか。テカテカ光るのでハゲらしい。マゲのまわりにターバンを巻いている男もいる。このターバン、襟巻きにもなる。首のまわりにゆったり一回巻いて長く垂らす。ナウイファッショんだ。イヤリングをしている男もいる。ズボンと着物スタイル。その上に丈長の前開きベスト。生成のウールで裾に茶色の横縞がある。戦国時代の武将の着る陣羽織とそっくりだ。ただ、陣羽織の下に刀がないので安心。「話しかけるとちよつとはにかむおとなしい男たち」というのが初対面の印象だったが、さて、おつきあいしてみると……。

チャンラへの進路となるドザム・コーラ沿いの村、バジバラとドザムからポーターを呼んだ。七十数名のうち、チョンマゲを結っているのは年配の十人ほどで、若い衆は万国共通の短髪や長髪。また女性も十人ほどいた。女の人は長い髪を束ねたり垂らしたりだが、イヤリングやネックレスは重いほどつけている。

彼らはチベットから南下してきたチベット人である。一妻多夫婦も鳥葬も残っている。ラマ教を信じているが、寺は小さく、荒れて

いた。彼らと共に歩きはじめて二日目の昼、最後の村ドザムを出て、いよいよ谷を遡ろうという日に、早くもキャラヴァンはストップだ。何事かと思えば、彼らは食糧を持っていないのだった。村へ帰って五分分の食糧を作るのに一日かかるから待つてくれというのだ。彼

らは、麦や稗を脱穀しない状態で、土中に糠の皮を敷いて保存している。その脱穀に一日かかるらしい。

米作は、六月中旬の帰路キャラヴァン途中、シミコットへあと一日のテェー村の川沿い、標高二四〇〇<sup>メートル</sup>で、小さな水田を見かけたが、収量はごくわずかだろう。ネパール政府はシミコットへ米を空輸している。ドクター・チームの話では、その米はもっぱら役人の口に入り、貧しい村人には、時々、手のひら一杯ほど分配されるだけだったそうだ。

ポーターたちは、度々、登山隊の米をほしがった。とくに、キャラヴァン五日目、彼らの食糧が乏しくなった頃には、欲求が強くなつた。私は、シミコットの行政官宛てに、米を送って下さいと手紙を書いた。その米は、途中の村で半分盗まれた。

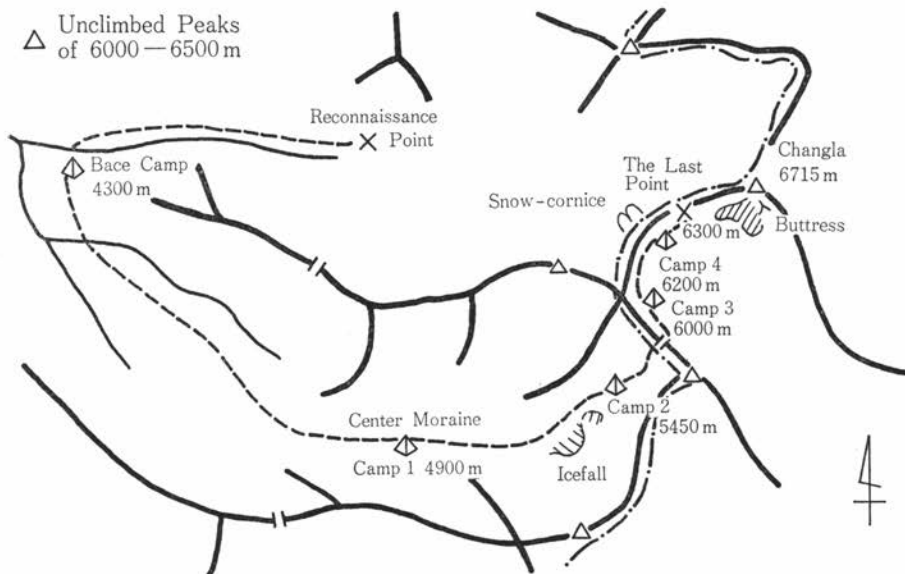
雪が現れる三四〇〇<sup>メートル</sup>から、長靴、セーター、ズボン、パーカなど与えたが、ポーター賃金も四十ルピーから五十、そして深雪になると七十五ルピーへと値上りだ。

そのくせ、ポーターは半数に減り、進む行程も半分になった。かくのごとく、キャラヴァンもまた予定の二倍、十三日かかった。

登山活動 五月六日、荷物も人もやっとベース・キャンプに揃つた。そこは谷の分岐点で、夏には村人が放牧に来るところだが、まだ厚さ一<sup>センチ</sup>の雪原だった。

七日から大急ぎで南の谷へ荷あげを始めた。谷は広くて安全だが、昼前から雪が軟かくなり、歩きづらい。谷は少し左へ折れる。ここから谷の中央に押出されたモレーンの丘の上を歩く。雪崩の直





撃を受けない安全コースである。九日、この中央モレーン帯の行程、四九〇〇mに第一キャンプを設ける。

その先、なおも中央モレーン帯を二時間ほど歩くと、アイス・フォールに突き当たるが、これは登らなくてもよい。左側の雪壁を直上すると、次第に斜面は緩くなり、もう一段小さなアイス・フォールの左を越えたと広い雪原が現れる。十四日、その中央、五四五〇mに第二キャンプを置く。第一キャンプからまた一度曲ったので、ベース・キャンプと第一キャンプと第二キャンプの間で、トランシーバーの電波が届きにくい。

第二キャンプの周りには、ヒマラヤ巒の美しい六千m級のピークが林立しているが、快晴の日には、南々西の空に、白い大きな山が蜃気楼のように浮かぶ。きつとサイバルだろう。

ここまでのルートは安全で易しいが、この雪原を四十分ほど進むと、国境尾根が立ちはだかっている。そのコルめがけて、雪と岩の間にルートを探す。十六日、高度差約二〇〇m、平均斜度五十度の壁に、草本、山下、サンゲ、カミが挑み、ロープを固定した。岩は脆く、しかも鋭利な刃物のような岩屑が斜面に不安定に乗っていて、気温が上がると落ちるので、気を遣うところだ。

五七〇〇mのコルに立つと、チャンラ主峰の南西面の全貌がわかる。目の前に、滑らかで大きな白い氷河を挟んで、主峰は、高度差一五〇〇mほどの胸壁を抱いて立ち上がっていた。

南西稜は北よりにカーブしながら、長く長くのび、頂上近くで急に立ち上がっている。左の谷から眺めた南西稜ほど絶望的には見えない。なんとか登れるだろう。しかし、長い道程だ。キャンプは少

なくともあと二つ必要だ。

コルは広い雪原になっていて、小さな凍結した池すらある。十九日、コルからしばらく雪原を進み、雪のクローローを登った稜線上六〇〇呎の台地に、第三キャンプを設けた。

その後三日間は、天候がくずれたため、前進できず、下部キャンプの荷あげに従事した。

二十四日から好天のサイクルに入って、快晴が続いた。第三キャンプ上部のルート工作にとりかかる。

比較的易しそうに見えていた雪稜でさえ、クレヴァスが多く、ロープの固定作業をした。フィックスト・ロープを稜線で横に張っていると、高度はかせげず、頂はいっこうに近づかないのに、ロープだけどんどん減ってゆく感じがする。

五月二十七日、稜線上六二〇呎に第四キャンプを設ける。テント二張に、カメラマンを含めて八人泊る。その日のうちに上部の氷壁に一部分ルートを開いておく。春の登山期限五月末日までにベース・キャンプへ降りるには、翌二十八日が登山の最終日だ。燃料もロープも行動食も残り少なくなった。やはり最終日だ。その日も見事に晴れた。しかし、チャンラの頂はまだ遠い。一日で往復して帰れない。勝ち目のないアタックに、草本、カミ組を先頭に、山下、板東組、梶原カメラマンと助手のプルバを送出した。

朝六時前に出発して、十時に先頭の二人が氷壁のトラヴァースを終えた。雪庇の下は堅いブルー・アイス。カミはクランポンズの爪が鋭くなかったので苦労したようだ。これを越えると少し下りになり尾根は広いように見えたが、ここもクレヴァスの巢。けつきよく

ロープを使い果して、午後二時、六人が六三〇〇呎の丸いコブの上に集結。第四キャンプで双眼鏡片手にトランシーパーで交信している隊長と相談して、この登山は打切られることになった。

第四キャンプから南に見える山々が、美しく茜に燃え、やがて青白の影となって消えてゆく眺めがすばしかなかった。全部未踏峰だ。南西稜の登高は、雪庇のため、ほとんど南側にルートをとるので、北西側を見る機会は少いが、すぐ北に六五〇〇呎はあろうかと思えるピークがある。その向うにもいくつかピークが重なり合っている。グルラ・マンダータは見えないようだ。報告書を作る前に、隊員から集めた写真の中では、この方向に雲が多くグルラ・マンダータは見つからなかった。しかし、報告書ができ上がった頃、一番若い隊員が、「こんな写真がありました」と持ってきた一枚に、グルラ・マンダータは遠く雲の上に浮んで見えている。直線距離にして約一〇〇呎。見える筈なのだ。

ドザム・コーラの豊かな自然 ドザムでは、巨大な岩壁の下の傾斜地に、二十軒ほどがへばりついている。三階の屋根が傾斜した草葺の片屋根であり、その下は物置きになっているのが、パジバラとドザムの特徴だ。二つの谷の合流点にわずかな平地があり、麦畑に納まっている。

この村を出るとすぐ、谷は狭くなるが、杉や松などの針葉樹、樺などの広葉樹もいろいろあり、森は深くなる。チベットとの交易路の一つなので丸木橋もよく手入れされ、細いながら道はよく踏まれている。村を出てしばらく行ったあたりで、ホワイト・モンキーの

群れを見かけた。その上の三一〇〇呎あたりで四月下旬桜草の群生が見られた。葉は細長く小さめだが、花が丸く房になっている。この桜草前線は六月上旬に、三九〇〇呎で満開の花海原となり、四三〇〇呎のベース・キャンプで三分咲きとなる。

六月のドザム・コーラでは、わずかだが、青いケシもある。またヒマラヤ東部にある濃紫色の桜草も見えた。その他、福寿草やアヤマの種、葉草になるというピンクの花など、数知れずあり、たくさん写真に撮ってきたが名前がわからない。

しかし、四月末に三八〇〇呎の広い河原の中州にいた雁とカモメはもういなかった。村人はこの川に魚はいないと言うが、鳥たちのエサは何だったのだろうか。山の中には、いろんな川虫がいた。ほんとうに魚はいないのだろうか。

頂に立つなら中国側から登る方が確実だ。しかし、自然の豊かさ美しさは南面のネパール側がだんぜん優れているだろう。

△記録概要▽

隊の名称 西北ネパール女子学術登山隊

活動期間 一九八三年四月～五月

目的 チャンラ山脈主峰の登頂およびシミコットにおける医学的調査と診療活動

隊の構成 隊長Ⅱ遠藤京子(45)、副隊長Ⅱ内田昌子(42)、小山とき子(32)、隊員Ⅱ草本早苗(36)、山下富子(29)、坂東洋子(25)、宮川ふみ江(45)、サンゲ・シエルパ(45)、アン・リタ・シエルパ(34)、カミ・リンジ・シエルパ(25)、医

記録概要

記録発表

師Ⅱ清水久信(28)、写真Ⅱ梶原達夫(45)

五月五月、ドザム・コーラ四三〇〇呎にベース・キャンプ設置。九日第一キャンプ(四九〇〇呎)設置。十四日第二キャンプ(五四五〇呎)設置。十九日第三キャンプ(六〇〇〇呎)設置。二十七日第四キャンプ(六二〇〇呎)設置。二十八日南稜上六三〇〇呎まで試登、登頂を断念する。六月八日ベース・キャンプ撤収。

西北ネパール女子学術登山隊編 ドザム・コーラの人と自然 同人エングフラウ 城陽 一九八三

梶原達男 未踏の頂「チャンラ」山と溪谷 五六三頁 一五—一九頁 一九八三

岩坪吟子 シミコット周辺の人と生活—ヒマラヤの未踏峰チャンラ遠征から 岳人 四三六号 九—十三頁 一九八三

遠藤京子 はるかなるチャンラ峰 岳人 四三六号 二五—二十八頁 一九八三

西北ネパール女子学術登山隊 西北ネパール・チャンラへの道 ヒマラヤ 一四三三号 十七—二十三頁 一九八三

三

## マッシュャブルム アルパイン・スタイル

### 南 裏 健 康

スカルドゥ行小型プロペラ機の薄汚れた小さな窓からナンガ・バルバートが遠のいて行く。

朝日を浴び純白に輝いているラキオト側にヘルマン・プールのルートを目で追いながら、私は、アラン・ラウスが言うところの「登山史を一貫してつなく、切れない一本の糸」についてぼんやりと思いめぐらせていた。

やがて裸の山が見えなくなり、機が高度を下げ始めた頃、努漣に屹立する島のごとく、カラコルムの巨人達が現れた。バインター・ブラックとラトック三山は異様な姿で聳え、クライマーにとつては魅力的だ。その右隣にK2が、ブロード・ピークが、GIVがシルエットをなして見える。ヒドン・ピークが見えないのは、マッシュャブルムに隠れているためだ。マッシュャブルムの山容は八千峰と比較しても決して見劣りしない。正にK1と呼ぶにふさわしい。

一九八三年京都岳人クラブ・マッシュャブルム遠征隊の目標は、マッシュャブルム南西峰を初登ルートからアルパイン・スタイルで登頂することであった。

隊長須藤建志、権威主義にはしらず、常に冷静な客観的判断が出来る隊長適任者である。一九七九年K7偵察の際、フーシエ谷の奥に輝くマッシュャブルムに魅せられ、八十年マンゴ・グゾール初登の後、この計画を実現させた。

及村昌広、立命館大学山岳部OBでAAVKに所属する。マイクトリー、パンワリ・ドワール、ヴァスキ・バルバート、キリマンジャロなど多くの遠征で成功を納めている。また、国内においては、厳冬の剣周辺で精力的に活動している。

榎本幸博、一見、あのガンダーラ美術の最高傑作といわれる「断食する仏陀」を思わせる容姿から彼のパワーは想像出来ない。京都

で行われる登山競争では首位の座をゆずらない。

堀江良明、彼のトレーニング量は、ちよつとまね出来ない。日曜の夜もジムへ通うフィットネス狂。トレーニングしないと落ち着かないのが玉にきず。

南裏健康、オール・ラウンドな登山を目指しながらも、ハード・ロック・クライミングを好む。七九年須藤と共にK7偵察。八一年クライミングの修業にアメリカへ渡り、ビッグ・ウォール・クライミングを体験し、カナダではロータス・フラワー・タワールのフリー・アッセントに成功。国内でも多くのショート・ルートの開拓をしている。

以上の五名で、そのうち高所経験者はたったの二名だけ、その二名にしたところで、七千以上は経験なし。それで七八〇六にアルパイン・スタイルでいどむなんて、保守主義者や門外漢から、無謀登山の批難の声が聞てきそうだが、近年における高所生理学の発達や、それを認識した上での低地でのトレーニングを含む高所順応の方法が解明されてきたことにより、クライマーの高所登山に対する心理的、肉体的障害は、以前よりかなり小さいものとなつてきた。そして何よりも多くの高所クライマーによる実践がなされてきた事実は、我々五名にも自信を与えてくれた。

アルパイン・スタイルでカッコよく決めたい我々であったが、そう簡単には行かなかつた。マッシュブルム・ベース・キャンプ付近には順応に手頃な山やキャラヴァンで越える峠もない。高所順応をどこで行うかが重要な課題となつた。結局、討議の末、登攀ルート上で順応した後、ベース・キャンプからアタックしようということ

に妥協するしかなかつた。

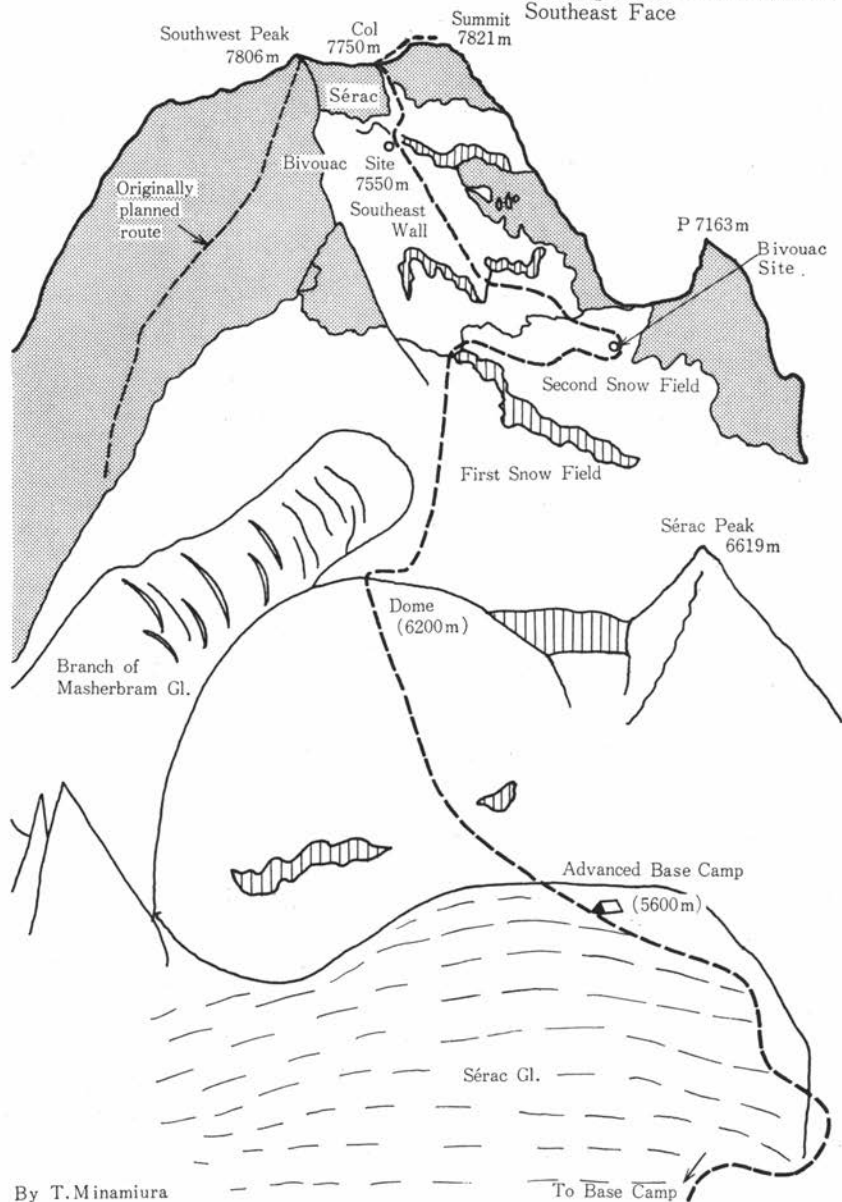
キャラヴァン二日目にして、最後の村フーシエに着く。標高三千メートルをすでに越えているため順応と休養をかねてここで一日滞在し、周囲の急斜面の登下降やボルダリングに興ずる。ベース・キャンプ四二〇〇メートルでは、この村から二日で到達するため着実に順応しておく必要があつた。

七月三日、セラック氷河とマッシュブルム氷河の合流する氷上にベース・キャンプを建設。四百\*の隊荷と共に三張のテントが張られた。だが我々にとつてのベース・キャンプ設営はこれからだった。我々の作戦は、まず実質上のベース・キャンプとなる前進ベース・キャンプをセラック圏谷の奥五六〇〇メートルに設営し、ここへすべの装備、食料を荷あげした時点で七〇〇〇メートルまでの順応活動を目ざす。そして休養後、前進ベース・キャンプあるいはベース・キャンプから一気にアタックするという計画であつた。

前進ベース・キャンプの設営と荷あげに我々は二週間ついやした。セラック氷河は文字通り、三段からなる危険なセラック帯で構成されていた。前進ベース・キャンプはこの氷河の最奥の平らな雪原に設営され、周り半分は一〇〇〇メートルをこす氷壁でおおわれていた。高所順応が出来、この複雑なセラック帯に最良の荷あげルートが確保されるまでは、荷あげははかどらなかつた。七月十六日に無事荷あげは完了し、我々五名だけの快適なキャンプが誕生した。全員順応も順調にいつていることと、重荷からの解放感から気分は上々だった。

そして第二段階に入り、各自慎重な判断で行動して、出来れば七

# Climbing Route of Masherbrum Southeast Face



By T. Minamiura

千ヶ台を体験し、順応を終えるのが次の目標だった。七千ヶに達するには南東壁の約三分の一まで登らなくてはならない。前進ベース・キャンプからのルートは高度差六〇〇ヶのドームの頂へ出て、ほとんど高度をかき上げない長大な二つの氷河盆地をトラヴァースし、南東壁基部へと達するのだ。ドームへの登りは、一ヶ所ダブル・アックスを必要とした以外は、手にはアイス・アックス一本で丁度よい傾斜の雪壁だった。しかし、足元は次々と変化する雪面に克蘭ポンス、ワカン、ビブラム・ソールとこまめに取替え、対応していかなければならなかった。この苦しい登りも、高度を上げるにつれ拡がる東部カラコルムの展望にいやされる思いだった。

ドームをこえ氷河盆地を横断する我々を待っていたのは、摂氏四十度をこす熱射地獄だった。高所の強い陽射と雪の照返し、そして無風状態が容赦なく我々の体力と水分をうばっていった。日よけ帽よりゴア・テックスのフードをかぶる方がまだ涼しかった。我々は行動中も雪を解かして水分を充分とるのだった。この間、須藤、堀江、パーティは七四〇〇ヶまで達し、他三名は悪天候を懸念し六四〇〇ヶからそれぞれ引きかえし、順応活動を終了した。

前進ベース・キャンプで充分休養後、七月二十八日、乃村、榎本、南裏が、翌二十九日須藤、堀江がアタックに出発。三十一日の夜明け前には全員が七六〇〇ヶのクローワールの入口に到着した。クローワールは陽が昇るにつれ雪がくさり困難を増していった。コルに達したとき全員フラフラでコルから続くナイフ・リッジは、見るからに難しそうで一日の往復はまったく考えられず、いったん引きあげ出なおすことにした。コルにテントを上げないと南西峰登頂は望

めないというのが全員の一致した意見だった。だがそれ以後十日間にわたる悪天と最終アタックが二名に減ったためコルまでテントは上げられず南西峰は断念せざるをえなくなった。

ベース・キャンプへ降りてからもう一週間も悪天候が続いていた。運動不足でイライラしていた私はコックのガフルが食料の買い出しにフーシエ村まで下ると言うので堀江と共に同行した。ところがフーシエでは品不足、結局もつと下流のカネ村までつきあつた。ベース・キャンプから往復六日間の行程を三日で走破しベース・キャンプにもどつた私はくたくたに疲れていた。夜空の雲が切れ星が輝きだし明日からの行動開始が確実となり、私は買い出しに行つたことを後悔した。せめて一日休養したかったのだが。

八月十二日、行動は開始された。おそらく最後のチャンスになるだろう。予想通りセラック帯は変り果てていた。荷あげに使ったトラ・ロープは、まるで綱渡りの綱のように空中にたれていたり、雪崩にうまつたり見るも無残だ。セラックの迷路を飛んだりねたり、また側壁からの雪崩に注意を払いながら前進ベース・キャンプへ入る。カネまで行つて来たのが功を成したかすこぶる調子が出てきた。

八月十三日、今日はいっきに南東壁基部六五〇〇ヶまで行かなくてはならない。前回のアタックの折に、私達のパーティはそこへテントをデポしてきていた。ドームへの登りからはラッセルが始り、例の灼熱のトラヴァースを終えそこへ着いた時は日が暮れかっていた。ところが目印のポールが見当らない。長らく続いた悪天候でこの高度には五十ヶも新雪が積つたままだった。早急にテントを捜

出さなければ！我々三人はワカンをぬぎすて雪原を縦横斜めまで気違いのように捜回るがテントはみつからない。須藤、堀江の二人は、もうテントを張り雪を溶かし始めている。日は暮れ、大気には光の余韻が残っているだけで、冷たい風がほほをつたう。焦る心をおさえ、冷静になりちよつとした雪の起伏をも思い出そうと目を皿のようにして雪面を見渡しここだと思ふところへかけよりアイス・アックスでつく。数回のころみのあと、ついに見つけた。正に奇跡だった。

八月十四日、昨夕からの風は、嵐にと変り今日の停滞を余義なくさせた。休暇の都合で榎本は明日降るといふ。また、須藤、堀江の体調も良くない。

八月十五日、嵐は去った。出発出来る。榎本が降り、須藤、堀江の体調は回復しない。ここから先は及村と私の二人だけになる。彼らと堅い握手を交し出発する。右側から南東壁に入り危険な懸垂氷河の下を左上し壁中央のちよつと突き出たインゼルにワカンとストックをデポし、傾斜を増した雪壁をヒザまでのラッセルでクローワールの左下のオーバーハンダしたセラックの下にプラットホームをけずりテントを張る。高度七六〇〇呎。

八月十六日、ルックサックに行動食四食分、ガス・ストーヴ、寝袋カバー、羽毛服そしてカメラを入れて出発。ポーランド隊の固定ロープを横目で見ながらクローワールへと入って行く。このクローワールの困難さは、おそらくどんなに技術が発達しても変らないしるものだった。両手にアイス・アックスとアックス・ハンマーを持ち雪面に突きさすが何の抵抗もなく肘までスッポリ入り、我々をも

て遊ぶかのような。コル付近では傾斜六十度はありそうだがよくナダレないものだ。ようやくコルに着くと、バルトロの山々が目に飛込んできた。南西峰へ続くナイフ・リッジを目で追いながら我々はそれを断念し主峰をみざす。頭上第一ステップの岩場はもろくバルトロ側を捲きミックスのクローワールを直上、アメリカ隊のピトンを水平クラックに発見充分使用にたえそうだった。次にやせた雪のリッジをたどり第二ステップの岩場につく、中央にチムニーが見えるが、まさかあれがルートだとは思わず、両側を捲こうとしたが無理で、最後に及村がチムニーをアタックまたピトンを発見し頂稜に出た。そして二人そろい、あとはゆるやかな雪稜をたどり午後三時我々はマッシュヤブルム主峰の頂上に立った。

#### △記録概要▽

隊の名称 京都岳岳人クラブ・マッシュヤブルム登山隊

活動期間 一九八三年七月～八月

目的 マッシュヤブルム南西峰（七八〇六呎）ポーランド・ルトのアルパイン・スタイル全員登頂

隊の編成 隊長Ⅱ須藤建志（32）、隊員Ⅱ乃村昌広（27）、南裏健康

（25）、榎本幸博（26）、堀江長明（25）

#### 行動概要

七月三日フーシエ谷セラック氷河とマッシュヤブルム氷河出合の四五〇〇呎にベース・キャンプ設営。十七日セラック圏谷五六〇〇呎に前進ベース・キャンプ設営。二十四日乃村、榎本、南裏、二十五日須藤、堀江六七〇〇呎でビヴァーク、翌日前進ベース・キャンプに下る。三十



記録発表

一日全員でクローワールをつめ、七七五〇<sup>メ</sup>のコルに達したが、南西峰登頂を断念。

八月十五日セラック下のプラットホーム(七六〇〇<sup>メ</sup>)にテントを張る。十六日乃村、南裏が七七五〇<sup>メ</sup>のコルを経て、午後三時マッシュブルム主峰に登頂。十八日前進ベース・キャンプ撤収。十九日ベース・キャンプ撤収。

京都岳人クラブ マッシュブルム―アルパイン・スタイル  
岩と雪 一〇五号 五十二―五十六頁 一九八四



## ゴリー・シャンカル西壁試登

富田雅昭

一九八〇年秋、ヒマラヤ第一歩として六人でアマ・ダブラム北壁(編注1)を登った私は、大がかりな遠征にはないであろう気楽な登攀を楽しみ、登頂による充実感に満たされていた。これ以後、私のヒマラヤ登山は、このライト・エクスペディションで味わった満足感を求めているように思う。

アマ・ダブラムの隊長であった加藤康二と私とで、当初初登頂されて間もないゴリー・シャンカルの許可を取った。時期は三年後の一九八三年春。アマ・ダブラムの成功によってライト・エクスペディションの楽しさを知った我々は、ゴリー・シャンカルもライトで行こうと話合ったのである。しかし、八一年秋、私はマナスルに、加藤はアンナプルナI峰南壁にと、それぞれ行っていたが、加藤は二次アタックに出たまま帰らなかつた。(編注2)

ゴリー・シャンカルという山 この山は、北峰(七二三四m)

と南峰(七〇一〇m)の二つのピークを持つ双耳峰である。そして東面、南面、西面と三方を大岩壁によって固め、その間の稜線は岩と氷のナイフ・リッジになっていて、人を寄せつけない。

一九六四年、ネパール・ヒマラヤが登山禁止になった。それまでにこの山に向った登山隊は六隊あったが、そのいずれもが失敗した。未登峰の中では最難度の山と呼ばれるようになったのである。一九七九年以前にこの山に本格的にチャレンジした最後の登山隊は、デニス・グレイがリーダー、ドン・ウイランス、イアン・クロウなどの英国隊であった。この隊は、北峰から北に落ちる北稜を、頂上直下まで迫ったが、雪崩によって断念した。

(編注1) 福島比佐雄 アマ・ダブラム北壁初登(一九八〇年秋) 山岳 七十六 一九八一

(編注2) 吉野 寛 アンナプルナI峰南壁 山岳 七十七 一九八二



▲ マッシャブルム氷河からマッシャブルム南面，右の雪の付いたフェースが南東壁：MASHERBRUM's south side from Masherbrum Glacier. Southeast Face is on the right. *Photo by Takeyasu Minamiura*



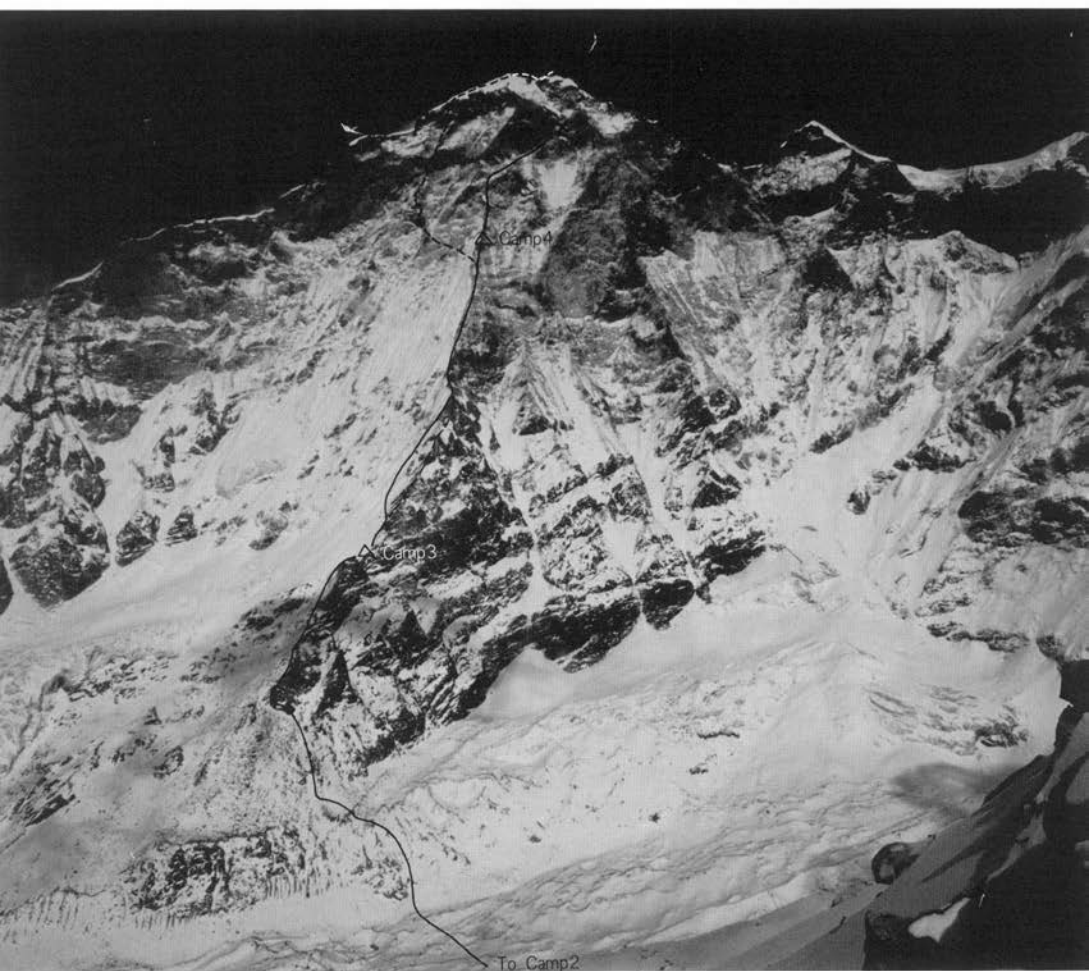
▲セラック氷河ワン・ステップ目を越えて、頂上は遠い：MASHERBRUM (right) from Sérac Glacier. *Photo by Takeyasu Minamiura*

最終アタック、南東壁へ向う：Starting for the final push to the summit of  
▼MASHERBRUM via the Southeast Face. *Photo by Takeyasu Minamiura*



ゴッリー・シャンカル西壁, 左から主峰(北峰), 南峰, 南壁の頭,  
実線: 日本隊ルート, 破線: アメリカ隊ルート: GAURI SHANKAR'S  
WEST FACE. Left to right: Main (or North) Peak, South Peak, and top of  
the South Face. Solid line: Japanese route; dotted line: American route. The  
Japanese high point is at c. 7000m. Camps are marked: 3=5400m; 4=6400 m.

▼ Photo by Hiroyuki Kuraoka





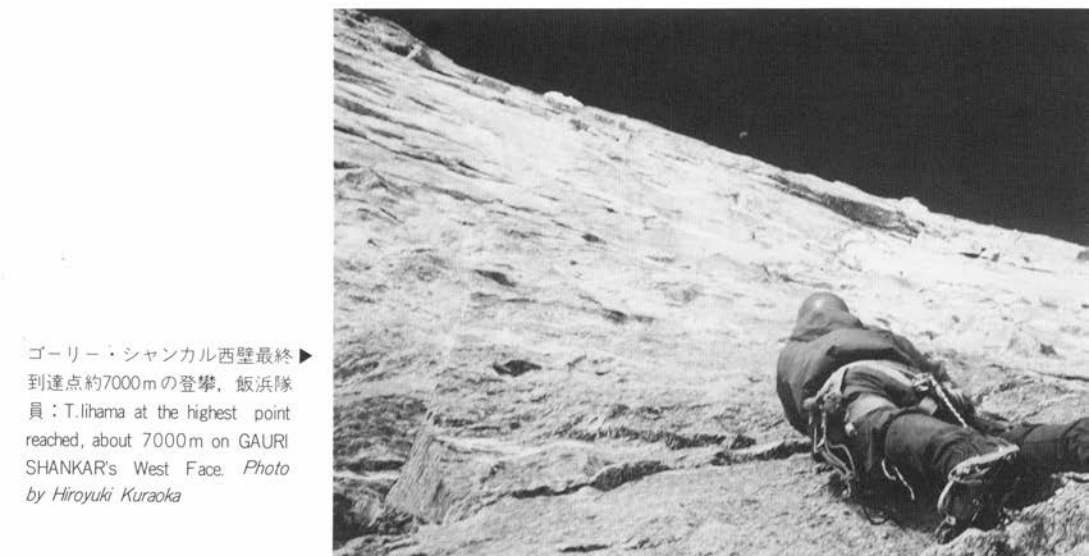
◀ゴーリー・シャンカル西壁第3キャンプ、  
第4キャンプ間の岩壁5800m付近の荷あげ：  
Load-carrying on the wall between Camp 3  
and Camp 4 at about 5800m on GAURI SHA-  
NKAR's West Face. *Photo by Hiroyuki Kuraoka*



ゴーリー・シャンカル西壁第4キャンプ▶  
（手前雪の影にテントがある）より  
上部壁を見る：Upper Wall of GAURI  
SHANKAR's West Face seen from Camp 4；  
our tent lies beyond the snow in front.  
*Photo by Hiroyuki Kuraoka*



◀ ゴーリー・シャンカル西壁6900m  
付近の雪壁を登る飯浜隊員：  
T. Iihama leading the snow wall at  
6900m on GAURI SHANKAR's  
West Face. Photo by Hiroyuki  
Kuraoka



▶ ゴーリー・シャンカル西壁最終  
到達点約7000mの登攀。飯浜隊  
員：T. Iihama at the highest point  
reached, about 7000m on GAURI  
SHANKAR's West Face. Photo  
by Hiroyuki Kuraoka



▲ ベース・キャンプよりナンガ・パルバート・ディアミール壁全景：NANGA PARBAT DIAMIR FLANK seen from Base Camp. A: Summit. B: North Shoulder. C: Bazhin Gap. D: Fore-Summit. E: North Summit. F: West Col. The solid lines show: 1 Buhl-Route 1953; 2 Kinshofer-Route 1962, and Japanese-Route 1983; 3 Mummery Rib (X: the point Mummery reached in 1895, and Messner brothers' descent route 1970); 4 Messner-Solo-Route 1978; 5 Schell-Route 1976; 6 Czechoslovak's North Summit I-Route 1978; 7 Attempt in 1939. *Photo by Takeyoshi Takatsuka*



ベース・キャンプ上部よりディアミール壁：NANGA PARBAT DIAMIR

▼ FLANK seen from above Base Camp. Photo by Takeyoshi Takatsuka





▲ 第2キャンプ上、氷壁帯へ出る前のクローワール：Couloir leading to ice wall above Camp 2 on NANGA PARBAT Diamir Flank. Photo by Takeyoshi Takatsuka

▼ 第4キャンプから頂上へのルート、雪が深く苦勞する：Route from Camp 4 to th summit of NANGA PARBAT. We struggled through deep snow. Photo by Takeyoshi Takatsuka



一九七九年、新しく解禁された山の中に、ゴーリー・シャンカルも含まれていた。そして、第一号七九年春の許可を、ネパールでトレッキング・エージェントをしているアメリカ人、アル・リードが取得した。しかし、この許可はネパールとの合同隊であること、という条件付きであった。

各五人ずつの十人による、ネパール・アメリカ合同隊は二五〇人のポータと共に西面より入山し、固定ロープを張り、ルートのをのびし、前進キャンプを作っていくスタイルで、きわめて難しい西壁をダイレクトに登った。壁の取付きから約七十ピッチズ、中央に走るアイス・リッジから上部岩壁を左に回り込んで、登頂は、五月八日、ジョン・ロスケリーとシエルパのドルジェの二人であった。

そしてその年の秋、イギリスから四人、シエルパ一人のチームが、南西稜に向った。リーダーは、ピーター・ボードマン。彼らは前年、チャンガバン西壁で使ったスタイル、 $\wedge$ カブセル $\vee$ をこのゴーリー・シャンカルにも採用した。約二十日間、西稜上のカブセルを進め、南峰の頂上に立った。北峰までの縦走は、事故や食糧、装備の不足などで断念した。

そして八十年秋、市橋隆二隊長率いる日本山岳会東海支部隊が南東稜に取付いたが、その困難で長大な尾根と、悪天候にはばまれ敗退している。

その後も幾多の挑戦を受けているが、両峰とも再登を許していない。

\*

ゴーリー・シャンカルの姿は、カトマンドゥやさらに南部の平原

地方からも遠望できる。ある土地の伝説ではこの山が世界の最高峰といわれているくらいよく見えるのである。事実、一八五五年、シューラギントワイトにより世界の最高峰であるといわれ、後に一九〇三年インド測量局によって、最高峰エヴェレストとゴーリー・シャンカルは別の峰であるとわかるまで、最高峰と広く信じられていた山である。

宗教的にも重要な意味を持っている。双耳峰は、南峰がゴーリー(श्री) ヒンドゥ教パールヴァティー女神の別名、光輝く(श्री)の意、北峰がシャンカル(शंकर)パールヴァティー女神の夫シヴァ神の別名、吉兆を意味する(शुभ)と呼ばれているらしい。この山の南麓を流れるロールワリン谷の住人にとっては南峰しか見えないが、チベット語でチョモ・ツェリンマと呼んでいる。チョモ(女神)、ツェリン(長命の意をもつ人名)、マ(女性の語尾)。ラマ教徒にとつて、このツェリンマは最高クラスの聖なる山とされている。

私たちの準備 隊長が雨宮 節、加藤、赤松、富田と四人で始めたこの計画も、加藤がいなくなり、赤松を翌年アンナプルナI峰の北面で失い、計画そのものが消えかけた。しかし、私の所属するクラブの後輩である若い西ヶ谷と倉岡が加わり、さらにアンナプルナI峰南壁のメンバーから木内 聡、G登攀クラブから溝口宏行、飯浜 隆、四方津クラブの橋本 覚らが集まり準備が始まった。

まず、なにを目的とするかが話合われた。ヒマラヤが初めての者が大半を占める隊で、もちろん登頂第一だが、個人個人ができるだけ楽しんで帰れる登山にしたいと考えた。そして、全員が登れるためにはフィックスト・ロープを張って登る。時間の許す限り全員が

ルート工作に参加できるようにする。というオーソドックスな戦法を用いることにした。費用は全額自己負担、各自六十万円、十人で合計六〇〇万円に間に合せようと経費を切つていった。

ルートは西壁から、初登ルートであるアメリカン・ルートを、より直線的に登るラインを考えた。タクティクスが練上り、食糧、装備などの準備も進んでいた十二月、隊長の雨宮が、個人的な事情で参加できなくなってしまった。替って私が隊長を務めることになった。最終的なメンバーは九人になっていた。

ベース・キャンプへ 三月三日、先発隊員として溝口と私が成田を出発した。三月十三日に本隊がカトマンドウに着くまでに、通関、各種の許可、食糧の買付けなどをすませた。そして十七日、まだ決っていなかったリエゾン・オフィサーを待つ私を残してキャラヴァンがスタートした。

チャリコットでトラックとバスを捨て、ジュビング、ジャガットを経由して七日目、ラモバガールに着いた。この小上高地のような最奥の村には、チェック・ポストがあつたのだが、ここでエクスペディション・パーミットに不備があると、丸一日の足止めを余儀なくされてしまった。電報で何とかOKを取る。ポーターをこの村の人々に替えたのだが、九十数個の荷を一度に運ぶだけの人数が集まらず、二隊に分けて運ぶことにする。

ベース・キャンプ予定地は初登のアメリカ隊と同じ四九五〇<sup>±</sup>と考へていたのだが、何と二五〇〇<sup>±</sup>附近から雪が多く、とても予定地まで上げられそうにない。結局三二〇〇<sup>±</sup>に仮ベース・キャンプを設けて、三九五〇<sup>±</sup>の地点をベース・キャンプとして、荷あげをく

り返した。全部の荷が上つたのが、三月二十九日。予定より一週間遅れであった。

長いアプローチ 小さな尾根の上の小さな切開きにベース・キャンプを設けた我々には、深雪の斜面を五四〇〇<sup>±</sup>の尾根まで登り、さらに四〇〇<sup>±</sup>降りてやっと西壁に取付けるといった長いアプローチが待っていた。

四六〇〇<sup>±</sup>に仮第一キャンプを作り、順応の進んでいない初期に各人一泊以上させた。

第一キャンプは、アメリカ隊、イギリス隊共にベース・キャンプであった四九〇〇<sup>±</sup>とする。四月四日、この頃から、天候が悪化して来た。週の内、雪の降らないのは一日か二日。毎日ラッセルである。広い雪原を登ると、南峰南西稜に出る。ここで北峰西壁を初めて正面から見ることができた。高度差二二〇〇<sup>±</sup>。アンナプルナI峰南壁を傾斜を強くして、ひとまわり小さくしたような壁だ。中央に一本リッジが落ちている。上部三分の一は完全に岩。双眼鏡で見ても上部にはキャンプ・サイトになりそうな所は見えない。かなり手強そうだが、やるしかない。西壁の下には氷河があるが、その手前の丘に、四月十二日第二キャンプを設ける。ここがアドバンスト・ベース・キャンプである。

橋本以下三人が第二キャンプに入ったとたん、大雪が来た。まだ食糧が五日分しか上つていなかったの、四日間も降りこめられた時は、心配でならなかった。

第二キャンプは少々風が強いことをのぞけば、西壁を正面に見ることができ、なかなか快適なキャンプになった。第二キャンプまで

にフィックスト・ロープは十二本使用した。

**西壁登攀** 西壁は五〇〇〇呎の取付から三〇〇呎はガラ場。その上は雪壁となり、フィックスト・ロープが必要になる。五四〇〇呎に第三キャンプを設けた。小さなコル横の斜面で、氷を切出してキャンプ・サイトを作った。四月二十一日、この第三キャンプは西壁中央リッジの下部になる。ここから四十五度の雪壁を左上し、中央リッジ下部岩稜を左のフランクにある雪壁から回り込んで登る。だんだん傾斜は増して、リッジ中央部にある水平部分に出るまで約七十度位が続いた。第三キャンプから雪壁十一ピッチズ、氷壁五、岩四の割合である。この二十ピッチズは三日間でばされた。しかし、第四キャンプ予定地までの九ピッチズが、悪天候やピッチ数が増えたことなどでなかなかのびない。最後は第四キャンプ建設の装備を持ってつつ込み、最後三ピッチズルート開拓の後、スノー・リッジを切って二人用テントを張った。五月一日第四キャンプを六四〇〇呎に建設。この日は朝六時から夜九時まで十五時間の行動であった。第四キャンプから七ピッチズは完全なアイス・リッジである。

第三キャンプから第四キャンプの高度差一〇〇〇呎。二十九ピッチズの荷あげは体力的につらく、一人十二<sup>+</sup>程しか上がらない。それも二日行動すると、翌日には休まないとつらい。それで上部キャンプのメンバーと交替する時は、個人装備はほとんど置いておき、荷あげ装備を十<sup>+</sup>持つつタクティクスにした。そうでもしないと荷あげが追いつかないのだ。

第四キャンプに入った橋本、富田が上部岩壁に取付いた。アイス・リッジを三ピッチズ登るとフェイスに出る。IV<sup>+</sup>とIV級の二ピッチズ

直上すると、二十<sup>+</sup>程前傾した壁に出るので左にトラヴァースIV<sup>+</sup>。

岩質はやや浮石は多いが花崗岩で固めで、フレンズやヘキセントリックなどが良くききそうなクラックが多い。そして、垂壁を十<sup>+</sup>直上し右にトラヴァース十<sup>+</sup>で五十<sup>+</sup>程のスノー・リッジ下部に出るV<sup>+</sup>。これで二日ルート工作したので次の木内、溝口パーティとチェンジである。夜までに三十八ピッチズの下降をしなければならぬので、早めに降り始める。第四キャンプについてしばらくすると木内が上がって来た。しかし、ルックサックを背負っていない。訳を聞くと、アイス・リッジの途中で休んでいる時、手がすべて落ちてしまったとのこと。落ちていった所が予想できるので明日さがしてもらおう。木内の替りに富田がさらに二日ルート工作のため第四キャンプに残ることにする。ところが第四キャンプ入りした溝口がのどをやられ、二日間動けなかった。

**二村の事故** その夜、第三キャンプに落石があり、二村の膝に当たり歩行不能になってしまった。当たった場所が関節なので心配である。骨折の可能性があるのでカトマンドゥウまで降ろすことになった。ベース・キャンプまでは実働二日で降ろしたが、そこから下はスノー・ポートなどは使えないので少し様子を見て、自力である程度歩けるまで待つ。富田と休みの都合で帰らなければならない高橋とでカトマンドゥウまでついて降りる。他の隊員は登攀に戻ってもらう。五月十一日。

**敗退** 結局五月二十二日、第四キャンプより十九ピッチズのびた所で(約七〇〇呎)食糧、体力共に尽きた。私は登攀の終盤までに戻るつもりであったが、間に合わず、下山してきた隊とラモバガ

ールで合流した。やはり最後は動けるのが三人程となつてしまつてあきらめられたらしい。三々四人で荷あげとルート工作はかなりローテーションがつらくなつたようだ。小人数で長いルートの荷あげ補給線の維持というのはむずかしい。特に後半になれば動けるメンバーは少なくなつてくるし、ルートものびる。

この山の場合には、ベース・キャンプ入りの前から仮ベース・キャンプを作り、第一キャンプもベース・キャンプから一気にのげせず、仮第一キャンプを一時的に設けたりしたので大変であつた。これを数に入れば第四キャンプが第六キャンプとも考えられる。予想外の大雪で例年通りであれば、もっと楽に登攀が楽しめたのであろうが。しかし、西壁自体のグレードは高く、氷のリッジも岩も固くて楽しなかつた。我々は取付から計五十八本の五十メートルロープをのばした。その三分の二はIV<sup>-</sup>、V<sup>+</sup>のグレードであらう。

しかし、釣りのがした魚は大きいというが、ゴーリー・シャンカールもまたしかりである。チャンスを作つてもう一度すつきりしたスタイルで決めてみたい。

高所順応について 全メンバー中六人が高所登山は初めてなので、上部キャンプへのアップは二回以上の荷あげの後と基本的に考へていた。だが、比較的調子の良い富田、飯浜、橋本などは初めての高度にいきなりアップして泊つたりしたが、問題なく動けた。少量だが酒も第二キャンプまでは上げた。調子の悪い者は飲みながらなかつたし、良いストレスの解消になつた。

天候について 三月二十九日のベース・キャンプ入りから五月二十日の登攀終了までの五十二日間の約三分の二の三十四日間雪に降

られた。そのうち二十日間は大雪で行動不能を強いられた。私の六回のヒマラヤの経験の中でも大雪の印象が強い。風も強い場所の印象がある。

装備 固定用ロープは四三〇〇メートル持っていたが、ほとんど使用した。頂上まで行けたとしてもびつたりであつたらう。

ピトンはコの字形のアンクルが良く岩にも、氷にも効いた。フレインズやヘセントリックなどを持っていなかったのは失敗であつた。

ウェアは今回ダンロップ社の協力で、岩壁で動きやすいチャケットとオウヴァロールズを作つてもらつた。ゴア・テックスを使用して全天候行動できて大変良かった。

荷あげ 荷あげは第一キャンプまではカートン・ボックス、壁に入つたらハイビー袋に平均十キログラムになるように食糧とガス・ボンベ、ロール・ペーパーなどを入れ上げた。袋の大きさはルックサックにすっぽり入るようにカトマンドゥで縫製させた。

おわりに 今回の登山をふり返つてみると、ゴーリー・シャンカールに対する我々の力量不足があつたようだ。確かに二村の事故によつて登攀が中断されたり、メンバーが減つたのではあるが、登攀の終りになって気力が落ちてしまつたのは今思い返してもくやしさが残る。今一度、複雑になつてしまつた登山をシンプルなものにして、再挑戦の準備を進めている。

#### △記録概要▽

隊の名称 イエティ同人東京ヒマラヤ登山隊ゴーリー・シャンカール

一九八三  
一九八三年三月～五月  
活動期間  
ゴーリー・シャンカル(七一三四) 西壁からの全員登頂

隊の編成

隊長 富田雅昭(26)、隊員 西ヶ谷一志(20)、木内 聡(29)、溝口宏行(27)、飯浜 隆(30)、橋本 覚(27)、倉岡裕之(21)、二村秀広(26)、高橋信秀(39)

行動概要

三月二十九日、七九年のアメリカ隊よりも、大雪のため一〇〇〇m低い三九〇〇mにベース・キャンを設けた。  
四月四日第一キャンプを四九五〇m、十二日第二キャンプ五二〇〇m、二十一日第三キャンプ五四〇〇m、とキャンプを進め、五月一日には第四キャンプ六四〇〇mを建設した。しかし六日、第三キャンプにいた二村隊員に落石が当たり、五隊員で三日間かけてベース・キャンプに収容した。この事故のため時間を費し、悪天候も重なり、結局時間切れと食糧切れのため五月二十二日約七〇〇mで登頂を断念した。

## ナンガ・パルバート西面ディアミール壁登頂

高塚武由

一九八二年二月富山県山岳連盟の総会でナンガ・パルバート登山を三十五周年事業の一環として決まり、パキスタン観光省に一九八二年の偵察隊と一九八三年本隊の正式申請を出した。

一九八二年七月十六日ナンガ・パルバート偵察のため、高塚隊長以下二名が成田空港を出発する。本隊の登る時期となるべく同じ頃にとこの日にする。パキスタン航空成田発、北京経由にてパキスタンのラワルピンディに着く。翌日観光省へ行きさっそく一九八三年のナンガ・パルバートの登山状況を尋ねる。明年は八十隊の申請があり、そのうち日本からの申請は三隊である。富山隊については最優先に扱っているので安心しろとのこと、トレッキングの申請も手早くやってくれる。今年からトレッキングは六〇〇〇名まで登ってもよいことになっているが、ガイドを雇わなければ許可をもらえない。知人のアシニラフ・アマンかナジール・サビール

に相談すればいいのだが、彼らはすでに仕事で山に入っている。ホテルのマネージャーに頼み、トレッキングの許可をとる。ラワルピンディに着いて五日目にキャラヴァンをスタート出来るとは信じられない。

ラワルピンディの町は暑い日で摂氏四十五度〜五十度ぐらいまで気温があがり早く入山することが出来て大変うれし。小型マイクロバスをチャーターしカラコルム・ハイウェイをギルギットに向けて走る。約十二時間程でブナール橋に着く。ガイドをふくめ四人の隊で八人のポーターを雇いベース・キャンプ予定地へと出発。K2登山隊でハイ・ポーターとして雇われていたポーターがいて色々世話をしてくれる。四日間のキャラヴァンでディアミール氷河上四三八〇名のベース・キャンプ地に着く。島田、川尻両隊員は高山病でダウン。約十日間のベース・キャンプ生活で第一キャンプ予定地



より上部の五八〇〇の地点まで登りルートの写真撮影やその他の調査を行い帰国する。

ルートも確実なものをみつけ、一九八三年本隊はまちがいなく成功と確信を得た。一九八二年十一月富山県置県百年事業に正式に決定する。

一九八三年正月には富士山へ行き高所順応と技術訓練を行い。また、心のふれあいを深め、よりいっそう強いチーム・ワークを作り頑張った。

私は先発隊としてパキスタン入りした。日本から送った荷物はすでに陸揚げされているはずなのにまだ揚がっていない。聞くと、二週間程前から港湾ストライキで船は沖で停泊しているとのこと、びっくりする。登山隊の荷物は無税で通関出来るので手続きをすませる。そして、パキスタンの日本大使館へ行き、事情をつたえ協力をお願いする。ストライキが解除され荷物を通関して、カラチからラワルピンディのミセス・デビス・ホテルへ着いたのは五月二十五日夕方であった。荷物が手もとに届きホッとす。

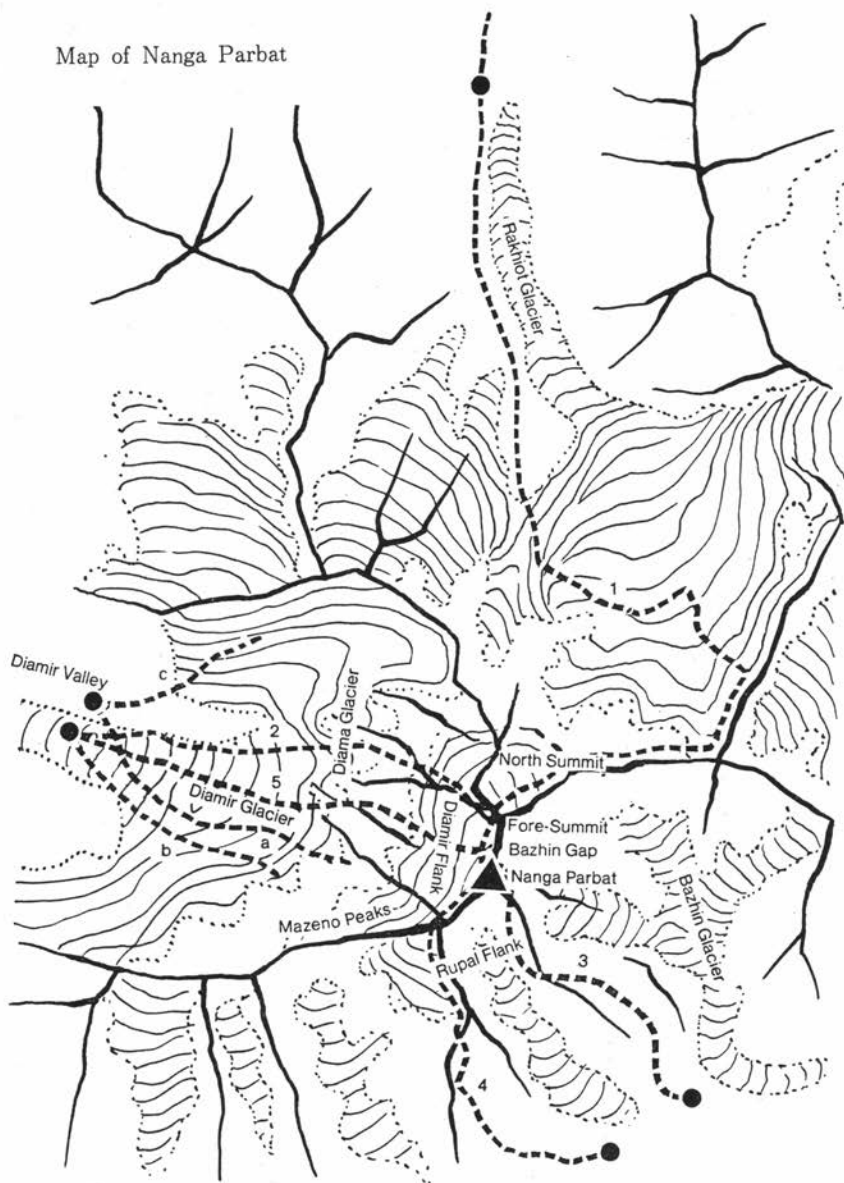
パキスタン観光省から私たちへ許可されている登山期間は六月一日から六十日間とされ、延長期間は二週間となっている。従ってキヤラヴァンは六月一日からとなる。現地での食糧や装備の調達をいそがなければならぬ。五月二十七日夜、後発隊ラワルピンディに着き全員の顔がそろった。半月ぶりの顔合せである。荷をほどきビールで乾杯、久しぶりの酒で気持が良い。パキスタンは宗教的にアルコールは禁止なので、人前では飲むことは出来ず、ホテルの部屋で静かに飲む。

六月一日ラワルピンディからブナールへ向う。六月二日ブナールからディアミール谷、ディアミール氷河に向って本格的なキヤラヴァン開始。今回は昨年の経験を生かして、ベース・キャンプまで一週間かけて登ることにする。最初の体ならしをうまくしなければ、後半の行動に影響が出るからである。高所順応は個人差があるのでそれをうまくやりながら行動する。

六月六日全員ディアミール氷河上四四〇〇のベース・キャンプに集合する。ベース・キャンプにはまだ雪があり、厳しい冬の状態である。下の村から丸太を担ぎ上げ小屋掛けをする。集会所と食堂を兼ねて二間×四間のものを一軒とし、石積みした飲事場を一ヶ所、水は伏流水がすぐ近くに流れている。なによりもベース・キャンプが土の上に張れるのがうれしい。ベース・キャンプからはナンガ・バルバートの全貌が見え、ルート——一九六二年ドイツのキンズホーファーが登った——もはっきり確認出来すばらしい場所だ。今回は上部キャンプを四ヶ所設けて頂上をめざすことになる。六月七日三名が第一キャンプへのルート偵察に出る。ベース・キャンプから第一キャンプまでの難所は氷河のセラック帯の通過で、一番問題になる所だ。第一キャンプには一六〇〇<sup>kg</sup>の物資を上げなければならぬので安全なルートを確保しスピーディに行うことが大事である。その間もベース・キャンプでは、荷物の整理やキャンプ地の整備をし、快適なキャンプ生活が出来る様に、隊員たちは頑張る。

六月十一日ルートが決定、第一キャンプも決まり十二日から荷あげが始る。初めの頃は体の調子が悪く第一キャンプへの荷あげに苦

Map of Nanga Parbat



Nanga Parbat with the various climbing routes : 1 Rakhio Face, Buhl-Route 1953; 2 Diamir Face, Kinshofer-Route 1962 and Japanese 1983; 3 Rupal Face, Direttissima 1970; 4 Rupal Face, Schell-Route 1976; 5 Diamir Face, Messner-Solo Route 1978; a, b, c Reconnaissances by Mummery and Aufschnaiter.

勞する。わずか十<sup>分</sup>の荷だが、呼吸が乱れスピードが上がらない。今回の登山には班別リーダー・システムをとり、酒井、尾島、谷口の三人を各班のリーダーとし、一班三名としてローテーションをくみキャンプをのびしながら頂上をねらう作戦である。

十九日ようやく酒井班が第一キャンプ五二一〇<sup>呎</sup>へ入り第二キャンプへのルート作業をする。天候が悪く第一キャンプ入りが遅れたものの五張のテントを張る。ローテーションを繰返し第一キャンプへの荷あげと第二キャンプへのルート作業をし、二十九日ようやく完了。第一キャンプから第二キャンプまでの高度差が約一〇〇〇<sup>呎</sup>あり苦勞する。ナンガ・バルバート登頂への成功、不成功が決まるのは第一キャンプから第二キャンプまでのルート作りと、酸素や食糧、装備など約九〇〇<sup>ポンド</sup>の物質の荷あげと「驚の巢」とよばれる垂直の岩壁一五〇<sup>呎</sup>の突破がポイントになる。その第一段階として安全なルートが確保され、明るい見通しがついた。この頃になると二回目の高所障害にやられ増々行動がにぶくなる。全隊員総力をあげての行動になる。

七月八日谷口班が六二六〇<sup>呎</sup>の第二キャンプ入りし、上部へのルート作業を始める。第二キャンプにはテント二張り、青氷を削ったテント場で両側が切れ落ちた狭い場所だ。生活条件も段々悪くなる。第二キャンプから第三キャンプまでは高度差約六〇〇<sup>呎</sup>で平均斜度四十〜四十五度の雪と氷のミックスマス壁である。第三キャンプへの荷あげ量は五七〇<sup>ポンド</sup>。七月十一日高度六八五〇<sup>呎</sup>の第三キャンプへのルートが完了し、明日から上部への荷あげ開始という時に、風雪で三日間の沈殿があり予定の行動がとれない(後でわかったこ

とだが、この時福岡隊が雪崩で事故をおこしている)。

この頃になると、体の調子の悪い隊員が多く出て他の隊員の負担がいっそう大きくなり、あげくにハイ・ポーターが約束の第三キャンプまでの荷あげをやらす、ベース・キャンプへ下つてしまった。

なんとか頑張り十八日第三キャンプ(高塚、中西、佐伯(成))の三人が入り、第四キャンプのルート作業をする。第三キャンプから第四キャンプまでは高度差約五〇〇<sup>呎</sup>で雪崩のおきそうな雪壁をトラヴァースしてプラトリーへぬける。ここがこのルートのポイントだ。

二十二日高度七三八〇<sup>呎</sup>の第四キャンプまでのルートが完了しキャンプを建設した。予定では第三キャンプでは睡眠中、酸素を吸うことになっていたが、予定量の酸素が上がらず吸わなかった。また、第四キャンプへは約二〇〇<sup>ポンド</sup>の荷物を上げなければならなかったのだが、これも一〇〇<sup>ポンド</sup>に減らさなければならず、頂上アタックは厳しいものになる。

二十三日夕方第一次アタック隊の谷口、中西、佐伯(成)の三名が第四キャンプに入った。二十四日早朝三時にアタック隊三名が第四キャンプを出発。満天の星空のもと前日のトレイルがうすうすと残っており、そのトレイル沿いに登る。上部のバツイン・ギャップに着く頃にはガスが始め頂上ルートがわからなくなる。風がなくホワイト・アウトの状態になり、しばらくガスの晴れるのを待つがなかなか晴れてくれず、一たん第四キャンプに下ることにする。第四キャンプに着いたのが午後四時頃だった。第一回は失敗に終わった。

二十七日二回目のアタックを谷口、中西両隊員で行うが、これも

風雪で再びバツイン・ギャンプで引き返す。二十九日多賀谷、佐伯(成)隊員のサポートで七八五〇<sup>ポ</sup>に仮の第五キャンプを作り、翌三十日三回目のアタックに谷口、中西両隊員が出発する。アタック隊員の疲労が激しくスピードが上がらない。八〇九〇<sup>ポ</sup>の北の肩で日が暮れビヴァーク。夜は風もなく満天の星空で安心してビヴァークが出来そうだ。ベース・キャンプでは焚火をし、トランシーバーでテープ・レコーダーの音楽をながして元気づけ、眠気をさませる。ながい夜がようやくあけはじめベース・キャンプのメンバーもホッとす。あけはじめると同時にアタック隊は行動を開始、三十一日早朝七時五分中西隊員が頂上に立ち、続いて谷口隊員が頂上に立つ。ベース・キャンプから朝日に照らされた二人の影がくつきりと見える。双眼鏡ではっきりと確認した。

ベース・キャンプを建設してから五十六日目でようやく成功したものである。酸素は第四キャンプから上は使う予定であったが、ポンスベの重さをさらって睡眠用のみ用いられた。

日本人としては、ナンガ・バルバートの頂上は初めてのものである。

#### △記録概要▽

隊の名称 富山県山岳連盟ナンガ・バルバート登山隊

登山期間 一九八三年六月～八月

目的 ナンガ・バルバート(八二二六<sup>ポ</sup>)西面ディアミール側

からの登頂

隊の編成 隊長Ⅱ木戸繁良(48)、副隊長Ⅱ高塚武由(41)、登攀隊長

#### 行動概要

Ⅱ佐伯尚幸(43)、隊員Ⅱ尾島健誠(36)、伊藤隆夫(35)、谷口 守(34)、酒井秀光(34)、多賀谷 治(28)、島田俊之(28)、川尻知幸(26)、中西紀夫(25)、佐伯成司(26)、佐伯賢輔(24)、医師Ⅱ田辺隆一(31)

六月八日ディアミール氷河上四四〇〇<sup>ポ</sup>にベース・キャンプ設営、一九六二年ドイツのキンスホーフアー・ルートに登ることにする。十九日第一キャンプ(五二二〇<sup>ポ</sup>)設営。七月八日第二キャンプ(六二六〇<sup>ポ</sup>)設営。十八日第三キャンプ(六八五〇<sup>ポ</sup>)設営。二十四日谷口、中西、佐伯(成)の第一次アタック隊が午前三時、頂上に向ったが、悪天候のためバツイン・ギャンプで断念(七八〇〇<sup>ポ</sup>)、二十七日第二次アタックは谷口、中西で再びバツイン・ギャンプまで登ったが断念。二十九日多賀谷、佐伯(成)のサポートで仮第五キャンプ(七八五〇<sup>ポ</sup>)建設。三十日谷口、中西の二人は三たび頂上に向い、八〇九〇<sup>ポ</sup>の北の肩でビヴァーク。三十一日午前七時五分登頂。

#### 記録発表

富山岳連登山隊 ナンガバルバート登頂 岳人 四三七号 二十五―二十八頁 一九八三

「魔の山」ナンガ・バルバートの栄光と悲劇―日本人初登頂をめざした三隊の記録から 山と溪谷 五六五号 三十一―三十五頁 一九八三

マッキンリー南壁アルパイン・スタイル

——アメリカン・ダイレクト——

私はモン・ブランの頂きに立っていた——七月の初め、モン・ブランの山は、まだ雪が多く残り、イタリア側からの登攀は、思わぬ苦戦をしいられた——。先程まで私たちを震えあがらせた雷雲の中心も遠く東へ去り、四八〇七呎の頂上は穏やかな雲に包まれて、私たちの視界を厚く遮っている。ロープをたたみ、ルックサックの上に腰をおろし、私たちは言葉もなく全霊を傾けた時にのみ感ずることが出来る快い余韻に浸り、各々の思いへと深く沈み込み始めていた。「あの時もこんな感じだった……」今日のようにには柔らかな雲に抱かれてはいなかったけれど、もっと寒く、風も強かったけれど、山がとても優しく感じられたのはあの日も同じだった。山が私の身体の一部となり、私が山に同化して、私が雲になり風となり、それはある種の至福といったようなものを、私にもたらしてくれたものだった……。

私がマッキンリーの頂きにいたのは、つい二週間前のことであつた。この短かい時の流れの中で地球を巡り、今ここに自分があることも信じられなくて、私は今もマッキンリーの頂上にいるような錯覚を覚えていた。

私たちの登山は随分と遅い時期にスタートした。私たちが日本を発つたのが五月二十三日、その三ヶ月程前、マッキンリー国立公園へ提出する登山の登録書のメ切が、目前にせまっていたような頃であつた。そして私たちの登山は一本の電話から始つたのだ。「竹内、マッキンリーどうだい」「いいね」唯それだけのこと、でも、その短かい会話の中には、私たちがこれから登るであろうルートも、登り方も、この山行に対する姿勢自体の暗黙の了解といったものがすでに出来上つていた気もする。

パートナーの竹内孝一は私の所属している社会人山岳会の仲間で

和田昌平

ある。彼と私はもう八年程のつき合いで、多くの山行の中からお互いの良いところ、悪いところを見尽している。彼は過去に、ヨーロッパ・アルプスの数多くのルートに登り、ヒマラヤのカンテガへの遠征も経験し、夏・冬と国内での登攀も数多い。体こそ小さいが、その山のセンス、体力、気力はずば抜けたものがある。私は常々彼とは大きな登攀を試みたいと思っていたのだが、やっと今回、あてのなかったこの希望も実現をみた訳である。まったく私には出来すぎた。パートナーであった。

さて、それからの準備は書類を提出してしまつてからは、いたつて、ノンビリと進んだ。「万事に何とかなるであろう」が私たちの合言葉、登山地の情報に詳しい旅行社の人からも「こんな手のかからない登山隊は珍しい」とお墨付？ をもらつて、日本を後にしたのは初夏という感じのする、暖かい五月末のことであつた。

アンカレッジではジャクソン・キム氏にお世話になり、早々手続や買物をすませ、登山基地のタルキートナの町へアラスカ鉄道で、タルキートナからランディング・ポイントへ軽飛行機で、私たちの旅は快調に進んだ。下手をすれば、悪天にタルキートナで、数日待ちぼうけを食わさせられることもあるそうだから、日数に余裕のない私たちには最高のスタートといえよう。日本を出発してから三日目には、私たちは標高二一五〇呎のランディング・ポイントに降立つことが出来た。まさに都会から山の中へ放り込まれたとはこのことである。一寸違和感のある金髪の美人フランシスが私たちを優しく迎えてくれる。ランディング・ポイントはマッキンリーの西方を流れる長大なカヒルトナ氷河の支流、南東フォーク上にある氷河の上

の飛行場である。ここからは、その日は雲に隠れていたが、遠くマッキンリーの南壁も正面から望める。また、ハンター、フォラカー私が常々写真でため息をついていた名峰が、一寸登つてみたくなる程の位置にひかえて、私は何か悪い夢を見そうな感じになつてしまつた。

ところで、今回の私たちの登山は二段構えで計画が組まれていた。登攀日数は約二十日間、その前半三分の一をウエスト・パットレスの登攀に当て、若干の休息の後に南壁をアタックするというものである。この前半は、体のコンディションを調えることが目的で、別に頂上へ行けなくとも良いが、五〇〇〇呎のラインを越えて、高度には慣れておきたいとは考えていた。日本にいる時、二人とも必ずしも心身ともに最高の状態であつた訳ではない。そのためにも長い距離を歩いて、山の雰囲気慣れ、山のカンをと戻すことは大事である。ぜひとも、この前半のトレーニング山行は行なつておいた方が良いと思つていた。

実際行なつてみて、これは有効であつたと思う。私も竹内も、高度に対しては、ある程度ヒマラヤの経験から、少しは自信がある。この時はウエスト・パットレスを順調に進み、五日もあれば頂上往復だ、などと最初はうそぶいていたのだが、約四三〇〇呎の大プラトーで、よくしたもので、私たちはまる三日間猛吹雪の中にとじ込められてしまった。毎日、二時間毎に貧弱なピヴァーク・テントは埋り、それを掘り起す。とうとう我慢しきれず、吹雪の中、悲惨な雪洞掘りとあいなつた。風は荒れ狂い、うなり声をあげて、ウエスト・パットレスを激しく叩き、寒気は骨をも凍らせる程身にしみた。

South Face of Mount McKinley

Left : Cassin Ridge

Right : South Face Direct



おまけに食糧も切れてしまう。南壁でこのような吹雪につかまったら、まず致命的だなと少々深刻にさせられる程に強烈だった。四日目、ようやくおさまり、私たちは、ほうほうの体でランディング・ポイントまで下った訳だが、少し甘く見過ぎたな、とは二人の一致した感想。

しかし、おかげで、つまらぬ自信も消え、体もしまり、山の坎も戻り、満足がいく程ではなかったが、そこその高度に対する順応も出来たようだ。これらの経験が、いま振り返ると、後の山行に大きく役立っている。速攻は日本での山行での一線上で考えるときも、現地での異なる自然環境に順応することによって初めて有効になる。わかつてはいたが、あらためてその意味の重要性を身体で再確認させてもらった訳だ。

その後、少し天気が崩れ、数日、私たちはランディング・ポイントで無為の日々を過ごした。上部は、そう悪くはないのであるが、やはり厚い雲と降雪があると少し出にくい。六月五日、やっと待ちに待った好天が訪れる。トレイルがしっかりとついたカヒルトナ氷河を一時時間も登ると本流に東より支流が出合う。これが南壁への取付へ向う東フォーク・カヒルトナ氷河である。大勢のウエスト・パットレスを登る人々で賑う本流とはうって変わり、東フォークには一本のトレイルもなく、わずかに途中までの竹ポールが唯一の人間臭、それも、いつからか消え失せ、私たちは時々落ちるブロック以外、ジーンと耳をこするような静寂の中で、シュツ、シュツとスキークを黙々と滑らし続ける。いつしか天気も崩れ、眼前に望める南壁も、その上半部を不気味に隠してしまっていた。クレヴァス帯を抜

け、カヒルトナ・ノッチ下(約三一〇〇呎)に着いたのは、ランディング・ポイントから十時間後のことであった。一休みの後、ランディング・ポイントのフランシスへ交信を試みる。ランディング・ポイントから直線的に遮る物のない私たちの現在地に彼女の声が元気に飛んできた。開口一番「天気は?」「少し崩れる」「明日は?」「はっきりしない」……やがて暮れきらない夜を迎え、寒さがジンジンとしてみてる。私と竹内はビヴァーク・テントをかぶり今後の行動についてじっくりと話し合った。重苦しい雰囲気の中で「ここはひとまず下ろう」と言い出したのは私の方からであった。

竹内はと言えば、今一つ納得出来ない様子で、じっと考え込んでいる。サラサラと雪がビヴァーク・テントの上を流れていった。数時間たち、降雪も激しくなり出した頃、竹内もどうやらあきらめて下ることに同意をしてくれる。私たちがいくらかの装備、食糧をデポし、下手なスキーで転がるように下降を開始したのは、もう大部夜も遅くなってからのことであった。ランディング・ポイントに着いたのは翌朝の二時、私たちは疲れきってテントに転がり込み、あつという間に寝入ってしまう。こんな訳で、まず第一回目のアタックは偵察と荷あげ行に終わってしまった。

その日の昼、目を覚まして驚いた。何といまだかつてない程、きれいに晴れわたっているではないか、すぐにも出発をしたいと思っても、昨日の疲れが身体に重く残り、私たちには寝袋に再度もぐり、早く疲労をとることしかかな術はなかった。私たちがようやく出発の用意を始めたのは、その日の夕方四時頃、今日は意地でも夜つびで歩きとらすことにする。アンカレッジでたっぷり買った脂



身ばかりのペーコンを、まさにガツガツと食らい、たつぷりと栄養を補給する。満腹するとまた登攀意欲も自ら湧いてきて、やるかたない憤懣もおさまってきた。今回は荷物も少ないのでカヒルトナ・ノッチまでは楽に行けそうだ。登り終ってから帰りにスキーを回収すべく東フォーク入口付近にそれをデポ、夜の寒気に締った氷河上を歩いて行くことにした。クレヴァス帯では、先に歩く私は大丈夫なのに、竹内ばかりが数回腰まで落込んで大笑い、昨日十時間の道も今日は七時間位で到着した。

六月七日、二時間程ビヴァーク・テントをかぶり仮眠、早朝私たちはいよいよ、アメリカン・ダイレクト・ルートの取付へ向って出発した。天気は昨日に続き文句なし、今度は嫌がる理由は何もない。唯、重い荷とひざ上のラッセルには閉口、スキーを置いてきたことを恨めしく思った。間近に見える取付も、歩けど歩けどなかなか近づくかない。私たちが取付へ着いた時は、すでに午後の三時をまわっていた。ここはもう東フォークの最奥といつてもよい所である。頭上にはギラギラとたたった緑っぽい氷壁が、これからの私たちのルートを南壁に導いていた。不思議に威圧は感じず、この時から、すでに「やれる」と確信しきっていた気がする。好天も何故か続きそうに思えたのは、その時の過剰な自信からであろうか……。急な雪壁を登り切る。取付は例の通り、ベルクシュルントの乗越しから始った。長大なクローワールの末端は、思ったより口を空けてはいない。いくらかの迂回で容易に弱点を見出すことが出来た。ベルクシュルントの上からは、いよいよ氷壁となるが、まだ下部の方は雪が薄く付着し、かえって登りづらい。おまけに、ふくらはぎは重

荷と久し振りの氷壁登攀で悲鳴をあげている。雪を削り、アイス・ピトンを打込む作業をくり返し、その日は七ピッチズで絶好のビヴァーク・サイトを露岩の下に見出し、長い登攀の一日目を終えることにした。ここ数日、白夜のせいか昼も夜もあつたものでない。明日からは規則正しくやらねば体もたないだろう。どうもついオーバークになりがちのようだ。その日は快適なビヴァーク・サイトでぐっすり眠りをむさぼることが出来た。

六月八日、今日も好天で朝を迎えた。今日は三十ピッチズ近くの氷壁登攀に終始する。ここがいわゆる下部の要所で、雪崩の通り道となる所だ。過去多くのパーティがこのルートを試み、退却を強いられているのは、この氷壁帯の中で危険性が大きくものをいっている。技術的にさほど難しくはなく、むしろ氷の質、傾斜(約六十度位か)は快適でさえあるのだが……。多くのパーティを退けた自然の猛威がこの壁に隠されていると思うと、私たちも何故か背筋が凍りつく、サラサラと流れるチリ雪崩にも胸がキュンと締つけられるようだ。私たちは雪崩をさけるように右側の岩壁沿いに登っていった。その日は下部の氷壁帯を登り切り、ビヴァーク・サイトを見出せず、水を切つて座りながらのビヴァークとなった。一つの難所を無事越したことに、若干ホッとしたものの、もう後はないと思うと複雑な気分、いつしか、ハンター、フォオカカーが暮れきらぬ夜の中で、幻想的なシルエットを見せてくれる。そして、真下に臨める東フォーク・カヒルトナ氷河が私たちを何故かセンチメンタルにさせる。

翌日の朝は、陽が壁に当り、私たちを暖め溶かしてくれるまでは

動く気もしなかった。一睡も出来はしなかった。そのため、出発は十時近くになる。しばらく登り出してから小雪が降り出したものの、天候はおおむね良好、私たちはアメリカン・ダイレクトの尾根へと入っていく(ダグ・スコットたちのルートはここいらで分岐している)。尾根とは言っても、だだっ広くて、自分たちの位置はまったくわからない。時々、雲の中からかすかにのぞく上部岩壁が私たちの道しるべと言ったところである。簡単な氷壁、ミックス帯がうんざりする程続く。いたって平穏な中、昨日の不眠からアクビを連発、のんびりとパートナーの確実で自信に満ちた登攀を鑑賞させて頂く。自分の望み、パートナーの望みをお互いに賭す。パートナーシップのだいご味だ。私はペア登攀のこの人間関係が大好きである。やがて視界も開け、コンティニューアスでミックス帯をつめると、上部岩壁の直下へ到着、大きな露岩の下を掘りビヴァーク・サイトをつくる。雪を掘ると、数年前ダイレクトを登ったトウベキ・クラブのフィックス・ロープやらがごそそ出てきた。少し早いが上部には良いビヴァーク・サイトが望めそうもないので、今日はここでビヴァークとする。トランシーパーを開き、チャンネルをいじっていると日本のトラック同士の交信が入ってきてビックリ。こういう方面には詳しい竹内先生のご高説を拝聴する。

六月十日、今日も良い天気だ。私たちは本当にうまく好天のタイミングに入り込めたようだ。それも、こここそは、と思う時にパツチリと朝晴れわたっている。おかげで気分良く出発出来るというものだ。この岩壁帯さえ今日抜けられれば、後は大して困難な所もなはずだ。いわば今日のルートが上部の要所といったところ、好天

の中で、グッと成功が身近かに感じられるのは言うまでもない。快適な雪壁を登り切り、顕著に分かれた左・右のクローワール(右が大きい)の左へと入っていく。最初のピッチはIV級プラス位か、ルックサックを置いて空身で攀る。その後も数ピッチズの難しくはないが息の抜けない岩登りで、右側よりセリ上ってくる雪のつまったクローワールへ入っていく。ここからは不安定なフカフカ雪で登りにくい。デリケートな雪の処理にちよっと緊張をした。思ったより時間を費やし、今日中に頂上という願いも、どうも実現が遠のいてきた。クローワールを抜け出るとII・III級程度の開けた雪壁となる。しかし依然、これも大クローワールの一部で、上部には第二の障壁がそそり立っている。基部から約八十呎、これも空身で右側の方が脆く、下の岩壁よりも難しく感じられた。久し振りの全身運動にグッタリとした疲労を覚える。ここを抜け切るとクローワールは抜がって、上部はやがて稜へと消えていく。ここからは別段、問題はないのだが、私たちはルート・ファインディングを誤り、若干の迂回をしいられた。今日は朝から何も口にしていない。いつの間にか陽も隠れ、寒さがひしひしと忍びよる。飢えと疲れに私たちが足を進める理由は義務感以外の何ものでもなかった。やがて雪がチラチラと舞い始めた頃、私たちはクローワールを抜け、安定した稜へと飛び出した。その夜は久し振りに少し吹雪いた。今日はフランシスと交信すらする気になれなかった。

六月十一日、重苦しい雲の中、私たちは自分自身の位置を理解してはいなかったが、明らかに頂上が近いことは周りの壁の様子から



▲  
マッキンリー南壁下部氷壁帯を登る。氷壁の傾斜もだんだんきつくなってくる：Climbing an ice wall which steepened on the lower part of the South Face of MT. MCKINLEY. Photo by Shohei Wada



▶  
カヒルトナ氷河からのマッキンリー南壁：MT. MCKINLEY's South Face seen from Kahiltna Glacier. Photo by Shohei Wada



▲ マッキンリー南壁上部岩壁帯の下部を登る竹内隊員：K. Takeuchi leading the upper rock band on the South Face of MT. MCKINLEY. *Photo by Shohei Wada*

▼ マッキンリー頂上に立つ竹内隊員：K. Takeuchi on the summit of MT. MCKINLEY. *Photo by Shohei Wada*



感じられる。風はやんだが前日からの雪はとめどなく降りつづいてきた。岩を攀り、クローワールをつめ、ミックス帯を登る。やがて空も明るくなり、上空が抜けていることをそれは示していた。やがて雪は小降りになり、雲は流れる。そしてついに上方に雪庇を望む所まで私たちは到達した。雪庇の下へは急傾斜の雪壁が数ピッチズ、雪庇は思ったほど張出してはおらず、何なく弱点を見出し、リードしていた竹内が、やがて切れ目を乗越え消えていった。長い数秒が過ぎ、やがて彼が上から、のぞくように顔を出し、下で確保をしていた私の写真を撮ってくれる。明かにそこはサウス・バットレスの稜線らしかった。早く上げてくれと思いつながら、私は思い切り手を広げてポーズをとる。稜線へ飛出すと風と雲が強く私の顔を叩き、チラチラと上空には青空も顔を出す。私たちは雲の切れ目に立っているらしい。私たちは、いつも行なっているように無言でロープを素早く巻き、ハーネスをはずし、ルックサックにしまい込む。やがて羽毛服を着込んで、寒気に追立てられるように頂上を目指して、休む間もなく歩き始めることにする。「まだ終ってはいない」と自らに言聞かせながらセイヤー側の急斜面の氷雪壁を巻き、ナイフ・リッジを慎重に辿り、どの位歩いたであろうか、なかなか姿を見せぬ頂上に私たちの歩調も大部乱れがちになっていた。高所の障害が意識出来る。視野が狭くなり、距離感が薄れ、何か夢見心地、やがて頂上らしきものがあらわれたが、今まで先頭で来た私には、何か、それが、ひどく遠くかなたに、まだ一時間も歩かねばならぬように見え、ここで竹内に先に行ってもらおう。それが何と十分も歩いたのだろうか、遠くのはずのその頂上私たちの足下になつてい

た。貧弱な竹のポールが数本立っているだけの小さな雪のピーク、もう周りには登る所はどこにもない。喜びがジーンとこみ上げ、竹内とガッチリと握手をかわす。言葉をお互いに発するのだが、それつが二人ともまわらなくて、何を言っているのかまるで解らない。何たる喜劇、私は自らをかえりみず、彼をおもいきりからかった。夕方の頂上、人は何処にも見出せなかった。いつもは賑わっているであろうこの頂も、今日は私たちのために特別席を設けていてくれたようである。厚い雲のじゅうたんが、いつか足下に広がり、抜けるような青空と純白の頂、危険は遠のき、夕暮の中、山は優しく感じられ、私たちを柔らかに受入れてくれている。そんな気がしていた。

#### △記録概要▽

隊の名称 山学同志会アラスカ登山隊一九八三

活動期間 一九八三年五月～六月

目的 マッキンリー南壁アメリカン・ダイレクト・ルートのア

ルパイン・スタイル・クライミング

隊の構成 隊長Ⅱ和田昌年(24)、隊員Ⅱ竹内孝一(28)

行動概要 五月二十五日カヒルトナ氷河にベース・キャンプ(二一

五〇〇)設営。二十六日～六月一日までマッキンリーの

ウエスト・バットレスを四三〇〇まで試登、高所順応

トレーニングを行う。五日南壁アメリカン・ダイレクト

一九七六ルートに向うがいったんベース・キャンプに戻

り、六日再びアタック。七日十二時十五分取りつき三八〇

〇でビヴァーク。八日氷壁を抜けて四四〇〇でビヴァ

記録発表

ーク。九日五〇〇<sup>時</sup>でビヴァーク。十日上部岩壁帯の大凹角部を抜け五七〇<sup>時</sup>でビヴァーク。十一日サウス・バットレスに出て午後六時登頂。アルパイン・スタイルによる同ルート第二登。ウエスト・バットレスを下降するが、他の日本隊の事故処理を手伝って十三日ベース・キャンプに戻る。

和田昌平　アメリカン・ダイレクト―マッキンリー南壁  
アルパイン・スタイル　岩と雪　九十八号　六十八〜七十二頁　一九八三



*Andean Flicker*

## 彩られた高峰

——試論・女性登山史ノート——

江 本 嘉 伸

ことしのロサンゼルス五輪では、初種目として「女子マラソン」が注目された。日本でもここ毎年国際大会が開かれているため、すでにおなじみの競技の感があるが、女性がフルマラソン、つまり42・195\*の距離を「走れる」ようになったのは、ほんの最近のことである。

一九六六年のボストン・マラソンで、新婚三か月のロバータ・ピングレイ夫人（二十三才）が号砲と共に物かげから飛び出し、男性ランナーにまぎれて完走したのが、世界で初めての女性マラソン・ランナーの誕生と言われている。翌六七年には二十才の女子学生、キヤサリン・スウィツァーが「K」のイニシャルで参加申し込みをし、制止しようとする役員をふり切つて、男子ランナーに守られ四時間二十分でゴールインした。

結局、「女人禁制」だったボストン・マラソンは七二年の第七十

六回大会から、ついに女性ランナーの参加を公認した。一頁五一の  
の小柄な日系アメリカ人ゴーマン美智子が二時間四十七分十一秒で  
優勝したのは、その二年後の七十八回大会である。

マラソンのような競技の形をとらない登山の世界では、女性たちははるか以前に行動を開始していた。宗教的な意味での「女人禁制」は、現代もなお一部に残っているが、十九世紀初頭のヨーロッパ・アルプスにはじまり、アンデスやヒマラヤに及ぶ女性登山家たちの行動の軌跡は、なかなか幅広い。

しかし、主婦であったり、勤め人であったりする普通の女性たちが、七千呎、八千呎の高峰に女だけで挑むようになったのは、女子マラソンと同じく近年のことである。

女性が初めて八千呎峰の頂上をおとしたのは一九七四年のマナスル（八一九六呎<sup>（編注）</sup>）であり、世界最高峰エヴェレスト（八八四八呎）

に立ったのは翌一九七五年だった。二つとも、日本の隊であったことが、世界に日本女性の山の世界での行動力を印象づけることとなったが、アルプスやヒマラヤでの登山については、欧米の女性たちが先輩である。山で、女性たちがなしてあげてきたことについて、考えてみたい。

ヒマラヤと人の関わりをテーマにフランスで製作されたドキュメンタリー「ヒマラヤ登山史」(日本でも一九八三、八四年の二回放映された)の冒頭に、一人の女性が出てくる。ファニー・パロック・ワークマン。裕福なアメリカ・マサチューセッツ州知事の娘として生まれたワークマン夫人が死後六十年近くを経てテレビに登場したのは、「ヒマラヤへ登った最初の女性」だからである。一八五四年にモン・ブランにおしどり登頂したイギリスのハミルトン夫妻、一八八七年にテッシュホルンの長大なトイフェルス稜を初登攀したママリ夫妻など、登山史には夫婦で困難な山に挑んだ例は少なくないが、ワークマン夫人は、医師であった夫より自分自身がまずヒマラヤへ行きたいという願望を強く持っていたようだ。

夫人は、もともと登山家というよりは冒険好きの旅行者であった。しかも、自転車をこいでどこへでも行くのである。一八九八年、インド南端のコモリン岬からインド亜大陸を自転車で北上(時には一日百四十\*も走り、パンク修理だけで多い日には四十回もしなければならなかった!)、カシミールからラダック、そしてついにはカラコルム峠に達した。ヒマラヤにはじめて踏み入れた夫妻は以後、毎年のようにカラコルムに出かけ、一八九八年から一九一二年にかけて八回の遠征をなしてげている。

テレビ・ドキュメンタリーでは一九〇六年七月二十九日、インド北方スン・クン山群のピナクル・ピーク(六九三二<sup>2)</sup>)に登頂した時のワークマン夫人の写真が紹介された。スカート姿の夫人が下山途中、疲労からガイドに背負われているカット。一見いかにも女性の愛らしさ、ひ弱さを感じさせるが、どうして、夫人はそのような印象とは程遠かったらしい。アメリカに戻れば女権獲得運動の闘士だったという夫人には、カラコルムの氷河の上で「Voices for Women」と大書した紙を手している別の写真がある。旅行やヒマラヤ登山が、女性の主体性を訴える一つの行動表現でもあったことが、そこからうかがえるが、同時にそのテーマは現代に至るまで女性登山家たちのバックボーンの一つとしてなお生き続けているのである。

カラコルムを中心に、ファニー・ワークマンのなしたげた数々の遠征は、男たちの度胆を抜くものだった。

日本で言えば、河口慧海がチベット大蔵経を求めて苦難の旅を重ね、与謝野晶子が「君死にたまふことなかれ」の詩を発表した時代である。日本の山登りの指導的存在とされた日本山岳会ですら、ワークマン夫人がはじめてヒマラヤへはいった当時は誕生していなかったのだ。

女性が初めて七千<sup>3)</sup>峰の頂きに立ったのは、ワークマン夫人のピナクル・ピーク登頂から二十八年後の一九三四年だった。ドイツ生まれのスイス人、ギンター・オスカー・ディーレンフルトを隊長とするカラコルム国際遠征隊で、隊長夫人へティ・ディーレンフルトがシア・カンリ西峰(七三一五<sup>3)</sup>)に初登頂したのである。四年



前やはり国際隊を率いてカンチエンジュンガ（八五九八<sup>（註）</sup>）に挑戦したディーレンフルトは、妻がワークマン夫人の高度記録を破ることを期待していたが、ヘティは見事それにこたえたわけだ。

男性にまじって女性がヒマラヤに行ったケースは、ほかにいくつもあるが、女性だけで登山隊を組んだのは、あのクロード・コーガンが活躍した一九五〇年代になってからである。

一九五五年春、イギリスの「スコットランド女性山岳会」の三女性（ジュガール・ヒマールの奥地にはいって）。インド生まれで、シッキムの山に登ったことのある主婦、モニカ・ジャクソンを隊長に、独身の言語治療士、エリザベス・スターク、最年少の医師、エブリン・カムラスの三人。これが、世界で初めての女性だけのヒマラヤ遠征だった。どちらかと言えば裕福な立場の人が多かったそれまでの女性登山家に比べ、この三人はとくに恵まれた環境にいたわけではない。必要最少限の装備で間にあわせ、シェルパ、ポーターの数もぎりぎりにした。

エブリンを除く二人は有能なサード、ミンマ・ギャルツェンら二人のシェルパと共に六九〇<sup>（編注4）</sup>の無名峰に登り、サードにちなんでギャルツェン・ピークと命名した。「女だけでヒマラヤは無理」と批判もあったこの登山隊がなしたげたのは、女性の耐久力の証明と女性だけでもシェルパやポーターを十分コントロールできるという実績だった。

一九五三年にイギリス隊がエヴェレストに初登頂したことの影響もあったかもしれない。ヒマラヤへ繰り出した女性隊の二番手、三番手もイギリスからだった。一九五六年春、五十三才の主婦、ジョ

イス・ダンシースを隊長とする女性ばかり四人の「アビンガー・ヒマラヤ・エクスペディション隊」が、パンジャブ・ヒマラヤのバラ・シグリー氷河を踏査すると共にキャシードラル・ピーク（六四〇〇<sup>（編注5）</sup>）に初登頂した（アビンガーは、隊長の家の所在地名。ここで準備

の多くの時間をかけたことから、隊長とした）。隊長以下二人は陸路車でインドに行くなど、経費を切りつめての遠征だったが、氷河の測量をしながら周辺の山や峠を登りまくり、画期的な成果をあげた。ところで、女性隊が男性隊に較べると、やや深刻に考えなければならぬことの一つにトイレの問題があるが、ダンシースたちは、登山から帰ったあとの記録の中で、三つの解決法をあげている。第一は、自分は絶対に他人から見えないのだと思ひこむこと、二つ目はキャンプがけし粒のようになるまで遠くへ歩いてゆくこと、三つ目は、平地に小さな窪地を見つけること――。

翌一九五七年、やはりパンジャブ・ヒマラヤをめざしたアン・デービスをはじめとする三人のイギリスの主婦も、車でヒマラヤへ向かい、五七〇〇<sup>（編注6）</sup>の無名峰に初登頂し「ビーヴィー・ギリ（妻たちの峰の意）」と命名した。

最近では、女性の登山行為の中で、イギリス女性がクローズアップされることは少ないが、エヴェレストをはじめヒマラヤのジャイアンツが次々におとされていった一九五〇年代に、このようにイギリスの女性たちはパイオニア的役割を果たしたのである。

女性たちによる初めての八千<sup>（註）</sup>峰への挑戦は、一九五九年秋、フランスのクロード・コーガンを隊長とするチャー・オユー国際女性隊によって実現した。

コーガンは、女性登山史の中でいまなお傑出した存在である。

エヴェレストが登られた一九五三年、五人から成るフランス隊がカシミールの未踏峰、ヌン（七一三五<sup>1</sup>）の登頂に成功した。三十四才のクロード・コーガンは、この時隊員の一人としてスイス人牧師ピエール・ヴィトールと共に頂上に立った。翌五四年には、五二年のスイス・エヴェレスト隊で八五九五<sup>2</sup>にまで迫ったレイモン・ランペールと共にチョー・オユーに遠征、七六〇〇<sup>3</sup>の地点にまで達し、女性の到達高度記録を塗りかえた。五五年にはやはりランペールを隊長とするフランス・スイス合同隊のメンバーとして、ガネット・ヒマール主峰（七四〇六<sup>4</sup>）<sup>〔編注〕</sup>に初登頂している。

アルプスでの数々の登攀のあと一九五一年に夫のジョルジュと共にペルー・アンデスに遠征、ジョルジュの帰国後の急死の悲劇にもめげず、<sup>〔編注〕</sup>五二年にはその遺志をついでアンデスのサルカントイ峰（六三〇〇<sup>5</sup>）に登ったクロード・コーガンである。ヒマラヤで二つの七千<sup>6</sup>処女峰にも立ったとなれば、次の目標を八千<sup>7</sup>にすえたのは、当然だったろう。

フランス、イギリス、スイス、ベルギーからよりすぐりの女性クライマー八人がチョー・オユー隊に参加した。

コーガン夫人にとっても初めての女性隊で、九月中旬、ベース・キャンプを設営してからの登高は順調だった。高所障害の出た者もいたが、隊員たちは固定ロープを張るにもできるだけシエルパの助けを借りないようにした。

九月末には第四キャンプ（七五四三<sup>8</sup>）を設営、コーガンと若くて勇敢なベルギー女性クロード・ストラテン、それにシエル

パのアン・ノルブが第四キャンプ入りしたが、悲劇はこの直後に起きた。天候が悪化し、雪が強く降り出した。雪崩があちこちで発生し、コーガン夫人ら三人は連絡を絶った。第四キャンプが何の痕跡もなく消えていることは十月十日になって、ようやく確認された。女性によるチョー・オユー国際隊は、こうして悲惨な結末を迎えたのである。

一<sup>9</sup>五〇<sup>10</sup>と小柄なクロード・コーガンは、南仏に水着工場を持つ事業家兼デザイナーでもあった。アルプスにはじまり、アンデス、ヒマラヤへ及んだ彼女の足跡は、その後、日本を含む各国の女性たちが引き継ぐことになる。

コーガン夫人たちが、チョー・オユー遠征の準備に奔走していた同じ五九年の七月七日夕、三十三人もの中国人が、中国・新疆ウイグル自治区にあるムズタグ・アタ（七五四六<sup>11</sup>）<sup>〔編注〕</sup>の頂上に立った。うち八人は、後にエヴェレスト登頂者となるパンドゥウ以下の女性で、コーガン夫人の記録（ガネット・ヒマール登頂）を破り、女性としては世界で最も高い山頂に到達したところだった。

「天の半分を支える」という言いまわしで女性を表現する中国では、登山活動についても、女性の地位向上の証明として、あるいは女性の社会的進出を鼓舞する目的から、国家的規模で展開されるのが通例である。

中国で女性の登山活動がはじまったのは、ムズタグ・アタに八人の女性が立つほんの一年前の一九五八年で、女性登山家はわずか五人しかいなかったとされている。それでも七千<sup>12</sup>以上の高峰に多人数に登り得たのは、一つにはその中にパンドゥウを筆頭にチベット

女性が多いからだろう。標高四千前後の高地に住むチベット人たちの高所適応の素晴らしいは、後に外国登山隊が目にあたりにするこ  
とである。

中国女性のみによる最初の登山は二年後の一九六一年、パミール高原にそびえるコングルル・チュウビエ（七五九五<sup>註10</sup>）をめざして組織された。メンバーは隊長の袁揚以下十人。袁揚はじめ大半がムズターグ・アタの登頂者である。三五〇〇<sup>註11</sup>のベース・キャンプから一か月あまりの登攀の末、六月十七日、バンドゥとシーラオの二人のチベット女性が登頂、再び女性登頂記録を書きかえた。

クロード・コーガンが帰らぬ人となり、中国の女性たちが七千<sup>註12</sup>峰にアタックを開始した頃、日本女性がようやくヒマラヤに向けて動き出した。

細川沙多子を隊長とするブッシュ山の会主軸の七人が一九六〇年秋、パンジャブ・ヒマラヤのデオ・ティバ（六〇〇一<sup>註13</sup>）をめざしたのである。ヒマラヤに限って言えば、一九五五年のイギリス隊以来女性隊としては世界で五番目の遠征だった。デオ・ティバは五二年にイギリスのグラーフ夫妻ら三人が初登頂し、五六年にはイギリスの「アビンガー女性隊」の一人、アイリーン・グレゴリーが前述のキャシードラル・ピーク登頂のあとポーターを連れて方向を転じ、第三登を果たしている（第二登は五五年にドイツ青年、ルディ・ロットが二人のポーターと共になしとげた）。

このように女性と縁の深いこの山の第四登―ただし、ポストモンズン期では初めて―に日本女性隊は十月七日成功した。

一九六〇年、日本は、いわゆる「岩戸景気」のさ中であつたが、

日本人はまだ自由に海外へ行けたわけではなかった（海外渡航が自由になったのは一九六四年四月一日以降である）。その時代に登山隊を繰り出すためにはそれなりの大義名分を必要としたが、デオ・ティバの女性たちは、「インド・パンジャブ婦人親善隊」と名乗り、帰途インド亡命中のダライ・ラマ十四世やネール首相と会見するなど実際親善の役割も果たした。

一九六一年には佐藤テル隊長以下五人の女子親善隊がニュー・ジラランドへ出かけ、六六年には女性だけの山岳会エーデルワイス・クラブが坂倉登喜子を隊長にペルー・アンデスへ遠征した。山岳会結成十年を記念してネパール・ヒマラヤのカン・グル（七〇〇九<sup>註14</sup>）に行く予定だったが、ネパール政府の突然の登山禁止措置により、アンデスへ転進したのである。三年後の六九年には同じエーデルワイス・クラブの関田美智子ら三人がボリビア・アンデスに遠征、ワイナ・ポトシ（六〇九四<sup>註15</sup>）の登頂に成功している。

女性登山家の同人組織「ユングフラウ」の佐藤（現姓・遠藤）京子ら三人がヒンドゥ・クシュ山群のイストル・オ・ナール西峰（七二〇〇<sup>註16</sup>）に登頂したのは一九六八年六月二十九日だった。「日本婦人西アジア親善隊」の名でトルコのアララト（五一六五<sup>註17</sup>）、イランのデマバンド（五六〇一<sup>註18</sup>）に登ったあとの挑戦で、日本女性隊として当時の最高記録をうち立てた。

「ユングフラウ」は、一九六五年六月、「女性による自主的な登山の研究と実践」を目的に京都山岳会所属の佐藤の呼びかけで京都周辺の八人の女性が参加して発足した。シルクロードを登り歩いてのイストル・オ・ナール行は七千<sup>註19</sup>以上の高峰を女性たちだけで挑

戦する最初の試みだったが、登頂前後七千メートル地点での二晩のビヴァークに耐え、佐藤らはこの関門を乗り越えたのである。

佐藤たちの成功より一か月あまり早く、日印婦人合同登山隊（日本女性四、インド女性八）が、インド領内パンジャブ・ヒマラヤのカイラス（五六五六メートル）に登頂した。日本側リーダーは、宮崎（現姓・久野）英子。カイラスには登ったものの、別の無名峰への登攀途中、雪崩が発生、シエルパー一人が死亡した。日印女性の合同登山は日本山岳会とインド登山財団の間でまとまったものだが、初めての国際交流体験は、登山観の違い、シエルパーへの対し方の違いなど多くの教訓をもたらした。（編注14）

今井通子が加藤滝男・保男兄弟らと一か月がかりでアイガー北壁を直登した一九六九年夏、日本では宮崎を中心にアンナプルナⅢ峰（七五五五メートル）計画が動き出していた。東京周辺の女性登山家たちが集まって同年四月に発足させた同人組織「女子登攀クラブ」が、計画の推進母体である。このクラブは「女だけのヒマラヤ」を明確な目標にした点で注目された。

ネパール政府が女性隊に登山許可を出したのはこの時までで一九五九年、クロード・コーガンのチャー・オユー国際隊ただ一つだった（他の女性隊はもっぱらインド、パキスタン領内のヒマラヤに登っていた）。それが女子登攀クラブには、申請後三十七日間で登山許可が出た。女性であることの、強みと言えるかもしれない。

一九七〇年春、医師を含め九人のメンバーから成る「アンナプルナ日本女子登山隊」はカトマンドゥ入り、五月十九日、田部井淳子、平川宏子の二人が二人のシエルパーと共に頂上に立った。隊員選考、

アタッカーの決定にとまらぬあつれきなどメンバーシップの難しさを実感しながら、中国女性隊のコングール・チュビエに次ぐ高度記録を日本の女性たちが達成したのである。

同じ年、ユングフラウの渡部節子は日本山岳会エヴェレスト登山隊のメンバーとしてサウス・コル上部八千メートルに達し、中世古直子、芦谷洋子の二人は日本山岳会東海支部のマカール隊で七千メートルの高所で活躍した。

念願の八千メートル峰攻略は、それから四年後の七四年五月四日、黒石恒を隊長とする日本女性マナスル登山隊によってなすとげられた。

中世古直子、内田昌子、森美枝子の三人が女性として世界で初めて八千メートルの頂に立ったが、二次アタックの鈴木貞子は、第五キャンプに向かったまま行方を絶った。

そして翌七五年春、女子登攀クラブが送り出す日本エヴェレスト女子登山隊の久野英子隊長以下十五人が、世界最高峰を旨ざすのである。

エヴェレストに女性が行くと聞いて、登頂を信じた人は、少なかった。実際、いまでは延べ百五十人以上のサミッターがいるエヴェレストだが、女性隊が挑戦した例はその後は出ていない。

主婦、教師、保母、公務員といったさまざまな立場にある十五人の女性の戦いは、日本を発する前までがむしろ勝負だったと言えるかもしれない。男性と違って、誰に子供を預けて会合にかけつけるか、というような何でもないような日常生活のやりくりが、実に常に重要だった。第二キャンプを雪崩につぶされ、メンバーとシエルパーに負傷者が出たあとも田部井淳子がアン・ツェリンと共に頂上

“Votes For Women”と書いたポスターを手に東カラコルム、6400 mの雪原に立つワークマン夫人、アイス・アックスの長さに注目



▲メンルン・ラでレイモン・ランベール(左)と共に小休止するコーガン夫人、背、左手にエヴェレストが見える



1974年5月4日、マナスルに3人(中世古直子、▶内田昌子、森美枝子)の女性が登頂、世界初の女性8000m峰登頂記録となる



1979年8月、フランス・シャモニーで顔をそろえた3人の女性エヴェレスト登頂者、左から、田部井淳子(日本)、バンドゥ(中国)、ヴァンダ・ルトキエヴィチ(ポーランド): Three women summiters of Everest meet at Chamonix, France in August 1979. Left to right: Junko Tabei, Japanese; Phun Dob, Chinese; and Wanda Rutkiewicz, Polish.  
▼ Photo by Setsuko Kitamura

▲  
1975年5月16日、世界最初の女性エヴェレスト・サミッターになった田部井の登頂の一瞬



に立った(五月十六日だった)原動力は、そうした長い準備を乗り切ってきた気迫だったろう。

日本の女性たちがエヴェレストの山頂ににじり寄っていた四月三十日、ベース・キャンプの裏側にそびえる秀峰ブモ・リ(編注15)(七一四五呎)にフランス女性、クロディーヌ・レスクールが立った。フランス隊の隊長夫人としての参加だったが、この後フランスにもK2ポールランド女性隊に加わったクリスチヌ・ド・ロンベルのように、女性だけのヒマラヤを実践する者が現れる。

七四年のマナスル、七五年のエヴェレストと日本女性のヒマラヤ遠征は、社会への女性進出を象徴する出来事だった。とりわけ国際婦人年と重なった一九七五年のエヴェレスト女性初登頂は、計画段階では考えられなかったような反響を世界にもたらした。女性隊員の多くは実は国際婦人年であることも、それが何であるかも知らなかったのだが。

田部井たちの登頂から十一日後、中国登山協会隊が北東稜からチヨモランマ(エヴェレスト)を登ったことは知られている。一九六〇年以来中国としては二度目のアタックで九人の登頂者の中にチベット女性バンドゥがいた。ムズタグ・アタ、コングール・チュビエの二つの七千呎峰に立ったバンドゥは、高所キャンプで中国共産党への入党式に参加、山頂では心電図の遠隔測定を受けた。「祖国と人民と党のために登りました」―登山の動機を聞かれて、彼女は後にこう答えている。この時のチヨモランマ攻撃では、八二〇〇呎以上の高所にバンドゥのほか六人の女性が到達した。

七五年には、カラコルムでも注目すべき女性の登山が行なわれた。

ポーランドのヴァンダ・ルトキエヴィチら八人の女性隊が七人の男性隊と合同の形で、ガッシャブルム山群にはいったのだ。国際婦人年を意識していた女性隊があえて男女合同隊の形をとったのは「回教地域なので女性だけよりは男性も一緒の方が有利」と判断したためだったという。八月十一日、ヴァンダ・ルトキエヴィチとアリソン・オヌィシキエヴィチは、未踏峰としては世界最高のガッシャブルムIII峰(編注16)(七九五二呎)に登頂、翌十二日には、ハリナ・クリュガー・スイロコムスカ(一九八二年、K2女性隊に参加中、死亡)とアンナ・オコピンスカの二人がガッシャブルムII峰(八〇三五呎)の頂に立った。荷上げを全て自力でがんばるなどポーランド女性の強さを証明した登山だったが、この時のアリソンの夫であり、男性隊の一人としてIII峰に登ったヤヌシュ・オヌィシキエヴィチは八〇年八月に発足したポーランドの自主管理労組「連帯」の報道担当になっ

ていた。ヴァンダ・ルトキエヴィチの名が世界に知られたのは一九七八年十月十六日、西ドイツ・フランス合同隊に参加してエヴェレストに登ったはじめてのヨーロッパ女性になった時だろう。三十五才の技師であるルトキエヴィチは、サウス・コルから誰のサポートも受けず、他の男のメンバーとロープを結ぶこともなしにアタック、頂上に小さなポーランドの旗をはためかせた。

男性たちの間にはいつて登山をする時の女性の立場について、ルトキエヴィチは「皆のマスケットになるか嫌われ者になるか、どちらか」と言っている。男のどんな力も頼らず、自分の力だけで登っていかうとする女性は、うとまれ、反発を買い、やがて嫉妬の対象に

なつてゆく、というのである。それは、女性をマスケットにしたがる男たちと、進んでマスケットになりたがる女たちへの批判であった。登山の主体性という点で、ポーランドの女性登山家は、他の国々の女性をしのぐ激しさ、強さを持っているように見える。それはエヴェレストをはじめまやヒマラヤの冬期登山に一時代を開いたポーランド人の登攀の力量からだけ来るものではないだろう。

アメリカ女性アルレーヌ・ブルムがヴァンダ・ルトキエヴィチと会ったのは一九七二年八月、ヒンドゥ・クシュの山、ノシヤック（注17）（七四九二呎）であった。欧米のいくつかの隊がノシヤックに集まっていた、二人はそこで顔をあわせたのである。

「次は八千呎を女だけでやる番よ」とルトキエヴィチはブルムに言い、実際、ポーランド隊に加わっていたイギリス人のアリソン・オヌィシキエヴィチもまじえた三人は、その場で一九七五年にアンナプルナI峰（八〇九一呎）へポーランド・アメリカ女性隊を出すことを決めた。国際婦人年にふさわしい女性のヒマラヤを、ウーマン・リブ活動家の一人であったブルムは考え、ルトキエヴィチたちも共鳴したのである。結局、この時は許可が取れなかったが、ブルムを隊長とするアメリカ女性隊はルトキエヴィチがエヴェレストに向かった七八年秋、アンナプルナをめざし、三十五才のヴェラ・コマルコヴァと、四十二才のイレース・ミラーの二人が二人のシエルバと十月十五日、登頂した。しかし、二次隊のオヌィシキエヴィチとヴェラ・ワトソン（四十六才）の二人は滑落して帰らなかった。三年前ルトキエヴィチと共にガツシャブルムIII峰に登って気を吐いたオヌィシキエヴィチは、親友がエヴェレストに登頂した同じ日、

アンナプルナのクレヴァアスに消えたのである。

ブルムたちの「女の八千呎」はこうして実現したが、計画の当初は、アメリカ山岳会（AAC）でさえ「女だけのヒマラヤ」をなかなか承認しようとしなかった、とブルムは後に述べている。

ヴァンダ・ルトキエヴィチをはじめとするポーランド女性の山への挑戦は続く。八二年にはルトキエヴィチ以下十一人のポーランド女性とフランスのクリスチヌ・ド・コロンベルの合同女性隊がK2（八六一一呎）に向かったが、第二キャンプでハリナ・クリューガー・スィロコムスカが心不全で急死する事故に天候悪化が加わり、八一〇呎で断念せざるを得なかった。

このK2隊の中核として活躍したアンナ・チェルヴィンスカとクリスティナ・パルモフスカ（いずれも三十四才）の二人は、八三年六月、ブロード・ピーク（注18）（八〇四七呎）に高所ポーターも使わず、登頂した。二人は七八年三月、ルトキエヴィチと共にマッターホルン北壁を登攀、七九年にはポーランド・パキスタン合同ラカボシ（七七八八呎）隊でやはりロープを結んで登頂を果たしている。八千呎級の山で二人だけで山頂をおとす實力は、日本を含めて他の国の女性にはまだみられないところである。

ともあれ「女たちの山」は年々、その行動範囲を広げている。田部井淳子を隊長とする女子登攀クラブの九人は八一年春、中国・チベット自治区内にそびえるシシャパンマ（リゴザインタン、八〇一二呎）に女性として初登頂、八三年春には解禁だったブータンの山に挑戦した。遠藤（旧姓佐藤）京子を隊長とするユングフラウのメンバーは八三年春、西北ネパールの未踏峰チャンラ（注19）（六七一五呎）



周辺で学術登山を行なった。

アマ・ダブラム(六八五六註)には八二年春、スーザン・ギラー隊長ら九人のアメリカ女性が南西稜から挑戦、南西稜から登攀メンバー全員に登頂を果たした。

ソ連最高峰のコムニズム峰(七四九五註)に初めて登った女性隊は八二年八月のマリア・フランチタールを隊長とするユーゴスラビア女性隊で、これは同時にユーゴスラビアの女性高度記録となった。

エヴェレストは七九年秋、四人目の女性として、西ドイツ隊の隊長夫人シュマツツ(三十九才だった)を頂上に受け入れたが、夫人は下山途中遭難死した。五人目の女性は八四年春、インド隊に加わったバチェンドリ・バル(二十八才)だった。インドの女性たちの登山活動は活況で、一九六二年、シッキムのフレイ・ピーク(六〇九六註)に登ったのが女性隊の最初の成功だった。その後、ガルワールのムリットニイ(六八五五註)に登ったり、日本の女性隊と数回の合同登山を行なうなど国内外で女性登山を展開している。

八四年五月には、国際女性隊がチヨ・オユー(八二〇一註)に登頂した。登ったのはアメリカのアンナブルナ登頂者、ヴェラ・コマルコヴァ(四十二才)と、チェコのマルギタ・ディナ・シュテルボヴァ(四十四才)の二人、それに二人のシエルパだった。クロード・コーガンの悲劇から、ちょうど四分の一世紀後の、成功であった。ディナ・シュテルボヴァは、八〇年秋、「チェコ女性ヒマラヤ遠征隊」の隊長としてマナスルに挑戦したが、悪天候で登頂を断念している。チェコにも力のある女性登山家が多いというから、今後の活躍が注目されそうだ。

ソ連の山男たちの力量は、一九八二年春、ネパールを初めて訪れた同国隊が南西壁左岩稜から西稜經由の新ルートでエヴェレストをアタック、十二人の登攀隊員中十一人を頂上に立たせるという成果にも表われているが、女性登山家の活動についてのデータは少ない。

一九七二年にガリナ・ロジャリスカヤ隊長以下の女性隊がコルジエネフスカヤ峰(七一〇五註)に登頂した。ソ連の登山書の一部にこれを「世界初の女性隊による七千註峰征服」としてあるところを見ると(実際には一九六一年、中国女性隊のコングル・チュウビエ、一九七〇年日本女性隊のアンナブルナ峰など女性隊による七千註峰登頂はすでになしとげられていた)その時点でのソ連女性の最高記録だったとみられる。その後も女性隊の試みは各地で繰り広げられているが、おおむね国内に限られるようだ。一九七五年に日本女性隊がエヴェレストに向うと知って、七千註峰経験者であるソ連女性から女性隊あて「是非参加させてほしい」との要請の手紙が届いたことがある。八千註峰への女性だけの登山に情熱を燃やす人がいる証しとも言えるだろう。「ヤー・チャイカ(私は、かもめ)」で一躍世界に名を知られた人類初の女性宇宙飛行士、テレシコワを生んだ国である。女流登山家の活躍は、これからであろう。

ヨセミテのクイーンと呼ばれるアメリカのビバリー・ジョンソンをはじめ、現在山で活躍している女性たちの中にはヒマラヤへ行かなくとも素晴らしい成果をあげている人たちがいる。日本に限っていても、ヒマラヤへ行く以上に困難な登攀活動を国内外で展開している女性は少なくない。彼女たちは、男と同じように筋肉を鍛え、握

力を強め、持久力をつけるためのトレーニングを欠かさない。その強さ、たくましさは、女性ボディビルダーの写真に仰天するだけの男たちには想像つかないものである。

だが、問題は筋肉の鍛練だけにあるのではない。チャー・オユーを登った二女性にみられるように、長い時間を費してあたるヒマラヤ登山では、四十才を過ぎてもなお現役のばりばりで活動する女性たちが目立つのである。このことは、冒頭にあげた女子マラソンにも共通しており、ロス五輪で自分のペースを守って十一位にはいったイギリスのジョイス・スミス夫人は四十六才だった。

男たちにも四十以上でがんばっている者は多いのだが、そして近年その傾向はさらに強まっているのだが、それでも女性の不思議な強さとは少し違う気がする。

なぜ、女性たちだけで山に行くか、との質問には幾通りもの答えがある。精いっぱいやった、という人間としての満足感を得たいため。男といることによって起きる「雑音」を排除したいため。女性の自立のため。国の威信のため……。

動機や目的は、国により、個人により違って当然だが、一つ感じるのはルトキエヴィチやブルムがやってきたように、「国を越えた女性の連帯」が、欧米ではこれからもしばしば登山行動の一つの形となつて定着するのではないか、ということである。

すでに男たちの隊には、しばしばそういう例があり、エヴェレスト国際隊にみられるように、うまくいかないケースも少なくない。ただ、女性の場合、仮に互いの力量が接近していれば、連帯することのメリットは、男性隊より大きいのではないだろうか。

言葉の問題もあって、日本の女性たちには案外それはしんどいところかもしれない。しかし、無理に共に登らなくとも、互いに有益な情報交換をしたり、準備から登山の終結までの体験を語りあう場は、今後自然に広がってゆくだろう。

ロス五輪女子マラソンでは、二時間二十四分五十二秒で優勝したアメリカのジョーン・ベノイト(二十七才)の強さが際立ったが、スタンドはもちろん世界中のテレビ観客に強い印象を残したのは、スイスのガブリエル・アンデルセン(三十九才)の「フラフラ・ゴール」だった。なかばもうろうとした意識のまま走りきる意志だけに支えられて、ほとんど倒れる寸前でゴールを踏んだアンデルセン。その敢闘精神は絶賛されたが、「だから女には過酷」という声も一部には出た。このため、アンデルセンは十月のニュー・ヨーク・マラソンを、こんどは余裕をもって走りきり、女性の長距離走の能力を示したほどである。

走る場の安全が保証されているマラソンとの違い、一瞬の風、落石、雪崩、滑落が命とりになる山登りの世界で、もちろん女性の強さの過大評価はできない。ブロード・ピークを二人でおとしたポーランド女性の実績は、特筆に値するが、皆が同じことをできるとは思わない。

ただ、家庭や職場を説得し、多少のいやみを言われながらも、山々に繰り出す女性クライマーたちのエネルギーには、男たちと違う何かがある。山登りは計画から実行、終了まで、きわめて複合的な資質を要求する行為である。その中で女性たちが作り出してゆくものに注目したい。

おもむき参考文献

- Tents in the Clouds : The First Women's Himalayan Expedition. Monica Jackson and Elizabeth Stark, 1956.  
 White Fury : Gaurisankar and Chooyu. Raymond Lambert and Claude Kogan, 1956.  
 Na szczytach HIMALAJÓW. Zbigniew Kowalewski i Janusz Kurczab, 1983.  
 Карегория грядущим. Владимир Шараев, 1977  
 Going Higher : The Story of Man and Altitude. Charles S. Houston, 1983. (編注②)  
 Victorian Lady Travellers. Dorothy Middleton, 1965.  
 Annapurna : A Women's Place. Arlene Blum, 1980. (編注③)  
 「岩と雪」山岳年鑑 一九七九、一九八〇、一九八一、一九八二、一九八三、一九八四。  
 「スカートをはいたクライマーたち」今井雄二、一九七九。  
 「ヒマラヤの高峰」全三巻 深田久弥、一九七四。  
 「アンナプルナー女の戦い 7577 m」女子登攀クラブ、一九七三。  
 「マナスル一九七四—日本女性マナスル登山隊報告書」日本女性マナスル登山隊編、一九七七。  
 「私たちのエベレスト—女性初登頂の全記録」エベレスト日本女性登山隊編、一九七五。

編注

- 1 '83年ネパールは八一六三<sup>①</sup>と発表。  
 2 インドは六九三〇<sup>②</sup>としている。

- 3 ワークマン夫人により一九二二年クイーン・メリー・ピークと命名されたが公認されていない。  
 4 六七〇五<sup>③</sup>。'83年ネパールは六一五一<sup>④</sup>と発表。  
 5 インドは六一〇〇<sup>⑤</sup>、コンサイス外国山名辞典(以下外国山名と略記)は六二四八<sup>⑥</sup>としているが、それぞれ緯度・経度が大幅に異なっている。命名は'83年A・E・ガンサーによる。  
 6 約五六三九<sup>⑦</sup>。外国山名ではビウイとしているが、「妻たち」の意味では本文の読み方が正しい。  
 7 '83年ネパールは七四二九<sup>⑧</sup>と発表。  
 8 六〇八一<sup>⑨</sup>。六二〇〇<sup>⑩</sup>と諸説あるが、六二七一<sup>⑪</sup>はベルー地理学会公認の標高。  
 9 七五五五<sup>⑫</sup>の異説もある。  
 10 七四八二<sup>⑬</sup>の異説もある。  
 11 '83年ネパールは六九八一<sup>⑭</sup>と発表。  
 12 田中栄蔵により西稜上のロック・ピナクル約七二〇〇<sup>⑮</sup>と同定された。  
 13 ダマーヴァンド・クーが正式名称。五六七一<sup>⑯</sup>の説もある。  
 14 '84年3月H・カバディアより登頂に疑義が出されているが、今日まで解明されていない。  
 15 中国の新地図は七一七〇<sup>⑰</sup>、'83年ネパールは七一六一<sup>⑱</sup>と発表、七九二五<sup>⑲</sup>の異説もある。  
 16 七四九〇<sup>⑳</sup>の異説もある。  
 17 七四〇一<sup>㉑</sup>の異説もある。  
 18 八〇五一<sup>㉒</sup>の異説もある。  
 19 '83年ネパールは六五六三<sup>㉓</sup>と発表した。六七二五<sup>㉔</sup>の緯度にして約十度北方、峠のチャンラの南の別のピークである。  
 20 '83年ネパールは六八一二<sup>㉕</sup>と発表。  
 21 五八三〇<sup>㉖</sup>の異説もある。  
 22 「高所における女性」の一章が書かれている。また、巻末の参考文献に女性スポーツ生理学関係書も数冊収録されている。  
 23 巻末参考文献に女性による登山・探検書が八十二冊収録されていて、すぐれた文献目録もなっている。

## 中国横断山脈東南縁部踏査紀行

松 本 徃 夫

中央アジア、そしてチベット高原（青蔵高原）から四川・雲南にかけては、ヒマラヤやカラコラムに比べて、高度こそやや劣るものの、多くの興味ある山々や大高原がある。

横断山脈とはそのチベット高原の東端で、雅魯蔵布江が屈曲して南流するあたりから、四川省西部と雲南省西部の間あたりまでを指し、南北に並走するいくつかの山脈の総称である。例えば大雪山脈、怒山山脈、高黎貴山脈などもこの中に含まれ、その東縁は大涼山地に接し、さらにその東側は雲貴高原に連続する。またこの地域では、長江（楊子江）の支流を含めて数本の河川が各山脈の間を平行して南に流れている。なかでもわずか二十キロほどの間をおいて南流する金沙江（長江上流）、瀾滄江（湄公江の上流）、怒江（サルウィン河）が顕著で、中国ではここを三江地域と称している。高度は一般に北部が高く六〇〇〇〜四五〇〇が、南にすすむにつれし

だいに低くなり、雲南省に入り五〇〇〇〜三〇〇〇と下がる。しかし横断山脈の最高峰は大雪山脈の貢嘎山（ミニヤ・コンカ）七五五六である。このように山脈と分水嶺は高く、逆に溪谷は深く切れこんでいる。したがって東西の交通はさまたげられ、横断山脈の名称が付されたという（中国地理）浅川謙次監修・人民中国編集部編・築地書館刊・一九七五年による）。

一九八三年十月〜十一月にかけて、この横断山脈東南縁部（四川省南西部）一帯を踏査することができた。これは中国科学院地質研究所との共同地質研究であって、共同研究を提案してから五年目にしてやっと実現したものである。中国側は「中国科学院地質研究所攀西裂谷科学考察隊」を組織し総勢三十名近くのメンバーで、日本側は愛媛大学佐藤信次氏、山口大学の加納隆氏と私の計三名であ

る。攀西とは、長江最大の支流雅麗江と金沙江の合流点にある渡口市の攀枝花鉾山と、西昌の頭文字をとっている。この間成都から南下して、楽山、峨嵋山、西昌、徳昌、米易、会理、拉々廠、渡口、塩辺などから、これらの周辺部を踏査するとともに、その自然や少数民族に接することもできた。



この地域における過去の探検史を紐解くと、最初はヨーロッパの宣教師等によって始められた。雲南から横断山脈東南縁部へ大凉山域の記録に関しては、解放されるまでの長い間、中国統治者と対立していた少数民族彝族居住区がこの地であるため、きわめて少な

い。わずかに、ドローヌの「シナ奥地に行く」(西域探検紀行全集、第十巻、矢島文夫・石沢良昭訳・白水社、一九六八年)や、曾昭掄の「中国大凉山彝族区横断記」(八巻佳子訳・築地書館・一九八二年)などで紹介されている。

成都の南南西一五〇キロには、中国の仏教四大聖地の一つ、名山峨嵋山と楽山市があり、観光地として開放されているので訪れた外人も多いことであろう。楽山は大渡河と岷江の合流点にあり、千年以上前、赤壁に刻まれた高さ七十一呎の石仏がある。有名な蘇東坡の赤壁賦もここで創られたという。十月十九日、紅珠山から霧のなかを峨嵋山に登り、三〇七七呎の金頂山頂に立つ。山頂付近は二疊紀の峨嵋山玄武岩から成っていて、その柱状節理が懸崖となり、山頂付近の針葉樹と相まって山岳景観を誇っているが、残念ながらガスのため展望がきかない。山頂付近では紅葉したナナカマドやシャクナゲ、山麓では白色のキフネギク、淡黄色のジンジャー、白色のツリフネソウなどの花がみられた。

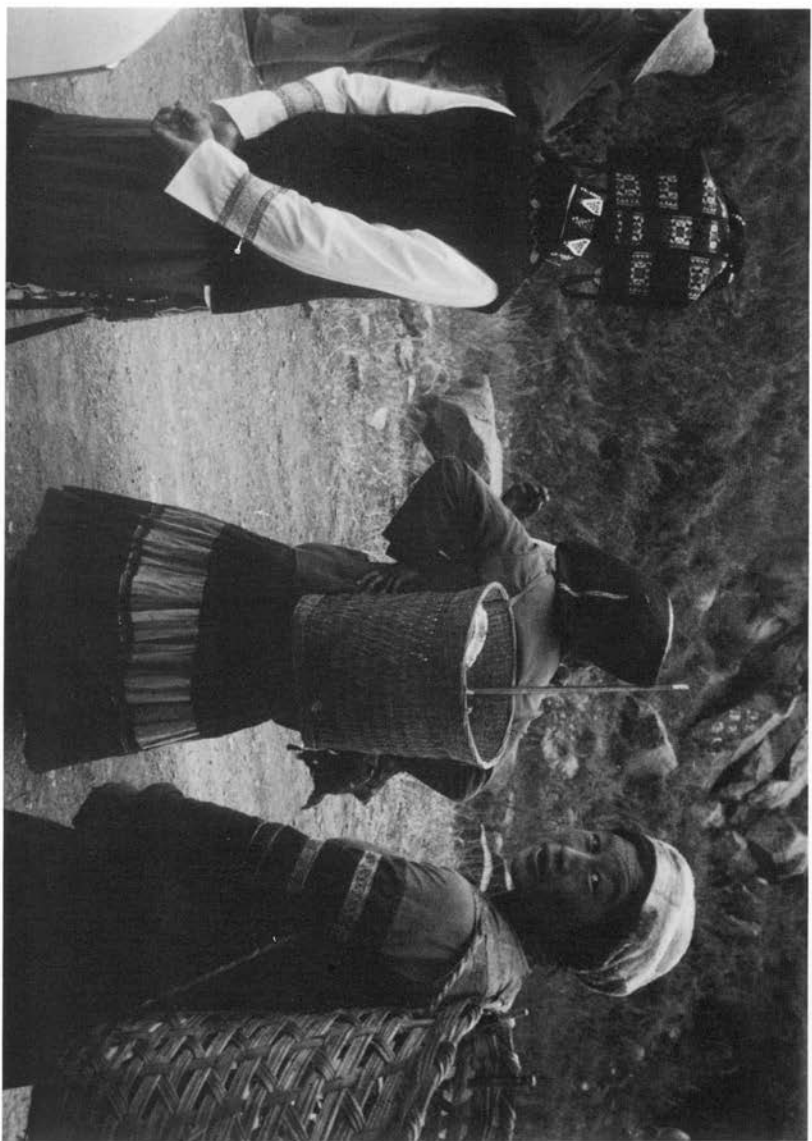
ここから南が共同研究の本場でもあり、外国人として初めての地域も含まれている。十月二十一日、四川省涼山彝族自治州の中心地西昌県に行く。邛海湖畔に泊まる。この朝夕はのどかで美しい。太陽が昇りはじめると、湖を越して大涼山の山なみが朝霧のなかに浮かんでくる。湖面には、小舟をあやつりながら網打つ漁民や釣人たちが逆光にシルエットを見せ、漣は金色に輝く。邛海湖は、千數百年前の地震で生じたとの伝説があるように、実際に記録されてい



▲徳昌県・西昌県境の螺髻山<sup>ロウキツ</sup>（4360m）



▲塩源イ族自治県の錦屏山地から綿々山地の遠望，眼下には巴顔喀拉山脈<sup>パインのル</sup>に源を発した雅砻江<sup>ヤルンツァン</sup>が滔々と流れている。



▲西昌付近のイ族の女性たち。ひだの多い独特のスカーツ(百箱褌)をはき、未婚女性は左の人のように、頭の上を美しく刺繍してある角張った布で飾る。この人は私たちの食事の世話をした李リ嬢さんで、イ族名は吉古阿吉古阿嬢さんという。背追っている竹かごは、九州の田舎で見かけるものとよく似ている。

十一月二日、さらに安寧川沿いに南下し渡口市米易県に着く。中国では市と県の単位が日本とは逆で、県は市に含まれる。ここでは人口二十七万人、そのうち彝族は八パーセント、リス、回、蔵、白などの諸族が三パーセントという。四川省南部のこのあたりでは何処でもそうであるが、果物が豊富であり種類も多い。リンゴ、ミカン、ザクロ、バナナなどがとれる。これもこの付近の地形のしからしむるところで、高地では寒地の果物を、低地では暖地の果物を栽培するからであり、さらにマンゴウなども作りつつある。ここから、白馬層状斑礫岩体、半辺溝斑礫岩複合岩体、峨嵋山玄武岩類、晋口片麻岩・花崗岩類などを調査する。

十一月七日、米易からやや北上し、安寧川から東南の支流に入り、二一七〇<sup>米</sup>、一九五〇<sup>米</sup>の峠を二つ越えて、再び凉山彝族自治州に入り、その会理県に行く。会理は一八一〇<sup>米</sup>の高台にあり、雲貴高原の北縁の一角に位置し、昔から雲南（昆明）と四川省南部との交通の要所であつたらしい。一九〇七年春、昆明を出発したドロースは、青河（楊子江の上流金沙江と同じ）を渡り、通安―会理―寧遠（西昌の昔の地名）を十五日間かかって歩いており、西昌でド・ゲブリアン神父と会っている。また、有名な長征の紅軍も雲南の尋甸・武定方面から絞平渡で金沙江を渡りし、通安―会理―徳昌―西昌と北上し、会理では五日間滞在したとされている（「長征の思い出」北京外文出版社・一九七九年、「長征」岡本隆三・弘文堂・一九六四年などによる）。会理では猫々山のアルカリ閃長岩、毛谷嶺鉱山、田坊の超塩基性貫入岩などを調べる。ここでも外国人は極めて珍しいわけで、幼稚園にも招かれ、子供たちの歓迎遊戯などを見

せてもらう。

十一月十三日、会理よりさらに約六〇キロ南下してラツァ廠鉱山に行く。ここは金沙江東岸の二一〇〇<sup>米</sup>の高台にあり、雲貴大高原の一角である。すなわち、四川、雲南の省境に金沙江がほぼ深さ一〇〇〇<sup>米</sup>の大峡谷として貫流しているもの、四川省南部のこの付近の高原から、雲南、貴州の高原にかけては、同じレベルの同一高原として考えてよいわけである。ラツァ廠鉱山は、解放後の一九五八年から開発のための試掘と調査が始められ、一九七八年から本格的に採掘がなされ、選鉱場もある。いわば歴史の浅い銅、コバルト、モリブデンの鉱山であり、日本の黒鉱式鉱床にやや似ている。この鉱山の地もかつては全くの辺境の地であつたのが、今では鉱山町になつている。この鉱山に訪れた外国人として、一九六〇年ソ連、一九七九年ユーゴスラビヤに次いで私たちは三度目だとのことであつた。鉱山の一角に立てば、遙か眼下には悠久の大河金沙江が滔々と流れている。金沙江の両岸には申しわけ程度にほんの一条の急坂の小径が延々と続いている。その小径は、探すのに苦勞するほどのわずかな耕地と家屋とを結んでいる。この大峡谷に刻まれた大高原に住む少数民族彝族が、先祖代々をとおして永々と築いた文化をひしひしと感じる。西方から北西方を遠望すれば、累重とした山脈が重なり、そのはるか彼方に雪山がかすんでいる。これぞ金沙江、メコン、サルウィンの大川、さらにはイラワジを境する分水嶺であらう。

十一月十四日、昼過ぎに鉱山を出て、一旦力馬河のニッケル鉱山まで北上してから南西下し、雅砻江と金沙江が合流する渡口市に着



く。渡口市は世界第一級といわれる鉄、チタン、バナジンの攀枝花鉾山をかかえた鉾山町であり、私たちが想像していた以上の人口三十五万人（市街地のみ人口で、市全体では八十万人）の大都会であり、植物園などもある。鉄鉾石は古生代末期の層状アルカリ斑れい岩体中に集積岩として胚胎している。付近には、先カンブリア紀の石灰岩、三疊紀の石炭を産出するため、鉄製錬に必要な三拍子が揃っており、盛んに鉄を生産している。ここまで来ると高度もかなり下がって一一〇〇崙前後である。そのため昼はかなり暑く、サトウキビやバナナなどが豊富で、兩岸の崖には大きなサボテンが自生している。また、日本では屋久島などでよく見かけるツマベニチョウ、あるいは前翅先端がオレンジ色のメスシロキチョウ？、リュウキウムラサキ？、アササギマダラの類が翔んでいる。金沙江の右岸上流では、三疊系が見事に横臥褶曲をしており、その上流でも背斜褶曲が見られる。これらは、レベル差数百崙の崖で見られるのであって、日本であれば直ちに天然記念物であろう。

十一月十七～十九日にかけて、二二八〇崙の埡口峠を越えて塩辺に行く。ここは渡口市ではあるが、雅礮江の流域にある辺境の地であり、隣接するのは雲南省の寧浪イ族自治州、その西方が金沙江を堺して麗江納西族自治州であって、ここには玉龍山（五五九六崙）が聳える。また、北方は塩源イ族自治州から木里藏族自治県に連なる。したがって塩辺県内にも四〇〇〇崙を越す山々があり、ここには豹が住むとのことである。

十一月十九日、再び渡口市に戻る。そのあと攀枝花鉾山や周辺の地質を調べる。十一月二十一日には、金沙江の合流点から雅礮江を

さかのぼる。やや上流で安宁河が吐合う。この付近は、雅礮江の上流から流した材木の集積所がところどころにある。筏を組んでいるところも見られる。二灘では、アルカリ閃長岩や峨嵋山玄武岩を調べる。ここでも、スジグロカバマダラ、アオタテハモドキ、メスシロチョウ？、ほか多くのチョウを見かけた。また、ここにダムを作る予定があつて、現在いろいろと調査がなされていた。

横断山脈東南縁部の踏査行は以上であるが、この未開放地に行くことができたのは、中国科学院地質研究所名誉所長張文佑教授はじめ関係各位の御尽力のたまものである。現地では、人民政府や招待所の関係各位に大変お世話になった。これらの方に厚く感謝する。また、共同研究者にも種々お世話になったが、そのなかには中国チヨモランマ科学考察隊員の劉秉光先生もおられた。

## 追悼

### 辻村太郎氏（一八九〇～一九八三）

本会名誉会員、辻村太郎先生は、一九八三年七月十五日払暁、長年住まれた本郷弥生町の御自宅で九三才の天寿を全うされた。ここに慎んで先生の御冥福をお祈りするとともに、一文を草して長くそして豊かであった先生の御生涯を偲ぶよすがとしたい。

明治二三年、箱根の火山群を間近に見る小田原に生を受けられた先生は、従兄であられた辻村伊助氏の影響によって早くから山岳への関心を高められた。日本山岳会への御入会は、先生が開成中学の二年生であられた明治三九年（一九〇六）二月、先生十六才の時のことである。山岳会創立の翌年であった。その年の七月には木曾駒ヶ岳に登山、さらに翌年夏には父君がスイス土産のリュックサックを背負い、シモンのアルペンシュトックを携えて常念山脈の縦走を果たされた。明治四一年七月には白馬岳に登頂、次いで伊助氏等と神河内に遊ばれ、翌年八月には立山に登られたが、この登山中、雨に遭われ、それがもとで軽微な肋膜炎を患われたことが、その後先生の御生涯を決定する重要な転機となったように思われる。こ

の出来事以来、もともと冒険的な性向を多分にもっておられ、伊助氏に次いで一高近くの煙突から双眼鏡で赤石山脈を遠望されて、学友から煙突男の異名をとられたこともある先生は、健康問題のみならずすべてのことに対して極度に慎重になられ、登山さえもその後十六年間にわたって断たれてしまわれたのであった。

しかし先生が真の山岳人として成長されたのは、先生が山行から遠ざかっておられたこの十六年の間であったと言っても過言ではないであろう。明治四四年（一九一一）、一高二年生の時に初めての論文『日本アルプスと既往の氷河』を『山岳』第六年三号に発表された先生は、それまでの御山行で得られた入念な地形観察とその他の岳人の報告記事をもとに、日本アルプスの氷河地形に対する生涯にわたる御研究の基礎を置かれたのである。それは先生二一才の夏のことであった。次いで大正二年、東京帝国大学地質学科二年生の時には、『地質学雑誌』に『本邦のカールは氷河之を形作りしや否や』と題する大論文を公けにされ、日本アルプスのカールを地形が氷河作用によってつくられたことを明確に主張されたのである。

大学の卒業論文では三宅島の火山地形を研究された先生は、大正四年に地質学科を卒業されるや、直ちに開設されたばかりの地理学教室に入られ、白馬岳で初めて氷河地形を発見された山崎直方教授のもとで地形学の道に進まれた。先生の御研究の中心は断層地形に移り、とくに飛騨山脈と木曾山脈周辺の断層を調査されて、これら二つの山脈が断層運動によって高く隆起した地塊であることを立証された。こうした画期的な御研究のかたわら、大正十二年（一九二三）には三二才の若さで六百ページを越える日本で最初の地形学

の教科書を著され、次いで六年後の昭和四年には日本各地の地形を詳細に論じられた『日本地形誌』を、さらに昭和七・八年には諸外国の夥しい論文を網羅した一千ページ以上に及ぶ『新考地形学』を著されて、日本に地形学の確固たる礎を築かれたのである。

先生が再び山に近づかれたのは大正十五年（一九二六）夏のこと、尾白川の谷から甲斐駒ヶ岳に登られ、また昭和七年には仙丈岳に登られて、藪沢カールの底で氷河によって磨かれた羊群岩を発見された。日本のカール底で氷食岩面が発見されたのはこれが最初である。昭和九年には鹿島槍ヶ岳に登られた。しかし先生の御山行が最も頻繁になるのは、昭和三十一年（一九五六）、六才の時に立山に登られて以後のことに属する。白山（昭三三）、槍ヶ岳（昭三四）、水晶岳（昭三五）、赤岳（昭三六）、十文字峠越え（昭三七）、針ノ木岳（昭三九）、立山（昭四〇）、白根御池（昭四二）と、ほとんど毎年のように高山へ登られ、昭和四五年、先生八〇才の秋には、雷殿から一ノ越をへて室堂まで歩き通されたのである。

針ノ木岳の登山にお供して以来、期せずしてこれら先生最晩年の御山行のほとんどに同行する幸運に恵まれた私は、山を楽しみ、学問を楽しみ、そして人生を楽しむ先生ののびやかな生き方を、登山という行為を通してじかに教えられたのであった。先生最後の山旅は昭和四七年の夏、先生八二才の折りの山行で、先生は千畳敷のカール壁を三時間あまりかけてゆっくり登られ、木曾山脈の稜線まで達せられた。稜線に出たときにはもう霧がわいていて、黒川の氷食谷を覆い隠してしまっていたのはいかにも残念であったが、僅かに濃ヶ池を望まれたことに満足され、カール壁を下る道すがら見つけ

られたヒナウスユキノソウの花に六〇年の昔を偲ばれた先生は、最初と最後の山旅を同じ木曾山脈に送られることによって、その六〇年余に及ぶ長い山との交わりを静かに閉じようとしたように思われる。一つの山行に始めと終わりがあるように、ひとはいつか、永遠に山から去っていかねばならない。決して無理をせず、体力と山とを常に厳しく天秤にかけられていた先生は、そのようにして見事に山に別れを告げられたのであった。

先生は日本地理学会の会長を務められたほか、日本学術会議、国立公園中央委員会、文化財保護審議会など数多くの委員を歴任され、天然記念物の選定や自然保護に関しても多くの仕事をされた。立山の山崎カール、薬師岳のカール群を天然記念物に指定されたのも先生である。しかし自然保護についての先生のお考えは、一切の開発を否定するといった極端なものではなく、先生はむしろ如何にして開発と自然とを調和させ、多くの人々が本当に自然を楽しむにはどうしたらいいかを常に模索されていたように思われる。

先生の文章は、その該博な知識と自然に対する繊細な感覚、とくに目にふれた植物や、耳に響く虫の音の一時の印象を鮮やかに定着する独自の能力によって、内面から溢れ出るような美しい階調を備えていた。『晩秋記』、『続晩秋記』、『日本の景観』、『日本の山水』、『黄葉集』、『白雲青山』と続く六冊の随筆集は、日本の紀行文学として第一級の作品を数多く含んでいる。ひとはページを繰ること、先生の澁刺とした少年のような心を見出すであろう。それはおよそ旅というものがひとに与え得る最大限の喜びを表現している。山に関して、とくに先生は昭和十五年に『山』という岩波新書を

出された。この本は小冊子ながら全世界の山岳についての知識を網羅した第一級の入門書であり、この本の水準を越える本は、遺憾ながらその後も書かれていないのである。先生はその山岳に対する長年の御研究により、昭和四八年、秩父宮記念学術賞を受けられた。それは先生にとって最もふさわしい勲章であったと思われる。

先生は真摯な学究であり、学問を論じる時にはこのほか厳しかつたけれども、その御興味は人事百般に及び、とくに文学、絵画、音楽への傾倒は大いなるものがあつた。また座談の名手でもあられ、その驚くべき記憶力に基づく昔語りは、聞くひとを飽かせることがなかつた。明治四一年に来日したスヴェン・ヘディーン博士の講演会に出られたことも先生と山岳との結びつきを一層強める契機となり、先生のヒマラヤ、中央アジアへの憧憬は一生を通じて深まりこそすれ、衰えることを知らなかつた。名古屋大学の樋口敬二博士を初めとするグループや、五百沢智也氏によるヒマラヤ研究が高い水準に達したことを誰よりも喜んでおられたのは辻村先生である。昭和五七年の六月、田中薫氏のお宅に先生や村井米子氏らをお招きし、前年の秋に五百沢氏と撮影してきたカンチエンジュンガ山群のフライト写真と、マチャプチャリ山麓へのトレッキングのスライドを先生にお目にかけることができたのは、そうした意味では私にとってせめてもの慰めであつた。しかしその年の夏に田中薫氏は急逝され、先生も同年十一月、病に倒れられて、翌年七月に逝去されたのである。御遺言により御葬儀は行なわれず、御遺影の掲げられた先生のお部屋で、親しかつた人々がお別れの挨拶を交したただけであつた。御遺影は二〇年前の夏、針ノ木岳の山頂でとられたお写

真であつた。私はその時まだ十六才の高校生で、その時には自分がこれほど先生に近い道を歩む人間になるとは思つておらず、そして先生はそのとき七三才で、先生はまだまだ生きるつもりでおられたに違いないが、そうして共に時間を過ごすことがそれから二〇年も続くことになるとは先生も私も知らずに、二人して針ノ木岳の山頂に並んでいたのである。

日本山岳会入会 一九〇六年二月 会員番号 二一番

(小野有五)

## 成瀬岩雄氏（一九〇五—一九八四）

私が旧制の成蹊高校高等科に入学したのは昭和二年であつたが、このとき成瀬岩雄さんは一年先輩の二年生だつた。成蹊は全校生徒が僅か百八十名という少人数だつたから、生徒は何かを通じてお互いに知り合いになるといふ雰囲気はいわば家庭的な高校であつた。おい、今度の日曜には山へ行かないか、と成瀬さんに声をかけられて、雲取山へ登つたのが私が成瀬さんと知り合いになつたきっかけだつた。このときの成瀬さんはもう一人前の登山家だつた。というのは、成瀬さんは大正十二年にすでに日本山岳会の会員になつており、故大島亮吉さんなどと一しょに多くの山行の経験を持つておられたからである。

この頃の成蹊高校には旅行部という生徒のクラブがあつた。現在

の山岳部とスキー部が一しょになっているようなものだった。この旅行部も昭和二年には日本山岳会のメンバーになった。もちろん成瀬さんがその中心になっていたからであろう。当時学校の登山部で山岳会のメンバーだったのは、東京帝国大学だけだったのだから、高校の程度で山岳会のメンバーが認められていたということだけでも、成蹊がいかに活躍していたかを示すものだろう。

成蹊高校には、当時夏の学校という行事があり、全校生徒は、夏には必ず海へ行って水泳をするか、山登りすることになっていた。山の方は、数班に分れて、それぞれの班に旅行部の部員がリーダーになって、北や南アルプス、秩父、上越、東北、北海道などの山行を行っていたが、この計画はすべて成瀬さんが決めて、学校側の承認を得て、実施していたのである。

成瀬さんはよく私を虎の門の山岳会のルームに連れて行ってくれた。榎さん、松方さん、浦松さん、藤島さん、木暮さん、など、山の大先輩たちは、私たち若僧にも親しく声をかけて下さり、山の話をして下さった。本場のアルプスの話も、北アルプスや秩父や奥利根の山の話も、いろいろ教えて頂くことが出来た。成瀬さんの山登りも、岩登り、沢歩き、スキー登山、何でもやるという態度だった。

当時としては新しい登山の装具も教えてくれたし、草鞋のはき方、焚火のしかた、何でも成瀬さんは山の大先輩から吸収して、これを自分でも実践し、また、私たちにも教えてくれた。

五万分の一の地図を見ながら、今度はここへ行って見ようとか、積雪期のこの山のルートはどこを狙うのが最も良いか、など学校でもよく私たちと議論したり、相談をしたりした。ごましおと味噌は

成瀬さんの山登りには欠かせない食料であり、缶詰など重いものはあまり使わなかった。スキー登山では、必ずテルモスに紅茶を入れて持たせられたが、スキーはこのテルモスをこわすことがないような慎重な滑り方をするように指導された。

この地味で慎重な成瀬さんの山登りの態度は、その後の成蹊の伝統として今日まで伝えられているが、成瀬さん自身も最近まで、昔と同じような地味な山登りを続けられていたようである。山を愛し、自然に親しむこと、それだけを生涯の仕事として実行された人であった。

(中屋健次)

成瀬岩雄氏は明治三十八年(一九〇五)東京で誕生。成蹊高校を経て昭和七年東北帝国大学経済学部を卒業。青年時代の登山には大正十五年三月の抜戸岳、笠ヶ岳の積雪期初登頂(『日本登山記録大成』14所収)、昭和二年七月の知床岳初登頂(『山岳』60所収)、昭和五年四月の会津朝日岳初登頂(『いろりばた』56所収)等があり、また同氏が兄事していた大島亮吉氏との上州武尊山や笹穴川上流の山歩きなども数えられる。

また大島氏の影響もあって、西欧山岳文献殊にイギリス人の書いたスイス・アルプスの山書に造詣が深く、唯一の著書『山・よき仲間』(昭和三十七年刊)の内容の多くは、アルプスに関するものであり、その後も『山岳』、会報『山』などに寄稿が少なくない。

同氏自身も昭和四十八年夏、六十八歳のときスイス・アルプスに遊び、メンヒに登ったほか邦人の訪れること稀な僻村を訪れ、そ

の紀行「スイス・赤毛布の旅」(『山岳』68所収)を残したが、アルプスの登山史とアルプス登山者の細部に通曉していた同氏らしい紀行文であった。晩年は特に、内外の山岳書を読むのが唯一の愉しみではなかったろうか、と追想する。

日本山岳会へは大正十二年十一月入会、会員番号八六五。(註)多量理事、評議員をつとめ、マナスル登山当時は、その準備のためネパールへも出かけて尽力し、昭和四十六年から二年間副会長、四十八年永年会員となり、更に五十三年には多年に亘る本会への貢献と登山界でのパイオニア・ワークによって名誉会員に推挙された。

同氏は中年以降も登山を続け、殊に会津、越後、東北の山、峠、山村を好んで数多くの山行を重ねたが、そういう理由から昭和四十七年十月には南会津山の会(当時の会員数約五十名、本会員も多かった)に入会し、それ以降は、その仲間との山行が多く、またそのうちの何人かと親交を続けた。かなり体力が衰えてからも、山田哲郎、中西章氏ら(共に本会員)は同氏を助けて山行を共にしたが、晩年の同氏は、それをどんなに喜んだことだろうか。

また同氏は、会員歴半世紀を超える長老会員で、会を愛すること深く、土曜会、有志閑談会等に出席を欠かさず、本会でのクラブ・ライフを最もエンジョイした会員の一人であった。山行の時や都会での奇行は、その歿後も旧友間で屢々話題の種になったが、山と山岳書一筋に生きた純粋な性格のしからしむところとしてか、それを悪くとする友人は一人もいなかった。

昭和五十九年三月二十一日逝去、享年七十八歳であった。

(註) この入会年月日、会員番号は成瀬氏自身自著の表紙にも明

記しているし、現行の会員名簿(戦後一九五二年版以降)もそうなっているが、『山岳』25の2の一七二ページの新入会員紹介では会員番号一一六三であり、昭和十七年版(戦前最後)の会員名簿にも一一六三、昭和五年四月入会となっている。この相違がどういう原因によるものか、今にわかに詮索する余裕はないが、後考のため指摘だけしておく。

(望月達夫)

## 角田 吉 夫 氏 (一九〇七—一九八四)

故人が昭和六年八月に発行しました「上越国境」の序文を、当時法政大学英文学部教授で、また山岳部長でもありました田部重治先生(日本山岳会物故名誉会員)が書かれております。角田氏の人柄を知るには、この序文が、よく氏の性格と山に対する情熱を言いつくされておりますので、敢えて巻頭に記しました。

「角田君は新進の登山家である。恐らくは君ほど目ざましい進歩を、最近登山に於て示した人は蓋し異数であろう。君が登山を始めてから決して長日月と言うことは出来ない。しかも過去数年間の君の生活は殆んど登山に献げられたと言って差支えない。君は夏山にも通じている。否な私の知る限りに於ては、君の登山はスキー登山に始まっている。君は凝り性である。一たび事に従事すれば、其事に徹しなければ止まない性格をもっている。スキー

登山に於ても、岩登りに於ても、山岳写真に於ても、君は決して人後に落ちるものではない。君の精力をそそぐ方面は多岐に涉り、君の跋渉せる方面は広きにわたっているが、尚君の最も得意であり、又、最も多くの精力を費やした方面は、上越国境山脈である。此地方に関する君の研究は実に念入である。君は多くの時日を四季を通じて此地方を实地踏査することに献げている。従つて君の叙述は決して間接的でなく、どこまでも君自身の調査によるものである。(中略)此頃の山岳書に於て最も危険に感ぜられることは、著者自から踏査することなく、他人から聞きかじり、他人の書から無断拝借して作られたと思われる書の多いことである。(以下略)

法大山岳部の創立は大正十四年四月で、氏はその揺籃時代に、精力的に活躍し、現在二百名を超える山想会(OB会)の基礎を築き上げた功勞のあつた先輩であります。

その草創時代部員の集合には、神楽坂のオデン屋、赤ひょうたんがよく利用されました。小部屋に集まり田部先生を囲んで、山に対するいろいろな観点から、ニュアンスのこもつた独特な講話を拝聴したものです。

亡き田中菅雄、角田吉夫の先達もこの輪の中に加わつて、おでんや松茸飯に大いに健啖ぶりを發揮し、また酔うほどに気炎を上げて、なかには見事に光る先生のおつむを撫でさせて貰うなど、まことに親睦あふれるふんい気でした。それからもう五十年余の歳月が過ぎました。来春には部の創立六十周年記念式典などの催し計画が持ち上つております。

先輩よ、その日を待たず黄泉の旅にお出かけとはまことに残念でたまりません。共にあの日あのとときの想い出を語りたかつたのです。あなたの会に寄せる情熱と伝統は、あとにつづく我々が大切に守りつづけております。

昨秋は学校百周年に因んで、白馬連峯遠見尾根に見事なヒュッテが再築されましたので、これからの若人達にはよき修練場になりましょう。小舎のことで思い出しましたが、最初の法政ヒュッテを毛渡沢(谷川岳)に苦勞して構築したのは、あなたのときでした。当時黒田正夫さんがご健在で、初子ご夫妻ともどもみえ、いろりを囲み、四方山の話に、ジョークを交える先輩のまっ黒く焼けた顔が、つい先日のような気がします。(この小舎はその後雪崩で崩壊しました)

当時、私たちは、よく山男という言葉をつかいましたが、あなたは全くそのもので、年間二〇〇日もの山行きには驚きでした。山歩きそのものが日常生活のようでした。早春のスキー行で、笠ヶ岳から大槍越えなどは、当時の記録として素晴らしいものでした。

また日本山岳会の理事もつとめられ、昭和八年度事務分担表によれば会報担当、山小舎担当で、ある大会に於て「日本の山小舎並に涸沢に建設すべき本会の山小舎」と題する講演などは、まことに蘊蓄あるお話でした。

又本邦主要峠高度の研究などして、山日記に掲載するなど大へん会にも貢献しておつたようです。このように山に対する執念の持主で剛直さのある反面、部員に対しての思いやりは大へん深く、新参だった私は、山靴(津布久山靴専門店)やザック(片桐)などの購



名誉会員

辻村太郎氏

Taro Tsujimura (Hon. men.)

(1890~1983)

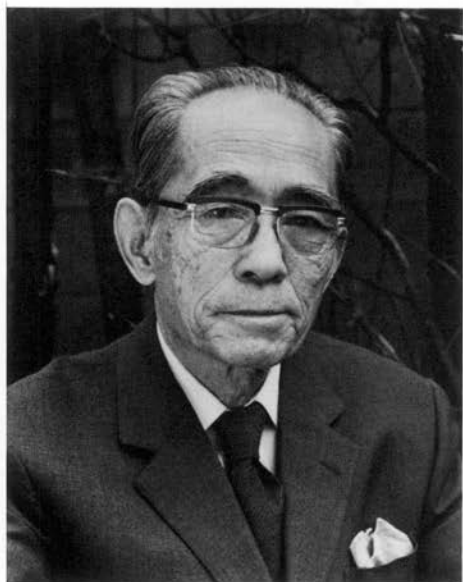


名誉会員  
成瀬岩雄氏  
Iwao Naruse (Hon.men)  
(1905~1984)



名誉会員  
角田吉夫氏  
Yoshio Tsunoda (Hon.men)  
(1907~1984)

渡辺 漸氏  
Susumu Watanabe  
(1903~1984)



加藤 恭平氏  
Kyohei Kato  
(1909~1983)



折井 健一氏  
Kenichi Orii  
(1912~1983)

林 和 夫 氏  
Kazuo Hayashi  
(1916~1983)



今 井 雄 二 氏  
Yuji Imai  
(1898~1984)

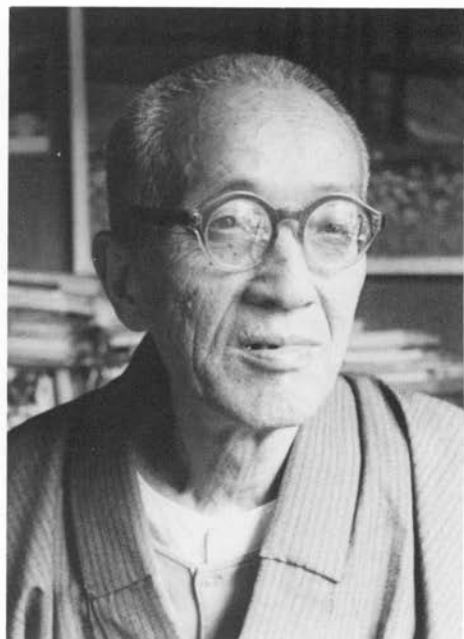
大 塚 武 氏  
Takeshi Ōtsuka  
(1917~1983)



牧野文子氏  
Fumiko Makino  
(1904~1983)

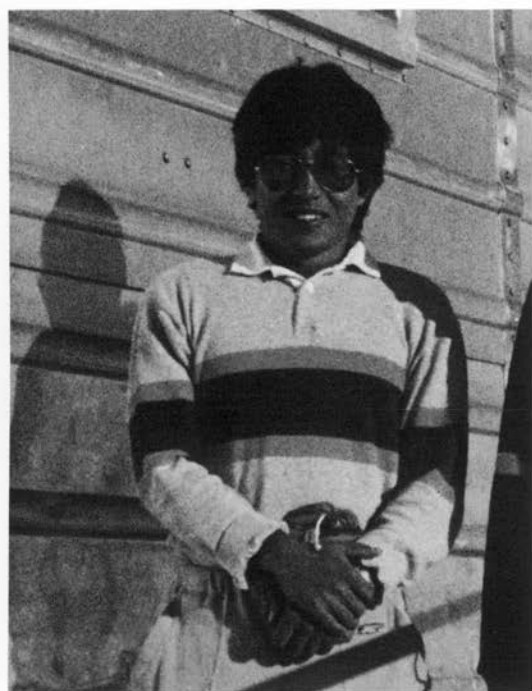


皆川文彌氏  
Fumiya Minakawa  
(1921~1983)



山下久男氏  
Hisao Yamashita  
(1903~1982)

樋口明生氏  
Haruo Higuchi  
(1929~1983)



柳沢幸弘氏  
Yukihiro Yanagisawa  
(1955~1982)

入にも同行して貰い、その良し悪しなど親身になってお世話を受けました。部員一同から慈父のように慕われ、先輩でありながら、角さん角さんの愛称で声をおかけしたものです。脱稿に先だち、公表してはと、躊躇しましたが、病身でありながら余りにも心のやさしさがにじむ、この手紙を読ませて頂きましょう。

(第一号)

九月十七日 山岳写真展のご案内状ありがとうございました。昨年は野村ビルまで出かけましたが今年の中野区江古田の中野病院に八月十五日から入院しております。胸部疾患の老人病です。約六ヶ月カンズメ生活を宣告されました。山想会の事務所に通知しております。よろしくご連絡願います。病室で眺める山の絵ハガキを送って下さい、山の諸兄によろしく。

(第二号)

九月二十三日 日本山岳写真協会展の画題目録を送っていただきありがとうございます。みるチャンスを選した展覧会の画題が、一つ一つ強く追想にはね返って来ましたのは意外でした。とじ込められた白い病室の中におかれた関係かも知れませんが、山の姿が眼に浮んで来ました。北アルプスの山小舎経営者の二世両名さんが活躍していることは楽しいことです。松本の穂刈写真館や有明村の赤沼さんの大きなお屋敷に訪ねたことを思い出しています。病室の白い壁に是非山の作品をかざりたいものです、お待ちしています。老人性肺結核病は気を長くして回復に時間のかかる治療をつけております、胸部の神経痛の痛みになやまされております。(註 筆者は日本山岳写真協会員)

九月下旬に撮影した中央アルプスの引伸しを早速お届けしました。

(第三号)

九月二十八日 甲斐駒と宝剣岳の写真額二枚落手いたしました。六人用大部屋の一隅に幸い板壁がありますのでそこに掲げました。殺風景な部屋にうるおいの出来たことをよろこんでおります。七十六歳やっかいな病気になりました、これも宿命ですか。御礼まで

(第四号)

十月十四日 北海道カメラ行脚の旅はみのりが大きかったことでしょう。収獲を期待しております。北キツネの可愛らしい絵ハガキ(旭川市今津秀雄氏撮影)ほんとうにありがたうございました。早速ベットの前、テレビの上に額入れて楽しんでいきます。知床の山や空に想いを走らせながら、二匹の小ギツネと対話がつづくことでしょう。ほんとうに思いがけなくたのしいプレゼントをいただきました。又旅行談をおきかせ下さい。旅先から出した二枚のエハガキにこれほどまでよろこばれるとは思いませんでした。早速旭川の今井氏に頼み第二号集をとりよせお送りしました。

(第五号)

十月二十日 北キツネ第二号集の絵ハガキありがたく拝見しております。三ヶ月の下 夜の遠吠えの構図に敬意を表します。山想会総会にご出席ご苦労様でした。老境に入ったメンバーに、夜の会合は出足がにぶらないででしょうか、何分よろしく願います。

紅葉に囲まれた静かな病院に山仲間とお見舞に参りました。このころはまだ元気で、山の話がつきず、帰りにはエレベーターまで見送りを受けました。

(第六号)

十一月十日 昨日は遠いところご来院下さいまして厚くお礼申し上げます。五十年來の山の仲間にお目にかかり楽しい一日でした。駒形会(注・山想会創立当初の古いメンバーで現在七十歳前後の集り、駒形橋際にある前川うなぎ店主も仲間で会場とする)が老人会の型になって来ましたね。ゆつくりとうなぎを食べて山を語るところに特色が出ています。今後もつづけたいものです。北キツネの絵ハガキ沢山ありがとう、楽しんでおります。よほど北キツネに愛着をおもちのようでした。そしてこの手紙を貰ってから数日後、ヒュッテ竣工披露を現地で行いましたので、その報告を差し上げました。筆まめな先輩のことだから、さぞよろこびの返事があるだろうと心待ちにしておりましたが残念ながら十一月の末ごろから経過悪く、一月三十一日にお亡くなりになりました。

合掌

略歴

明治四十年三月 浅草区今戸町に生る。豊山中学を経て法政大学法学部に入学、体育会山岳部に入部

昭和四年卒業 山想会(OB会)に入学、昭和四十七年山想会名誉会長

昭和二年 日本山岳会に入会(会員番号一〇四八番)この間理事等をつとめる、昭和五十三年名誉会員になる

昭和五十九年一月逝去 享年七十六歳

職歴

日本専売公社東京地方局調達部長

右停退後 坂井印刷(株) 榎乾倉庫を歴任

昭和五十九年一月 正五位勲五等瑞宝章授与さる

ありし日を追憶し、心から謝恩とご冥福をお祈り申し上げます。この稿を終ります。(秋元常夫)

渡辺 漸氏(一九〇三—一九八四)

渡辺漸氏(すずむ、通称ゼンさん)が亡くなった。行年八十歳。戦前ひろく知られた岳人である。

終戦後、朝鮮平壤から引き揚げ、広島大学で原爆白血症の研究に力を注ぎ、築地の国立ガンセンター研究所に移ってからは、病理学の大家として国際血液学会を主宰し、昭和五十三年に退官した。本職に多忙だったので、あれほど濃厚だった山の世界とのつながりもうすれ、たまに東大山の会の集りに顔を出す程度だった。

昭和一〇年前後、私が学生のころ、ひと廻り年上の漸さんは伝染病研究所の方が閑なのか、よくルームに遊びにきて持ち前の憎まれ

口をきいたものだが、不思議な人気があった。

今から三年前、東大山の会五十周年の出版記念パーティーに珍らしく顔を出し、乞われての挨拶に、こんな本が出るのにボクに一行も書かせないとは不愉快だ、と大声をあげたことがある。この肥満の老紳士が誰なのか知らぬ大勢はどよめいたが、すぐ、そうだ、と有めの声援がかかったので大笑いになった。無邪気なおおらかさをそのまま保持した老年だった。

私は漸さんの一古い友人、西堀さんの依頼で（同氏が会葬不能になったので）山の弔辞を読んだが、山関係の人は少なかつた。だが、日本山岳会、AACR長寿会、東大山の会から贈られた三本の白い供花は、故人の在りし日の山の遍歴を物語り、その霊を慰めたと思う。

漸さんの山は、大正十一年、旧制三高入学で始まった。登山史的に見ると、その前年の九月、榎さんがアイガー東山稜を登っている。入る前に浪人塾で西堀さんと知り合い、そろって合格したところは今西さんが落ちて来て、三人一緒になった。高橋健治、桑原、四手井、奥等と言う人が加わり、三高山岳部の出発となる。

関東育ちの漸さんは生粋の京っ子達に持ち前の陽気さとひょうきんさですぐ溶けこみ、中学時代にアルプス縦走の経験をもつ今西、西堀をリーダー格として、皆とスキー練習に精進した。鈴鹿や伊吹から、当時の名門、山スキーのグレンデ、関温泉で合宿し、慶応学習院や明大の東京勢と顔を合わせる。高校二年の夏、立山、薬師、槍の縦走で初めて日本アルプスを知り、同年秋には、今西、西堀、

四手井と四人で甲斐駒に登った。

京の質屋に田中喜左エ門なる人物がおり、関西のスキーの先覚者で山の洋書のコレクターでもあった。若いグループは喜左エ門氏から教えられるところが多かつたと言われる。その蔵書は新知識の宝庫で今西さんは難解なヤングのマウンテン・クラフトに没頭し、漸さんは三高部報に、マンマリーのツムット尾根やモルゲンタールの訳文を載せた。

大正十四年春、漸さんは京都を離れて東京大学の医学部に進学した。

大学四年間の前半、専ら京都の仲間と行を共にした。三高グループが連続的に大きな登山活動を始めるのは、高校を卒業し京大に移る大正十四年の春からようである。

漸さん参加の目ぼしいものを拾うと、卒業の春の、南ア・北岳仙丈の積雪期初登頂、西堀さんがリーダーだが、体が不調だったのか、漸さんは登頂を逸した。夏の今西さんとの、劔源次郎屋根の初登攀、大正十五年春の黒部源流東沢の雪中露營生活。そこからの放射状登山。京都は舶来ものをそのまま受けつけない土地柄で一旦吸収しても、独自のものとして出てくる、と言われる。東沢の露營は当時の登山界として斬新な試みで、移動性をもつ基地の設営に、京都の海外遠征構想のヒナ型を見る人もある。その可否は別にして、漸さんの山登りが大正末期に、しかも京都で始まったことは、考え方に並々ならぬダイナミズムを持ち込んだ、と考えても間違いあるまい。

東京に移った大正十四年の秋、故人は日本山岳会に入会した。会



員番号九四八。現存する三ヶタ番号の会員は指で数えられるくらいだ。当時、少数の幹事が会の面倒を見ていたが、漸さんの入会を、明大の馬場忠三郎、法政の田中管男の入会申請と共に受理した五名の幹事は、木暮、高頭、冠、榎、鳥山の五氏である。

東大時代の後半、漸さんの山の道づれは、三高の仲間か山岳会の冠、岩永、別宮と言う人たちに移った。年齢もこの順で、漸さんが一番若かった。冠、岩永両氏は黒部開拓の名コンビであり、黒部上ノ廊下を通過して薬師沢から有峰に抜ける新ルートの山行に、漸さんは参画した。また、文部省撮影班と多数の工夫をつれた古強者の冠さんの鹿島槍行に参画し、四十半ばを越えた冠さんと二人で東尾根初登攀の成果を手に入れている。

昭和四年、東大医学部卒業、病理学教室に残る。三男の高根君（父君と同じく東大山の会々員）がくれた故人の自伝的随筆『癌研究と私』を読むと、漸さんは、「病理学に行つたのも父の跡を継いで町医者になるのが嫌だっただけで、本当は儒学者の祖父に倣い学究になりたかった」と書いている。

さて、漸さんが会員として右の山行を行っていた日本山岳会は、当時、すなわち昭和の最も早い時期に、登山界でどんな位置にあったか。

大正後期から昭和初頭にかけて、登山界の主流は学生登山界に移っていた。学校山岳部の会誌が登山の主流的な読みものになり、『山岳』は原稿難に悩む時代が続いた。大正中葉、探険時代を終えたあと、山岳会の主力は奥羽秩父に目を転じ、そのエスプリに微細な変化が見られた。初期の剛毅から、日本の古典的な、思索的な旅心へ

の回帰が目立ちはじめた。旅心を基調とする紀行は内省的で美しかったが、西欧の登山思想にとらえられた外向的な学生群を魅する力に欠けていた。角田吉夫編さんの『山岳』二五号までの総索引を見ると、今日近代登山の代表的先駆者と目される人々でさえ、昭和五年までまったく言うほど『山岳』に筆をとっていないことに驚かされる。

これをどう解釈すればよいのか。私なりに解釈すれば、日本の山はその穏やかな山容ゆえに、従来のままの山行を続けるかぎり、新しい形式の登山を生み、それを次々と発展させる内なるパネを持たなかったのではあるまいか。積雪期の日本の山々が第二の探険時代のすばらしい対象であることを発見するには、大正中葉後の外来思想の流入を待たねばならなかった。新しい登山の波は山岳会の外側で発生し、発展し、それが次第に登山界の主流的性格を持ちはじめたのだ。

それだけに、昭和早期の『山岳』に寄稿した漸さんの「観の新登路」や三高・京大の人たちの「東沢」は、新しい登山のあり方を紹介した新鮮な記事であったにちがいない。

大学を卒業したばかりの、この漸さんに山岳会から、新設の理事会の一員として『山岳』の編集依頼の話がかかった。二十六歳の青年に求められたのは、たんなる会誌の編集でなく、それを通じての新しい会づくりにあつたことだ。

松方さんの山岳会五十年回顧を読むと、昭和四、五年のこの時期に初めて、現在の会の運営の理念と原型ができたことがわかる。英国やスイスの山岳会を勉強した松方さんは昭和三年に帰国したばか

りだったが、その翌年に新旧の有能な人々を語らって、新らしい会  
づくりに着手した。分散した登山勢力を日本山岳会に糾合する事業  
の発足でもあった。

ルームとライブラリーの開設、山日記と会報の創刊、従来の幹事  
会制を評議員制に移し、選挙による理事会制を設け運営の中心組織  
とする。近代登山の発生地涸沢にスイス風の会の山小屋をつくり、  
寄附金募集のため会を財団化する案。会長制の発足により小島鳥水  
の初代会長、高頭、楨両氏の副会長就任。まさに新旧合同による山  
岳会の復権である。

会誌『山岳』は山岳会の顔であり、問われるのは顔つきだけであ  
り、それがどこを向いているか、でもある。冠さんと二人で編集し、  
苦勞話を編集後記に書いた漸さんの手で、『山岳』は面目を一新し、  
新時代に応える中心的な山岳雑誌としての素地を確立した。最初の  
号から、従来の紀行ものと並んで、小川登喜男の谷川の岩登り、今  
西錦司の雪崩や森林限界、佐々保雄の千鳥、北海道、東北の山岳文  
献索引などが載りはじめた。

登山界に広げて設けられた図書批評欄は、登山の論壇として新鮮  
だった。多くの才筆にもこと欠かなかった。藤島、伊藤(秀)、浦松  
等が東西の登山論を書きとばし、松方さんがA JやH Jの紹介に縦  
横の筆をふるった。漸さんは時の人、時の本、長谷川伝次郎の「ヒ  
マラヤの旅」紹介に長文を書いている。

近代登山には、より高く大きいもの、より困難なものを無限に追  
う魔性の一面がある。学生登山界は心情的にすでに日本の山の枠組  
を超えはじめていたし、実際に時代の先端は早くもアルパータまで

届いていたのだ。大学時代、理事三年の間に、英独の読める漸さん  
は随分ヒマラヤを勉強したらしい。堀田弥一は、長谷川伝次郎、松  
方、浦松、そして渡辺漸の「カンチ」の講演を聞いて、ヒマラヤ行  
を決意したそうだ。堀田はインド測量局のアドレスを漸さんに求め  
ている。

昭和七年、三年間の『山岳』編集を終えて漸さんは理事を退任し  
た。学生登山者群が着実に会に流入しはじめた時期である。

昭和十年暮から十一年初頭、東大現役の南千島茶々岳遠征に乞わ  
れて隊長となる。帰京して間もなく、二・二六事件が帝都を震撼し  
た。

昭和十三年に夫人を迎え、十六年、朝鮮平壤に病理学の職と研究  
の場を得て、対中国戦争に行きつまり梗塞状態にあった内地を離れ  
た。漸さんにとっては、充実した長い山の日々との別れでもあっ  
た。

戦後、昭和三十一年、藤島敏男氏の懇意で会に復活したが、日本  
の近代登山の発足とともに歩んだ長い日々の思い出は、胸底深く仕  
舞われてしまったようだった。

(後記、拙稿について西堀、山崎、松家晋、平井吉夫諸氏のご助  
言があったことを付記します)

(田口二郎)

## 加藤 恭平氏（一九〇九～一九八三）

加藤恭平君は慶応在学中の昭和五年に日本山岳会に入った。会員番号一八四番、紹介者は角田吉夫、藤田信道、松方三郎の三氏であった。たまたま私と同年の入会で、番号も私の五七番あとであったが、当時はお互いに知り合うこともなく過ぎていた。

慶応高等部の卒業は昭和六年だが、在学中から法政大学山岳部の人たちと親しくしていた。これは、宇都宮中学時代、茨城の海岸で毎夏ともに遊んだ土浦中学の秋元常夫氏（本会々員番号二六二三番）が、法大山岳部に入り、同部の山行に特別参加として、加藤君にも同行を勧めたのが始まりであったという。

秋元氏の記憶によると、加藤君は他の部員たちとも融合して、よき山仲間となり、法大山岳部が谷川岳毛渡沢に最初の山小屋を建設した折にも応援して「小舎賛助員」とされ、同山岳部のスキー合宿には、昭和三年の関温泉、四年、五年の熊の湯と毎冬参加し、七月一月には毛渡沢小屋生活にも加わって、その間、仙ノ倉山へスキー登行、同部の夏期山行では、秋元氏をリーダーとして烏帽子から槍ヶ岳へのコースを歩いたとのことである。

加藤君は栃木県塩谷郡高根沢町の出身なので、北関東や上越国境方面の山々にとくに親しみを抱いたようで、法大山岳部の角田吉夫氏と、昭和六、七ころ、那須岳の茶臼から三本槍のスキー縦走をやったり、昭和八年の八月にも、奥塩原の大佐飛山（一九〇八）

へ出かけている。大佐飛山行については会報二八号（昭和八年九月）の会員通信欄に報告しており、それによると、荻平から大佐飛川を遡行、途中四泊して鹿又岳、日留賀岳を縦走して小佐飛川を下り荻平へ戻ったとのことで、当時会員だった浅野松蔵氏と同行したと記されている。

なお会報三二号（昭和九年一月）には、昭和八年十二月十日、十一日の富士山行についての会員通信が掲載されており、時日は不明であるが、冬の北海道にも出かけていたことが、大雪山、十勝岳で撮影された写真で明らかである。

加藤君は恵まれた家庭に育ったので、好きな道を選んで、とことんまで追及して生きてきた。なかでも写真に関しては玄人といつてよく、戦前は写真工房、東京工藝社を主宰し、林忠彦氏はじめ多くのすぐれた写真家を育て上げ、戦後はカラー現像所の株式会社クロマートを経営していた。晩年には油絵制作に熱中し、脇田和画伯に師事して、五十二年一月には文芸春秋画廊で個展を開くとともに、その三年後には三十五年ぶりの写真作品展をやったのけた。ゴルフ歴も長く、最後まで、日光カントリー倶楽部のキャプテンを務めてきたが、病魔には勝てず、肺ガンのため、昭和五十八年五月二十日、七十四才の生涯を閉じたのであった。

（なお同君は戦時中に本会との縁が切れていたもので、昭和五十一年六月に旧会員番号で復活手続を完了した）

（島田 巽）

## 折井健一氏（一九二一—一九八三）

日本山岳会にとってかけがえのない人材であった折井健一氏が亡くなられたことはまことに心残りなことである。すでに八十年の年輪を数える会の伝統をよく受け継がれていたメンバーであった。最近の本会の行事をみてみると、何かその伝統の光りが一つ一つ消されていくのではないかとうれいていた矢先きでの折井さんの死は、それだけに惜しまるのである。

折井さんはご存知の通り、表立つことはされなかったが、裏方として、会のために十二分の力を注がれていた。

昭和三十七年の春ごろのことだが、信濃支部長の高山忠四朗さんが、西穂山荘の村山守さん同道で、当時のお茶の水のルームを訪ねてこられた。いまの上高地山岳研究所のそもそもの話の発端とこれになるのだが、高山さんのお話によると、いまの山研の場所にあった案内人組合の小屋が不用になったため、これを日本山岳会の所有にしては、ということであった。本会の何人かのお歴々がこの説明の集りに顔を出されていたが、ある長老の一人がこの話を誤解され、山小屋のおやじの代わりを日本山岳会がすることはないと、木で鼻をくくったような発言をされた。

追悼 私もちよっとびっくりしたが、中でも守さんは、自分は好意でこの話をしにわざわざやってきたのに、とひどく心証をそこなわれてしまった。集りがすむと、折井さんは高山さんと守さんをお茶の水

駅裏の飲屋にさそい、飲めない酒盃を手にしなから、会の長老たちのいんぎん無礼な発言をあやまり、なだめていた。私も折井さんにさそわれて同席したが、あのとき、守さんを怒らせたまま松本へ帰してしまつたら、多分いまの山研は日の目を見なかったに違いない。

折井さんと太田敬さんらの骨折りで、会の所属になったこの小屋は、平家建ての普通の民家で、善大沢の洪水などに会い、老朽化して昭和四十四年に閉鎖し、新しく建てなおすことになった。いろいろな案が出され、折井さんも熱心にやっておられたが、いよいよ具体化の段階に入ったころ、折井さんは肝炎をわずらい入院されてしまった。折井さんがやるはずになっていたすべての仕事は、私にお鉢がまわってきて、高山さん、早乙女さん、伊倉さん始め関係者のご協力を得て、何とか切り抜けたが、あのときもつと折井さんいろいろな相談すればよかったと、いま思っている。

折井さんとは何度か山へお伴をしたが、印象に残っているのは、東京支部主管で、昭和三十七年十二月、富士山五合目の芙蓉荘で行った第一回氷雪技術講演会のときである。チーフリーダー折井、サブリーダー山崎、マネジャー芳野魁夫、コーチには村木潤次郎らという顔振れで、折井さんは手袋もつけず熱心に受講生にアドバイスをされていた。（この講習会は昭和五十二年五月、山研での第十九回まで私の手もとに記録があり、ほとんど毎回私も顔を出していたが、いまどうなっているのだろうか）

折井さんは私などの後輩からみても、日本を代表する優秀なクライマーの一人に数えられる。小学校時代から山登りを始め、松本中学から早稲田第一高等学院に入ったのは昭和五年だが、早稲田の山

岳部の計画には昭和六年二月の鹿沢スキー練習から参加している。

そして折井さんは、当時北アルプスの主要なピークの積雪期初登頂時代が一段落し、第一線の登山者によるバリエーション・ルート登攀の華やかな時代の幕を自らの手で開けていったのである。それはいうまでもなく氷雪の北穂高滝谷の開拓であり、昭和七年春から昭和九年春まで五次にわたる槍平室堂生活のすべてに加わりその秘密のベールをはいでいった。昭和七年春の第一次槍平生活では、パートナーの出牛陽太郎と二人で、雄滝の氷瀑を突破A沢から大切戸へ抜け、この氷の未知の谷に初のトレースを付けた。そして最後まで残された第四尾根は、昭和九年春の第五次生活で三回に分割して登攀を完成させた。

氷雪にくるまれた岩稜の登攀にそなえ、出牛氏とともに、冬の三峠の岩場でアイゼンを付けてのクライミングの練習や、第四尾根にある鋭いカンテの乗越のため、トリコニー6号をべた打ちにした特別製のクライミング・シューズを四谷の高橋に作らせたことなど、その苦心談をいくつかうかがったことがある。

自然保護にはことに熱を入れ、また日本山岳会ばかりでなく日ネ協会の役員として何度かネパールを訪れ、あるいは韓国との国際交流登山など、きわめて広い活動をされており、その素樸な人柄は多くの人に親まれていた。

#### 略歴

明治四十五年一月十六日、松本で生れる。

昭和十一年二月、早稲田大学商学部卒業。

昭和十三年十月、日本山岳会入会、会員番号一七五五番（紹介者

和田一男、中島博美）昭和四十九年五月終身会員

昭和三十年～三十三年、三十五年～三十九年日本山岳会常務理事、昭和四十一年～四十二年、四十四年～四十五年～五十年～五十一年評議員

昭和五十二年～昭和五十五年日本山岳会副会長

昭和五十八年九月二十九日死去 七十一歳。

法名 槍岳院常念妙健居士

著書 「登山を始める人のために」（昭和三十七年、池田書店）

（山崎安治）

## 林 和夫氏（一九一六～一九八三）

林和夫さんが卒然と逝かれたのは昭和五十八年九月二十五日、高速自動車道の事故に因る。その日は激しい雨であったという。

ほんの二ヶ月前、林さんや旧友と大雪山からトムラウシ山へ歩き、まだその余韻を楽しんでいた時のことであった。

林さんは札幌一中山岳部の一年先輩、高が知れた登山しかできない訳だが、林さんらが五年生の昭和八年、トムラウシ山から大雪山に縦走した。当時松山温泉（今の天人峽）からトムラウシ山へ路があったが、その先、大雪山までは古い測量刈分けが残るだけで、その思い出の強烈さはわれわれに一生山の姿を焼きつけてしまった。昨五十八年の山歩きはその五十年記念であった。トムラウシの頂上

下の沼辺には以前に変らぬ残雪があった。この雪だな「男」をやったのは、パイナップル罐をかこみ騒いだ事が思い出された。「男」とは眼をつぶりブロックン・パイン罐にフォークをつつ込んで喰べるあそびで、林さんが考案者という。フォークに何もなくてもいさぎよく次にまわす。泣きことは言わない。いかにも彼らしい発想で、それを林氏の男といった。

昭和九年、林さん達先輩はそろつて北大に進み山岳部員になった。そして憧れの日高の幌尻岳、ナメワツカ岳（初登頂）カムイエクワチカウシ山に行くが、日高側に迷い込み一週間下山が遅れた。一行は西村リーダー、葛西、有馬、林の三人は中学同級生であった。（この四人は雪崩遭難、不慮の事故で皆物故された）。捜索隊中野征紀さんらとの出会いは林さんが山岳七四年に述べている。彼はこの時から山と離れられなくなった。林さんの山岳部現役の山登りは天気に恵まれず、雨男振りが少し評判であった。春の石狩岳、夏のポンヤオロマツプも、昭和十一年春のコイカクシユサツナイ岳も駄目であり、昭和十二年ベテガリ岳も登頂の日からの吹雪で果せなかった。林さんは身軽でバランスが良く岩登りの達人で、昭和十三年十二月十勝岳の八手岩に登攀した。氷雪をまとったこの岩峰を仰ぐ度に凄いのだと思ふ。学部に進んでからは実験・実習が多く几帳面な林さんの山行は多くなかったようである。しかし後輩の指導はきびしい方で、他の先輩はあだ名で呼んでも私たちは林さんを林氏といった。林さんは林流スキー術を論じ、また上手だった。それは北大伝統の沢本三郎流とは別派だった。その頃沢本さんと部首脳者の間に意見の大激突があり、沢本著スキー教程は氏に返却される事件があっ

た。林さんは議論を戦わせた一人らしいが、何故かその内容は後輩に伝えられなかった。林さんらは林流の色濃い新スキー教程をつくり、卒業後大分後に登山スキー術として出版された。沢本さんは後輩（林和夫？）の誤りを正すべく「正しいスキー術」を出版された。スキー術が激突の原因でなかったと思うけど後々まで面白いことであった。

林さん卒業の昭和十五年一月、冬のベテガリ岳登山が行われた。卒業研究で林さんは参加しなかった。ベテガリ隊は雪崩遭難で八名を失い、そのなかの葛西、有馬さんは彼の中学以来の親友であった。二人の遺稿集「歩み」は林さんが編輯された。「歩み」は故人の人柄を偲ぶにふさわしく、また林さんと彼らの厚い友情を読む人に感ぜずにおかない。

林さんは学生の頃から海外での登山に意慾を燃やし、カムチャツカやヒマラヤを目標に研究していた。私の年代は大勢いたが楽しく騒いでいる許りで、研究会で時に発破がかかったが不発に終るのを嘆かれていた。

戦後、林さんは日本山岳会の理事としても会の再建につくされたと聞いている。山岳会員の多くの方々、藤井、堀田、望月、太田、藤平さんなどを紹介されたのもその意味あいが深かったのである。マナスル登山が行われた当時、林さんは会社経営に専心されて直接に計画に参画されていなかったが、後に北大からの遠征サポートの大きな柱となって自分の夢を若い後輩に託していた。それだけに筋の通らぬ事にはきびしく、うるさ方と思う者もいたに違いない。昭和四十五年北大山岳部は大麻事件で学内公認団体を取り消さ

れた。林さんはこの年ダウラギリV峯の隊長で念願の果される筈であつたが、計画を中止された。山岳部長を辞任した私は封筒がふくらむ程長文の手紙を頂いた。それは登山とくに遠征への一徹な心情と痛恨にあふれていた。昭和四十八年林さんはカナダ・コロンビア氷原へ山岳部五十年記念登山隊をひきいて行かれた。最長老六六、最年少一八歳、老若男女三二名が満足したのであつた。林さんは若者たち許りでなく老先輩にも心を配り組織者としての手腕を発揮する。だから林家ほど北大の若手から古手まで集めた所はない。そのなかで厳冬のヒマラヤの計画が林総隊長を中心に生れ、昭和五十五年十二月バルンツエ登山が成功した。暫く続いたネパール帽に白いあごひげは彼のうれしさを物語っていた。そして二年後厳冬のダウラギリ一峯も、トムラウシ以来の旧友有馬純君を総隊長として登られた。二人のバラサーヴとの山行は古い思い出に新しい感慨が加わつて私は忘れられない。

正直なところ林さんは少しおつかれ気味だった。だから大雨のなかでも車を走らせ、ゴルフで鍛えに行かれたのでないだろうか。次に北の山に現われた時、林さんらしく先頭切つて歩き遅れた者をからかえるように。

多分林さんはこう言うだろう「土方商売の地質家にしては遅いね、ノータリン(ヴォルタレンー鎮痛剤)のんでも駄目か」。そういう言葉はもう聞く事ができない。

日本山岳会入会 一九四〇年八月 会員番号一八三二番

(橋本誠二)

## 大塚 武氏(一九一七—一九八三)

東京商大(現一橋大)山岳部の『針葉樹』第十号(昭和十四年九月刊)は、昨夏神威岳で亡くなった大塚武君が中心となつて編集したものであり、五十ページに亘る主要内容の「前穂高東面に就いても、彼が纏めたものである。特にその「序—反省と新しい出発へ」は、彼自身の筆になるもので、当時の彼の登山に対する考えや、山岳部についての考え方がよく出ていると思う。現在『針葉樹』第十号は、当時の多くの山岳部報の例に漏れず、入手困難な書物になつたが、右の一文は幸い先般完成された山崎安治氏編の『日本登山記録大成』第四巻に、付図も含めて全文採録されているので、読むことが容易となつたのを喜ぶものである。ただ少々訂正しておきたいのは、同書末尾の解説には、岩壁のスケッチが小谷部全助君によるとなつているが、これは誤りで、同スケッチは略地図と共に大塚君の筆になるものである。この前穂高東面の岩壁スケッチは、当時えがかれたものの中では最も優れていたと思うので、このことを特記して訂正しておきたい。

大塚君は昭和十年四月に東京商大予科に入學と同時に山岳部に入部し、同年の日江井正巳君と共に翌年には早くも頭角を現わしてきた。そして十二月、小谷部、森川真三郎君らの北岳パトレス登攀のサポートを、この二人と私とでやり、三人で池山釣尾根のテントから北岳に登つた。

その後も大塚君の山行は年を追って充実し、その足跡は『針葉樹』第十号に殆ど取められている。だが、彼は学生時代に行なった数々の登攀のなかで、彼自身も快心だったと思っていたのは、昭和十四年十二月の滝谷第四尾根の登攀であり、これは厳冬期としては初登である。この登攀について彼は請われて昭和十五年五月二十三日、日本山岳会第九十五回小集会で話をしているし、『山岳』第三十五年第二号、二五四ページ及び山崎安治『剣の窓』二四五ページ参照)、また「冬の滝谷第四尾根のツルム」と題する写真と短文とが『高山深谷』第十輯にかかげられている(序でながら、その説明に昭和十五年十二月二十五日となっているのは、明らかに十四年の誤り)ものの、その詳しい登攀の様子は、間もなく戦争時代に入ったため、遂に彼自身の筆としては発表されなかった。戦後刊行(昭和三十年十二月)された『針葉樹』第十一号に、ごく簡単な記述がある。他は、当時のバーティだった山田亮三君が『針葉樹会報』八十七号(昭和十五年一月刊)に書いたものが残っているだけである。また戦後刊行の『山岳』第四十四年第二号の口絵写真に第四尾根の上部から、ツルムの尖塔と笠ヶ岳を写した一葉がある。『高山深谷』のものと同様、大塚君の写真らしい迫力のあるものである。

また、学生時代の彼の山に対する気魄を知る資料として、彼が愛読し且つ翻訳したW・メルクルの *Ein Weg zum Nanga Parbat* の一章「グラン・シャルモ北壁の登攀」がある(『針葉樹会報』八十九号)が、その前書きに彼は次のように書いている。

「我々はヒマラヤ登山史上に於けるメルクルの名を忘れる事が出来ない。(中略)一九〇〇年南ドイツの小邑に生れたメルクルは、

大戦にも参加し、戦後の国歩艱難なる祖国に於て、鉄道者の技術検査官としての職を持つ傍ら、低い山から高い山へ、容易なる山から困難なる山へ、彼の精進は絶える事がなかった。生命をかけた一峰をかちとる毎に、彼の眼前には更に高き峰が現れた。それは妥協のない、満足する事を知らぬ、それ自身の中に価値を持つ所の道であったと言う事が出来る。その最後の一環としての一九三四年のナンガ・バルバット攻撃——我々はそれが、学者的探検旅行でもなく、登ったのか、登らせて貰ったのか分らない様なブルジョア的登山でもなくして、最も普通な生活者の挑まざる精進の最後の、然し悲しき結実であったと言う点に、深い尊敬の念と一種の身近い感情を禁じ得ない。そして彼の道に於て、数多くのビッグ・クライムの中の代表的なものとして、又それが現在の我々の行方の目標となる意味に於て、我々には直接縁もゆかりもないモン・ブラン山群の高峰、グラン・シャルモの北壁登攀の概略を伝える事は、無意味ではないと思う。」

大塚君は機会さえあれば、当然ヒマラヤへも行きたかったろうし、その能力も充分あったと思う。晩年二回もヒマラヤ・トレッキングへ出かけているのも、若い時代行けなかった不満を、僅かでも満たそうとしたからであろう。唯、彼の場合は、その理由の半ばは、当時既に腕をあげていた油絵の題材として、ネパール・ヒマラヤがすっかり気に入ってしまったこともあったが——。

大塚君は昭和十五年一橋山岳部の代表委員となり十六年三月卒業して日本銀行に就職した。日本山岳会に入会したのも十六年四月で会員番号一九一四、紹介者は吉沢一郎氏と私であった。戦中戦後を



混乱期に一時会籍を離れていたが、山登りを忘れてしまった訳ではなく、しかも相当年配になっても、登るからにはかなり骨の折れるコースを指向するのが、彼のこのみでもあった。

北海道の山は、戦前日本銀行へ入行した年の冬、札幌勤務となった機会に、早くも十勝岳や後方羊蹄山に登っているが、昭和三十九年七月札幌支店長となつてからは、坂本直行氏との付き合いも始まつたし、また他にもいい仲間ができて、北海道の山をあちこち登つて来た。四十一年八月の利尻岳は鬼脇から登つて鴛泊へ下るといふ具合であり、四十二年三月のニセイカウシュベではかなり時間がかかつたようだが、この山は曾て私が札幌在勤中遂に登り残した山だったので、彼から得意な便りを貰つた記憶がある。また彼が東京へ戻つた後、四十二年六月には、曾ての古戦場でもあつた滝谷を、槍平から登つてみたいといつて山田亮三君を誘ひ、中島寛君ら若手三名とCルンビ左俣を登っているが、あまり天気がよくない時だつたようだ。彼の五十歳ごろのことである。

日本山岳会への復活は昭和四十五年一月だが、同年十一月には日銀から北洋相互銀行に転出して札幌に居住するようになった。三十八、九年ごろから本格的に始めた油絵を、忙しい銀行生活の合間にえがき、また山やスキーにもよく出かけていたようだった。本会北海道支部長の伊藤秀五郎氏が不治の病に倒れてから、同氏や中野征紀氏の推輓で支部長となつたのは昭和五十年四月のことであつた。

それ以後、彼が亡くなる迄支部長だつたわけだが、その間は包容力ある彼の人柄と努力とによつて、支部の中堅、若手の会員がよく協力し、北海道支部は活気が溢れているように思われた。特にベテ

カリ岳（五十二年六月）、カムイエクウチカウシ山（五十六年八月）、羅臼岳（五十八年七月）等のかかり大がかりな登山を支部行事として行ない、参加した多くの会員会友によい思い出をのこしたことは記憶に新しい『山岳』第七十八年、八〇ページ以下参照。支部の育成発展に彼自ら大いに努力したばかりでなく、北海道岳連や北壁のヒマラヤ登山に際しては、特に一番面倒な募金問題等で、或いは力を貸し、或いは自ら陣頭にたつて尽力した。

大塚君は、前にも一寸触れたように、特に先生についていたのではなかつたが、油絵が非常に上手だつた。生前、札幌で三回油絵の個展をやつたことがあり、四回目は既に準備していたのに、残念ながら遺作展となつた。去る三月六日から十二日まで札幌で開催された。晩年の作品は、特に色彩が美しく厚味が感じられ、且つコンボジションも素晴らしいものであつた。また、囲碁は日本棋院五段、関西棋院六段だつたというから、並々ならぬ腕前だつたのであろう。

大塚君は学生時代年間百日以上も山登りに費しながら、高橋泰蔵先生のゼミナルでは抜群の成績であつた。日銀に入行後も、たしか二度ぐらい大学に戻らぬかと言われた逸材であり学者者であつた。従つて日銀においても重要なポストを歩き、北洋相互銀行の最高責任者となつては、銀行の発展に大いに寄与したばかりでなく、北海道経済界でも多くの要職に就いていた。

しかし、それらに関わりなく生れながらの誠実さ、それでいて常に笑いを絶やさぬ大らかな性格や銜うことのできない、常にまる裸かである性分は、学生時代から変ることがなかつた。そして一見ブツキラ棒に見えることもあつたが、実にあたたかい心の持主であつ

た。大学では私より三年後輩にあたるが、曾て旭川で軍隊生活をしてきた私を、真冬の雪をつけて札幌から態々慰問してくれたことなど、約半世紀の昔をまだ昨日のことにように思い出すことのできるのも、彼のあたたかい友情のお蔭である。

昭和五十八年八月二十七日、一人で南日高の神威岳に登りにゆき二十八日下山の予定であったが、帰り来らぬので二十九日夜から捜索が行なわれ、九月四日、中ノ川源流標高約八〇〇㊦地点で遺体となつて発見された。彼のような山の経験の豊かな者でも、神威岳でこのような最期をとげることがある。運命としか言いようがないのではないか。

彼の遭難が伝えられるや、北大山岳部をはじめ、実に多方面の方々から、到底文字や言葉では現わし得ないご支援を賜わった。また彼が会長であつた北洋相互銀行には文字通り尋常でないご迷惑をおかけした。山を通しての旧友の一人として未永く忘れられないことであり、彼の御霊の冥福を祈ると同時に、心からお礼とお詫びを申し述べる次第である。

略 歴

大正六年十一月九日 静岡市で生れる。昭和十六年三月 東京商大卒業。同年四月 日本銀行入行。外国為替局長、新潟支店長、札幌支店長、事務管理部長を歴任。昭和四十五年十一月 北洋相互銀行専務取締役 社長 会長。昭和六十八年八月二十九日（推定）南日高神威岳で歿。

（望月達夫）

今井雄二氏（二八九八〜一九八四）

今井雄二は明治三十一年一月一日、岐阜県下呂町乗政に生まれました。五歳のとき、父が中津川町長になると同時に、中津川へ引越しました。だから、小学校へは中津川で入学したと思います。名古屋商業を経て、東京商科大学へ入学し、大正十二年卒業しました。東京商大はその当時大学へ移行する過渡期で、入学したときは東京高等商業学校で、その後在学中に大学になったと聞いておりますが、確かなことはわかりません。

東京商大を卒業するとすぐ、神田の（株）三省堂に勤めました。わたくしは雄二が大学生時代に知り合い、大正時代、私が十五才の頃一緒に富士山へも登りました。雄二は本格的な登山をしていたわけではありません。むしろ若いときは文学青年でアイルランド文学を研究していたようです。ですから山に入っても、もりもり山を歩くというタイプでなくほんとうに山の自然を愛し、静かに山と話をしてくる人という方がほんとうであつたと思います。

昭和二年にわたくしと結婚しましたが、その頃から夫婦でさかん

に山へ出かけるようになりました。最初は、結婚してすぐ出かけた昭和二年の槍ヶ岳でした。燕岳からアルプス銀座をとおって槍ヶ岳へ抜けたのですが、これですつかり北アルプスの魅力にとりつかれるようになりました。翌年には、上高地から穂高へ登りました。そのとき、穂高から槍へと向かった

のですが、前年に槍ヶ岳を登っているので、省略して、直接槍沢へ下ってしまいました。

その頃女性で穂高へ入っている人は少なく、それがガイドもつけないで二人きりでしたので、ほかのパーティの問題になっていたようです。後になり先になりしていた登山者が先に槍の肩の小屋で待っていたらしいですが、わたくしたちが着かないので、大騒ぎになったのです。

それからは毎年のように穂高へ出かけるようになりました。もちろん、いつも夫婦一緒でした。二人とも金銭的には全く無頓着で、あるときなど、二人で山へ出かけようとして、家を出たとき、二人とも金を持っていないことに気づき、あわてて古本屋を呼んで、美術全集を売って三十五円作り、それから山へ出かけたこともありま

す。夫は無口な人で、山でも黙って歩く方でした。静かな山のふんいきを楽しんでいたのでしょう。自然のただ中に入ることに、何よりの楽しみを見出していたのだと思います。

第二次大戦はげしくなった昭和十八年頃、二十年も勤めた三省堂を退職しました。戦争が激しくなったため出版も思うようにならなかつたからです。そして、八ヶ岳山麓の蓼科へ入りました。現在の白樺湖付近です。そこで炭焼きをしたのです。というより、土地の炭焼きに弟子入りしたところでしょう。わたくしと息子は学校の都合で下の部落の柏原におりました。炭焼きがやつと一人前

戦後は出版社に勤めましたが、つぶれてしまい、自分で出版社を

始めましたが、これも思うようにゆかず、苦労しました。友人の紹介で自動車振興会のガイドブックの編集をするようになり、生活も安定し、そこには七十二歳頃まで勤めました。その間、ふたたび夫婦で山へ行くようになりました。わたくしは多くの友人と一緒にこの山へでもでかけましたが、夫は登山でもあまり広い交際をしたわけでもなく、ごく少数の人びとしか登りませんでした。

昭和四十二年にはカナダのロッキーに夫婦で出かけました。静かで、雄大で、カナディアン・ロッキーはすっかり夫の心をとらえたようでした。馬などに乗ったり、人気がない山中での生活を楽しました。四十五日間いたと記憶しています。

昭和四十六年には二度目のカナディアン・ロッキー行を果しました。今度は夫婦だけでなく、エーデルワイスの仲間、大原裕子さん、館野昭子さんの二人が同行してくれました。前回が七月から八月にかけてでしたので、二度目は六月に出かけました。やはり、四十五日間ぐらゐの旅行でした。この二回の旅行では、夫が写真を撮り、わたくしが日記をつけていまして、それを夫が整理して、「花と氷河」(同信社刊)という本にまとめました。

夫は前にも述べましたように、静かに山を愛する方で、気に入れば、歩かずに山の中で昼寝をするといった具合でした。写真を撮るのが好きでしたし、文章を書くのも好きでした。主に「アルプ」に多くの文章を発表していました。著書も若干発表しました。「高原風物誌(同信社刊)」(昭39)、「心に山ありて(同信社刊)」(昭40)、「続・心に山ありて(同信社刊)」(昭45)、「花と氷河(同信社刊)」(昭47)、「スカートをはいいたクライマーたち(蝸牛社刊)」(昭54)

などです。七十七歳までは山へ登っていましたが、その後は胆石のために入院したりして、自宅に居りました。最後の著書「スカートをはいたクライマーたち」には洋書を取り寄せ、熱心に調べていました。

日本山岳会には昭和二十三年六月に入会し、会員番号三〇四二でした。昭和五十九年三月十五日、肺炎になり、心不全のため死去いたしました。享年八十六歳でした。戒名は高峰睡好雄信士としました。そして墓石には「心に山ありて」と彫りました。

(今井喜美子・述)

(水野 勉・筆記)

## 牧野 文子氏（一九〇四—一九八三）

昭和五十八年八月二十日発行の「山」に文子イタリア委員について、如何に彼女はわが海外委員会にとって、大切な存在であったかを書きました。彼女は、よくイタリアの山を書き、イタリア山岳文学に精通し、イタリアアルプスを愛しその自然をいくつかの詩に歌っておられます。感受性は豊かで澄んでいて、いつも若々しさを読む者に感じさせずにはおかない筆の力の純粹さに驚かされるものです。

一九八三年六月八日に腎不全腸管出血で昇天されるまでの七十八才の御生涯は、彼女の良き理解者である四子吉氏といつも行動を共

にしておられ、海外委員会例会にもお揃で御出席になっておられました。

昭和四年に四子吉氏と御結婚なさる前は、彼女は山脇敏子先生のお店のマネジャーのような仕事についておられ、そこで四子吉氏とお会いになり、お互いに自然を愛し、その大いなる魅力に殊の外ひかれておられたお二人の性格は、やがて尊敬、協力、愛情と進展されたのは当然の事のように考えられました。

文子様はなによりも書くことが好きで、いつでもなにかを書いていました。夫の四子吉氏は語られました。古びた大学ノートのうち高い束を、私に見せられ、文様が十数年書きつづけておられた日記帳ですと、なつかし気に、そして優しく、その表紙をなでておられたお姿は私の心を強くうちました。

毎日のように机に向っては、いつ、どこで出版してくれるか分からぬままに原稿を、せつせと書いておられる文子様と自然の草花などを主に描いておられた御主人の優しさが、お互にそれとなく、わけ合う家庭生活を創つたようでした。「食事の後片付けは、いつも私がする事になっていましたので、文子が亡くなってからも、ひとりで台所に立つ事は私にとって大変ではありません」と四子吉氏は言われましたが、その後片付けを喜ばれる最愛の妻が、そばに居られないと思われる御主人の淋しさは、さり気なく語られる言葉の端し、はしに出ておるように受け取られました。

文様が亡くなられて、四子吉氏は彼女の遺稿を四冊出版されました。そのうちの一冊「イタリアの山を行く」(アディレ書房)には

文字姉と御一緒に歩き、たのしまれました数々のイタリアの山々に御主人のスケッチが沢山挿入され、読む者の眼をたのしませてくれます。

無理に氣どった文章を書く女性が多いのに、文字様はそんなケレン味がみじんもなく、山や村の情景をナイーブな筆致で書いておられます。その蔭に、書かずにはおられない情熱があつたのに違いありません。

山岳会にとつて、本当に惜しい山岳人を失い、その代りを務められる方は仲々無く、今更のように彼女の才能と人格が惜しまれてなりません。

彼女はクリスチャンでしたのでお戒名はありません。墓地は、京都市北区の等持院の裏にある功運院とおききました。京都はお二人の最初の家庭生活の場所でありますので御主人にとつても尚更に思い出深い所かとお察しいたします。

数々の遺稿が御主人の手で整理され、陽の目がみられますことをお祈りしております。

日本山岳会入会 一九五四年四月 会員番号四一七六番

(佐藤テル)

## 山下久男氏(一九〇三—一九八二)

山下久男先生は、会えばいつも笑みを浮かべている人であった。

あのやさしい笑みは人を安心させ、人の頑くかなな思いをほぐし、なごませ柔げる不思議な笑顔であった。一九三〇年慶応義塾大学文学部を卒業され、教職の傍、民俗学を研究。特に先生の本領は口頭伝承の調査研究で歌謡、昔話の採取の先覚者で、早く、「金沢民俗談話会」を創立、長く「日本民俗学会」の評議員として学界に貢献した。また「江沼地方史研究会」を創立、加賀市、江沼郡の郷土史の研究と後進の指導にあたり、他方、加賀市文化財専門委員長、加賀市歴史民俗資料館専門委員長、小松市立博物館専門委員長として文化財の保護に力を尽し、加賀市立図書館協議会委員長として読書会を育て、はつしほ俳句会、加賀江沼俳文学協会会長としてその発展に寄与し、郷土の山々を愛し、郷里が大聖寺と一言いで深田久弥とも親交があり、日本山岳会、加賀山岳会の会員となつて活躍するなど、その功績は顕著なものがあつた。学問については、ご出身の慶応義塾大学文学部教授折口信夫博士に師事、柳田国男翁の指導を受けて民俗学に携わつてきたことが終生の誇りであり生甲斐であられたようだ。文学の道は、古典を主としたが、その発展は学校教育の場、俳句の指導、さらに郷土の文人、深田久弥、木村素衛、石倉五洲、大田錦城、中谷宇吉郎に及びその顕彰に尽された。民俗学では、郷里の手毬唄や昔話を収集して学界でも注目された。「江沼県手毬

頃集」(一九三四年四月十日)、「加賀江沼郡昔話集」(一九三五年八月一日)を自費出版し、昔話集には師の折口信夫博士の序文がのせられた。また岩手県の遠野中学校へ赴任したのは恩師、折口信夫博士の「住みつきてうつることなし雪高き閉伊の遠野の物語せよ」とのすすめによつたと伝える。そこは柳田民俗学の創始の地であり、柳田翁の「遠野物語」の語り手、佐々木喜善に心から敬慕し、なきあと碑の建立を提案し折口信夫博士に揮毫を願ひ、自らも「昭和八年九月二七日帰幽享年四十八歳」と書した。また、一九七五年十一月

「全国昔話集成」の第十九巻に「加賀昔話集」が発刊されたが、これは郷土についての昔話集の嚆矢であり、「舌切雀」などの古い形式の民話発掘の貴重な著作とされている。また一九五〇年三月柳田国男なきあと「柳田国男先生書簡集」としてまとめられ後年「定本柳田国男集」別巻第四、「日記・書簡集」に収められたが、これは喜善研究の原典の一つとなつた。氏の活動は単に民俗学論文にのみとどまらず、広く大衆に対する啓蒙、利用にまで力を尽した。文化財保護行政面では、一九五八年加賀市制発足以来、加賀市文化財専門委員長として文化財の発掘、保護、展示に献身的な努力をされ、一九七三年加賀市歴史民俗資料館建立に功績した。民俗資料館では民俗部門の収集、展示を担当。製塩用具、農耕具、漁具、衣服等の収集し、展示会にはリーダーとして活躍した。一九五四年十一月「江沼地方史研究会」の創立発起人となり常任幹事を經て、一九八〇年九月会長となり、会誌「えめのくに」を発刊した。

文学の上では、金沢出身の作家室生犀星に接し、長女の名までいただいたが、次第に詩より俳句に力を入れ、一九五二年郷土の文豪

深田久弥の主幸した「はつしほ俳句会」に参加。以後、「魚洞」の俳名を得て秀作を残し、芭蕉が奥の細道の旅上に立寄つた全昌寺が大聖寺にあるので毎年ここで芭蕉忌を営んだ。一九七一年十一月には深田久弥を悼み「深田久弥追悼集」を編集し、一九七四年四月には「深田久弥文学碑」建立発起人となり市内の江沼神社境内に建立した。一九七三年十月には「中谷宇吉郎の幼少時代」翌年には「深田久弥の幼少時代」を著わした。

学生時代から慶応義塾山岳部に籍をおき、一九五八年十二月、日本山岳会(会員番号四八一六)に入会、加賀山岳会の指導にもあつた。榎有恒、今西錦司諸氏とも交り、白山、立山はもちろん国内の諸山をきわめ、白山、富士写が岳へは毎年登るのを例とした。先般今西錦司氏が四〇〇山登頂の偉業を達成されたが、一九七四年五月大日山、富士写が岳にお見えになられた際先生をお誘いしたら「こんな無名の山奥にお見えになる」と言うことで大変喜ばれ、一緒にした時のスタイルは地下タビに巻脚絆、将校マントと言う若山牧水ばりの古めかしいもので山深い真砂部落でイワナ山菜で酒汲み交し賑かに談笑したことが忘れがたい思い出の一つである。翌年ウエストン祭にお誘いし上高地を訪れた時学生時代以来のことと感慨深げでした。一九七六年十一月ネパールに旅行し小型機でヒマラヤの高峰を空から観察された。その際の印象を著作「日本の民話」北陸編の表紙裏に、

ヒマラヤの山々をみて

『秋天のヒマラヤの山高かりし』

昭和五十一年十一月四日小型機でエベレストの大岩壁に高度七、

六〇〇日まで接近、その豪壮なる相をみる

昭和五十一年十二月 山下久男

太田義一様

と記されお贈りいただいた。

一九八二年十一月十七日九時二十分逝去になった。享年七九。ご高齢であったとはいえまだお元気でまさかという方が多い様であった。法名、釋證久。同日従六位勲五等瑞宝章。告別式には加賀市長、まほろば会、加賀俳句文学協会、加賀地方史研究、日本民俗学会、日本山岳会等の弔辞。俳句会員の弔電献句披露があり哀情が切々と満堂に溢れいかに徳望が高く文化事業に貢献されたか、ご逝去が惜しまれた。告別式のとき、ご長男が「病気はたとえ四年前に判っていたとしても現代の医学では治せないものだったとお医者から言われた。思えば父は好きなことをして一生を終えたので本人も満足だったでしょう」と言われたご挨拶はまことに印象的でありました。山下先生のご冥福を心から念ずるものである。

(太田義一)

## 皆川文彌氏（一九二一〜一九八三）

一九八三年、六月七日のお昼の休憩時間の少し前のことであつた。「皆川文弥さんが亡くなつたらしい」と言う電話が入つた。嘘だろう。誰しもそう思ったし、信じられないことであつた。

つい数時間前、役場の前をまだ買ったばかりの新車を運転し、笑顔で手を挙げてダムの方に向つて走つて行く皆川さんを見ているのだから、まさか、と思うのが当然のことであつた。しかし、時が経つにつれ、次々と入ってくる報せは、そのことを事実として裏付けることばかりであつたのである。

以前から「俺には、ヒザに故障があるんだ」と語っていたし、事実ちよよとした急な登りなどは、右ヒザをかばいながら登るといった様子も見られたが、その日も自宅から三十五キロ程の所に在る整骨院に出かける途中に、交通事故に逢われたのである。

あまりにも突然の死であつた。

皆川さんは、昭和十八年三月から軍役に服し、南方派遣軍の一員として、マニラ、シンガポール、ビルマ、仏印と敗戦の色濃き激戦地を転戦されているが、この間、ビルマ（と聞いている）で、ヒザに負傷を受け、その傷跡が終戦後もずつと残り、痛みも時々出ていたようで、今度の事故もこうしたことが大きな引き金となつたのではないか、とも思われ、改めて戦争の傷跡を見直したのである。

皆川さんは、大正十年、今は既に湖底に没した田子倉に生を受け、浅草岳や会津朝日岳の自然と共に生長した。従つて、四季に移り変わる浅草岳の様相や地形、山深い会津朝日岳を住家とする数多い動物達の生態等、実に詳細な分布図が彼の脳裡に刻み込まれていたのである。

このことが、後日、町役場に職を求めたときに、その豊富な知識と卓越した識見とで観光行政の生き字引きとまでに職員間でもてはやされ、重宝がられた所以でもある。

町役場では、退職する昭和五十五年三月まで、主として観光部門を担当したが、もともと好きであった民話の収集や、郷土史の研究等に精力的にとり組んでおり、中でも町の大事業である「図説只見の歴史」の編集部長として寝食を忘れての活躍は特筆すべき事柄であらう。

日本山岳会には昭和三十八年六月に、当時越後支部長であった藤島玄氏、齋藤平七氏の紹介で入会し（会員番号五五五二）、越後支部に籍を置いたが、その後福島支部に移籍している。

その頃から藤島玄、川崎精雄、吉沢一郎、望月達夫、加藤泰安といった岳界の著名な方たちを始め、伊藤弥十郎、吉野尚、武藤清次といった今は亡き県岳連の重鎮であった人達との交友が始まっており、民宿を経営していたということもあり、今迄に何回か実施した浅草岳での県体登山部門や、や、県高体連登山部門、全国インターハイ等、幾つもの大会に活躍しており、選手、役員の世話も親身になって協力して居り、選手達も生涯忘れることのできない人であると思う。

民話については、遺稿集といった彼の貴重な収録を、家族の方々誰かに将来まとめて戴きたいものである。

皆川さんは話好きであった。訥々とした口ぶりではあったが、いつしかその話に引き込まれる、という話術を持って居り、特に「マタギ」に関する話や、熊狩りの話などは実に詳しく、私共を魅了させたものであった。

今後は、民宿「田子倉」の経営をしながら「好きな民俗、歴史、民話などの収集、研究などで第二の人生を楽しく送りたい」と語つ

ていた矢先きのできごとであっただけに、運命とは言え、まことに残念であった。本当に惜しい人を失ったものである。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

#### 略 歴

大正十年十二月二十七日 福島県南会津郡只見村田子倉に生まれる。昭和三十四年八月 只見町役場に就職。昭和三十八年六月 日本山岳会入会。昭和五十三年 自然公園指導員。昭和五十八年六月七日 交通事故により逝去。

(五十嵐恵紀)

#### 樋口明生氏（一九二九～一九八三）

昭和五十八年四月十九日、樋口は食道癌の頸部、脊椎転移のため永眠した。京都市立病院での二度の食道手術にもたえて、好きな酒もほどほど飲めるようになって全快祝いしようとした矢先に、不運にも転移の症状が現われた。私の勤める新河端病院に入院してからは、腰痛、下半身麻痺、頸より肩の痛み・呼吸困難などで彼をさいた。しかし彼は病苦に対し科学者らしくきわめて冷静に立ち向った。たとえば気管切開のカニューレに取付けられた人工呼吸器の取扱い方を研究し、私たちに教えたりした。見舞いの友人たち、医師・看護婦に対し、あの独特の円い顔に人なっこい笑いを死のほ



んの直前まで絶やさなかった。七千米の高度を登っているぐらい苦しいと言いながら、看護婦が呼吸数を教える時にわざと息を止めたりしてあわてさせたことも何度かあった。

大阪出身の樋口は旧制天王寺中学を経て、昭和二十二年第三高等学校理科へ入学し、そして山岳部へ入部した。彼がどうして山岳部へ入ったかそのころ山岳部で一緒だったものに尋ねても分らない。

フラーと部屋にやって来たそうである。当時の三高山岳部はオールラウンドでコンプリートな山行を目標にして、しぶとい活動が続いていた。この三高山岳部の山に対する主張と実践が、彼のその後の山に向う態度に大きく影響したことは間違いない。彼の生涯の仇名となった「ジャン」は三高時代についている。三年間伸びるままの長髪にしていたため、ジャン・バルジャンを連想してつけられたとか、マージャンばかりやっていたのでついたとかこれもはっきりしない。

昭和二十五年京都大学理学部地球物理学科へ入学、そしてまた山岳部へも入部した。京大山岳部は戦後の混乱より立ちなおし、丁度組織的な部活動が始まったところであった。まだ人は貧しく物は極端に乏しい時代だった。そのようななかで山でも部屋でも京大の伝統パイオニア・ワークが語られ、ヒマラヤへの夢がいつも熱っぽく話題になった。

しかし樋口がそのような時に、進んでけんけんがくがくの議論に加わったりした記憶はあまりない。彼は彼なりの目と心で山を楽しんでいるような態度であった。A A C K (京大大学士山岳会) 時報の五号に、三高からの友人広瀬幸治は丁度ガネッシュの隊長を務めて

帰って来た樋口の人物評で「樋口、つまりジャンについては面白い話はいてすてるほどある。ただ残念なことには、ここに書くにはたいていあまりにもバカバカしいものであって……」と書き出している。樋口の人を楽しませる冗談を思いつく才能は、彼が漫才の本場大阪の出身ということに關係があるように思う。大阪人にはユ一モラスでいゆるオモロイ奴をよく見受ける。いずれにしろ山でも下界でも、樋口のまわりにはいつも楽しい笑いと共に酒が付きものだった。

卒業後彼は京大防災研究所の助手となり、昭和三十六年には助教に任命された。A A C KはアンナプルナII峰を皮切りに、チヨゴリザ、ノシヤック、サルトロ・カンリと遠征隊を出し、チヨゴリザからはすべて初登頂に成功した。その間樋口は研究所にあって、専門の沿岸海洋学の実験と研究に明け暮れていたようである。昭和三十七年には潮の干満のモデル実験で理学博士を取得している。

昭和三十七年、京大山岳部現役がインドラサン、デオ・チバに遠征し初登頂に成功した。三十九年には再び次の現役たちにアンナプルナ南峰(ガネッシュ七二五六)の計画が持ち上がった。現役の遠征には文部教官が引率する不文律がある。現役たちは樋口へ隊長を引受けてもらうべく宇治にある彼の研究室へ押しかけた。彼は話を聞くなり「ええ話やなあ!」と言って二つの返事で引受けたのである。これからあと山と縁が切れたかに見えていた海洋学者も、ついに海と山との二足のわらじをはくことになってしまった。

ガネッシュの隊員は副隊長がサルトロ帰りの上尾、その他の四名が現役学生であった。彼等の活躍は目覚ましく見事に全員初登頂に

成功した。樋口自身も七一〇〇のマイナー・ピークに登った。この隊の記録は「ガネッシュの着氷」(朝日新聞刊)に詳しい。樋口の指揮ぶりは隊員だった木村雅昭によれば「まなじりを決して事をなすをよしとせず」とする樋口一流の考えが端的に表われている。

昭和四十二年、樋口は松田隆男と二人でヤルン・カンの偵察と許可取得の交渉をかねてネパールへ向った。ヤルン・カンは三十九年に一度許可が出たのだが、すぐに理由が分らないまま取り消された。それから事態は全く進展しなかった。樋口たちはヤルン氷河よりヤルン・カン西尾根に取りつき、ルートに確信を得た。しかし交渉はAACKの優先権が確認されただけだった。

その後毎年申請を続け、彼等の偵察後五年目の昭和四十七年夏にやっと登山許可を受取ることができた。ヤルン・カン(八五〇五)はAACKが挑む最初の八千級級の巨峰であった。総隊長に長老西堀栄三郎、登攀隊長に樋口、そして隊員十三名が選ばれた。私も医師として参加したが樋口とは現役以来始めて一緒に山行することになった。樋口はその年に愛媛大学に新設された海洋工学の教授に決つたばかりで、本当は長期間留守にできる状況でなかった。しかし彼のヤルン・カンにかけた情熱の前にはすべてが克服された。海の水の源は山の雪、氷河にあるというような理論で周囲を説得したと聞いている。

昭和四十八年二月二十日、ダラン・バザールを四百人を越すキヤラパンがヤルン・カンに向けて出発した。ヤルン氷河上のB・Cから樋口等の偵察に従って西尾根にルートを順調に伸ばした。五月十

四日午後六時、松田隆男と上田豊が頂上に立った。しかし帰路ピバークのあと松田は行方不明になった。上田は彷徨状態に追いこまれたが必死の救援活動により救出された。このことは「ヤルン・カン」(朝日新聞刊)、「残照のヤルン・カン」(上田著・中央公論刊)に詳しい。樋口とともにヤルン・カンに執念を燃やし続けた松田を失ったことは、樋口にとつて痛恨のきわみであった。彼はすべてに大げさな表現を好まない。その後の彼の松田の遺族に対する一徹なまでの心くばりを見聞きしては、彼の心の痛みがいかに大きかったかがうかがえたのであった。

ヤルン・カンのあと彼は瀬戸内海の物理模型実験設備を呉に造つたり、新設であった海洋工学科の基礎がために力を尽した。山のほうは昭和四十九年五十一年、五十三年と三回ネパールヒマラヤ氷河学術調査隊に参加し、主に飛行機よりの調査を担当した。この調査隊は昭和五十六年に秩父宮学術賞を受賞している。

来年の昭和六十年へ中国登山協会、同志社山岳会、京大士山岳会は日中友好合同登山隊を組織してナムニ峰(グルラマングータ)に登ることになった。お互いに資料を検討しあつたが、樋口がネパール側より飛行機から写したナムニ峰の南面、カイラス・マナサロワール湖の写真は、中国側を驚かした新しい資料だった。その時私はすぐ樋口が得意の時にみせていたあの満足気な笑い顔を思い浮べたのだつた。

つい最近七月二十二日、彼の追悼文集が、刊行された。文集の表題は「海を探り、山に遊ぶ」とつけられている。彼の学問、行動の対象は地球物理学者らしく山に海に、高く深くそして広大であつた

と言えよう。

日本山岳会入会 一九六九年十月 会員番号六八三五番

(齊藤淳生)

## 柳沢幸弘氏（一九五五～一九八二）

ヤナちゃん（柳沢幸弘君）にゃんにゃんガイドのこと。

キラキラと輝く目と精悍な面構えで、僕の前に姿を現わしたのはもう五年も前になる。アンデスから帰って来たばかりの君は、国内の登攀にも燃えて、あるクラブに入会したいと僕の所に訪ねて来た。君の第一印象は、素晴らしく明るい好青年であった。それから君は暇さえあれば僕の店に現れ、「山幸トレイニング・サーキット」のトレイナーを自認、持ち前の筋力と持久力は他の誰よりも群を抜いて優れていた。また自分に対するトレイニングは、仲間達が真似のできない程厳しかった。

僕達の時代のヒマラヤは、厳しいトレイニングが無くとも登ることができたが、これからのヒマラヤは、より困難な条件を求めて行くだろうという僕達の意見を取り入れて、君はただひたすらトレイニングに励んだ。そんな君に僕は惚れ込み、ザイル・パートナーになってもらった。

初めての大きな登攀は、唐沢岳幕岩だった。岩小屋で君は将来の生活の事、できればガイドで生活をしてみたい、それにはヨーロッパ

でもヒマラヤでもビッグ・クライミングに挑戦して行きたいと熱っぽく語ってくれた。翌年の夏に、僕にとって初めてのヨーロッパ・アルプスのクライミングに君を誘った。

今でもよく人に話すのだが、六級ルートのプレチエールの西壁は君が居なければ登れなかっただろう。あのブラウン・クラックは僕にも登れるが、その上の五級のピッチは僕にはとても怖くて登れなかった。この時は、マッターホルンのヘルンリ稜を毎日四日間も連続して登った君の強さには感心したものだ。僕などは二日間でもう嫌になったのに、君はガイドの仕事がとても楽しい言っていていた。翌年のアンナプルナの南壁では、持前の強さを発揮しあの素晴らしい南壁にこれ以上のルートは無いと思われるラインを引き、見事第一次アタック隊に選ばれサミッターとなった。

君は帰国後にチョゴリ隊に選ばれ、優秀な仲間達に負けないような立派な登山をして来ますとキラキラしたあの目で話してくれた事が今でも想い出される。翌年に迫ったエベレストの南西壁、更にローツェの南壁、ナンガパルバット、カンチエンジュンガの北壁と次の目標が数多く有り、これらを全て登頂したいと、また全ての八〇〇〇峰に登頂したいと真剣に語ってくれた君は新しい時代の日本山岳界、いや世界の山岳界も背負っていつてくれると大いに期待していたのは、僕だけではなかったであろう。

日本山岳会入会 一九七八年四月 会員番号八六八七番

(雨宮 節)

## 図書紹介

### 喬戈里峯登頂記 中国側北稜ルート征服の全記録

日本山岳協会登山隊・NHK取材班著 日本放送出版協会 東京  
一九八二年 272ページ カラー写真多数 白黒写真多数 159×125  
一六〇〇円

### 砂漠と氷雪の彼方に チョゴリ登頂の全記録

小西政継著 山と溪谷社 東京 一九八三年 233ページ カラー  
写真11葉 白黒写真6葉 128×813 一二〇〇円

ヒマラヤ北側は夢があった。国境の高い頂に立って北側を見おろしてみれば、白くうねった水河、その彼方には平坦な赤茶けたチベットの高原が見えるはずである。

カラコルムの北側は……、タクラマカン砂漠を中心としたシルクロードの要路はしる西域ではないか。チベットの高原から、そしてタクラマカンの砂漠から、ヒマラヤやカラコルムの登山は、あまりにも未知にあふれすぎ私たちを魅了する。グレート・ヒマラヤの北側は登山家のみならず、探検家、冒険家たちにとって長い間の憧れの地、片想いの地であった。

だが七二年、田中角栄首相（当時）の訪中で中国との国交が回復

され、七九年には中国が自国の山々を外国隊に開放したことによって私たちの積年の夢は現実のものとなった。珠穆朗瑪峰（チョモロンマ）エヴェレスト、希夏邦瑪峰（シシャパンマ）ゴザインタン、公格尔（コングル）、貢嘎山（ミニヤコンガ）、阿尼瑪卿峰（アムネマチン）など、各国から登山隊が押しよせ、珠穆朗瑪峰の北壁や東壁のバリエーション登攀、あるいはアルパイン・スタイルで無酸素登頂など中国登山は一気に最新登山の場としてにぎわうこととなった。

日本山岳協会は八日中国交正常化一〇周年記念として中国登山協会に働きかけ、交渉を重ねた末、外国人に開放されていなかったカラコルム山脈の盟主K2（中国名喬戈里峯）登山の許可を得ることができた。そしてタクラマカン砂漠の南からカラコルムの北面に入り、未踏の北稜から無酸素登頂に成功した。表記の両書は、この日本山岳協会喬戈里峯登山隊の公式登山報告書と、登攀隊長を務めた小西政継氏の登山記である。

『喬戈里峯登頂記』は、参加した登山隊員たちの手記を「喬戈里峯への情熱、北稜征服作戦、登頂記」の三章に小西登攀隊長がまとめた登山記録に、スポンサーであるNHK取材班の「喬戈里峯への道——もう一つのシルクロード——」の一章、巻末に「喬戈里峯の天候」を付けた公式登山報告書である。

登山報告書とはいうものの、市販単行本の形式をとっており、写真、図版などを豊富につかい登山用語解説をつけ、一般の人達にも読める親切なつくりになっている。

本書はまたNHKが七九年から始めた中国中央電視台（CCTV）

との共同取材番組「シルクロード」の別動隊として「もう一つのシルクロード」取材としても入山しており、一八八七年イギリスの探検家ヤングハズバンドが外国人として足をふみ入れて以来、ほとんど世界に紹介されていない地球上の数少ない空白地帯の「登山探検記」として貴重である。

日本放送出版協会発刊の『シルクロード・絲綢之路』全集の中の一巻として離したくない一冊でもある。

『砂漠と氷雪の彼方に』は、とかく建前に流れがちな登山報告書とは異なり、八山溪ノン、フィク、ジョン・ブックスの一冊だけあって、登山界や登山隊の内情、隊員間の葛藤などあけすけに本音だけで書いているので序奏（プロローグ）から真にせまり読ませる。

喬戈里峯の登山許可を得た日本山岳協会は小西氏を登攀隊長として要請しており、氏は「隊員の人選と決定、基本的な攻撃方法」の二点をまかせてくれるのならとの条件を提示して就任したいきさつがある。

氏は七〇年の日本山岳会と、七三年の第二次RCCのエヴェレスト、七七年の日本山岳協会のK2、そして八〇年の日本山岳会の珠穆朗瑪峰など、多人数、莫大な物量、多額な資金を投入した大々的な全日本登山隊は日本の登山評価を押しあげたか？ 否、世界的評価を落しめるものとして、氏のこれまでのジャヌー北壁の登攀や、カンチエンジュンガ北壁の無酸素登山の経験をふまえて、この登山隊を、日本を代表する隊としてはずかしくない、国際的にも通用するような、無酸素、少人数による全員登頂ができる組織にすべく固く決意していた。

氏の考えに反対はあったものの隊員には八〇〇メートル以上で無酸素で活躍できる実力ある人達を集め、本当の日本最強の登山隊を率いて頂上に向った。隊員たちの体力、技術、精神力のがんばりもさることながら、この登山を世界一流レベルにもちあげた指揮者としての氏の手腕を高く評価することは言をまたないが、本書をみてノンフィクション作家としての氏の筆腕を高く評価したいと思う。

本書は読めば読むほど、臨場感があふれだし、あたかも登山隊に参加しているかのような錯覚を読者に覚えさせ、登山現場にぐいぐい引きずりこんでいく。こんな本に初めて接した戸惑いを感じずにはいられなかった。

……体調よくいつのまにか頂上アタックに向っている……登頂そして下降……極寒のビバーク……意識がモローとしてきた……寒い……もうダメだ……限界だ……計算しつくした隊長は叫ぶ「降りてこい」……（読者はホッとする）……まだ急峻な氷壁の長く厳しい下降は続く……本文に書かれていなくたって、極限に達した自分がまるで見えるようだ。

超高所の辛い厳しい条件の中で、人間同士がぶつかりあい、微細にゆれ動く生身の人間対人間の「感情」と「心」をトランシーバーで交わす会話文体を通じて、ありありと浮きださせている。このことが本書をして近年にないノンフィクション物として成功した要因だろう。そのため読者は読むことで喬戈里峯登山隊に参加している気持ちにさせてしまうのだ。ぜひ「登山隊」に参加するよう推薦する。

さて両書とも、同じ登山の記録で、同一人の手になった本だが、(比較するのは可愛そうだが)読みごたえの点で相違あるのはやむをえない。ここらが公式報告書と私的手記との表現の限界の差である。

また、登頂後八〇〇〇以上の超高所でビバーク、そして墜死した柳沢隊員の事故。ベースキャンプ下山後、五〇〇〇以上の丘で逝った坂野ドクターの死因について、色々な意見もあるが、今後のためにもっと注目、研究すべきではないだろうか。疲労は高度順化を高度障害に変換させる何かがあるように思える。

(高橋善数)

## ザイルの二人

鴨満則・秋子著 山と溪谷社 東京 一九八三年 218ページ 白黒写真18葉 125×182 九八〇円

ここ数年、日本におけるフリークライミングの隆盛に対してアルピニズムの衰退は著しい。フリークライマーを自負する人間はふえたが、優秀なアルピニストは数えるほどしか見当らない。アルパイン・クライミング自体が低迷しているのかといえ、決してそういうわけではなく、ジャン・マルク・ボワバン、クリストファー・プロワイといったすぐれたクライマーによってエキサイティングなスパー・アルパイン・ゲームが盛んである。

またレナート・カーサロットの驚異的な記録をみるにつけてもア

ルプスでのクライミングは80年代以後、まだまだ発展しつつける可能性を感じる。

モンブランのイタリア側、ベニの谷からみあげるその山容は、第一級の山岳としての風格と威厳を持ち、アルピニストの心を魅了する。

若いクライマーは、前衛の山や海岸線、崖で行なわれるきびしいフリークライミングに打ち込み、ヨセミテのすっきりした乾いた岩で本領を発揮したいと思う。確かにこのことは悪いことではない。しっかりした安全対策をとってクライミング能力をみがけば、無駄に命を落すことも減るだろう。

大きな山でも小さな崖でも、常に自分にとってより新しいことを求め全力投球することによってクライミングの喜びをみいだしてゆくという点は共通のものと思われる。

しかし様々なクライミングゲームの形態を含む、登山活動—マウンテンアッシング—というものは、未知の要素に対する冒険心と予期せぬ危険を甘受しうる心の余裕も必要とする。そのことが独特の魅力である。

クライマーが目先の一歩を登ることばかりに目を奪われ、井の中の蛙になり、路地裏的な世界をつくりださないためにも、大きな山に接することも必要である。

レビュファアいうところの「山の与えてくれるどのような喜びも何一つ拒まないこと……」

というおらかな心を知るためにもだ。大きな山に抱かれると、クライマーはその大自然にもてあそばれ、

ほんろうされる弱い人間にすぎないことを知る。

このことを痛感していたのが鳴満則であると思う。三大北壁登攀というセンセーショナルな目標には目をむけず、自分がクライマーとして、何ができるのか、何をしたいのかに非常に忠実であった。死に至る危険と生きるためのゲームのぎりぎりのバランスを保つ知性をもっていた。

ブレンバの数々の単独登攀の記録は、読む者の胸を熱くする。久しく忘れていたマウンテニアリングの醍醐味——雄大で荒々しい山にむかう豆つぶのような、しかし果敢なアルピニストの姿——が生き生きと伝わってくる。

本書は、題名にあるとおり、鳴満則の世界を追っただけのものではない。どちらかというと鳴満則・秋子の夫婦による登攀を中心として、それを年代順に収録したものである。

鳴満則がコンゴールで行方不明になったあとと人生においても、クライミングにおいても唯一頼る相手を失った妻、鳴秋子によって出版されたことがこの本の性格をあらわしている。

夫婦、あるいは知らない他人同士による登攀というのは、あまり歓迎されない傾向があるが、それはクライミングにおいて自由な人間関係を維持できないからではないかと思う。最近出版されたマイクル・ロフマン著『フリークライミング入門』のなかでも「……夫婦や恋人はお互いに対して敏感になりすぎてしまい、それがクライミングに都合の良い人間関係を阻害してしまうことがある……」という指摘がある。

彼らも例外ではない。本来一人のクライマーである鳴秋子は、ク

ライミングにおいても可憐で、ねばり強い妻というパターンをただの一度も崩さない。夫婦関係というのは不自由なものである。鳴満則が単独でブレンバにでかけている間の鳴秋子の日記をみれば、相手の身を必要以上に案じて待つ身がどんなにつらいものがわかる。一方の鳴満則はといえば、「……思ったぞ」と半分義理で自分にいいきかせるだけなのだ。勝手にしやがれと思うか、古今東西共通の理想の夫婦を演じるしかなくなる。

一つ一つの行動、判断に全責任を負うようなはげしいクライミングにおいては、ザイルを結び合う者同志は独立した個人と個人であって夫婦という関係ではなくなる。

一九八一年、ボナッティ・ザッペリルート冬期第三登の最中、嵐のブトレイ山稜をたどりながら、絶対に滑ってはいけない状況で、「秋子がんばれ……」と何度も大声をはりあげて自分自身を励ますところなどにそれがよくあらわれている。

おしむらくは彼女が、この事実に対する洞察を欠くことによって、クライミングの記録上でも絶対的主導権をもつ夫に、無上の信頼をよせる妻とのザイルパーティーというふうに関わり合いを描いていることだ。彼女のある種の演技が、この本の全編の基調をなしているドラムチックではあるが、クールで乾いたアルパインクライミングの世界が、浪花節的世界の様相を呈している。たぶん、この本を出版した時点では、彼女にとって鳴満則とのクライミングが鮮明すぎて、明日に向けての自分自身の方向がつかめていなかったからではないかと思う。

とりわけマッターホルン北壁はポーランドの女性隊と女性初登を

あらそう結果になったのであるから、あこがれのマッターホルンに夫と登れて幸せですという鳴秋子ではなくて、高校のころから山に親しみ、女性としてはかなり早くから先鋭的なクライミングをはじめていたという経歴をもつ、一人のクライマーとしての、鳴秋子の主張がほしかった。

ポーランド隊は要領も悪く、アクシデントをおこして途中で救助されるはめになったのだが、彼女たちの登攀スタイルの悪さをいうまえに自分自身の登攀の内実についての考えがほしかった。

人は頼る相手を失ったとき、はじめて自分自身の力で生きること学ぶものである。

非常に残酷な形ではあったが、彼女のクライミング人生は新たにこれからはじまるのだと思う。今後の活躍に期待します。

(室井由美子)

### エベレストを越えて

植村直己著 文芸春秋社 東京 一九八二年 291ページ カラー写真4葉 白黒写真17葉 一〇〇〇円

植村氏は一九八四年二月に水雪のマッキンリーに逝った。同月十二日に奇しくも四十三歳の誕生日に同峰の厳冬期単独初登頂を果たしたあと消息を絶ち、明大山岳部の仲間による搜索、「絶望」の観測に至るまで、マスコミの大量報道が記憶に新しい。それはとりもなおさず、植村氏の存在が社会に与えてきたインパクトの大きさを

改めて証明していた。遅きに失した感はあるが、日本山岳会にかわりの深かった植村氏の業績を振り返る意味でも、その著作を取り上げておかねばなるまい。

植村氏が残した著作六冊のうち、処女作は『青春を山に賭けて』である。自伝の形式をとって、生い立ちから登山との出会い「氷河のある山」への憧憬に端を発した海外放浪、明大隊のゴジュンバ・カン、日本山岳会隊でのエヴェレスト登頂に冬期グランドジョラス北壁登攀までを収録し、植村氏の登山家としての主な活動は大部分がこの中に含まれている。初版からすでに十三年たつが、その後、極地旅行に独自の冒険のジャンルを開拓した、特徴ある行動の骨格が形成された時期を知る上でも欠かせない一冊である。

植村氏は明大山岳部に入部して登山の世界に足を踏み込み、よき伝統の中で登山者としての基礎を身につける。卒業とともに、その後の針路を決定つけた四年半にわたる海外放浪に旅立つのだが、リュックサック一つで横浜港を出発したのが、高度成長時代の幕開けを告げる東京オリンピックの六四年だった。この年、海外渡航が自由化され、日本人の関心が外に向かい始めた時代である。数年後、若者がろくに金を持たず飛び出して世界を放浪するのがちよつとしたブームとなる。植村氏はその先駆けだった。放浪二年目の六五年には、ゴジュンバ・カン隊にアルバイト先のアルプスのスキー場から飛び入り参加し、思いがけない登頂者の榮譽をになうことになった。この年を最後に、ネパールは登山隊にしばらく門戸を鎖されたのだが、植村氏はゴジュンバ・カン登頂のあと六八年に帰国するまでの間、アルプスの諸峰、キリマンジャロ、アコンカグアの山頂に



足跡を残し、アマゾン川単独イカダ下りなどの冒険を次から次へと若さにまかせてなす遂げている。初々しい筆致で血わき肉躍る青春の日々をつづっていく。

長い放浪を終えて帰国すると、すぐさま日本山岳会のエヴェレスト第一次偵察隊員に抜擢され、二次偵察、本隊での登頂と、予め用意された階段を踏み登るが如き道を歩むのである。ここまでの足取りは植村氏が自ら切り拓いた道であることはいうまでもないが、時機にも恵まれていたと思う。

通読して打たれるのは、世界を漂泊していた間も、彼の行動が常に揺ぎない目的意識で貫かれていたことである。ほとんど無一文で出国したのだから、当面の生活費を自ら稼ぎ出し、世界を股にかけてのための旅費もまた、捻出しなければならなかった。そのために、多くの誘惑を断ち切って、貧しい食事に甘んじ、切り詰めた生活を続けていたのである。初章でそれまでを振り返り「まったく幸運とまわりの人の協力や友情に恵まれたからである」と記している。多くの協力がひきつけられた理由の一つは、植村氏が終生貫いた、この潔さであったような気がする。

七〇年、日本人初のエヴェレスト登頂者となった植村氏は、同年夏、北米に飛び、マッキンリーに初の単独登頂を果たし、同時に初の五大陸最高峰登頂者というタイトルを手にした。スケールの大きいピーク・ハンティングといえようが、植村氏自身はこのタイトルにかなり固執したことをうかがわせる事実がある。ヨーロッパの最高峰はモンブラン（四八〇七メートル）ではなく、エルブルーズ（五六三三メートル）である、との説を聞いて七六年に、わざわざコーカサスに出

向いて登頂したのである。このあたりに、植村氏がかなり早い時期から自らの登山、あるいは冒険に明快な様式観を確立していたことが想像出来る。それはなんらかの意味で、常に「初」でなければならなかった。「五大陸最高峰登頂」も、「初」であったからこそ、植村氏にとって価値があった。

「まだだれも世界五大陸の最高峰のすべてをきわめた人がないと聞く。ぜひ自分の足でいち早くこの仕事を成しとげたかった。それも、エヴェレストをのぞいては、全部単独登山でやつつけることだ」

ここで同時に彼の際立った特徴であった単独行について触れている。

「私の単独登山にしても、やはりひとつの登山形態として、未知なものへの探究と可能性への挑戦、さらに大きくいうなら、人間の可能性への挑戦ではなからうかと思っている。（中略）私の求めている単独登山は、たとえば陸上競技の百メートル競走で、〇・一秒を競って人間の可能性を深めていくのと同じことだと思っている」

「山登りはたとえどんな山であろうと、自分で準備し、自分の足で登山する。その過程が苦しければ苦しいだけ、それを克服して登り切った喜びは大きい」

マッキンリー登頂を描写する中で、唐突に「南極大陸単独横断の夢」という言葉が登場する。そして本書の最後で、マッキンリー登頂の帰路、早くも南極行の準備のためニューヨークに寄ったことを明かしている。そのあとのすべての行動が南極の夢につながっていることなのである。

次に、最後の著作となった、『エヴェレストを越えて』。日本山岳会のエヴェレスト隊の第一次、第二次偵察、七〇年の登頂、翌年の国際隊への参加、初めて自ら隊を率いた八〇年暮れから八一年にかけての日本冬期エヴェレスト隊と、五回に及ぶエヴェレスト体験をまとめている。七〇年の登頂までは既刊の彼自身の著作とも重複が多く、目新しい内容はあまりない。南壁初登攀を目指して七一年、ノーマン・ディレンファースが組織した国際隊は、民族意識とエゴのぶつかり合いから空中分解した。その中で、植村氏ら二人の日本人隊員が、最高所に陣取るドン・ウィランス、ドゥガル・ハストンの英国人ペアのため、最後まで黙々と荷揚げを続けた、自己犠牲の美談はよく知られている。植村氏はインド人隊員ハッシュ・バグナの遭難死を機に、国籍を異にする隊員間の確執が一気に爆発し、敗退に至ったいきさつを、淡々と書いている。バグナ遭難の経過を読むと、悪天候の中を西稜隊リーダーのオーストリア隊員ウォルフガング・アクストとともに第二キャンプへ下山途中、置き去りにされたまま疲労凍死に至った、と思える。もしバグナがインド人でなく、オーストリア人、あるいは西欧人であったら、アクストは果たして同じ行動をとったろうか。割り切れない印象はぬぐえない遭難である。植村氏は「隊にはバグナや私、伊藤君と、エヴェレスト体験者があるにもかかわらず、すべてヨーロッパ人が主導権をにぎり、われわれ東洋人に対する扱いはどうも登攀のための基礎工事人扱いなのが気になっていった。バグナの運命がわが身に重ねられて可哀相でたまらなかった」と、きわめて控え目な感想を述べるにとどまっている。しかし、植村氏は遺体収容に進んで加わり、

登山終了後は隊員の中でただ一人、バグナの遺族を弔問している。彼の人間性を如実に示す行動であった。惨敗に終わった国際隊を最後に、植村氏は登山から遠ざかり、極地旅行に急速にのめり込んでいった。

北極圏での十年に及ぶ活動のあと、植村氏が再び手がけた登山が日本冬期エヴェレスト隊だった。北極圏の大ゾリ旅行に備え、距離感を肌で知るため日本列島を北から南へ三千<sup>+</sup>徒歩で縦断した植村氏である。今回も彼らしい用意周到さで準備を進めた。七九年暮から一人でエヴェレストのふもとにこもり、冬の気象を調べ、さらにトレーニングのために、アコンカグアの冬期登頂までしている。新たな目標に挑む際、予想される事態や危険に、感覚のレベルで対応出来るまでの準備をするのが彼一流のやり方らしい。何事も、「初」であることに価値を認めていた植村氏だが、あとから登山許可を申請したポーランド隊に先を越され、一年早く登られてしまったのはよほど無念だったに違いない。それでも計画を中止せず、「学術とドッキングすれば新しい意義が生まれよう」として、氷河調査と高所医学調査の学術班を同行させることで自ら納得させている。注目されるのは、終章の「エヴェレストの魅力と南極の夢」である。「エヴェレストをいったん知った人間は、隣のロツツェに登ろうという気持は湧いてこない。ロツツェだけではない。世界第二峰のK2にせよ、カンチェンジュンガにせよ、登ろうという気はしない（中略）私にはエヴェレストによって地球第三の極点の魅力を見てしまったという気持が強いのである。（中略）私にしてもエヴェレストへ登頂出来たのは日本山岳会による一九七〇年の一回きりだ。

その後は国際隊によっても、日本冬期登山隊によっても失敗した。だが、私にとってのエヴェレストは成功も失敗も越えていく。そこへ向けて新しいものを見つければ、新しいことをつけ加える。そのための努力がすべてであり……（中略）私にとって、良い山というのは一つの極限を意味しているといってもいい。私が何度もエヴェレストへ行ったのは登りたい、頂上に立ちたい、という欲望もむろんあったが、国際隊のときには日本山岳会隊が手こずった南壁にもう一度挑みたかったからだし、冬期登山隊の場合は一月のいちばん厳しい状態の中で登頂に挑むというところに何ものにもかえがたい魅力があったからだ」

長い引用となったが、エヴェレストを語る文脈に、国際隊のあとに、極地旅行に転じた植村氏の心情を読み取れるような気がする。

万全を期して実行に移った登山にもかかわらず、厳冬のエヴェレストは竹中昇隊員の命を奪い、頂上を許さなかった。これまで致命的な失敗を経験したことのない植村氏が、初めて浴びた痛みであった。他の著作に一貫して流れるのびやかさが、ここでは自責の念に打ちひしがれた重苦しさにとって代わられている。

本書を手にして気になるのは、「ネパール側から見たエヴェレスト」の説明が付された表紙カバーの写真である。別の山の写真を誤って掲載したのだが、やはり異様な感じを受ける。

北極圏での活動に関しては、三つの著作がいずれも文芸春秋社から発行されている。『極北に駆ける』（初版七四年）は、七三年九月から約五カ月間、グリーンランド最北端の村シオラ・パルクに住みつき、生肉を食うことから始めて、狩猟、犬ゾリの扱い方と、酷寒

の生活技術を一から学び、翌年二月から三カ月かけてグリーンランド北西岸三千\*の単独犬ゾリ旅行を達成した記録である。極地旅行に犬ゾリという、もはやエスキモーでさえ忘れかけた手段を採用し、それに習熟することによって、以後、酷薄な北極圏の自然を舞台に、あえていえば、壮大な虚構の世界を構築していく。

『北極圏一万二千\*』（初版七六年）は、七四年暮れから七六年五月までの二冬、一年半をかけた犬ゾリの旅の記録。グリーンランドのヤコプスハウンを出発、カナダ北岸を経てアラスカのコッペンに至る、北緯七〇度から八〇度圏の長旅である。

『北極点グリーンランド単独行』（初版七八年）。七八年の北極点行と、それに続くグリーンランド縦断旅行の記録。ただ一人犬ゾリを駆って、零下四〇度の酷寒に耐え、行く手をさえぎる乱氷の林に鉄棒を振って道を開く。白クマに襲われたり、浮氷に乗ったり生死の境をきわどくすり抜ける苦難の末、初の北極点単独到達を果たしたのだった。この北極点旅行記が、ナショナル・ジオグラフィック誌に掲載され、植村氏は卓越した冒険家として世界的に認知された。北極点到達後、飛行機で支援基地のアラートに帰還し、わずか十日間の休養をとって、すぐさまグリーンランド縦断に出発する。グリーンランド北端のモリス・ジェサップ岬から、前人未到の内陸氷床を駆け抜ける三千\*の旅だった。

北極点、グリーンランド単独行はそれまでの彼の旅行と全く異なる要素があった。飛行機によって食糧から犬、ソリまで煩雑な補給を受けたこと。そのため莫大な費用を要し、資金集めを大手広告代理店が担当して大々的な募金活動を展開したことなどだ。さらに米

航空宇宙局が開発した D C D (Data Collection Platform) と呼ばれる無線器を携行したため、気象衛星ニimbus 6号經由で確認された植村氏の位置が、刻々と東京の支援者のところにテレックスで打ち込まれてきた。植村氏自身が天測の結果をチェックすることに本来の目的があったが、アラートの支援基地經由でスポンサーのマスコミに送られてくる情報と合わせ、国民の関心をあおる効果があった。それ以前から登山家、冒険家として植村氏の名前が定着していたが、一連の大量情報の中でイメージは増幅され、より多くの人がとがそれぞれの冒険心を仮託する対象となったのである。

八三年の春先、スポーツ記者として植村氏を取材する機会があった。アルゼンチンの南極基地を足がかりに、念願の南極大ゾリ旅行と南極最高峰のビンソンマシフ(五一四〇m)登頂を組み合わせた計画が、フォークランド紛争ばつ発であえなくつぶれ、空しく帰国する前後の時期だった。植村氏周辺の人たちが「一人で何かをしようとする限界を迎えている」「違う道を探すべき時期だ」と、危惧の念を語っていたことが印象に残っている。四十歳を超えた年齢が、体を張る冒険人生の収束を促していた。植村氏自身も「自分では若いつもりでいても、年齢といふ事実は、否応なく自分を裸にしてしまう。(中略)いまの私は、背中に刃を突きつけられている。いつまでも、自分の思うようには動けないぞ。そんな声が聞こえてくるのだ」(冒険II毎日新聞社、八〇年)とに切迫した思いをつづっている。悪い予感が当たったとすべきだろうか。今回マッキンリーに赴く直前、ミネソタの野外学校を見に行っている。「いずれは自分の経験を次代に伝えるような仕事をした」とももらし

ていた。二十年前に無銭旅行に旅立った時点で脱出した社会に、復帰の道を探ろうとしていた矢先、迎えた破局だった。私たちは、世界に誇る偉大な個性を失ってしまった。

(山田 新)

### 登山家素描

水野勉著 鹿鳴荘 東京 一九八三年 231ページ 白黒写真カ  
ット多数 160×215 三八〇〇円 特製本三四〇〇円

著者は「山岳」の編集担当理事を務める熱心な岳書研究者である。日本山書の会にあって主筆をとる傍ら、機関誌「山書研究」や「山書月報」の編集、発行に永年尽力してきた研学の徒である。これまで、多くの山の本を発表してきたが、いずれも翻訳書であるから、本書が本当の意味で処女出版である。

「はじめから、登山に対して素直でない面があった。行為と同時にりくつを求めた。山を登ることと、山を知ることが同時に歩き出した。ぼくは自分の『山岳学』を持つ必要があった」という著者は、二十代からずっと、中央アジア・ヒマラヤの探検史に興味を抱き、好んで、ヤングハズバンド、ヘディン、シプトン、さらには個性的登山家、ティルマンやカシンなどのものまで、広く、貧欲に読んできた。読むばかりでなく翻訳し、書誌的研究を積み重ねている。この一途な研究結果が今西の『山岳学』に共鳴するまでに至ったものと思われる。しかし「それだけでは心の安定が得られなかった。自分

の位置をいつでも確かめないでは生きていられない。ここにとり上げた、わが愛する先輩たち、美しく夜空に輝く星々と自分との距離および方向を確定せずにはどうにもやり切れないのである。すなわち、自分の位置、この宇宙における位置を測定することによって、心の安定をはかろうとしている」と、あとがきしている。これが、そもそも本書をあらわす動機になったと思われる。

登山は、しょせん遊びである。山を登るのに、このような自分自身の位置づけなんかどうでも良いじゃないかと言う者には、この本は無用であるかも知れない。しかし、山は平凡な趣味と一緒たにされたんでは困るんだ、人生観、世界観とも深く関わるものなんだ、と考える者には、山岳書研究の手引き書にもなるのでなからうか。

マロリーのように、山を取り上げられたら、左遷喰ったも同然だと思わないまでも、何時までも山と絶縁出来ずにいる私のような者は、山と人との関わりを全く考えないではいられないから、無意識に、理くつの一つも言いたくなるものだ。とりわけ大家と言われる先学の書冊を見るとき、彼等が当時考えたであろう思想を、あれこれと描いてみることは実に楽しいことだ。それは先輩登山家が著した諸本を読むことをとおして、彼等の人間像を自分なりに描けるからである。

本書は「登山家素描」というとおり、著者の山行を書いたものでなく、登山家について書いたエッセー集である。描かれたのは、柳田國男にはじまり、今西錦司まで、田部重治、辻村伊助、板倉勝宣、大島亮吉、松方三郎、浦松佐美太郎、伊藤秀五郎、さらにはヤ

ングハズバンド、ヤング、ティルマンなどで、どれもが著者の愛する巨星である。それらを著者は大胆な発想と繊細な筆使いで、一枚、一枚の絵にしたのである。

名作といわれる良い絵でなければ鑑賞に値しないように、山の文学でも然りだ。年間百冊を越える山の本の出版があるという中で、後々の世でも評価される良書が、果してどれだけあるだろうか。これまでの傾向から見ると、ある程度高く評価されたものに共通して言えることは、紀行でも随筆でも、あるいは論文にしても、新しい分野を開拓したものであることが、一つの要件であったと思われる。この点、本書は山岳書と言えるかは別にして、新しいものを感じさせるユニークな本である。山の文学をとおして、人物や思想の論評を試みたものも、これまでにあったのだが、一冊の本として発表されたのは、これが恐らくはじめてでなからうか。たしかに一人の登山家をとり上げて、人物論を展開した者もあった。佐谷健吉、吉田二郎あるいは安川茂雄など、本書が述べている通り先達である。中でも佐谷健吉が「山小屋」に発表した、鳥水、重治、亮吉など一連の「日本登山思想史ノート」については、登山家の登山態度、姿勢を登山史の流れの中で論じたものとして、新しい試みであった点、著者は、まさしく評価している。それと同時に、この連載論文が尻切れに終わったことは残念であった。さらに展開があったならばと、惜しんでいる。この辺りにも、平凡な山書愛好家でない、山の思想史と真剣に取組もうとする向学者の一面が伺われる。また著者が「今西錦司ノート」を発表したのは、吉田二郎の「小谷部全助ノート」に刺激されて書いたと述べていることから、日本の登

山思想史の基礎研究に着手した佐谷、吉田両氏の影響をなにしか受けたものと思われる。本書をあらわす上でも、インパクトになっているのかも知れない。

しかし、佐谷論文にかぎらず、これまでの論評は、本書が指摘するごとく、感想の域を脱していないばかりか、鳥水なら鳥水の既成の鳥水観に引きずられ勝ちであったことは否めない。思想史として登山家を論考する場合、このような人物のとらえ方から出発すると、大先覚であればあるほど、英雄視が度を過ぎ、ともすると神様扱いしてしまい、つまらない結果になってしまうと指摘している。山に限らず、思想史を研究する上で、これは重大な警告と受けとってよいのではないか。体質的に登山家は身びいきで、時には、ほうがんびいきをやるから、ひとたび研究者が独創性を失うと、賛同論になってしまう、英雄讃歌に終ってしまう危険性があるからである。

佐谷の「鳥水ノート」について著者は「鳥水によって、わが国の風景観の革命が行われ、しかも『主體的アルピニズム的な』風景観が確立された」と論じているが、このようにあまりにも鳥水中心の考え方はどうかと思う。もっと別の人々の行動、例えば、木暮理太郎とか岡野金次郎とかいった人々についても考えなくてはならないし、その時代の風景観を事実にもとじて論ずべきであったろう」とし、歴史観の上に立った論評を加えている。さらに大島亮吉のとらえ方についても「佐谷氏の大島観には、ぼくは反対である……(略)……神経の荒さが目立つ。」と厳しく指摘している。

二十代の終り頃から三十代の中ばにかけて主として書いたという

本書の文章について「自分の若い頃に描いた自画像を、ぼくは今でも自分で評価している。若き日のあやまちと逃げるつもりもない。たとい、こまかい点で思いちがいがあったにしろ、あるいは大きな

思いちがいがあったにしろ、自画像を一心に描こうとした若き日の自分を受容したいと思う」と一貫した著者のポーズが示されていて気持ちがいい。山を始める頃に、既に自我が確立されていたためか、あるいは自我が固まってから山を登り出したのか、いずれにしても、心配なぐらい毅然たる筆勢に圧倒される。この点、浦松佐美太郎の『たった一人の山』の十七年ぶりとは言え、再版のあとがきで、氏が「この本は、間違ひなくぼくが書いた本である。しかし今となって読み返してみると、どうもぼくの本のような気がしない」と述懐しているのとは、大違いだ。これについて本書では、『たった一人の山』の「もろさ」と題して、この本が書かれた時代背景から、納得出来ない書き方であると反発している。同感だが、若干著者の決めつけ方に抵抗を感じなくもない。しかし「思想らしきふんいきを持たない文章はきらいである」と言い切る著者の、この本に示した情熱が、このあたりにも強く感じられ、爽快だ。

また「松方三郎のわかりにくさ」と題して、何か全部を話さないで、つき放す松方流の魅力と欠点について論及している。松方随筆のファンである私は、そうかなアと疑う気持ちで『アルプス記』から読み返してみた。すると、なるほど思う点も多々あつて、今までの私の読み方を反省させられた。如何に雑駁に読んでいたか、教えられたようで、きまりわるさを覚えた。そのときはじめて本書が著者の自画像だと言う意味を納得した。

板倉の「春の上河内へ」と大島の「秩父の山村と山路と山小屋」との文章を例に、そのスタイルを較べ論考を展開する奇抜な書き出しに、まず驚いた。文章読本のようなのである。しかし、つぎつぎと描かれていくスケッチを見ていくと、大先覚の自然観なり人生観なりを読みとり、思想解明を試みようという狙いが解るに従い、著者のペースに引っぱり込まれ、くたくたにさせられた。正直なところ、異状なくらい疲れを覚えた。それは、率直な論考に共感を覚えたからだろうか。どうも随筆にしては肩がこった感じだ。論文風随筆という印象である。

「ぼくは自分の好きな人たちとの関わり合いにおいて、それをしようとする。例えば、今西錦司を論じながら、自分の生き方をさぐっているのである。松方三郎を批判し、浦松佐美太郎を批判しながら、じつは批判されているのは自分なのである。その点では独りよがり、独断だといわれても甘んじてその言葉を受けよう」と結んでいる。筆先の鋭さに較べて、人柄の素直さがにじみ出ている。これからこの本がどのように評価されて行くのか、興味あるところだ。タイトルの「登山家素描」は著者の大好きな今西錦司の『生物の世界』の序文にある「自画像」から採ったものと思われる。今西に依り著者も力一杯、自画像を描いた。内容、論旨からも恰好の題名だ。

最後に本書で気付いたことは、描かれた絵が、偶然だろうが、いずれも明治生れの大先覚の像であることだ。そして不思議と、これが何か安定感があるのだ。こんな紹介の仕方をする、ソレもうち成史観に影響されていると著者から怒られるかも知れない。

## ヒマラヤ文献目録

葉師義美編 白水社 一九八四年 B5判 七五九ページ 定価  
一九〇〇円

『ヒマラヤ関係図書目録』が最初に発行されたのが一九七二年だから、それから十二年を経て、この新版が出たことになる。「図書」から「文献」へと表題が変わったけれども、第二版である。初版のときでさえ、その収録点数のぼう大さにおどろいたが、第二版では更にそれが約二倍にふくれあがって、欧文図書三七五二点、邦文図書八五五点となっている。ヒマラヤ、チベット、中央アジアの各地域については、それぞれ多くの文献目録があるが、探検と登山を中心とした文献目録は、この目録が唯一であろう。内容的にユニークな目録であることはもちろんであるが、このぼう大な目録を独力でまとめた編者の苦勞と努力は相当のものだったであろう。まず、御苦勞様と申し上げたい。

内容は、第一部が欧文図書で、図書と地図との二項目に分けられている。第二部が邦文図書で、日本語図書と邦訳書との二項目に分けられている。この邦訳書は、欧文図書の項で掲載された邦訳書以外のもの、つまり、ロシア語や中国語からの訳書である。それに、第三部ともいべき索引がある。索引は四つに分かれ、邦訳書著者別一覧(第一部と第二部と両方を含む)邦文図書名一覧、欧文図書

名一覽、総合索引となつてゐる。最後の総合索引とは、人名とか山名とか地域とかという項目であり、普通にいわれる索引である。とにかく、初版と比べると、索引が一段と工夫されている。著者索引は邦訳書についてだけだが、その他については図書名と項目の両方から引くことができる。すなわち、総合索引は邦文図書と欧文図書の両方に共通なのである。

前述したように、この目録の特色は、探検と登山を中心に扱つてゐることだが、もう一つ大きな特色がある。それは、各図書について、簡単な説明が付けられていることだ。文献目録には不可欠のものと思われるが、じつさいに内容説明を付けようとする、その作業は容易ではない。だから、文献目録でも省略してゐるものもかなりある。評者もかつて図書目録を作成したことがあるが、時間の制約もあつて、省略してしまつた。薬師氏がこの労をいとわず内容説明を付けたことによつて、この目録は一段と便利なものになつたと思う。もちろん、すべての文献について説明が付けられてゐるわけではないが、それはやむをえないだろう。説明を要しないような本もあるのだから。また、重要と思われる文献でも説明がないものも若干見受けられるが、これもまた独力で作業のためいたし方ないであらう。むしろ、独力でこの作業をした薬師の努力をこそ賞讃すべきであらう。

また、邦文図書では、非売品、私家版といった入手の困難な本まで広く収録しているのが目につく。特に、登山記録の場合、出版社では扱わないのが普通であるから、数多くの文献を蒐集収録する努力はたいへんであつたらう。最近はそのような非売品の本がたくさ

ん発行されるから、なおさらたいへんである。

この労作を前にして、ぼくはただ感心するばかりである。ぼくはこれを利用できるのを心からうれしく思つてゐる。特に、本好きな者にとっては、この本の名が羅列してある目録のページをくるだけでも楽しいのである。座して何もしない者が、労した者に対してあれこれというのは礼を失することである。

しかし、この目録を手にして、ビブリオグラフィの在り方についていささかの感想を持ったことも事実であり、この目録に対する多くの情報提供など、ごくわずかにすぎないけれども、第三者としてはなく、いささかコミットした者として、今後の目録のために少しばかりコメントしてみたい。

第一に、ビブリオグラフィの作成にあつた共同作業についてである。この目録は薬師氏一人で作成されたが、時間的制約とか、空間的制約とか、個人的好みとかから、どうしても、不十分な点が出る。この目録と同じ範囲を扱つた目録もかなりあるが、どの目録でもやはり不十分な点が見られる。やむを得ないことである。この目録でも、西トルキスタン文献の少なさとか、解説の脱漏などにそれがみられる。これらは共同作業でやれば、かなりその欠点が埋められたであらう。中国語文献、ロシア語文献などについても同じである。

ただ、問題は単純ではない。共同作業がそう簡単にうまく運ぶとは限らないのである。共同作業者がそれぞれの地域の専門家でなければならぬし、互いに親密な関係であることが必要だし、その上、ときどき一緒に集まって話し合えるような地理的条件が要るだ



ろう。この三つの条件がとどのうのは、たいへん稀であろう。だからこそ、文献目録はだいたい個人の作成となつてきているのだらう。しかし、できれば、共同で作業をしてなるべく完全に近い形にすることが望ましいのは当然である。どうすれば良いか、ぼくにはいい考えがないが、将来の方向としては、そうすべきだと思う。

第二は、この文献目録の効用についてである。本好きのぼくにはたいへん役に立つ、そしておもしろい目録だが、研究者にとつてはどうであらうか。登山および探検旅行を中心に据えた目録であるから、基本的には趣味のようなふんいきを持つている。また、それでもいいといえよう。しかし、探検や旅行となると、いささか学問に關わつてくるのは当然である。地理、歴史、民族、考古、生物などの多くの分野に足を踏み入れることになる。その場合には、どうしても単行本ばかりでなく、ジャーナル類に発表された文章もまた重要である。特に、雑誌などに発表されただけで単行本にならなかつたものなどには、資料として重要なものも含まれている。一方、単行本であっても資料的にはごくつまらないものもある。資料的価値の低いものは、文献として掲げる必要もないかもしれない。けれども、それには客観的な評価が要る。むずかしいことだ。

評価がむずかしいからといって、雑誌類に発表された文献をすべて掲げるとしたら、この目録など、量を一〇倍にしても足りぬであらう。じつさい、ぼくの手元にある“Arctic Bibliography”米国防省発行)など、ページ数にして、この目録の二五倍ぐらいある。これは労力、あるいは経済上からしても望めない。実現可能性という点から考えると、葉師氏のとつた方法が妥当といえるかもしれ

ない。

一方、書誌ということからいえば、単行本だけの目録でも十分存在価値があるのだ。何も一部の研究者の便利なように作る必要もない。ニートの“Mountaineering and its literature”だって、単行本だけ、しかも英語文献のみである。

しかしながら、研究者にとつてはもの足りない感じがすると思う。これをどうするか。ぼくにもいい案などない。本好きなものにとつては、このような目録の方が好ましいのだから。

以上のコメントなど、少しも建設的でなく、ただ問題点を述べただけにすぎないが、たとい解決されなくとも、問題があるということとを明らかにするのも無駄ではないと思つて書いてみた。

(水野 勉)

## 大岩壁の五十年

リカルド・カシン著 水野勉訳 白水社 東京 一九八三年 278  
ページ 白黒写真24葉 130×194 一九〇〇円

「あの時こそ、私がクライマーとしての自分の生涯において初めて敗北感を味わつていた時なのだった。ローツェ南壁の登攀に失敗して故国に向う飛行機の中でこの本を書こうと思つた」

今迄カシン氏の数多くの記録が我々にとつて表面的かつ断片的にしか伝えられていなかったものが、初めてこの本によつて登攀に対する不安な気持、または困難な登攀への激情などが赤裸々に書かれ、

カシン氏もまた僕達と同じように悩み登り続けたクライマーの一人であるという親近感を抱けた。また五〇年という長い年月登攀を続けたクライマーは他に類を見ない。

この本はそういう意味でも、カシン氏の輝かしい記録である。偉大なるクライマーのカシン氏が、僕達と同じサンデークライマーであったとは、とても嬉しかった。

氏の岩壁での成功率が高いのは、何度もアタックすることはできなくとも、一度のチャンスに全てを傾ける事であった。カシン氏もその時代のクライミングのバイオニアであり、「はしご職人」と諷刺された事も現在に通じて中々おもしろい。これも「新しい登攀」を目指す人達の宿命なのだろう。カシン氏も段階を踏んでその登攀のレベルを上げて行つたのが良くわかる。

カシン氏が非常に恵まれているのは、いつの時代にも素晴らしいザイル仲間がいたことだ。そしてレッコに移り住んだ事も、氏のクライミング人生をこれだけのものにしたと言える。カシン氏が開拓したルートが今だに高いグレードを保ち、若い人達にトレースされている事も、氏の素晴らしいルートファイディングを物語っている。特にピッツ・パディレの北東壁の初登攀は印象的であった。

—— コモのクライマーのモルテニとヴァルセッキはこれで三度目の挑戦であった。カシン氏は初めてのアタックで取り付きのルートは違っていたが上部でやがて一緒に、モルテニからの提案で一つのザイル・パートナーになった。そして悪天候につかまっていた頂上に向って更に前進した。そしてこの大岩壁を完登し、下山の途中に悲劇が起つた。まずモルテニが亡くなり、それを聞いたヴァルセ

ッキが涙を流し乍ら死んで行つた。そして翌日救援隊と共に再び遺体の収容に山に戻つた。その体力気力の強さはどこから来たのだろうか。

一九三六年から三八年までの間に数多くの素晴らしい初登攀をくり広げたが、特にグラランドジョラスのウォーカーバットレスのそれは今や伝説的である。—— 小屋の人にウォーカーはどの方向と聞いてそのまま霧の中に消えて行き、初登攀を成したというのは何かで読んだことがある。このことが詳しく書かれてあり、それによると、グラランドジョラスに行く前にアイガールの北壁に向つていた。この時アイガールの北壁は初登攀され、氏はレッコに向う帰りの列車の中でグラランドジョラスに向う決心をした。そして一回も行つた事のないグラランドジョラスに向い見事にこれを登つてしまった。特にこの中では水晶を拾い、自分のザックにこれを登つてしまった。特にこの中捨てられてしまふところなどはとても印象的であった。

一九四五年から一九五八年まで、イタリア山岳会のレッコ支部長として活躍し、同時に、一九五〇年から一九六五年イタリア登山学校の会長という要職を兼任し、若いクライマーを多く育てた。カルロ・マウリー、ヴァルテル・ボナッティ、ラインホルト・メスナー等々の素晴らしいクライマーである。そしてこの人達と一緒にかつて初登攀したルートの再登を試みている。特にピッツパディレの北東壁は、一九五六年と一九七一年と二回登つているが一九七一年には自分の息子達と再び登り、その登攀を撮影したということである（このフィルムはぜひ見たいものだ）。

更に素晴らしいのは、三五年前に初登攀した時の氏の年令とこの時

同行した氏の息子が同じ年令であったことだ。これと同じように、チマオヴェストの北壁の記録がある。二七年後に映画を撮る為に登り、更に一九七二年（氏はこの時にいったい何歳であったろう？）にはこの北壁を一日で完登している。今の日本の若いクライマーでさえ、一日で完登することは難しいと言うのに……。ヴァディレの北東壁やこれらの登攀の中で、あまりにも多くのハーケンが打たれ過ぎていたと、ちょっぴり皮肉を言っている「登攀というものは、フリーで登った時こそ、常に美しいということを考えてみよう！」氏は更にその登攀の領域を海外の登山へと拡げる。一九五四年のイタリア山岳会のK2メンバーからはずされ、その鬱積された気持ちを一九五七年のガッシャーブルムIV峰、一九六一年マッキンレーの南壁カシシリッジの初登攀、一九六六年カフカズ、一九六九年アングスのヒリシャンカ西壁、そして一九七五年冒頭でも書いたようにローツェ南壁での敗退で終る。

氏の五〇年にもわたる登攀活動の素晴らしさは、読む人に必ずや深い感銘を与えることだろう。

（雨宮 節）

## A Walk in the Sky

Nicholas Clinch, *The Mountaineer and the American Alpine Club*, 1982, 16 colour pages, pp. 214, 160×240

一九五八年の夏、カラコルムの三つの名峰、ヒドンピーク（八〇

六八〇）、ガッシャーブルムIV峰（七九八〇）、チョゴリザ（七六五四）が、それぞれアメリカ隊、イタリア隊、日本隊（京都大学学士山岳会隊）によって初登頂された。この三つの隊のBCは、上部バルトロ氷河の近接した地点にあり、ここに期せずして、三つの国の文化交流が実現することになった。

京大隊は桑原武夫教授に率いられ、七月八日にBCに到着した。

（私はこのときの隊員であった）すでに七月五日に登頂に成功したアメリカ隊は、タイミングよくこの帰りのポータを使って、九日にはBCを引きあげ帰路についた。登頂者のピート・ショーニングと連絡將校リズビー大尉が、日本隊のBCを訪問したのはこのときであった。彼の快活な人柄もあって、我々はたちまちうちとけ、談笑のひとときを過した。頂上直下の深い雪に悩まされ、最後はベニヤ板を靴にくくりつけてスノーラケットの代用品としたとか、彼の登頂話は印象的であり、今も私の頭のスミに残っている。

本書はこのときのアメリカ隊隊長クリンチによる、遠征の発端から登頂までの物語である。著者も断っているように、決して公式報告書でなく、仲間がいかにチームワークを発揮して、数々の困難にうち克って勝利をつかんだかを、いろいろなエピソードをおりまぜながら書いたものである。

実はこの本の原稿の大部分は一九五九年には完成していた。しかしクリンチ自身の一九六〇年のマッシュガール遠征や、アメリカの出版界の事情などで、原稿はそのままクリンチの家でねむっていた。たまたま、一九七七年にショーニングが、この原稿の存在を出版社に語ったことから、やっとこの本が目の目みることになった

のである。

二五年も前の話であるので、キャラバンの行程をはじめ、現状とは若干変っていることは当然である。またヒドンピーク自身も、一九七五年、メスナーとハーベラーにより、アルパインスタイルで登られている。山の登り方も変った今、ガイドブックを見るような目で、この本を読んでほしくない。人間がいかに自然と闘い、目的を達するかという山登りの原点に立ってこの本を読むべきであろう。しかもこの本は著者の人柄がにじみ出ていて、決して物事を大上段にふりかざさないところがよい。長い歳月にも拘らずシミひとつない美しいカラー写真もすばらしい。

アメリカにとつて八千呎をめざす隊は、さき一九五三年のハウストンのK2隊などもあるが、K2隊も、このヒドンピーク隊も、実に小規模な隊である。この隊は、隊長を入れて総勢は九名であるが、内一名はパキスタン軍人（連絡将校とは別）、また二名は仕事の都合で一カ月半も出発がおくれるということ、事実上、六人の隊（内一名は医者）ということになる。荷物も全部で二トーンである。私的な隊であったため、遠征隊出発後の会計の支払いをクリンチの父君にたのんで、やっと出発できるくらいなど、実におもしろい。

四月二十九日にカラチについたあと、ガッシャーブルムIVにむかうイタリア隊と前後してスカルドにつき、あとキャラバンに移り、六月五日、BCに着くまでの話も、一五〇人余りのポーター、サーダールのオラムラースル、連絡将校などのやりとり、BC位置の決定の苦心などがおりこまれて、楽しい読物となっている。

ヒドンピークは七千呎以上は広いプラトリーになっている、技術的

なむつかしさはなく、プラトリーまでのルートの選択で勝負はきまると。彼らはロッシュリッジ (Roach Ridge) と名付けた急峻なリッジにルートをとる。六月二十九日、この尾根を登り切り、そして七月五日午後三時、ショーニングとカウフマンの二人が頂上に立つ。登頂の章はショーニングが書いている。計画の立案、チームワーク、そしてたえることない努力の終点に頂上があった、と。ふつう登頂に際してたえられるパキスタン国旗と星條旗のほかに、彼らは国連旗、先人の労をしのんで英国旗、フランス国旗、スイス国旗などを用意してきた。さらに当時の世界情勢を反映して、自由ハンガリーの旗が、勇気ある国民に敬意を表してたてられた。これほど多くの旗を準備してきた隊を私はほかに知らない。気配りのある隊ではないか。

さて、登頂が成功し、C1におりた所に、約二カ月おくらせてアーヴィンとロバートの二隊員が到着する。この二人はポーター七人をつれて、京大隊のキャラバンに同行して来たものである。二人は、二週間もキャラバンをして来たのだから、他の山に登ろうとさかんに主張する。しかし隊員は皆疲れていたし、登頂者のひとりカウフマンは足がひどい凍傷にかかっていたので、彼らはすぐ下山ということになった。

このときアーヴィンがおもしろいことを云い出した。「君たちが登頂したのは七月四日と思う」そして日を追って計算し、彼が正しいということがわかる。すでに登頂成功の電報を、七月五日の日付で打ってしまったっており、どうしたものかと一時混乱を来たす。しかし登頂は事実だし、たとえ七月四日が五日であっても、そんなわ

るいことではないということに落ちついた。ちよつとしたエピソードである。

最後の章はエピソードとして、隊員のその後の消息、この遠征に關して世話になった友人、知人の消息、ヒドンピークその後の記録、その他のトピックスが書かれてあり、興味深い。この章により、本書が二五年という時間軸をもった立体的構造となり、人物が生き生きしてくる（この章だけ出版直前に書かれた）。トピックスの中に次のような一文がある。「日本隊が登った地点が、チョゴリザ稜線の最高点でないことがその後明らかになった。最高点はその後の遠征隊によって登られた。しかし、われわれの日本の友人が、チョゴリザに登ったと考えていても、それは許されることと信じる」

クリンチのいう最高点は、南西峰のことで、日本隊が登った北東峰より十一メートル高いことになっている（マウンテン・ワールド 68/69）しかしこれが測量結果でなく、根拠のない数字であることが問題である。このことについては、又別の機会に書きたいが、クリンチのこの好意ある見解はさわやかである。（南西峰に登ったオーストリア隊コップミュラーからの私信にも同様な見解があった。）

著者クリンチは、前アメリカ山岳会々長でもあり、現在環境問題コンサルタントの要職についているが、広くアンデス、カラコルム、南極などに足跡を残し、一九八一年には中国側からのチョモロンマにも行っている活動的登山家である。（因みに彼の山岳蔵書は、個人のものとしては最高レベルのものである。）

本書はヒドンピークを舞台として、人間関係を主軸にくりひろげられた爽快な登山物語りである。古きよき時代の登山の片りんもう

かがえ、いつの時代も変らぬ、チームワークのよくとれた隊からうけるさわやかな読後感が印象的である。

（平井一正）

### Everest; The Unclimbed Ridge

Chris Bonington & Charles Clarke. Hodder & Stoughton, London 1983. 80 color photographs & 9 black-and-whites, 2 maps, 160×240. \$10.95

本書は、副題が示すように、エヴェレストに残された唯一の未踏の尾根、東北東稜から四人という少数の隊員で無酸素登頂を試みた一九八二年ブレモンズーンの英国隊の記録である。すでに新聞や雑誌の報道で周知のように、著者の一人、クリス・ポニントンを隊長とするこの遠征は、登頂を果せなかったのみならず、今日の英国を代表する二人の先鋭的なクライマー、ピーター・ボードマンとジョー・タスカーの遭難という悲劇に終った。

この遭難の転末、すなわち東北東稜上七八五〇メートルの地点に第三キャンプの雪洞を設営した後、いったんBCへ下って休養をとったボードマンとタスカーは、セミアルパイン・スタイルによる登頂を目指して五月一三日BCを出発、五月一六日一八・〇〇時C3からの交信をもって無線連絡を、翌一七日二一・〇〇時、第二ピナクル基部（八二五〇メートル）に登攀中の姿を見せたのを最後にすべての消息を断ち、以後ポニントンの必死の捜索にもかかわらず遭難の原因に

ついで決定的な手懸りは得られず、前後の情況から察するに南側のカンシュン水河へ墜落した可能性が高いという話は、二年前マスコミで報道された通りで、本書にも特に目新しい事実はない。だがボードマンとタスカールがまったくサポート無しでラッシュをかけるに至った経緯や、消息を断つた後のポニントンの対応については詳しく書いてあるし、遭難の場所が極めて近いこともあって五八年前のジョージ・マロリーとアンドリュー・アーピンの神話を想起させるに足るこの二人の若きクライマーについてもよく書けている。

ボードマンとタスカールは一九七七年、ポニントン、デュガール・ハストン等の超一流登山家をして不可能と言わしめたチャンガパン西壁を、二人だけのアルパイン・スタイルによる登攀で極め、一躍ヒマラヤ登山の最先端に踊り出た。以後、二人一緒にはカンチェンジュンガ北稜初登攀、二回にわたるK2試登、コングール（七七一九）初登頂を、それぞれ別のメンバーと共にボードマンはガウリシャンカール南峰初登頂、タスカールは冬期・無酸素エヴェレスト西稜試登等を成し、シエル・パレス、少人数、無酸素等のアルパイン・スタイルを標榜する、今日の極限的なヒマラヤ登山の最先端を拓いてきた。これら一連の先鋭的な登攀やその人間的な背景については、ボードマンの自著“The Shining Mountain”, “Sacred Sunmits” やタスカールの“Everest, the Cruel Way”, “Savage Arena” に詳しいが、すでにこれらの著書で二人の関係や人格についてなじみのある人にとつても、そうでない読者にとつても、本書にある第三者の目で二人の関係、例えば「ピート（ボードマン）」とジョー（タスカール）は長年つれそつた夫婦みたいなものだ。二人の間は、

他人が割って入ることのできない深い友情と固いきずなで結ばれていると同時に、人前で憶面もなく口汚ないのしり合いをやるといった無遠慮なものもある」といった類の観察はなかなかおもしろい。

その他、この本の献辞がボードマンとタスカールにあててあるだけでなく、巻末には独立した一節を設け、ボードマンについては本隊の医者兼ベースキャンプ・マネジャーのチャールズ・クラークが、タスカールについては、登攀隊員でかつアルプスにおける修業時代からの友人ディック・レンショーが長文の経歴と人となりを書いているほか、本文中でも二人を中心に置くよう意識がはらわれているし、ボードマンの日記の引用も沢山とつてある。遭難しても日記だけは残るようにと、常々細心の注意を払っている様子は、前述のボードマンの自著に詳しく書かれているが、幸か不幸かこのたびその配慮が生きていることになってしまった。登攀中のタスカールがいかに筆不精であるかもボードマンの著書に書かれているが、本書におけるタスカールの引用がガールフレンドにあてた手紙一通だけと少いのはその辺の事情を反映している。

以上述べたように、表面上はボードマンとタスカールを中心に据えてはあがるが、この本は結局のところ著者ポニントンの本である。すなわち、本書の読後感として一番印象に残るのは、ポニントンの才能とその限界というテーマである。登山および文筆活動という文武両道におけるポニントンの才能と活躍ぶりについては何人にも異論無いものを思うが、こと最近に限っても、自ら頂上を極めた一九八一年のコングール遠征を翌八二年には“Kongur, China's Elusive

Summit”なる二百十ページの本として世に問うかたわら、この未踏のエヴェレスト東北東稜遠征を組織、実行し、明けて八三年には本書を出版するなど、まさに八面六臂の活躍ぶりである。

しかもこのように多忙を極めるなかで短期間に書きあげたからといって、これは決していい加減な本ではない。共著者のクラークが分担した企画から登山開始に至る一―四章は若干モタつくが、登山、遭難、搜索を描いたボニントン分担の五―六章および八―一二章は、“Annapurna South Face”に始まる彼の一連の著書同様、達意、簡潔、明瞭でグイグイ読ませ、ノンフィクション・ライターとしてのボニントンにかけりは無い。クラークの名誉のため言及しておくが、彼の分担部分はボニントンのそれほど流れがよくないものの、一章では複雑な遠征の企画、機構、関連人物等が簡潔明瞭に整理されているし、二章では一九二一年に始まり六十余年におよぶエヴェレスト登攀史が、この遠征との関連においてよくまとめられている。三章では中央アジアのジオポリティクスを軸に、紀元五世紀から文化大革命に至るまでのチベット史を語るなかで、英国が初めてチベットと交渉をもった一九〇三年のフランシス・ヤング・ハズバンド卿のラサ進取にからめて本隊の入山が学術論文のような正確さで書かれている一方、七章のヤクによるBCからABCへの物資輸送の話は臨場感豊かでおもしろい。クラークの文章を学者の美文とすれば、ボニントンのそれはストーリーテラーの美文といえよう。

本書の出来ばえに関して一言つけ加えるならば、六〇ページにわたり揚げられた八〇葉のカラー写真も見事である。ボニントン、ボードマン、タスカ等写真はずでに定評あるところだが、

この遠征を全面的に後援したジャーディン・マセソン社の社長を筆頭にBCまで入った同社トレッキング隊のメンバーの一人ミッチェル・ジャーディンの写真は、大自然や大建築物を撮って雄大であり、白川義員の作品に迫るものがある。

ボニントンの肉体面での能力もすでに定評あるところで、コンダクトでも若い三名の隊員と共に頂上に立っている。今回もC3の雪洞建設の前後までは同じく若い三人の隊員と共に頂上に立つ積りで、対等にルート工作、荷上げ、メシ当番をやっているし、雪の吹込む雪洞の入口にも寝ているが、この時四八才という彼の年齢を考えると、これは驚嘆に値しよう。

ところがさすがのボニントンやはり年には勝てなかった。その意味で本書は、ヒマラヤ登山の最先端のクライマーとしてのボニントンの敗北宣言であると同時に引退宣言でもある。その徴候はまず酸素の使用に対する考え方に現れる。若い三人は酸素の使用などハナから論外としているのに対し、ボニントンの方は基本的には無酸素でゆくが、もしものためにABCまでは上げておくべきだと計画の段階から弱気である。結局、若者の主張通りまったくの無酸素でゆくことになるのだが、見方によっては主義の違いとも取れるこの問題も、その根源は自らの体力の衰えに対するボニントンの懸念と恐怖に端を発しているのと同じである。この懸念と恐怖は、登攀の初期においては「いや心配するほどのことはなかった、若い者と同じように登れた」という逆の形や、荷上げの時、分担の燃料用ガス・カートリッジ数本をこっそり置いてゆこうとして見とがめられ、笑ってゴマ化すといった軽い形であられるが、ルートが延

び、高度が上つてC3(七八五〇呎)の雪洞建設の前後になると、登りではもちろん、下りでさえ他の隊員に大きく水をあけられたり、疲労困憊のあまり途中一人だけ荷上げを放棄せざるを得なくなるなど、自尊心にもかかわる深刻なものになってくる。そしてある晩、アンナプルナ南壁に始まるこの十数年間、登山界に一大エポックを築いてきた大登山家が、自らの登攀能力の衰退に涙を流してとり乱し、「一晩寝ればよくなるから」などと一世代以上年下のタスカリーになぐさめられたりする様は、本書の正直さを感じる以前に、あわれという感想の方が先に立つ。

その他、ボニンントンに関し意外な一面として、登山の進展上C1の雪洞に上るべき段階になつても、もうじき妻ウエンディの手紙が届くはずだという期待に引きずられ、ABCを離れたがらぬ様とか、休養のため再度ABCへ下つた時にもその手紙が届いておらず、一人意気消沈する様なども正直に書いてある。総じて英国人の登山記には、当該登山のバイオニアワークぶりもさることながら、これに係る個人の内面や葛藤を描いて長ずるといふ伝統があるが、その意味でも本書はよく書けている。

登山というのは総合的なスポーツで、それに直接係るところの登攀能力とか体力に加え、計画力、組織力、統率力、判断力、経験等の間接的、知的な要因が個人の力量評価に大きなウェイトを占めるものである。第二次大戦後では英国初の中国側からのこのエヴェレスト遠征を組織し、この世界的な不況の折にジャーデン・マセソン社から巨額の資金援助を取りつけただけでも、この遠征に果すボニンントンの役割は十二分だと思われるのに、八〇〇〇呎の荷上げで

多少落伍したからといってこれほど深刻に悩まなくてはならないのは、果して彼が自己の内面に設定した肉体的な水準の高さによるものなのであろうか。それとも英国の登山界一般、あるいは社会一般の気風を反映したものなのだろうか。

こうして自らの能力に限界を感じたボニンントンは、C3建設を契機にBCに下り支援に回る。これと前後してディック・レンショーも脳卒中の前徴発作を起し、一人B・Cを下り帰国の途につく。このようにして四人の登攀隊員のうち二人が脱落し、ボードマンとタスカリーがサポートなしで頂上アタックに向うが、その結果は先に述べた通りである。

ボードマンとタスカリーがマロリーとアービンを想起させるのに対し、ボニンントンは文筆力の確かさといい、ヒマラヤ登山に新時代を拓きかつそれを生きのびたことといい、エリック・シプトンを想起させる。一九三〇—四〇年代にガルワール・ヒマラヤの探検登山、とりわけナンダ・デヴィ内院の踏査やエヴェレスト北面の試登で所謂ヒマラヤ黄金の時代を築いたシプトンは、一九五一年、エドモンド・ヒラリーを伴いクンプ氷河へ入り、一九五三年のエヴェレスト初登頂の契機を作つた後、ヒマラヤの第一線を退き、パタゴニアの水床横断、ティエラ・デル・フェゴではダーウィン山脈の初登頂など、新大陸に渡つてバイオニアワークを続けたが、奇しくもパタゴニア氷床の横断を成したのがエヴェレストのボニンントンと同じ四八才であった。シプトンは南米に新天地を求めたが、八〇〇〇呎の壁でも登れることを証明し、現代の登山に一大エポックを画したボニンントンは、この引退声明後何処へ行くのだろうか。「現代の登山家に



は地図の空白部など残されてはいない。ただひとつ残されているものといえ、登山家自身の心の内面だけである」とはエヴェレストに消えたボードマンが一九七七年のチャンガパン西壁登攀にあたってはいた言葉である。

(末田達彦)

## 原色新日本高山植物図鑑 (I)・(II)

清水建美著 保育社 大阪 A5判

(I) 31ページ うちカラー図版1と72 一九八二年 四五〇〇円

(II) 395ページ うちカラー図版73と144 一九八三年 四八〇〇円

わが国の高山植物図鑑も、ついにここまでできた。本書は、数ある高山植物図鑑の中で、最も科学的で権威あるものである。

内容は、一般の図鑑と同じように、カラー図版と解説から成る本文と「高山植物案内」と題する幾つかの付録とによって構成されている。

まず図版について。植物を表わすのに手書きの画によるか写真によるかは、一長一短があつて簡単には優劣は決めかねるから、ここではふれない。

今日のカラー印刷の技術にはもう問題はなからう。同じ保育社の原色図鑑シリーズ中の武田久吉著『原色日本高山植物図鑑』正・続(初版一九五九・六二)の白黒写真を元とした着色版による図版と、本書のカラー写真を使った鮮鋭な図版とを比べてみれば、差は明ら

かである。

しかし、本書の図版にも多少の不満はある。例えば、第3図版の四枚の写真は、いずれも写すときの工夫が望まれるものである。邪魔なものや余分なものが写つていては、主題の影が薄れよう。第48図版中のマルバウスゴの写真はあまりにお粗末だし、第53図版の二枚の写真からはハクサンボウフウとキレハノハクサンボウフウの区別は容易ではない。第66図版中のウラジロキンバイにはぜひとも一部の葉の裏を出すべきだし、第73図版のクモマグサとチシマクモグサの場合は、クモマグサの三浅裂した葉を写し出さなければ、この二枚の写真を並べておく意味が薄い。

イグサ科、カヤツリグサ科、イネ科には、写真よりも手書きの原色図や線画を多くとり入れ、スゲ属には雌花の鱗片および果胞を、イネには苞穎一対および内・外穎花一個ずつを图示している。これにより、写真ではまず困難なこの仲間の同定も容易かつ完全にできるよう。

ところで、本書とほぼ時を同じくして、佐竹義輔ほか編『日本の野生植物』IとII(平凡社 一九八一〜八二)が出版されているが、この図鑑の図版に注目したい。一枚一枚の写真が、その植物の形態や生態を表わすために、実によく計算されて写されていることがわかる。撮影した場所や日付が入っているだけでなく、撮影者名まで入れて(責任の所在を明らかにして)いる。今までにこれだけ見事な写真をそろえた図鑑があったであろうか。残念ながら、本書は図版ではこれには一步をゆずる。

高山の悪条件のもとの撮影の苦勞もわかるが、青山富士夫ほか

『高山の花』(毎日新聞社 一九七一)や土井信夫著『早池峰の花』(誠文堂新光社 一九八〇)のような、息をのむ写真を集めた本も出ていることを書き添えたい。

次に、解説は、図版と並ぶ図鑑のもう一つの生命である。本書では、巻頭の門・網等の検索表のあとに、文の解説、属の検索表、属の解説、種・亜種等の検索表、種・亜種等の解説の順に並んでいる。品種は、上位分類群の解説中に含めているが、例えば「草丈や葉がとくに大きいものは、レブンシオガマ *F. fauriei* Petim. とよばれる。」(I) p. 83 ヨツバシオガマの解説)は、「レブンシオガマ *F. fauriei* Petim. は草丈や葉がとくに大きいもの。」というふうに品種名の見出しのあとに解説をおいた方が、見た目にもすっきりしよう。

検索表は本書の解説の最大の特徴である。今までの高山植物図鑑で完全な検索表のあるものはなかった。まぎらわしい種類の同定で、長い解説をじっくり読み比べる余裕のないときなど、検索表の簡潔な表記は実に有難い。検索表は科学的図鑑のそなえるべきものの一つである。

基準標本(タイプ標本)の産地を記したのも、本書がはじめてであろう。もともと、奥山春季著『日本高山植物図譜』(誠文堂新光社 一九六六年)は種ごとに研究史を設けており、ところにより基準標本にも言及していたが。

染色体数の採録は、アマチュアには興味が薄いとしても、やはり近代図鑑の資格の一つかもしれない。染色体数は、北村四郎ほか著

『原色日本植物図鑑』保育社(一九五七〜六四)などにも記されている。

生活形の記載は珍しい。ここではラウンキエーの休眠型、つまり、越冬芽が地表から2〜8 mの高さにある「小型地上植物」、30〜200 cmの高さにある「矮形地上植物」、0〜30 cmにある「地表植物」、地表直下にある「半地中植物」、地中にある「地中植物」、一年生ないし越年生の「一年生植物」にわけている。

分布は、国内の分布ばかりでなく、国外のものも示してある。キバナシヤクナゲの分布をカムチャッカ・シベリア・千島・サハリン・ウスリー・ダウリア・モンゴリア北部とたどっていくと、私の夢は広がる。国内の分布についても、これほど詳しく具体的に記した図鑑はなかった。オオヒラウスユキソウの産地、岬山(『山の素描』(秀岳社 一九六九)参照)を、ヒメコザクラの産地、岩手県大東町(土井信夫著『早池峰の花』参照)をあげているのは図鑑としてはじめてであろう。とにかく本書により私たちの高山植物の分布に関する視野は、非常に広がった。

要素区分については、すべての種が植物地理学的に、「日本固有要素」・「周北極要素」・「アジア要素」・「中国・ヒマラヤ要素」・「両太平洋岸要素」・「北太平洋要素」・「北アジア要素」などに分けられている。これらは日本の高山植物の系譜を知る上に有効であろう。

(I)、(II)巻末の「高山植物案内」は、マニアにも楽しく為になる読物である。以下に、この付録を簡単にみてみよう。

「高山植物に寄せて」では、高山帯の範囲の二様の考え方を紹介

して、高山植物の定義をしている。

「高山植物研究史覚え書き」によれば、「高山植物」の語がはじめて使用されたのは一八九九年という。ここには、三好学・牧野富太郎著『日本高山植物図譜』第一巻・第二巻（成美堂一九〇六・〇八）を嚆矢とする明治以降の高山植物関係の主要な図書を列記しているが、本書は、著者が序で述べているように「先人の幾多の業績を越えた」集大成といえよう。

「日本高山植物の系譜」は、本文解説の要素区分の詳説。

「高山植物の生活史断面」とくに地下部の観察」は、本文解説の生活形の図による例示であり、今まで地上部のみに限られがちであった高山植物の観察を地下部にまで及ぼしたものである。いわば「高山植物の地下部生態図譜」である。現在は四〇種にとどまっているが、今後もっと他の種にまで及ぼすことが期待される。この記述によれば、アオノツガザクラの地中に埋もれた茎では、直径四メートルで二五個、ジムカデのそれでは一・三メートルで一五個の年輪が数えられたとのことである。

「走査型電子顕微鏡による微細構造の観察」および「日本高山植物染色体数一覧」は、それぞれに分類学研究の有力な近代兵器であるが、アマチュアにはあまりに学問的、専門的にすぎよう。それよりも私どもには、例えば学名解説などの方がなじめるのだが。

「英文検索表」と「新学名一覧」は、海外の研究者のため。

「高山植物関連世界地図」には、ガンコウランのように両極分布の例があるのだが、なぜか北半球しか出ていない。

巻末の「総索引」は、(II)に(I)の分も入れているのは使用に便利で

ある。

次に本文中で気づいたことをいくつか書いておく。コマウスユキソウの項には、本場のエーデルワイスのことが詳しく出ている。ツガザクラ属の解説には、この仲間について興味のある事実が書いてある。クロマメノキの果実は、ヨーロッパのは食えず、北アメリカのは美味だとか、ガンコウランはヨーロッパのはがく、北アメリカのは無味だとか、私は本書ではじめて知った。北海道やアラスカなど北方のイワヒゲは本州産に比べて花などが大きい、とあるのを読んで、私は今までの山路での観察をふりかえって合点があった。

分布の限られた珍しいものまで採録してあるのはさすがである。オオハクサンサイコ、タカネアオチドリ、ミヤマノギクなど、他の高山植物図鑑にはないものだろう。

ところが、ムシトリスミレがあるのにコウシンソウがない。シャクナゲは、ハクサンシャクナゲにはアズマシャクナゲなども対比させたい。秩父や日光のように両者が混生している所も多いのだから。カニコウモリやオタカラコウも入れている図鑑が多い。

初心者も使うことを考えれば、説明のほしい述語もある。例えば、クライン、クローン、二次木部、仮軸分枝など。

最後に、山名には私ども山好きは神経質である。例えば、「早池峰山」には山の字をつけたくないし、「間岳」には、ノを入れない。「匡王山」は、匡王山の誤植としても、「石槌山」や「カムイエクウシカウシ」が何回も出てくるのは気にかかる。基準標本の産地として、ハイオトギリに「イドナツブ山」とあるが、イドンナツブとすべきだろう。ヒダカゲンゲには「コエボツクサツナイ岳」とあるが、コイカ

クシユサツナイ岳とコイボククシユシビチャリ川の混同したものか。しかし責任は著者にはなく、標本の記録者にあるのであろう。クモマタンポポ、タカネヤハズハハコなどの産地として北海道の「白鳥山」をあげているが、私はこの山を知らない。ユキワリソウの九州の産地、「洞岳」はどこにあるのだろうか。

いささか望蜀の私見ではあったが、日本の高山植物図鑑中の金字塔としての本書が、今後この分野の学問の進歩とともに内容を改訂して版を重ねることを期待したい。

(松崎中正)

日本の山地形成論 地質学と地形学の間

藤田和夫著 蒼樹書房 東京 一九八三年 466ページ カラー写真10葉 白黒写真多数 図多数 引用・参考文献 藤田和夫著作・論文集成(目録) 索引 135×192 四〇〇〇円

「ある山と別の山との形がちがうのはどうしてだろうか」とか、「なぜ、どのようにして山は高くなったのだろうか」とかいふ疑問を、多くの登山者が一度は抱いたことがあるにちがいない。このような疑問に答えてくれるのが本書である。ここには、日本列島の山地——とくに近畿地方を中心とした中部地方以西の山やま——が、どのようにして、どういう原因で形成されてきたかが書かれている。

山地の形成といえ、すぐ思い浮かぶことばは「造山運動」であ

る。アパラチア造山運動やアルプス・ヒマラヤ造山運動という語は山の地質解説記事の中にもしばしば見出せる。しかし、文字通りの意味とは異って、造山運動の研究とは、実際には、山地の地質構造の研究であって、たとえば基盤岩石のでき方や、褶曲構造の発達などをくわしく研究するのである。山がなぜ、どのようにして高い地形になってきたかということは、従来の造山運動の研究ではほとんど取りあつかわれてこなかった。

そもそも、われわれの眼前に、高い山地がそびえているということは、たいていの場合、山が現在でも隆起し続けているということの意味する。さもなくば、山は百万年ぐらゐの間に侵食されて平坦な土地になってしまったであらう。現在、地球上にある山脈はほとんど、第三紀の後半から第四紀という地質時代の最後の時期——たかだか最近数百万年のあいだ——に隆起したと考えられている。たしかに、山地をつくっている岩石にはたいへん古い時代につくられたものが多い。しかし、山の地形そのものは、地質学的にいうと、ごく最近つくられたものばかりなのである。それゆえ、山地の隆起の様相をくわしく知るためには、古い時代のかたい岩石だけではなく、最近の軟らかい地層のでき方や、地形そのものの動きを調べなければならぬ。したがって、山地形成の研究は、地質学・地形学・第四紀学・地球物理学の諸分野にまたがり、関連する地質時代も古生代から第四紀・現在にまでひろがるであろう。

このような多岐にわたる山地形成の研究を完成させるためには、一つの分野からアプローチするだけではとうてい不可能である。著者の藤田和夫は、みずから「何でも屋」的精神をもつと称するだけ

あつて、専門の地質学だけではなく、地形学や第四紀学・地球物理学の各分野にも精通している。しかも著者はこの研究を学生時代から引き続いて四〇年以上続けてきた。このような著者にして初めて可能になった山地形成論、その集大成が本書である。

本書は、論文風の構成でもなければ、教科書調の書き方でもなく、著者が到達した山地形成論にいたる過程を回顧録ふうの自伝的研究史というかたちでまとめたものである。その理由を著者は、「地球科学は、長い歴史の中で今日にいたった地球という具体的なものを相手にしているから、理論的・演繹的なものより経験的・帰納的なものが大きな意味を持つことが多い。しかしそれだけではなく、それらの中から抽出されたものがまとまってきて、一つの発想になってくるのが大事だと感じる(九ページ)」とのべている。登山と探検のすきな一学生がいかにして日本山地形成論を完成させるにいたったか、そのためにどのようなフィールドワークと発想をつみ重ねてきたかがよく理解できる。

内容をざっとみてみよう。

われわれはまず、中国の黄河上流、オルドスの平原に連れて行かれる。これは、本書がせまい日本列島だけではなく、広く世界中を舞台にしていることを暗示するものである。じつさい、のちにわれわれは、カラコルム・ヒンズークシユ、アルプス、アメリカ合衆国西部、アラスカ、中国の雲南と西域、ボルネオなどを訪れることになるのである。オルドスに続いて、著者が山地形成論に取り組みきっかけになった学生時代の白頭山と大興安嶺での登山・探検の経験

がのべられる。「北部大興安嶺の中央部に立った時、そこはその名前前から想像されるような山嶺ではなかった。見渡す限り、大海のうねりのようなものがあるだけで、まるで大洋の水平線をみているようであった。……いったいこれが山なのであろうか。山脈とか山地とわれわれが呼ぶものは何であらうか(二一ページ)。別の論文で著者は、中学生時代のホームグラウンドであった六甲と、高校生になつてから親しんだ京都北山との山容のちがいに強い印象をうけたことも述べている。著者の山脈形成論の出発点は、まさに山登りにあつたのである。

終戦後大阪にもどつてきた著者は、資源調査の一環として、第四紀に堆積した地層である大阪層群の研究を始めた。大阪層群を追いかけていくうちに、それは大阪湾の底から六甲山の上りまで連続して分布していることがあきらかになつた。このことから、六甲山は第四紀になつてから急激に隆起して山地になつたことが推定できた。そのため、著者は本格的に六甲山地の研究にとりくむことになる。六甲山地をつくつた断層運動があきらかになり、それと、著者が近畿トライアングルと名付けた近畿地方中央部の地質構造・地殻運動との関係もはつきりしてきた。近畿トライアングルは、断層で境された小規模な山地と盆地の寄せ木細工状の集合体であり、それらが形成されたのも第四紀に入つてからであつた。

つづいて、近畿トライアングルでの地殻変動の原因をあきらかにするために、著者は中部地方から中国山地までの広い範囲の地形と地殻構造をしらべる。最近急速に発展してきた地殻物理学や変動地形学の考え方や方法を幅広くとりいれて、さまざまの調査をおこな

った。たとえば、広域の活断層系を調べるためには、人工衛星の映像を使ったし、活断層系の実際の動きをしらべるために、新幹線のトンネルの中に岩盤の動きを測る伸縮計を設置したりした。その結果、波長一〇〇キロメートル程度のうねりの構造や、格子状の横ずれ断層系の存在などがあきらかになった。これは、西南日本の地形が東西方向の水平圧縮応力によって形成されたことを意味し、それが太平洋プレートとフィリッピン海プレートの運動の結果であるというモデルを提示できた。

これで、なぜ山地ができたかについての答が得られたので、つぎには、どのような経過をたどって山地が高くなってきたかについて調べなければならぬ。そのためには、過去の記録、すなわち地層をくわしく調べることが必要であった。山地と山地の間にある盆地の堆積物がくわしく調査された。海底の地層を音波探査でさぐり、建設工事用のケーソンにもぐりこみ、あちこちの山麓に分布する古い段丘の礫層を根気よく観察し対比した。近畿トライアングルの古地理がしだいにあきらかになり、山地の成長曲線を描くことができるようになった。日本の山地、すくなくとも中部日本から近畿地方にかけての山地が高くなり始めたのは第四紀の後半であり、とくに六甲山地などは最近五〇万年ぐらいの間に急速に隆起してきたのであった。このようなくわしい山地の隆起速度の変化が解明されたのは世界でもまれである。

むすびには、日本山脈（日本列島）とヒマラヤ山脈との形態のちがいがのべられ、準平原問題、山地形成の原因と隆起速度、海水準変動などについての大胆な意見がのべられている。

本書は専門家のために書かれたものではなく、一般向けの読み物であると紹介者は思っている。しかし、もりこまれた内容は豊富で、最先端の成果ばかりであるから、学術的水準はきわめて高く、完全に理解するためにはある程度の基礎知識が必要かもしれない。また、地質学・地形学の分野では仕方のないことであるが、地層や地形面のまぎらわしい名称がひんばんに出てくる。読み通すには少し努力を要するかもしれない。著者も「すべての読者に通読していただくこうとは思っていない。興味あるところをひろって、飛ばし読みしていただいで結構である」（四三七ページ）とこわわっている。本書は、近畿の山の地学的自然についての知識の宝庫である。紹介者もその一人であるが、近畿地方の山に親しんだ者にとつては、自分の歩いた山に関係する箇所をひろい読みするだけでも興味はつきない。

ふたたび強調するけれども、本書は山地の地形や地質を総合的にあつかっているにもかかわらず、はさみとのりでできた本ではない。足で山を歩き、ハンマーで岩をたたいて得られた豊富なデータを、緻密な論理と大胆な発想でまとめあげたものだ。引用・参考文献リストも索引も完備している。第一刷にはあった誤植や小さなミスも第二刷ではほとんど改訂されている。著者が本書を作成するために費した努力は、たいへんなものだったと容易に想像できる。われわれは、このようにまとまった形で、壮大な日本山地形成論を読めることを感謝しなければならぬ。

紹介者はまえまえから、わが国の登山界と登山者の地学的自然、

とくに地形についての理解の底の浅さをもの足りなく思っている。大多数の登山者が興味をもつ自然は、高山植物と気象、岩石・鉱物ぐらいに限られているような気がする。そのため、たとえば、ヒマラヤの高峰の高度を改定したとネパール政府が発表すると、ヒマラヤの山やまが隆起したり沈降したりしたという間違ったコメントがどうどうとまかり通ったりする。そのような現状がすこしでも改善されるためにも、なるべく多くの登山者に本書を読んでいただきたい。

(岩田修二)

# 会務報告

昭和五十八年(一九八三)六月、昭和五十九年(一九八四)五月

## 一九八三年度役員・評議員・支部長

会長 佐々保雄

副会長 田口二郎、山田二郎

常務理事 田村俊介、神崎忠男、大倉昌身、西村政晃

理事 赤松功也、河村憲二、松家晋、水野勉、鈴木雄二、平野隆

司、長谷川良典、平井吉夫、絹川祥夫、村木富士、皆川完一、

梅野淑子、高遠宏

監事 小倉茂暉、松田雄一

常任評議員 飯野亨、宮下秀樹、嶋原啓佑、山口節子、中村純二

評議員 小原勝郎、松丸秀夫、折井健一、辰沼広吉、柴田均二、岸田権

二、西沢健一、蒲生明登、細川沙多子、片岡博、渡辺兵力、

村山雅美、小西政継、吉田宏、伊藤紀克

支部長 佐藤敏彦(岩手)、岡田光行(秋田)、村上勝太郎(山形)、伊藤

篤郎(宮城)、中島正夫(福島)、佐藤一栄(越後)、奥原敦永

(信濃)、大沢伊三郎(山梨)、山本朋三郎(静岡)、尾上昇(東

海)、松井辰弥(岐阜)、若林啓之助(富山)、増江俊三(石川)、

今西寿雄(関西)、港叶(山陰)、赤松大助(福岡)、野口秋人

(東九州)、西沢健一(熊本)

理事会は会長、副会長、理事、常任評議員、監事によって構成される。

◇六月理事会 六月十三日(月) ルーム

出席者 二十二名

### ▽審議事項

一、休会会員の会員復活について

二、アンケート調査の件

三、理事の職務分担について

四、八〇周年準備会について

五、カンチエンジュンガ登山計画について

### ▽報告事項

一、エベレスト地形図の貸出について

二、会歌の制定について

三、ネパール観光大臣来日について

四、各委員会報告他

会報「山」四五八号参照

◇七月理事会 七月十一日(月) ルーム

出席者 二十一名

### ▽審議事項

一、カンチエンジュンガ登山計画について

二、「八〇周年記念事業準備委員会」設置について

三、支部問題について

### ▽報告事項

一、海外登山推薦

東大K7登山隊、東洋大カラコルム登山隊

二、富山支部新支部長就任

三、アンケート結果を会報八月号に掲載する

四、委員会会議開催について

五、中国登山協会一行八名来日について

六、事務局職員の夏季休暇の為休室の件



七、「山岳」の広告を『文春』に掲載について

八、各委員会報告他

会報「山」四五九号参照

◇八月理事会——休会

◇九月理事会 九月十二日(月) ルーム

出席者 二十名

▽審議事項

一、秩父宮記念学術賞の受賞候補推薦に関して

二、中国登山協会一行来日に関して予備費支出について

三、16ミリ映写機購入について

▽報告事項

一、カンチエンジュンガ登山の登山許可取得と後援について

二、北アルプス山小屋譲渡について

三、北海道支部長遭難死について

四、「IMF 25周年式典」出席報告

五、ナムチェバルワ・キレン山脈の登山許可願提出について

六、各委員会報告他

会報「山」四六一号参照

◇十月理事会 十月十一日(火) ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、八十周年記念事業準備委員の選任について

二、「平和と登山の在り方懇談会」主催の催物後援について

▽報告事項

一、ネパール山岳博物館について

二、文部省よりソ連航空機利用の自制

三、冬季無人小屋の利用者のモラルについて

四、カンチエンジュンガ登山進行状況

五、年次晩餐会について

六、本会運営管理についての内規の充実について

七、ボゴタ遠征の有志募金について

八、会の財務状況について

会報「山」四六二号参照

◇十一月理事会 十一月七日(月) ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、八十周年記念事業準備委員会作成の第一次原案について

二、日大理工学部山稜会「中部カラコルム登山隊」推薦について

▽報告事項

一、定款改正に関する文部省の回答について

二、年次晩餐会について

三、支部長会議開催について

四、中間監査報告について

五、カンチエンジュンガ登山進行状況について

六、事務員の産休について

七、故折井健一氏未亡人よりピッケルと基金寄贈について

八、各委員会報告他

会報「山」四六三号参照

◇評議員会 十一月九日(水) ルーム

出席者 片岡博、宮下秀樹、細川沙多子、山口節子、辰沼広吉、松丸秀夫

岸田権二、嶋原啓佑(議長)、佐々保雄、田口二郎、山田二郎

▽審議事項

一、名譽會員推薦の件

▽提案

一、創立八十周年記念事業案が説明された

◇支部長会議 十二月三日(土) ルーム

▽報告事項

一、会務報告

二、創立八十周年記念事業について

三、各支部の概況及び活動報告

◇十二月理事会 十二月五日(月) ルーム

出席者 十九名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、年次晩餐会(参加者三四〇名)の結果

二、支部長会議の結果

三、八十周年記念事業準備委員会報告

四、カンチエンジュンガ登山進行状況について

五、各委員会報告他

会報「山」四六五号参照

◇一月理事会 一月十日(火) ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、シンポジウム「ネパール・ヒマラヤ地域の荒廃をどう防ぐか」共催について

▽報告事項

一、八十周年記念事業準備委員会報告

二、カンチエンジュンガ登山進行状況について

会報「山」四六五号参照

◇二月理事会 二月六日(月) ルーム

出席者 十九名

▽審議事項

一、日本大学テリツツオヒマイル登山隊、都岳連推薦について

二、東海支部ガウリサンカール登山隊八十周年事業として許可依頼について

三、八十周年記念事業資金について

四、加藤保男写真展後援依頼について

五、昭和五十九年度収支予算案について

▽報告事項

一、八十周年準備委員会経過報告

二、カンチエンジュンガ登山進行状況と壮行会報告

三、シンポジウム「ネパール・ヒマラヤ地域の荒廃をどう防ぐか」開催報告

四、会長の支部訪問報告

五、各委員会報告他

会報「山」四六六号参照

◇三月理事会 三月五日(月) ルーム

出席者 十九名

▽審議事項

一、昭和五十九年度事業計画案について

二、同収支予算案について

三、総会開催日について

四、八十周年記念事業について

▽報告事項

▽報告事項

一、カンチエンジュンガ登山隊報告

二、植村直己会員について

三、各委員会報告

会報「山」四六六号参照

◇三月拡大理事会 三月十八日(日) ルーム

出席者 理事会出席者の他評議員、役員経験者計二十三名

▽報告事項

一、八十周年記念事業について

尚実行上の参考意見が多数出された。

会報「山」四六六号参照

◇評議員会 三月二十二日(木) ルーム

出席者 伊藤、西沢、蒲生、辰沼、片岡、中村、細川、村山、吉田、宮下、

小原、山口、岸田、佐々、田口、山田、鳴原(議長)

▽報告事項

一、昭和五十九年度事業計画と予算案について

二、八十周年記念事業について

三、役員改選について(候補推薦)

四、その他

◇四月理事会 四月九日(月) ルーム

出席者 十六名

▽審議事項

一、昭和五十八年度事業報告取次決算報告案について

二、会計監査報告について

三、八十周年記念事業について

四、カンチエンジュンガ登山隊報告

五、青年会員制度新設について

六、京大、同志社大合同登山隊後援会メンバーについて

▽報告事項

一、評議員会報告

二、故成瀬岩雄会員の未亡人より寄付蔵書寄贈の申し入れについて

三、植村直己の会について

四、会報発行遅れについて

五、各委員会報告

会報「山」四六七号参照

◇評議員会 四月十二日(木) ルーム

出席者 山口、吉田、中村、松丸、片岡、渡辺、宮下、辰沼、岸田、小西、

村山、佐々、田口、山田、鳴原(議長)

▽審議事項

一、昭和五十九年度総会付議案について

(一)、監事改選について

(二)、その他

◇五月理事会 五月七日(月) ルーム

出席者 十六名

▽審議事項

一、新監事竹田寛次氏推薦について

二、青年会員について

三、会報担当理事交代について

四、故成瀬岩雄会員未亡人寄付金処理について

▽報告事項

一、八十周年記念事業について

二、支部長会議について

三、月原俊二会員永年会員推薦追加について

四、木暮祭の祝金について  
五、各委員会報告

会報「山」四六九号参照

◇支部長会議 五月十八日(金) ルーム

出席者 二十名

▽報告事項

一、記念集会開催について

二、会報報告について

三、各支部の概況、活動報告

◇昭和五十九年度通常総会 五月十八日(金) 於千代田区六番町十五番地主

婦会館

出席者 佐々保雄会長以下一五一三名(委任者を含む)

▽総会次第 司会 神崎忠男

一、会長挨拶 佐々保雄

二、昭和五十八年度事業報告及び五十九年度事業計画(案) 大倉昌身

三、昭和五十八年度収支決算及び財産目録報告、昭和五十九年度収支予算

案 西村政晃

四、監査報告 小倉茂輝

(右昭和五十九年度事業計画及び予算案、原案通り承認)

五、任期満了に伴う監事選任について

竹田寛次選出

六、昭和五十九年度除籍対象者について

七、総会議事録署名人選について

尚總會終了後、各支部の代表の紹介と八十周年行事について説明があつた。

九。

会報「山」四六八号参照

◇主なる行事と集会

▽昭和五十八年六月五日(日) 上高地

第三十七回ウエストン祭

▽昭和五十八年六月十一日(土)~十二日(日) 守門岳

山菜山行

▽昭和五十八年六月十五日(水) ルーム

会員懇談会「フィールドマナーノートについて」 講師 中村純二

▽昭和五十八年六月十八日(土)~十九日(日) 静岡 富士ハイツ

新旧役員懇談会

▽昭和五十八年六月二十四日(金) ルーム

講演会「人への落雷と安全対策」 講師 北川信一郎

▽昭和五十八年六月二十五日(土) ルーム

フィルム映写会「冬のロータン峠」 講師 三田幸夫

▽昭和五十八年六月二十八日(火) ルーム

報告会「ブータントレッキング」 講師 黒石 恒

▽昭和五十八年六月三十日(木) ルーム

研究会「遭難救助」 講師 松永敏郎

▽昭和五十八年七月二日(土)~四日(月) 羅臼岳

北海道支部十五周年記念山行

▽昭和五十八年七月三日(日) 奥多摩

研究会実技「遭難救助」 講師 松永敏郎

▽昭和五十八年七月十五日(金) ルーム

講演会「今日のヒマラヤ登山」 講師 池田常道

▽昭和五十八年七月十六日(土)~十八日(月) 八幡平

高山植物探索山行

▽昭和五十八年七月二十三日(土) 神田YMCA

第三回委員会会議

- ▽昭和五十八年八月二十七日(土)～二十八日(日) 立山  
立山自然保護全国集会
- ▽昭和五十八年十月一日(土)～二日(日) 会津  
懇親山行
- ▽昭和五十八年十月八日(土)～十日(月) 穂高  
スケッチ山行
- ▽昭和五十八年十月一日(土)～二日(日) 小川山  
岩登技術講習会
- ▽昭和五十八年十月十三日(木) 自治労会館  
第一回山岳会秘蔵フィルム公開の夕 講師 日下田 実
- ▽昭和五十八年十月十五日(土) 青山学院大学  
山と登山の科学文献検討会
- ▽昭和五十八年十月二十日(木) ルーム  
学生部後期総会
- ▽昭和五十八年十月二十一日(金) ルーム  
ラムジー氏歓迎会
- ▽昭和五十八年十月二十二日(土) ルーム  
図書交換会
- ▽昭和五十八年十月二十四日(月) ルーム  
ヒマラヤの気象予報 講師 宮内俊一
- ▽昭和五十八年十月二十八日(金)～三十日(日) 小川山  
学生部現地集会
- ▽昭和五十八年十月二十七日(木) ルーム  
報告会「サト、バント登山」 講師 高本信子
- ▽昭和五十八年十月二十九日(土) 渋谷勤労福祉会館

雪と氷のシンポジウム「寒冷地の雪と暖候地の雪」 講師 井上治郎  
他七名

- ▽昭和五十八年十月～昭和五十九年二月 ルーム  
婦人懇談会高所登山セミナー 講師 黒石 恒、堀井昌子他
- ▽昭和五十八年十一月六日(日) 皇居周辺  
第二十回マラソン大会
- ▽昭和五十八年十一月十一日(金)～十二日(土) 那須  
秋山山行
- ▽昭和五十八年十一月十五日(火) ルーム  
会員懇談会「スキートの映画と昔のスキー四方山話」 講師 各務良幸
- ▽昭和五十八年十一月十五日(火)～十六日(水) 丹沢寄小屋  
青年懇談会丹沢研究会
- ▽昭和五十八年十一月二十五日(金) ルーム  
講演会「接峰面の研究と登山の想い出」 講師 岡山俊雄
- ▽昭和五十八年十一月十二日(土)～十三日(日) 富士御庭  
第二十六回紅葉会
- ▽昭和五十八年十一月二十七日(日) 番町共済会館  
学生指導者会議
- ▽昭和五十八年十二月三日(土) ホテルニューオータニ東京  
昭和五十八年度年次晩餐会
- ▽昭和五十八年十二月四日(日) ルーム  
支部懇談会
- ▽昭和五十八年十二月四日(日) 高尾山  
懇親山行
- ▽昭和五十八年十二月十日(土)～十一日(日) 精進湖  
山岳写真技術講習会 講師 白旗史朗

- ▽昭和五十八年十二月二十二日(木) ルーム  
研究会「高所遭難対策委員会」
- ▽昭和五十八年十二月二十日(火) ルーム  
講演会「山の樹木について」 講師 中田銀佐久
- ▽昭和五十九年一月十四日(土)～十六日(月) 柵池  
スキー山行
- ▽昭和五十九年一月二十一日(土) 主婦会館  
カンチエンジュンガ登山隊壮行会
- ▽昭和五十九年一月二十三日(月) ルーム  
研究会「最近の高所登山について」
- ▽昭和五十九年二月十五日(水) ルーム  
フィルム映写会「スキー映画特集」
- ▽昭和五十九年二月四日(土) 国際文化会館  
シンポジウム「ネパールヒマラヤ地域の荒廃をどう防ぐか」 日本ネパール協会共催
- ▽昭和五十九年二月十六日(木) ルーム  
学生部活動会計報告及び納会
- ▽昭和五十九年二月二十五日(土) ルーム  
山岳図書を語る夕べ 講師 岩科小一郎
- ▽昭和五十九年二月十七日(金)  
講演会「山スキーの科学」 講師 青柳裕樹他四名
- ▽昭和五十九年二月二十五日(土) ルーム  
展覧会「この一本展」
- ▽昭和五十九年二月二十八日(火) ルーム  
講演会「野鳥の話」 講師 中坪礼治
- ▽昭和五十九年三月十日(土) ルーム
- 山岳史懇談会 講師 今西錦司、西堀栄三郎
- ▽昭和五十九年三月十五日(木) ルーム  
講演会「南極裏ばなし」 講師 村山雅美
- ▽昭和五十九年三月二十四日(土) ルーム  
第十回オリエンテーション「新入会員の為の」
- ▽昭和五十九年三月二十七日(月) ルーム  
自然保護のための学習会「エントロピーと自然保護」
- ▽昭和五十九年四月六日(金)～八日(日) 守門岳  
山岳スキー技術講習会
- ▽昭和五十九年四月二十一日(土) 安達太良山  
東北地区親睦山行
- ▽昭和五十九年五月二十二日(火)  
山菜勉強会
- ◇海外登山界との交流
- ▽昭和五十八年七月三十日(土) クラブ関東  
中国登山協会史古春副主席一行八名歓迎会
- ▽昭和五十八年八月十二日(金) 銀行クラブ  
ネパール登山協会会長クマール殿下、観光大臣歓迎会
- ▽昭和五十八年十月二十一日(金) ルーム  
ラムジー氏歓迎会
- ▽昭和五十八年十月二十九日(土) ルーム  
インド・チャクラパディー氏、モトワニ氏歓迎会
- ▽昭和五十八年十一月一日(火) ルーム  
イギリスクライマーパーゲット氏歓迎会
- ▽昭和五十八年十一月二日(水) ルーム  
カナダ山岳会元会長ポップ・ハインド氏夫婦歓迎会













# SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

---

Vol. 79

Issued in December 1984

---

## Contents

**In English** (also in Japanese, pages in parenthesis)

Everest : First Oxygenless Ascent by Japanese.....Haruyuki Endo.....	1 ( 1 )
First Oxygenless Ascent of Everest by Japanese...Haruichi Kawamura .....	4 ( 10 )
Lhotse in Autumn and Everest in Winter, 1983/1984 .....	Kazuyuki Takahashi..... 6 ( 19 )
First Ascent of Himlung Himal.....Hiroshi Hori.....	9 ( 27 )
Two-Pronged Attempt on Shivling.....Hisao Seki, Masaki Nakao.....	10 ( 32 )
Bhagirathi II and Satopanth West, in Rapid Succession .....	Motomu Omiya.....12 ( 40 )
Ascent of Jogin I via the North Ridge.....Kaoru Aoyagi.....	13 ( 46 )
Attempt on Changla via the Southwest Ridge.....Kyoko Endo.....	14 ( 51 )
Masherbrum—Alpine Style.....Takeyasu Minamiura.....	16 ( 60 )
Attempt on the West Face of Gauri Shankar.....Masaaki Tomita.....	18 ( 66 )
Nanga Parbat, the Diamir Flank.....Takeyoshi Takatsuka.....	19 ( 72 )
South Face of Mount Mckinley, American Direct 1967.....Shohei Wada .....	21 ( 77 )

## In Japanese

A historical note of the Women's Mountaineering.....Yoshinobu Emoto .....	( 85 )
A Trip in West-southern China.....Yukio Matsumoto.....	( 96 )
In Memorial.....	( 101 )
Book Review.....	( 129 )
Club Notes : June 1983—May 1984.....	( 157 )
Social and phisycal change in the Environment of Mountain Villages —A Case Study of the Southern Alps of Japan.....Hiroshi Hosoda .....	23
Japanese Expedition's Notes.....Editors.....	43

**Editor : Tsutomu Mizuno**

Assistant Editors : Akio Horiuchi, Shigeru Kodama,  
Keisuke Takano, Kojun Mori

---

**The Japanese Alpine Club**

(Founded 1906)

*Address* : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

---

**Office Bearers and Committee**

**1984 (May 1984-April 1985)**

---

*President* : Yasuo Sasa

*Vice-president* : Jiro Taguchi, Jiro Yamada

*Honorary Secretary* : Tadao Kanzaki

*Honorary Editor* : Tsutomu Mizuno

*Honorary Librarian* : Susumu Matsuka

*Honorary Treasurer* : Masaaki Nishimura

*Auditors* : Kanji Takeda, Yuichi Matsuda

---

*Committee*

Tadao Kanzaki	Masaaki Nishimura	Shunsuke Tamura
Koya Akamatsu	Masami Okura	Kenji Kawamura
Susumu Matsuka	Tsutomu Mizuno	Yuji Suzuki
Ryuji Hirano	Ryōten Hasegawa	Yoshio Hirai
Yoshio Kinugawa	Takashi Muraki	Yukichi Okazawa
Toshiko Umeno	Hiroshi Takatō	

---

*Council*

Katsuro Ohara	Hideo Matsumaru	Gonji Kishida
Kokichi Tatsunuma	Kinji Shibata	Sadako Hosokawa
Ken'ichi Nishizawa	Akinobu Gamo	Junji Nakamura
Toru Iino	Hiroshi Kataoka	Setsuko Yamaguchi
Hideki Miyashita	Keisuke Shigihara	Masatsugu Konishi
Hyoriki Watanabe	Masami Murayama	
Hiroshi Yoshida	Norikatsu Ito	

---

*Chairmen of Local Sections*

<i>Hokkaido</i> : Seiji Hashimoto	<i>Iwate</i> : Toshihiko Sato
<i>Yamagata</i> : Katsutarō Murakami	<i>Akita</i> : Mitsuyuki Okada
<i>Fukushima</i> : Masao Nakajima	<i>Miyagi</i> : Tokuro Date
<i>Shinano</i> : Akinobu Gamo	<i>Echigo</i> : Echiei Sato
<i>Shizuoka</i> : Tomosaburo Yamamoto	<i>Yamanashi</i> : Isaburo Osawa
<i>Toyama</i> : Keinosuke Wakabayashi	<i>Tokai</i> : Noboru Onoe
<i>Gifu</i> : Tatsuya Matsui	<i>Ishikawa</i> : Toshizo Masue
<i>Kansai</i> : Toshio Imanishi	<i>Fukuoka</i> : Daisuke Suematsu
<i>Sanin</i> : Kano Minato	<i>Higashi kyushu</i> : Akito Noguchi
<i>Kumamoto</i> : Ken'ichi Nishizawa	

## Everest : First Oxygenless Ascent by Japanese-Light Expedition

**Haruyuki Endo**

Before 1953 Everest was climbed to 8500 m three—times. How to climb the remaining 300 meters was a question of great controversy. In the spring of 1953 Hillary and Tenzing climbed the mountain using artificial oxygen. Certainly the use of oxygen above 7500 m helps our ascent and increases the possibility of success. But in 1978 Messner and Habeler climbed without oxygen. Just as a climber sometimes avoids using bolts on a rock face, some climbers began to seek much simpler forms of expedition with fewer porters and no oxygen. When I think of the value of climbing, I cannot help thinking that present-day climbers should tackle the Himalaya in the more difficult, oxygenless fashion.

The Yeti Dojin Everest Expedition was formed in 1983 by Yoshino, Kamuro, Sawagami, Endo, and Dr. Ukai. An oxygenless ascent by a small number of people in a short period of time was the goal of our group and the strong wish of the members. Accompanied by two Sherpas, we set up Base Camp, 5350 m, on September 5. In this season two other Japanese groups shared the Base Camp site. The 5-man Sangaku Doshikai party was heading for the summit via the Southwest Face-South Ridge route and Kamoshika Dojin for Lhotse. And an American party was also deploying there to climb via the West Ridge. The three Japanese parties shared the route to Camp 2, so we talked and decided the role for each party. Sangaku Doshikai opened the route to Camp 1 through the ice fall while the Kamoshika Dojin maintained it. We were to extend the route to Camp 3. Our Camp 1 was set up on September 19 at 6100 m and Camp 2 on September 24 at 6400 m. The Kamoshika Dojin and we shared the route further up to about 7800 m. We took a new route to the South Col via the Lhotse Face, that is, climbed the face to 7800 m and traversed from there to the col.

We fixed the rope to the South Col, 7985 m, on September 31. After four days' complete rest at Camp 2 four climbers and two Sherpas started for the summit on October 6. The next day four Japanese climbed to the South Col and set Camp 4 up there. October 8 was the day for the summit assault. About 3:00 a.m. we left the col. We employed the so-called "Qogir style", climbing unroped during the summit push. At about 8100 m I met three Sangaku Doshikai members—Suzuki, Kawamura, and Pasang Temba. They first had permission for the Southwest Face but changed their route to the South Ridge. But they finally took the route of the 1981 American Medical Research Expedition to Everest across

the base of the Southwest Face, and traversed from the base of the South Ridge to the Southeast Ridge. I first saw them on the Southeast Ridge at 8100 m. They made the first summit bid on the same day as ours. So six Japanese headed for the summit that day. I was leading these people when I met three Americans at 8500 m. They were Lou Reichardt, Carlos Buhler, and Kim Momb of the American party climbing via the East Face from the Chinese side. They were using oxygen and climbed with good speed, so they took the lead to the top and the Japanese followed in their tracks.

The three Americans reached the top at 3 : 45 p.m. and Suzuki and Kawamura of Sangaku Doshikai at 4 : 20 p.m. I reached the summit at 4 : 30 p.m. and Kamuro and Yoshino forty minutes later. Sawagami of our party descended from 8600 m and returned to the South Col camp safely. Pasang Temba of Sangaku Doshikai also decided to descend below the South Peak and followed the Americans who were descending from the summit when he slipped and fell to his death.

When I reached the top of the world at last, I smelled, in a passing moment, heavenly fragrance. It was the same enticing, intoxicating, heavenly feeling that I had experienced at the top of Mt. McKinley two years before. I squatted down there and began dropping off into the dreamy world. Happily, however, I had other people to pull me back to reality. Suzuki and Kawamura began descending. I tied Japanese and Nepalese national flags to my ice-axe and, as there was no other man now, took pictures of it. When I descended about 30 meters, I met Kamuro climbing up and Yoshino 50 meters below him. Yoshino informed me that Sawagami had descended. Though they seemed tired, they showed no symptom of abnormality. When I reached the South Peak, it became dark. I looked back and saw Kamuro at the Hillary Step and Yoshino a little behind him. I waved to them and suggested that we bivouac in the col between the two peaks. I found a snow terrace on the Chinese side of the col and waited for them, but they didn't come down. So I judged they might have found a safe bivouac site up on the ridge.

Worn out, I dozed off at the windless bivouac site in rather warm weather. I awoke three times and vomited brown fluid twice unconsciously during the night. In the morning, when the sun began to light up the South Peak, I began to ascend the slope to the South Peak again. At the peak I looked back and saw Yoshino begin to move below the Hillary Step, so I began to descend from the South Peak. At the time my tired brain didn't notice that Kamuro was missing. The steep slope below the South Peak frightened me, so I sat down there to wait for Yoshino. The second American summit bid party appeared on the

Chinese side at 8400 m. When the first of them reached the Southeast Ridge at 8500 m, I plucked up enough courage to descend. Sunshine warmed me and my strength returned in this one hour's rest. At 8600 m I met the Americans and at 8500 m found the rucksacks of Kamuro and Yoshino. They had left a bivy tent, a thermos, down pants, and a stove. So I knew they too had a cold bivouac. When I climbed down to the big snow field of the South Col, Ang Tsering ran up to me and helped me into Camp 4. As Sawagami and I were worn out almost to immobility, the two Sherpas' assistance was indispensable to our safe return.

On October 11 Yoshino's body and Kamuro's boot were found at the base of the Southwest Wall. They might have slipped under the Hillary Step, at 8800 m, Kamuro around 6:00 p.m. on September 8 and Yoshino around 6:30 a.m. on September 9.

I'd like here to add some of my impressions on high altitude activities and acclimatization. Above 7500 m climbers suffered unrecoverable effects on their bodies. To that altitude we could acclimatize ourselves, though there were individual differences in the speed of acclimatization. But above that point, our Camp 3, 7500 m, every member suffered a slowdown in his climbing speed. We rested at Camp 2, 6400 m, before the final push. That altitude seems too high for recuperation, but the danger of passing through the icefall below seemed worse. The ability to recover at 6400 m seems to differ and the difference decided the order of ascent above that point. Before the summit bid we stayed in Camp 4, 7985 m, for nine hours. We used four hours for preparation and a meal and the remaining five hours we spent in many ways. I slept for four hours, Yoshino and Kamuro for two or three hours, and Sawagami hardly slept. This too seems to have affected the speed of climbing.

The atmosphere above 8500 m had different unrecoverable effects on our bodies. The working of our brains at that altitude dropped rapidly. When I was forced to bivouac at 8750 m, Kamuro and Yoshino also bivouacked at about 8800 m. Both of them had experienced forced bivouacs at 8350 m during the K 2 expedition. But the difference of 450 m seems to have caused them severer damage. When I last saw Kamuro in the dusk, he gave a cry and raised his hands. He is thought to have slipped just after that. The next morning I saw Yoshino under the Hillary Step. He might have seen Kamuro fall in the evening and spent the night on the narrow ridge with nothing to cover him. When he saw me, he began to descend. But if he had known himself and judged his own condition after the bivouac well, he might have acted differently. The loss of the sense of equilibrium and the damaged sight were things that he could not judge himself.



### *Summary of Statistics :*

Area : Mt. Everest (Sagarmatha), Nepal.

Ascent : Oxygenless ascent of Everest, 8848 m, via the Southeast Ridge, summit reached on October 8, 1983 (Endo, Kamuro, Yoshino). Sawagami reached 8600 m. Yoshino and Kamuro were lost on the descent below the Hillary Step.

Personnel : Hiroshi Yoshino, *leader*; Hironobu Kamuro, Haruyuki Endo, Noboru Sawagami, Hiroshi Ukai, M.D., (Nepalese) Ang Tsering Sherpa, Nawa Temba Sherpa.

## **First Oxygenless Ascent of Everest by Japanese**

### **Haruichi Kawamura**

The Sangaku Doshikai Everest Expedition had to wait in Kathmandu for 26 days because our packed cargo did not arrive on time. When we finally received it, we took 15 days to caravan to Base Camp to acclimatize to the high altitude. Our aim was a summit ascent by all members as is customary on our expeditions. And this time we aimed at an oxygenless ascent. I sat on Kala Pattar watching Everest and remembered the successful ascents of Kangchenjunga and K2. Everest is more like a 9000 er than an 8000 er. Staying there several hours, I at first felt uneasy but later grew a little confident. If the conditions were right, we could succeed.

Five of us arrived at Base Camp accompanied by ten Sherpas on September 3. We agreed with two other Japanese parties that we would open the route through the icefall. The Sherpas' help was indispensable to our operation at this stage and saved our strength to reach the top. We set Camp 1 up at 6200 m, on a snow field above the icefall on September 13. We had originally planned to climb the Southwest Face but due to the delay in Kathmandu changed our route to the South Ridge. So Camp 2, 6400 m, was established on the moraine at the foot of the Southwest Face two days later. The ridge was a wall of mixed ice and snow at a 40 degree slope. We cut the ice and made Camp 3, 7400 m, on September 24 and four days later pitched Camp 4, 7950 m, on a small rock shelf which allows only one small tent. The tent was to be pitched at the time of the final summit push lest falling rocks and strong winds might smash the tent.

Okano and Kimoto had not experienced the altitude of 8000 m before and they needed more time to acclimatize than the others. Suzuki, Pasang Temba Sherpa, and Kawamura were to form the first assault party. Konishi and Ang

Nima Sherpa were to be the second. On October 7 the three of us climbed back to Camp 4 for the final push. At this point we realized that we could not climb the South Ridge given the time constraint and the condition of our party, since there was less snow than usual this year and the Rock Band, the most difficult part of the route, was exposed. So we decided to switch to the Southeast Ridge route, following the route of the 1981 American Medical Research Expedition to Everest. I got up at midnight and prepared tea and rice cakes. Each of us had three pieces of cake, but Pasang Temba could not eat them. We left the camp at 2:30 a.m. We traversed a snow face to the Southeast Ridge. On the same day Yeti Dojin made the summit assault. We met them at 8100 m. They too were climbing unroped. At 8400 m we found a snow ledge. The three of us made tea and drank. We deposited sacks there and climbed further. At 8500 m we met three Americans who had been climbing via the East Face. They too were heading for the summit.

That day the three Americans, with oxygen, climbed ahead. Six Japanese and a Sherpa followed in their tracks. The steep slope to the South Peak, 8760 m, made our progress trying. Suzuki and Kawamura had to rest after every fifteen steps. Pasang Temba Sherpa lagged behind. At the col beyond the South Peak Suzuki and Kawamura passed Endo of the Yeti Dojin. At the Hillary Step we met the Americans who had returned from the top. One of them, Kim Momb, gave us food. It was 3:30 p.m. First Suzuki and then Kawamura reached the top at about 4:30 p.m. We could look over all the mountains around. We left there twenty minutes later. On our return we met Endo, Kamuro, and Yoshino coming up separately. They seemed to have enough strength at that time, though two of them died on the descent. We returned to the depot site and cut a shelf in the snow at about 8350 m. Pasang Temba was not there. Suzuki and Kawamura thought that he might have retreated to Camp 4 or to the Yeti Dojin's South Col camp. But he had slipped to death on his retreat.

Our second assault party, Konishi and Ang Nima Sherpa, left Camp 4 the next day. They abandoned the endeavor just beyond the South Peak at about 8700 m. They judged correctly. They returned safely after bivouacking at 8500 m that day. We must judge and control our minds and bodies objectively to make a safe return from these high altitude climbs.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Mt. Everest (Sagarmatha), Nepal.

Ascent : Oxygenless ascent of Everest, 8848 m, via the Southeast Face to 8100 m

and then to the Southeast Ridge, summit reached on October 8, 1983 (Suzuki, Kawamura). Konishi, at age 44, reached the South Peak, 8750 m, on October 9, also oxygenless.

Personnel : Haruichi Kawamura, *leader*; Shomi Suzuki, Koji Okano, Satoshi Kimoto, Masatsugu Konishi, (Nepalese) Pasang Temba Sherpa, Ang Nima Sherpa, seven other high porters and a sirdar.

## **Lhotse in Autumn and Everest in Winter, 1983/1984**

### **Kazuyuki Takahashi**

In 1977 I first cherished the idea of the winter ascent of Everest. At that time the Nepalese government didn't permit such a climbing. And Kamoshika Dojin which I belonged to, also wanted to climb Dhaulagiri I. When I visited Kathmandu to celebrate the successful traverse of Dhaulagiri II, III, and V by our club members in 1979, I asked the Nepalese government to allow a 1983/1984 winter ascent of Everest. I thought we needed at least five years for the improvement of our climbing technique and the development of new climbing equipment.

The winter ascent of an 8000 er would require speed in climbing, I thought. As for the ascent of Everest the beginning of the climb from Base Camp to Camp 1 was set on November 20. And the establishment of Camp 1 not earlier than December 1. A speedy climbing would increase the possibility of success and the safety of the operation. So our plan was to climb another 8000 er in the preceding autumn and finish acclimatization beforehand. We chose Lhotse because it had its own attraction as a 8000 er and in part shared its climbing route with that of Everest by the Southeast Ridge.

At the same time Michiko Imai was leading the members of the 1979 Dhaulagiri II, III, and V Traverse Expedition to climb Everest from the Tibetan side. The 18-member party was to follow the 1980 Japanese route on the North Face. We hoped for a meeting on the highest point on earth.

One of the problems in successive ascents of 8000 ers was how we would maintain our strength mentally and physically. On this point four of the members, Miyazaki, Suzuki, Yamada, and Murakami, had had a similar experience the previous year. They participated in the 1982 Kamoshika Dojin Dhaulagiri I Expedition in autumn; then Miyazaki and Suzuki joined the Japanese Everest Expedition led by Yasuo Kato; Yamada and Murakami the Japanese Winter Manaslu Expedition. They could bear the burden well.

The other problem was how we would take a rest after the first ascent till the next activity. The altitude for recuperation seemed very important. The Hillary party of 1960/1961 winter reported that staying at 6000m damaged the members' endurance. We planned to take a three-week rest after the Lhotse climb. We would climb down to the Everest View Hotel, 3900 m, at Namche Bazar. Return to Kathmandu would reduce the effect of acquired acclimatization and present other difficulties in preserving members' health. Consequently we decided to stay at the hotel and relax. First we considered a complete rest the first week and light exercise the next week and climb of the nearby hills in the third week. But in reality this program was not fully observed. Takahashi and Yamada had to return to Kathmandu for a official procedure and Miyazaki and Ozaki went to Lukula. Only the remaining members visited Gokyo Peak. The different ways of spending this rest period showed no marked personal difference in the following activities. As each member has his own adaptability, we cannot assess the result. I can only say that the Lhotse expedition contributed to the success of the following Winter Everest expedition.

#### *Ascent of Lhotse*

On September 9 all party members gathered at Lhotse-Everest Base Camp, 5350 m. Other two Japanese parties deploying there, too, were delayed by the late arrival of their cargo in Kathmandu. The three parties shared the route to Camp 2. So we divided the task of route-making and Kamoshika Dojin was to keep and repair the route. When we arrived there, the Sangaku Doshikai members were opening the route through the icefall. Before entering Base Camp, we had already had acclimatization training. At Pheriche, 4200 m, we climbed to 5000 m for two days and at Lobche, 4900 m, climbed nearly to 6000 m. It saved us the peril of passing the icefall so often for acclimatization.

As for the ascent of Lhotse we took an orthodox and safer way, that is, to climb via the normal West Face route and adopt the polar method, using oxygen in Camp 3 and 4 during sleep and during the summit assault. Camp 1 was established on September 17 at 6100 m; Camp 2, 6500 m, on September 21; Camp 3, 7500 m, on September 30; Camp 4, 7900 m, on October 2. On October 9 the first summit party, Yamada, Ozaki, and Murakami, reached the top. The next day the second summit party, Miyazaki, Kagawa, and Dawa Norbu Sherpa, followed suit. The third party of two Sherpas entered Camp 4 on October 11, but bad weather stopped their ascent. The fourth party, Takahashi, Suzuki, and sirdar Pemba Norbu Sherpa, succeeded in the ascent during the short fair weather on the 14th. The fifth party, Hata and Kawata, abandoned the climb due to bad

weather and the time-shortage.

### *To Winter Everest*

We resumed activity at Base Camp on November 20. Crevasses were wider and séracs sharper. We traced the Lhotse route in autumn and reached Camp 1 in three days. Carrying supplies was almost completed before the establishment of Camp 1 on December 1, so we could take three days' rest. We established Camp 1, 6100 m, on December 1; Camp 2, 6500 m, on December 3; Camp 3, 7500 m, on December 8; Camp 4, 7900 m, on December 13. We could pitch higher camps quite smoothly, but members suffered many different disorders. Miyazaki, deputy leader, broke ribs hit by a stone blown by a strong wind. Yamada was blown by wind and struck his elbow against the ice. One of the Sherpas sprained his ankle and the sirdar hadn't recovered from the frostbite suffered during the Lhotse ascent. And Takahashi was told by our doctor to stop a hard exercise because of an heart-attack.

At first we planned to set Camp 5, up at 8500 m. But a camp at that altitude seemed too dangerous when the strong wind was likely to continue so long. So Camp 4 was our final camp. On December 16 at 2:30 a.m. Yamada, Ozaki, Murakami, and Nawang Yonden Sherpa started for the summit. The data concerning the day's weather were continually radioed to us by the Imai party on the Tibetan side. The data suggested a lasting weak wind. At 8:00 Ozaki reached the summit. And Yamada followed him an hour later. Yamada stayed at the top waiting for Murakami and Nawang, who got there at 10:30 a.m. As they were worn out, Yamada fixed a rope at the Hillary step and accompanied their descent to Camp 3. Ozaki, fearing Camp 3 would be filled with too many members, climbed down to Camp 2 that day. It was a wonderfully speedy ascent and descent. As we had thought this to be the last chance, we were very lucky.

The success depended on the help of the Chinese side party, especially on their weather facsimile data. Though they continued their activity till January 10, 1984, and reached 8100 m, they could not reach the summit. Besides their cooperation, we could count as factors for success the Lhotse preparation, the use of new equipment such as the lithium batteries for headlamps, and the good membership both of Japanese and Nepalese.

### *Summary of Statistics :*

Area : Mt. Everest, Nepal.

Ascent : Ascent of Lhotse, 8511 m, via the West Face, summit reached on October 9 (Yamada, Ozaki, Murakami), 10 (Miyazaki, Kagawa, Dawa Norbu), and

14 (Takahashi, Suzuki, Pemba Norbu), 1983.

Ascent of Everest (Sagarmatha), 8848 m, via the Southeast Ridge, summit reached on December 16, 1983 (Yamada, Ozaki, Murakami, Nawang Yonden). Nawang Yonden's was the first Nepalese winter ascent of the mountain.

Personnel : Kazuyuki Takahashi, *leader*; Tsutomu Miyazaki, *deputy leader*; Noboru Yamada, *climbing, leader*; Kunio Hata, Takashi Ozaki, Shigeru Suzuki, Kazunari Murakami, Takeshi Kagawa, Shuzo Kawata, Tsutomu Hanawa, Mariko Kaji, Toru Asaji, M.D., (Nepalese) Pemba Norbu Sherpa, *sirdar*; Dawa Norbu Sherpa, Nawang Yonden Sherpa, and eight others.

## First Ascent of Himlung Himal

### Hiroshi Hori

Himlung Himal, 7126 m, lies northwest of Manaslu on the border between Nepal and Tibet. Since 1963, four parties had attempted the ascent in vain. The objective of the Nepalese-Hirosaki University Joint Expedition, 1983 was to make the first ascent of this mountain.

The party started the approach march from Dumre on September 4. After 11 days' march, we made Base Camp, 4300 m, on September 4. We started the climb three days later. From Base Camp, the party crossed the Right glacier, then climbed a rock gully and set up Camp 1, 5300 m, on the 26 th. From Camp 1 the route changed to a snow gully and then a snow ridge at the upper part. We made a snow cave Camp 2, 5600 m, on October 1. Camp 3, 6240 m, was set up on the upper snow field on October 18. The party planned to reach the summit via the East Ridge. On October 26 Takahashi and Minami climbed to 6590 m on the East Ridge and stayed there. The next day they started from there, and at the same time Saito and Kirkin Lama started from Camp 3. The three Japanese and the Nepalese reached the summit at 4 : 06 p.m.

### *Summary of Statistics :*

Area : Peri Himal, Nepal.

Ascent : First ascent of Himlung Himal, 7126 m, via the East Ridge, summit reached on October 27, 1983 (Takahashi, Minami, Saito, Kirkin Lama).

Personnel : Junji Kurotaki, *leader*; Hiroshi Hori, Ken Takahashi, Wataru Saito, Makito Minami, Takashi Nishioka, (Nepalese) Ang Kami Sherpa, Kirkin

Lama, Dorje Sherpa.

## **Two-Pronged Attempt on Shivling**

**Hisao Seki and Masaki Nakao**

### *West Ridge*

"Climb it as you like" I said before leaving Japan. Our plan was to climb Satopanth, 7075 m, and Shivling, 6543 m, according to members' abilities. Satopanth was to be climbed via the normal North Ridge route in orthodox style with several higher camps. We would acclimatize during this period. And to the summit of Satopanth two teams would take different routes in capsule style and, if possible, rendez-vous at the top. We hoped to gain some distinction for our expedition even though our climbing ability was not outstanding. We named the expedition the Basara-Shu Garhwal Himalaya Expedition 1983.

We set up Base Camp for Satopanth at Nandanban, 4500 m, on July 31. Then we established four higher camps at 4850 m, 5100 m, 5850 m, and 6300 m on August 6, 7, 12, and 17 respectively. At the beginning of the operation the condition of one of the women members deteriorated and she needed to be evacuated by helicopter. But in the end all the members reached the summit—three men on August 23 and the remaining two men and four women the next day.

On August 27 and 28 we moved Base Camp from Nandanban to Tapovan, 4300 m, to climb Shivling. There we divided the party into two—one for the West Ridge and the other for the South Face. The West Ridge party was made of two men and four women, Seki as leader. On September 1 we, the West Ridge party established Camp 1 at 5050 m, at a col where the lower section of the West Ridge forks. We climbed five pitches through a gully of mixed rock and snow, then beyond a snow wall and rocks set up Camp 2, 5450 m, on the West Ridge. From there only three members, Y. Seki, Endo, and I, climbed further. The next day we passed the rocky part of the ridge and cut the ice for Camp 3 at 5900 m. We could see the double peak of Shivling shining red reflecting the setting sun. As we had passed the difficult part of the ridge, we got into sleeping bags rather relaxed, when the accident happened. All of a sudden there was a booming sound and a cry by Y. Seki. An ice block about the size of a human head, fell out of the side of an avalanche. When she recovered consciousness, she complained of pain in the rib and sickness. But the next morning she recovered enough to allow our final push. Endo and I followed

the ridge to the top. The end of the ridge formed a dangerous hanging glacier, so we traversed to the right for 30 meters to a terrace below a slab and an ice wall, where the hanging glacier was only 70 meters wide. I began to climb along an ice-filled chimney using double-axe technique. An ice terrace over it was very bad, and several ice pitons stuck into the face were quite insecure. In a crack above I thrust a snow bar and used a ladder. Two more meters and the slope would become easier, I thought. But then the bar holding my weight came loose. I fell down about 20 meters. Though I slid on a rock, I was not seriously hurt. Endo fixed ropes for the retreat to Camp 3. When I radioed our decision to give up to Base Camp and the South Face party, I remembered with regret many indications of brittle ice and wet snow conditions. We should have retreated earlier. (Hisao Seki)

### *South Face*

We had a dream to climb a big wall in as simple a style as possible. A picture of Shivering's South Face taken by Doug Scott fascinated us with its straightness. An obvious arête runs through the middle of it. I didn't think our skill would be able to manage it. But I'd rather make possible what I want to do than be successful in what we knew we could do. When I heard that an Austrian party tried the route and abandoned it in its last stage, I was relieved. Of course this feeling is not fair, but in reality the name of first ascent gives some attraction to the route.

We decided to climb the wall capsule-style, taking our equipment and food all the way with us. This was also the only way for us. On September 2, leaving Tapovan, we climbed to a col on the East Ridge. We brought 200 meters of fixed rope and food for eight days—seven days for the ascent and one for the descent. And 30 pitons for rock and the same number for ice; some nuts, and a bivy tent. The next day over the East Ridge we climbed to the end of the glacier and followed an ice wall above. I can only remember yūmaring our heavy supplies up and up. On the third day, always feeling the danger of snowslides, we followed a couloir of ice and water. We crossed a small ridge and found a band which leads to the arête we had planned to climb. Ropes, probably fixed by the Austrian party, were found. On September 5 the clouds cleared away and, saying "what a nuisance", we accepted the assistance of these remaining ropes. We climbed six or seven pitches a day. Tattered ropes, painful shouldering of gear, sleepless nights, recurring coughs—these bad dreams ended when we traversed an almost perpendicular wall and got out to the ridge leading to the summit. On September 9 we reached the summit at 4:22 p.m.—on the eighth



day since Base Camp and after 51 pitches from the beginning. Our way of climbing left dissatisfaction in my mind, but at the same time I felt inexpressible joy. We could have made a simpler, more satisfying climb. Next day it snowed and we lost the chance to reach the Southwest Peak. We climbed down the West Ridge and were welcomed by the other members at Tapovan on September 11. (Masaki Nakao)

#### *Summary of Statistics :*

Area : Gaugotri Glacier, Garhwal Himal, India.

Ascent and Attempt : Ascent of Satopanth, 7075 m, via the North Ridge, summit reached on August 23 (H. Seki, Endo, Nakao) and 24 (Ohama, Yamagata, Mihara, Toida, Miyake, Y. Seki), 1983.

Ascent of Shivling, 6543 m, first time via the South Face, summit reached on September 9, 1983 (Yamagata, O'hama, Nakao).

Attempt on Shivling's West Ridge, reaching the height of about 6000 m on September 7, 1983 (H. Seki, Endo).

Objective : Study of environmental conditions and native people at the upper stream region of the Ganga.

Personnel : (West Ridge party) Hisao Seki, *leader*; Yuetsu Endo, Yasuko Seki, Yoko Mihara, Emiko Toita, Kiyoko Miyake, (South Face party) Masami Yamagata, Kenji O'hama, Masaki Nakao.

## **Bhagirathi II and Satopanth West, in Rapid Succession**

### **Motomu Omiya**

Permission to climb Satopanth, 7075 m, was originally obtained by the Toyo University Alpine Club. When they faced difficulties in carrying out the expedition, Hisamatsu and Omiya, members of Sangaku Doshikai, Tokyo, joined them. In the end only Suzuki represented Toyo University in the three-man expedition. To save money we brought with us only high altitude provisions and bought most of the food in India. We also used the equipment deposited in Pakistan two years previously by Sangaku Doshikai.

Two days' caravan brought us to Nandanban, 4500 m, where we set Base Camp up on May 6. Two days later we set Camp 1 up at 4800 m. The camp was used both for Bhagirathi and Satopanth. First we headed for Bhagirathi II,

6512 m, and carried food and equipment up. On May 14 we pitched Camp 2 at 5330 m. We started early the next morning for the summit. About noon we reached the top ridge of the mountain. Following the Northeast Ridge, we stood on the summit at 1 : 30 p.m.

After the successful ascent we stayed in Camp 1 for three days. Then we went up Sundari Glacier toward Satopanth and observed the Northwest Ridge from the snow plateau at its foot. A hanging glacier just above the plateau seemed less daunting, so we decided to take a new route on the ridge. On May 20, the second day we pitched a tent (Camp 2 for Satopanth), 6100 m, on the col of the Northwest Ridge. The next day we set out for a final push to the summit with a bivy tent and some gas cartridges. It began to snow in the afternoon and we used much energy breaking trail. We were forced to bivouac just under the West Peak. On May 22 we resumed climbing at dawn. An hour later we were standing on top of Satopanth West, 7045 m. It began to snow at that time, so we abandoned the plan to reach the main peak.

Within two weeks we climbed two peaks in that region. The climb of Satopanth West was the first ascent of that peak.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Gangotri Glacier, Garhwal Himal, India.

Ascent : Ascent of Bhagirati II, 6512 m, and first ascent of Satopanth West, 7045 m, summits reached on May 15 and 22, 1983, respectively by all the members.

Personnel : Motomu Omiya, Hiroto Hisamatsu, Akira Suzuki.

### **Ascent of Jogin I via the North Ridge**

#### **Kaoru Aoyagi**

The Jogin Group stands west of Kedar Ganga in the Gangotri range. In the past the mountain was climbed by an Indian team via the Southeast Ridge. On September 1 we, members of the Obihiro Chikusan University Alpine Club started from Delhi. But we had to divide the party into two because some of the members fell down ill at Lanka. Four of us returned to Uttarkashi and were hospitalized. On September 8 we established Base Camp in Kedarthal, 4700 m. And Advanced Base, 4900 m, on September 11. We fixed ropes from the icefall at 5000 m to the crevasse at 5250 m. On September 18 we set up Camp 1, 5650 m,

on Kedar Bamak. We fixed ropes further up and set up Camp 2, 6050 m, just under the North Peak. We rested at Base Camp and Advanced Base during the following violent storm.

Then the other members, recovered from illness, came up to us. On September 25 a party of four members climbed up to fix ropes on the North Ridge. And the other party of four members went up to acclimatize. The North Ridge was a thin knife-edge ridge. On September 30 we left Camp 2 at 7:00 a.m. Just below the summit we needed quite a sensitive climb. At 2:26 p.m. Aoyagi, Suzuki, Oshima, and Tsuda reached the summit through a cloud. On October 3 Nomura, Nakata, Tagawa reached the summit at 11:05 a.m. We felt happy during this light Himalayan expedition, and were especially lucky with good weather.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Peaks in Kedar Ganga Valley, India.

Ascent : Ascent of Jogin I, 6465 m, via a new North Ridge route, summit reached on September 30 (Aoyagi, Suzuki, Oshima, Tsuda) and October 3 (Nomura, Nakata, Tagawa), 1983.

Personnel : Kaoru Aoyagi, *leader*; Masataka Suzuki, *deputy leader*; Shigeru Nakata, Shiro Maruyama, Hiromichi Nomura, Hiroshi Togawa, Yoshihiro Oshima, Norihiro Tsuda.

### **Attempt on Changla via the Southwest Ridge**

#### **Kyoko Endo**

#### *March along the Dozam Khola*

We started our march from Simikot to Mt. Changla on April 24 with 76 porters and two horses. They were villagers of Dozam and Bajbara and spoke Tibetan. Some old men wore knotted hair about 15 cm high on the top of their head like "CHONMAGE" which was formerly seen among Japanese soldiers.

The next day we were surprised to learn that they hadn't brought their own food. They went back home and ground barley, millet and buckwheat which they had in a hole dug in the ground. This delayed us one more day at Dozam, where 10 yaks were added to our march. Two days later, however near the 3400 m Camp in Laliguras (Rhododendrons) woods, the porters and animals were in trouble with the deep snow, so we decided to retain only 25 porters and gave them some equipment : long rubber boots, socks, gloves, sweaters, trousers, jackets,

and sunglasses. In spite of our presents, they wanted higher fee and some of our food, and also deposited our baggage halfway between each camp. Even the experienced sirdar complained. We advanced one camp every two days.

### *Climbing*

It took 12 days to march to our Base Camp, 4300 m twice as long as our schedule and six times slower than a mail-runner's speed. At last we began our climbing activities on May 7, after others had finished their climbing in the mountains of Eastern Nepal.

Base Camp was established at the confluence of a north valley and a south valley in one of the eastern branches of Dozam Khola : a place called LATSARMA by the porters.

By a reconnaissance of the north valley we confirmed the main peak of Changla, but we could not find any climbing route on the steep, snowy, icy and rocky wall of its northwest face. So we entered into the south valley and established Camp 1, 4900 m, on the central moraine hill which was safe from avalanche. Every day baggage was carried up in a hurry to Camp 1 and Camp 2, 5450 m, established on a snow field above an icefall at the end of this valley. As the valley was long and turned to the north, we couldn't contact each other among these camps by radio receivers.

From Camp 2 we could see the beautiful triangular top of Changla on the border between Nepal and Tibet for the first time. Saipal and Api could be seen to the southwest on a fine day. It was the time when we felt happy to be there. But now we had to hurry to make a route up a steep, 200 m wall and to decide on a route to the summit. Our young members and sirdar made a route, fixing a 300 m rope on this unstable wall in one day and we stood on the col of the ridge on May 17.

### *Giving up the summit*

We set Camp 3 up on a snow plateau at 6000 m on the border ridge on the 19th. This southwest ridge continued to the summit, but it was a long, long way and we needed Camp 4. From the 19th to the 22nd, the weather was bad, so we couldn't go ahead. Meanwhile, an excellent climber, Koyama, had been sick in the tent at Base Camp since she arrived there. It was found that she was suffering from acute hepatitis. We decided to send her back to Japan. As she had been given glucose injections by Dr. Shimizu and taken good care of by Base Camp manager, Miyagawa, she got a little well and left Base Camp with Miyagawa on the 21st. A few days later, Doctor Shimizu also began to

suffer from hepatitis, so we lost two efficient climbers.

Some members began to feel that this climb would be unsuccessful and complained about the food and the shortage of rope and butane gas. I made up my mind to continue climbing until the last day of May, as was regulated by the Ministry of Tourism. From the 24th we proceeded to Camp 4, fixing the rope on the snow ridge which had a lot of hidden crevasses and a big snow cornice stretching to the north. We established the final Camp at 6200 m on this border ridge on the 27th, and eight members slept in two tents there.

The next day, on May 28, we decided it was the final day for our ascent, and 6 members proceeded toward the summit as far as possible. We had to traverse a steep and hard icy wall under a big snow cornice and then had to pick our way carefully step by step among hidden crevasses. At 2:00 p.m. we used up the fixed rope at 6300 m and stopped our climbing. The Changla Main Peak stood 400 m above us and the way to the summit was still narrower and steeper. In this way, the summit is still unclimbed. We saw a huge white glacier spreading to the south into Tibet. The Tibetan side of Changla looked easier.

The weather was continuously fine from May 24 to June 6, and it was generally fine through June. The scheduled flight was available from Simikot.

I would like to visit Humla again and try the summit once more, but I think the climbing season should be extended until the middle of June. But it requires a long time and great expense.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Changla Himal, Western Nepal.

Ascent : Attempt on Changla, 6563 m, via the Southwest Ridge to 6300 m, highest point reached on May 26, 1983.

Objective : Geographical and ethnological survey of the Dozam Khola region and medical service to the people there.

Personnel : Kyoko Endo, *leader*; Masako Uchida, Tokiko Koyama, *deputy leaders*; Sanae Kusamoto, Tomiko Yamashita, Hiroko Bando, Fumie Miyagawa, Hisanobu Shimizu, M.D., Tatsuo Kajihara, *photographer*.

## **Masherbrum-Alpine Style**

### **Takeyasu Minamiura**

When seen from the airplane window, Masherbrum, 7821 m, was really

magnificent. I could not identify Hidden Peak, 8068 m, because Masherbrum stood in front of it as if the mountain was an 8000'er. The five-man Kyoto Climbing Club party was led by Tateshi Sudo who made the first ascent of Mt. Mango Gusor in 1980. Other four members had practiced rock climbing either in Japan or the United States. Only two of us had experienced high altitude and that had been below 7000 m. Our objective was to climb the Southwest Summit of Masherbrum, 7806 m, alpine-style. Some may well denounce our attempt as reckless. But our claim was that the recent development of high altitude physiology and training based on the knowledge obtained from it would enable us to attempt such a climb. Many climbers had already proved the reliability of the method. To acclimatize ourselves we needed peaks of some height. Around Base Camp we couldn't find such peaks, nor was there a pass of suitable height on the way. So we decided to acclimatize ourselves by opening a new route to the summit.

On July 3 we set Base Camp up at 4200 m, at the junction of the Sérac Glacier and Gasherbrum Glacier. We needed two days' caravan from Skardu to the last village and another two days' march from there to Base Camp. It took us two weeks to set up Advanced Base, 5600 m, going up the Sérac Glacier, which in fact was full of séracs. On July 16 we were very happy in Advanced Base because the carrying of loads was finished and the first stage of our acclimatization seemed satisfactory. Our next objective was to attain the altitude of 7000 m and to experience it for acclimatization. We had to climb a third of the Southwest Face to reach 7000 m. From Advanced Base we climbed a dome of 800 meters. Then we crossed two big ice fields to the foot of the Southwest Face. Our progress was hindered by severe heat, over 40 degrees centigrade, without the slightest breeze. We made water from ice and drank a lot. Hoods made of Gore-tex were quite useful to block the sunshine and its reflection. During these activities Sudo and Horie reached 7400 m and the remaining three 6400 m.

We took a long rest in Advanced Base and on July 28 Nomura, Enomoto and Minamiura started for the summit. Horie and Sudo started the next day. On July 31 we gathered at the foot of a couloir at 7600 m. When we climbed this couloir and reached the col above it at 7750 m, we were already exhausted by the difficult climbing and the knife-edge ridge from there seemed too daunting. Going to and returning from the summit in a day seemed impossible. So we decided to climb down this time and come again after setting another camp up at the col.

A bad cycle of weather continued for a week and we stayed in Base Camp.

On August 12 we resumed our climbing. The route, as was expected, had been damaged here and there. At the foot of the Southwest Face we looked for a pole which marked the deposited tents and equipment. But it was completely under snow. At this altitude 50 cm of snow-fall made the scene quite new. We found the site after struggling in the dusk. On August 15 Enomoto left the camp because his leave from work was now coming to an end. The physical condition of Sudo and Horie was not good, so they climbed down together. From then on only Nomura and Minamiura continued the climb. We pitched a tent at 7550 m and on August 16 started for the summit. The couloir to the col was again difficult with soft snow which covered our arms to the elbow when we used our ice axes. At the col we could see the mountains around the Baltoro Glacier. Examining the narrow ridge which leads to the Southwest Summit, we changed our objective to the main summit, 7821 m. The first rock face above the col was very easy to break, so we went around the Baltoro Glacier side. We followed the mixed ice and rock gully to a horizontal crack above, where we found pitons used by the American party. Then we followed a narrow snow ridge to the second rock face. When we clambered along a chimney in the middle of it, we found another piton used by the previous party. We at last reached the top ridge of the mountain. Following this snow ridge with gradual ascent, we reached the summit at 3 : 00 p.m.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Karakoram Range, Pakistan.

Ascent : Ascent of Masherbrum, 7821 m, summit reached on August 17, 1983  
(Nomura, Minamiura).

Personnel : Tateshi Sudo, *leader*; Masahiro Nomura, Takeyasu Minamiura, Yukihiro Enomoto, Yoshiaki Horie.

### **Attempt on the West Face of Gauri Shankar**

#### **Masaaki Tomita**

A nine-man Yeti Dojin expedition from Tokyo, led by Masaaki Tomita, attempted a siege on the rock pillar to the right of the American 1979 route on the West Face of Gauri Shankar (7134 meters). Base Camp was set up 3900 meters, 1000 meters lower than planned because the deep snow in April made the

approach difficult. Two sherpas ferried loads to Camp 2 at 5200 meters. They had two more high camps. Rock climbing started on April 16 and Camp 3 at 5400 meters on the 21st. Camp 4 was set up at 6400 meters on May 1.

H. Nimura was injured by a falling rock in Camp 3 on the 6th. He was taken down to Base Camp and was escorted by leader Tomita and N. Takahashi to Kathmandu.

T. Iihama, S. Hashimoto, A. Kiuchi and H. Kuraoka reached c. 7000 meters on May 22 but gave up the climb because of a 150 meters vertical rock wall above us; the expedition could not surmount this final obstacle. We had constantly heavy snow-fall, which required us to remake the route constantly.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Rolwaling Himalaya, Nepal.

Attempted Route : Gauri Shankar, 7134 meters, via the rock pillar to the right of the American 1979 route on the West Face. Highest point reached on vertical rock wall was c. 7000 meters on May 22 1983 by T. Iihama, S. Hashimoto, A. Kiuchi and H. Kuraoka.

Personnel : Masaaki Tomita, *leader*; Kazushi Nishigaya, Akira Kiuchi, Hiroyuki Mizoguchi, Takashi Iihama, Satoru Hashimoto, Hiroyuki Kuraoka, Nobuhide Takahashi and Hidehiro Nimura.

## **Nanga Parbat, the Diamir Flank**

### **Takeyoshi Takatsuka**

In the post-monsoon season of 1983 the Toyama Mountaineering Federation sent an expedition to Nanga Parbat. The expedition was to celebrate the 35th anniversary of the Federation and the centenary of Toyama Prefecture. Before that, in 1982, the reconnaissance party visited the mountain — Takatsuka as leader and two others. We had a permission for trekking, which allowed us to climb to 6000 m with a hired guide. With eight porters we started from the Bunar Bridge. At the end of July, after four days' caravan, we arrived at the expected Base Camp site, 4380 m, on the Diamir Glacier. We stayed there for ten days and climbed to 5800 m, over the expected Camp 1. Also we took many pictures of the Diamir Flank.

The permission for our expedition limited the climbing period to 60 days which began on June 1. And we could use another two weeks on request. We



left Rawalpindi on June 1, 1983 and started our caravan from the Bunar Bridge the next day. Two of the members had been bothered by mountain sickness the previous year, so this year we took our time to Base Camp. On June 6 we established Base Camp, 4400 m, on the right side moraine of the Diamir Glacier, where we were forced to stop by a strike of the porters. However, there we could see all of the Diamir Flank and the route the German Herrligkoffer Expedition took in 1962. We were to follow their route with four higher camps.

On June 11 we decided the route over séracs to Camp 1. We needed to carry 1600 kg of loads. We made three working teams of three men each—Sakai, Ojima, and Taniguchi as leaders. On June 19 Camp 1, 5210 m, was established and we began to open the route further up. The great obstacle was the 150 meter wall under the Eagle's Nest. And at this altitude we experienced high altitude sickness again. But at last on July 8 the Taniguchi party set up Camp 2, 6260 m. We pitched two tents on an ice terrace cut into a knife-edge ridge. To Camp 3, 6850 m, we climbed a wall of mixed snow and ice at an average 40 to 45 degrees. Takatsuka, Nakanishi, and M. Saeki entered the camp on July 18. From there we traversed a snow wall, which seemed ready to avalanche any time, to a snow field above. We established Camp 4, 7380 m, on July 22. At first we planned to use oxygen above Camp 3 during sleep, but the expected amount was not carried up so we did not use them at Camp 3.

On July 24 at 3 : 00 a.m. Taniguchi, Nakanishi, and M. Saeki left Camp 4 for the summit. In the cloudless sky stars were glittering. At first they followed the trail of the day before. But when they reached the Bazhin Gap, 7800 m, about noon, they lost their way in white-out. They waited for a while. As the condition did not change, they returned to Camp 4. On July 27 Taniguchi and Nakanishi made the second summit attempt, but again a snow storm stopped their progress at the Bazhin Gap. So on the 29th Tagaya and M. Saeki set up a temporary Camp 5, 7850 m, and supported the summit attempt of the next day. Taniguchi and Nakanishi left Camp 5 on July 30. As they had already been worn out, their pace was slow and they had to bivouac on the northern shoulder. Through the radio kit we sent tape-recorded music to encourage them. They resumed their climbing as soon as it became light and reached the summit, 8126 m, at 7 : 00 a.m. This was the first Japanese ascent of Nanga Parbat.

#### *Summary of Statistics :*

Area : Diamir District, Panjab Himalaya, Pakistan.

Ascent : First Japanese ascent of Nanga Parbat, 8126 m, via the Diamir Flank, summit reached on July 31, 1983 (Taniguchi and Nakanishi).

Personnel : Shigeyoshi Kido, *leader*; Takeyoshi Takatsuka, *deputy leader*; Naoyuki Saeki, Kensei Ojima, Takao Ito, Mamoru Taniguchi, Shuko Sakai, Osamu Tagaya, Toshiyuki Shimada, Tomoyuki Kawajiri, Norio Nakanishi, Masashi Saeki, Kensuke Saeki, Ryuichi Tanabe.

## **South Face of Mount Mckinley, American Direct 1967**

### **Shohei Wada**

Koichi Takeuchi and I climbed the American Direct route in alpine-style in June 1983. We touched down at the Landing Point on May 25 and acclimatized to climb the West Buttress route to 4300 meters. We set out from Base Camp at the Landing Point in the evening of June 6 and began to climb the South Face around noon the next day. We were favored by fine weather and slowly climbed the solid ice in the lower section, 24 pitches in two days. Then 25 pitches of mixed section on the third day, and via the Great Corner to 5700 meters on the fourth day. On the fifth day we reached the South Buttress at 14 : 45 and the top at 18 : 00.

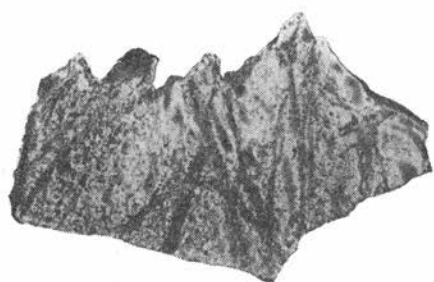
For me who had been to the Alps and Everest (Tibetan side), the American Direct route was colder than expected. Because I was favored by rare fine weather, I fully enjoyed the climb. But I think I consumed too much time on the Face. I now think we should have lightened our loads and attempted to move faster.

### *Summary of Statistics :*

Area : South Face of Mount McKinley, 6194 meters, Alaska Range.

Ascent : Second ascent in Alpine-style of South Face Direct, reached summit on June 11 1983 (Koichi Takeuchi, Shohei Wada).

Personnel : Shohei Wada and Koichi Takeuchi.



# 山岳と山村の変貌

—南アルプス・スーパー林道が示すもの—

細 田 浩

## はじめに

かつて岳人は山麓の村に宿泊し、地元の案内人を請うて、頂きを目指した。現在も、山の頂きを望む者は、山麓——時には山岳地域よりもはるかに長い行程——を経て、山岳地域に入ってゆかなければならない、という過程には変わらない。しかし現代の山麓の村、あるいは山村は、平地の都市域の生活の変化に呼応して極端に変貌し、これにつれて山岳地域の景観や生態系も林道、観光道路などの開通によって変化を余儀なくされている。車で村を通過し、足早やに部落の道を過ぎようとする「山目指す者」が、山麓にひろがる村の生活や、これに関わる山地の景観の変貌に注意を払うということがあってもよいかもしれない。

本編では日本の南アルプス北部、北沢峠を通過した南アルプス・スーパー林道（当局は開通後“スーパー”の名称を削った。筆者はこれに違和感をもつが、便宜上、以下南ア・林道と略記する）に関わる地域を例にとり、南ア・林道が開通したことによる山麓の村に生きる人々の生活や社会の変化について記述し、林道が山岳地域を通ることによる自然環境や景観の破壊について考察する。

## I. 南ア・林道問題の経過<sup>(注1)</sup>

南ア・林道は1965年「森林開発公団法の一部改正に関する法律」（スーパー林道事業の法律）の制定にしたがって、長野県上伊那郡長谷村から山梨県中巨摩郡芦安村に至る、全長57.6kmの多目的林道として計画された（1967年森林開発公団）。着工されたのは1967年であるが、この林道がにわかに関心と呼びスーパー林道問題としてとりあげられるようになったのは、高度経済成長も終り開発ブームの去ったあとであり、工事末期の国立公園の第一種特別地域に当る、北沢峠を通過する段階になってからである。この計画に対して、通過場所の地盤がもろいという問題があること、特に野呂川林道工事において残余土砂を谷にけずり落とすなどずさんな工法で工事がこれまでにこなわれていること、林道が通過しても林業はおろか、地域の過疎対策にもならないなどの理由から、自然保護団体や有志による建設反対運動が活発になった<sup>(注2)</sup>。1974年国会において建設中止の請願が採択されるに至る。環境庁長官は峠ごえの1.6kmを残して工事

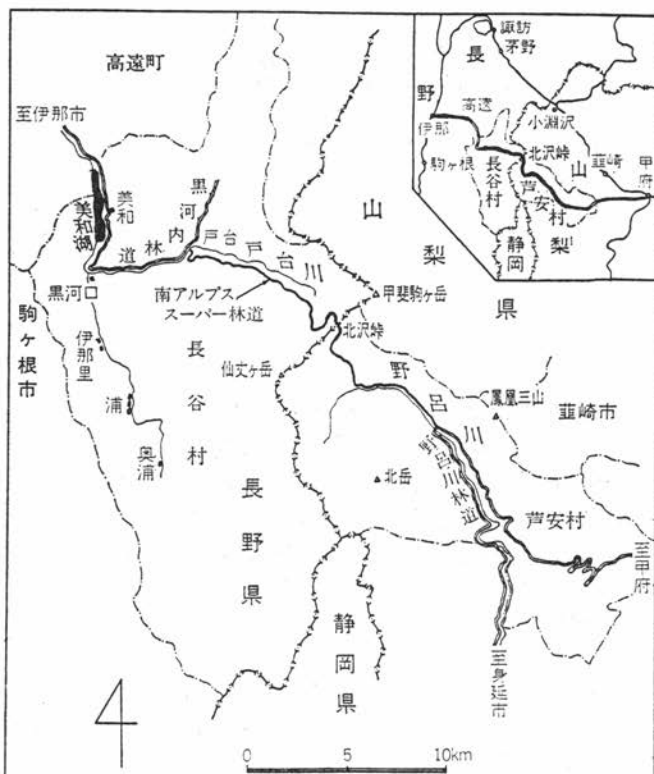


図-1 南ア・林道付近の概念図

の一時停止を命じ、1975年に自然環境保全審議会に意見を求めた。3年後同審議会はついに結論を出すことができず、賛成・反対の両論を併記するという異例の意見書を提出した。建設反対の世論の高まる中で工事は再開され、規模を縮小した形で1980年6月開通となったものである。

(注3)  
ここでは筆者らの研究グループによる1974年からの調査結果をふまえて、あらためて山岳を通る多目的(スーパー)林道のもつ意味を考察したい。南ア・林道はその事例研究の一つとして位置づけることにする。

## II. 南ア・林道、北沢峠、長谷村の基礎調査

### 1. 地質、地形に関する問題点

南ア・林道が計画された地域は、従来より各分野の研究者から指摘されてきたように、日本で最も大規模な構造線である中央構造線に沿った地域である。図-2に示したようにこの中央構造線に平行して走っている仏像構造線、戸台構造線は、林道に直接露出



図-2 南ア・林道周辺の構造線  
(自然研究紀要編集委員会, 1983 より)

している。そこではもろくなった岩石が斜面崩壊をおこし易い。また、破碎帯からは地下水の湧き出しが多く、むろん冬季は凍結して基盤をさらに破壊する。

地質は、甲斐駒ヶ岳をつくる花崗岩、白岩付近の石灰岩、仙丈岳はじめ大部分の地域を占める礫岩やホルンフェルス、片麻岩などで構成されている。この地域の花崗岩が降雨に弱いことや蛇紋岩の風化については北沢 (1975) の指摘がある。また 3000 m 級の赤石山脈や盆地をつくっているのは断層の多い中世代の地質であり、それが林道の崩壊の遠因の一つである。以下は地形関係の調査をうけもった下川和夫の報告 (1976) である。

地形班は野呂川のスーパー林道沿いの地形一般の観察と林道の法面及び林道の下方斜面の観察に努めた。

過去 2 回 (1975 年 8 月, 1976 年 7 月) の調査による野呂川側の林道の工事状況をルートマップで示す (図-3)。また林道工事が直接の原因ではない山崩れの状況も林道から見える範囲で観察を行った。しかし戸台川 (長野県) 側に関しては、工事中の林道が通行禁止のため (この時点では) 十分な観察を行っていない。ただ、地形一般、ことに山

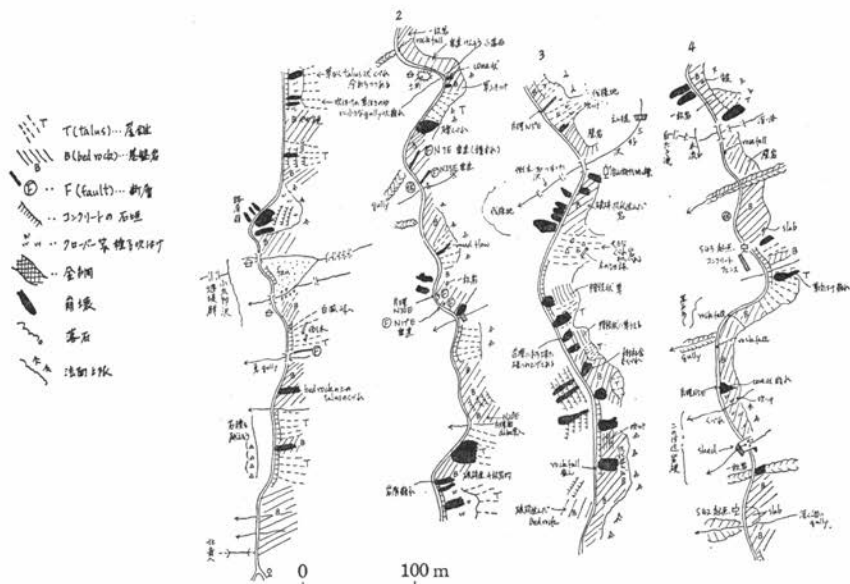


図-3 南ア・林道(広河原-北沢峠間)の法面のルートマップの一部(下川和夫 1976)

崩れについては、2万分の1空中写真の判読によって分類図を得た(図-4)。

林道工事に伴って人工的に造り出された崩壊について分類すると以下の4型がある。

①道路路面自体の崩壊, ②法面の上方斜面の崩れ(法面が出来たことで誘発される山崩れ), ③林道下方斜面の崩壊, ④林道に直接関係しない山地の崩壊(山崩れ)。ここではこれまでに観察可能であった①と、不充分ながら②について報告する。

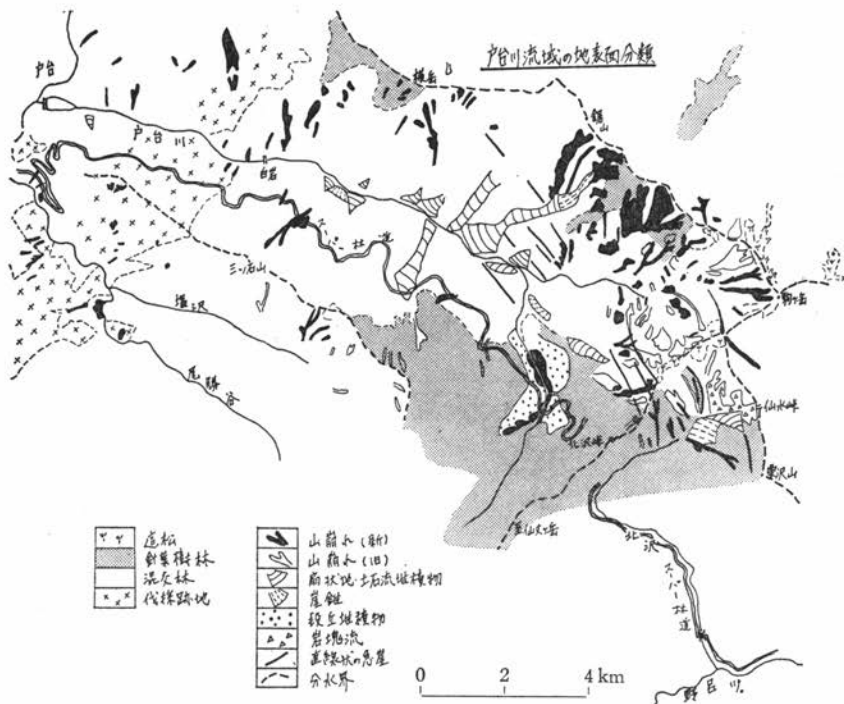
表-1のような結果が得られた。つまり山崩れ的な mass movement としての崩れは、主として崖錐などの風化物質からなる法面で多発している。一方、落石は急傾斜で切られた基盤岩に起こっている。

法面は工法によって次のような処理が施されている。①何の処置もせぬもの, ②法面下部のコンクリートの石垣(ブロック), ③コンクリートフェンス, ④コンクリートフレーム(間に石をつめたもの), ⑤金網, ⑥その他。

何の処置も施していない法面においてそれが基盤岩である場合、垂直に近い壁岩とな

表-1 南ア・林道の法面に発生した崩壊(1976年7月現在)

崩壊の種類	法面の地質	個数
山崩れやスランプ的崩れ (mass としての崩れ)	崖錐及び類する風化層	118
	基盤岩	34
落石(顕著な箇所)	崖錐及び類する風化層	1
	基盤岩	18

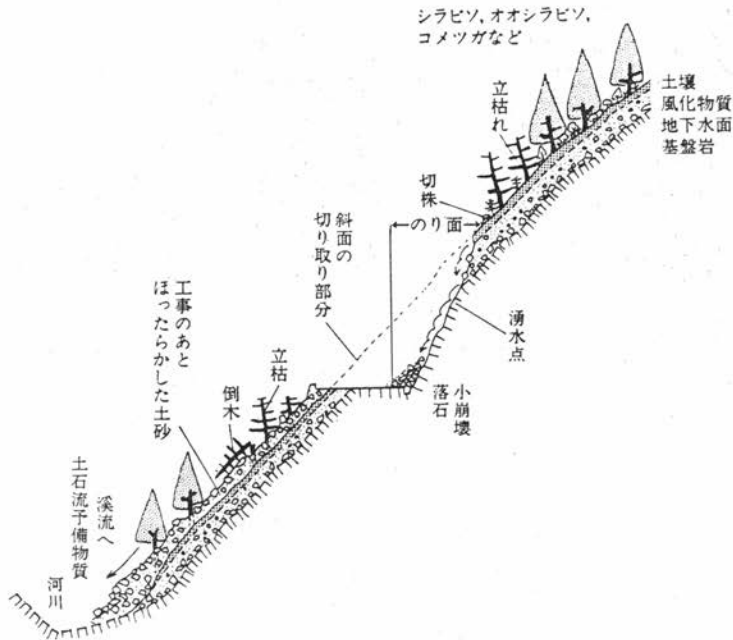


図—4 戸台川流域の地表面分類, 1/20,000 空中写真判読による (下川和夫)

っていることもある。節理面などを露出している部分は、安定している。しかし、北沢出合付近から林道工事終点 (1976 年現在) までの間はかなり破砕の進んだ断層帯が続いており、落石が各所にみられる。今後の凍結融解などによる風化が進むことによって落石はいっそう頻繁になるだろう。

崖錐を切った法面の場合には崩壊となる場合が多い(図-5)。崖錐は重力と摩擦の拮抗した不安定な堆積物であり、法面が崖錐を切るとは下部の支えを取り去ることである。当然物質の下方への移動は促進される。崩れの 70% 以上が崖錐部分でおこっている。植物の種子の吹き付けを行ない、植物が充分生育している法面でも崩壊が起っている。金網は通行者を落石から守ることを意図するものであり、崩壊を押える手段として設置されているものではない。コンクリートフェンスは、北沢に入ってまもない所に 1カ所設置されているが、ここは林道沿いでは最も大きい、そして唯一の地すべり性の崩壊が起っている場所である。現在進みつつある崩壊によって、コンクリートフェンスにはひびが入っている。以上のように、今のところ崩壊を防ぐ完全な工法は施されていない。そしてさらに今後法面は時間が経過するに従って風化が進み、崩壊を起こすだろう。ことに寒冷地であり凍結融解による風化作用の進行と、雪の緩慢な移動、融雪や降水による崩壊がこの林道に及ぼす影響は大きいものと思われる。





図—5 林道の模式的横断面 (下川和夫 1981)

林道の下方斜面（林道と河谷との間の斜面）は、ほとんど全般にわたって林道工事の際の残余の土砂を放棄してあり、草本や低木が埋められている。その結果、地表の乾燥→高木の枯死→崩壊という進行が考えられる。さらに土砂が溪岸まで達しているところもあり、それが土石流の原因となる可能性もある。また河流が対岸へ押しつけられており、対岸の溪岸斜面崩壊を起こす可能性がある。すでに路肩が崩壊している所が数箇所見られた。

野呂川（山梨県）側について全般的に見れば、広河原より下流、つまり工事の初期の段階では、工事は粗雑であり、法面の保全も充分ではない。ことに林道下方斜面は土砂を放棄した部分が長く、その他工事に伴う廃棄物（トタンや木材など）まで捨ててあって、国立公園内とは思えない工事方法である。北沢に入ってから林道は、現在工事を行いつつある部分もあるが、下流に比べ、ことに林道下方斜面の保全に対する対策は行なわれているようである。

## 2. 北沢峠周辺の気候的特性

調査方法、①北沢峠付近の常時観測地点における気象観測記録の分析、②積雪、卓越風災害などについて、地元の人からの聞きとり、③気候の指標となる地形、植生などの観察、④測器を使用した気温と風の定点観測、および移動観測。

小地域の気候について論議するためには、少なくとも主な気候要素についての年間を通した観測記録のあることが望ましい。しかし当地域には測候所、その他の観測施設が

なく、また 2000 m を越す高度であるために、厳冬季を含む年間観測の記録が得られにくい。そこで気温減率を用いて、長野県高遠町（標高 770 m）の気温の値より北沢峠の気温を推定した。ところで気温減率は、季節や時間、あるいは天気によって異なり、その地域的差異についても報告されている。が、ここでは仮りに  $0.61^{\circ}\text{C}/100\text{m}$  を採用して、北沢峠（標高 2036 m）の気温を算出し、その値を旬月で示した（図-6）。この結果、最低気温が氷点以上となるのは5月下旬～9月中旬の間であり、最高気温が氷点以

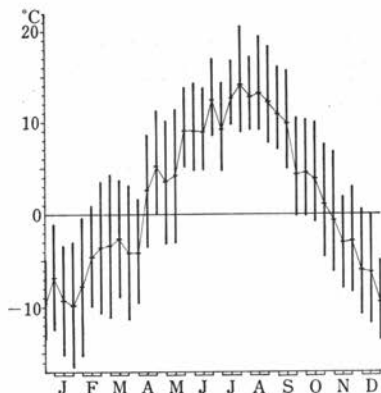


図-6 北沢峠の最高、最低、平均気温（1976年）高遠町の値より算出、旬月で示す。縦線が $0^{\circ}\text{C}$ にかかっている期間に凍結融解が起こる

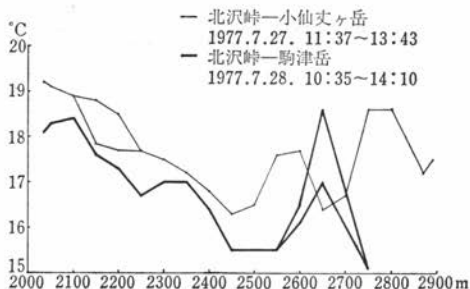


図-7 北沢峠周辺の気温分布  
峠を挟むどちらの山でも、森林限界付近から上では気温が不規則に変化する

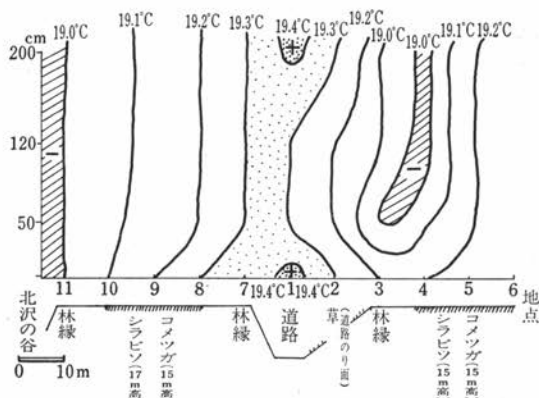


図-9 南ア・林道付近の気温分布  
1977年7月31日 18:00

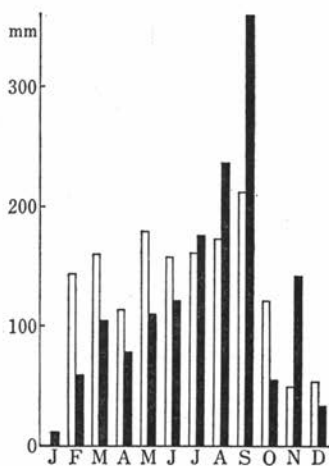
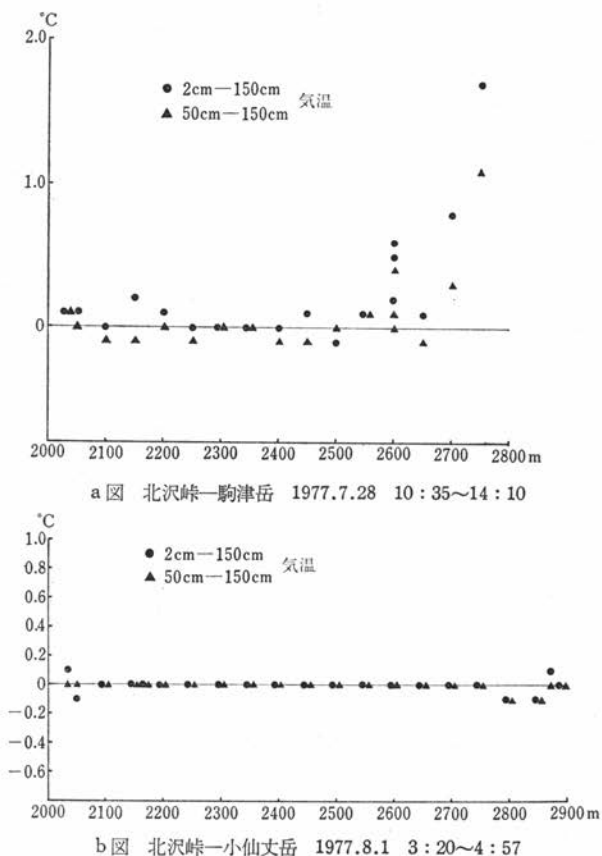


図-10 高遠の月別降水量（1976年）-白ヌキと長谷村の月別降水量（1982年）-黒棒。高遠の年降水量 1525 mm、長谷村は 1487 mm いずれも年変動が大きい

下となるのは 12 月下旬～2 月上旬である。また凍結融解の起る期間は 2 月中旬～5 月中旬、および 9 月下旬～12 月中旬となる。しかし前述のごとく気温減率は条件によって異なるので、これをさらに検討する必要がある。気温減率は雨天時には小さく、晴天時に大きい。また日本では冬季に極大となり、夏季に極小となることが報告されている（長谷川川 1974）。この地域では、夏季の駒ヶ岳の気温減率がほぼ  $0.69^{\circ}\text{C}/100\text{m}$  であるという報告がある（長谷川川 1978）。したがって冬季は予測した値以上に凍結融解作用が卓越するものと思われる。

北沢峠付近の気温分布の状態については、北沢峠—小仙丈岳の間、および北沢峠—駒津岳間の移動観測の結果がある（図-7）。北沢峠を挟む両山岳の斜面上においては、同じ標高毎に類似した気温分布の状態がとらえられた。すなわち 2650 m の森林限界より



図—8 地表面からの異なる高さにおける気温差の高度変化  
 昼間（a 図）は林内では 50 cm 高が最も低温であるが、森林限界付近より高い所では、地表面が最も高温となる。夜間（b 図）は林内では気温差がほとんどないが、山頂近くで、地表面がわずかに冷えているところがある



はさらに研究する必要があると思われる。

風についての聞きとりによれば、北沢峠周辺では、ほぼ西寄りの風が卓越するという。周囲を複雑な地形に囲まれた北沢峠は、風が峠を吹き抜ける“ウィンドギャップ”となっていることを示す景観はない。むしろ風は弱く、仙丈岳に登って行くと 2700 m 付近の斜面より上で風力が強くなることが多い。これは風上側にあたる馬ノ背の尾根がついたての役割を果しているせいであろう。馬ノ背は、2700~2730 m の細長い尾根であり、その西斜面は急な崩壊地である。東斜面はダケカンバが大きく根曲がりの生育型をして、風下側の積雪の多さを示している。北沢峠の周辺において、偏形樹によって風向と風の強さの分布を調査した結果を示す(図-11)。これによれば、双児山、駒津岳、仙水峠、栗沢山の偏形樹の偏形度が大きく、西風が双児山、駒津岳をぬけて、仙水峠を抜けてゆくようである。この限りでは北沢峠は、風による直接的な被害は少ない方であろうと予測される。

### 3. 林道周辺の植生

北沢峠付近は中部日本の亜高山帯を代表する樹種のシラビソ、オオシラビソ、コマツガ、トウヒが優占する。この付近の亜高山帯植生分布の上限は、標高約 2650 m、同じく下限は約 1600 m である。北沢峠はこの垂直分布帯のほぼ中央にあたり、表-2 に示すようにダケカンバを含む密な針葉樹が 20 m 以上の高木層、亜高木層、および低木層を構成し、草本層はしばしば蘚苔類が繁茂して、その中に多数の幼樹が発芽している。植物群落の構造から、この亜高山帯林はほぼ極相に達しており、天然更新によって現在の森林構成が保たれていると判断できる。

南ア・林道は落葉広葉樹の低山帯をトラバースしながら、長野県側では戸台—北沢峠のほぼ中間地点で亜高山帯林に至る(図-4 参照)。同様に山梨県側では広河原より約 1 km ほど上流で低山帯林を抜けている。この低山帯林と亜高山帯林の境界は前述のごとく、標高 1600 m 付近にあるが、種々の環境要因によってその状態は多様である。

亜高山帯林の中に散在し、その上部で優占種となって森林限界を形成するのはダケカンバ、ヒメコマツであり、藪沢、戸台川および北沢沿いには水辺林のヤナギが分布する。カラマツは丹溪山荘付近に径 30 cm の林分が見られる他、亜高山帯に散在している。戸台川沿いでは白岩ダムの下流は国有林から外れ、ほぼ全山カラマツの単一植林がなされている。

次に植生破壊の現状と予想について述べる。南ア・林道工事の直接的な植生破壊は、林道および法面の樹木の伐材と、工事に伴う土砂を谷側に落とすために生じる物理的な破壊である。これは道路工法と地形によって異っており、道路が尾根を切るような場合には法面は高く、道路上部の樹木の伐材は 10 m 以上に及ぶことがしばしばある。道路を横断する方向をとれば、道幅とその周辺 4~8 m の樹木は皆伐されている。道路下の斜面では工事残余土砂をけずり落としたための植生破壊が目立っている。

林道による間接的な植生破壊は林道付近の孤立木の立枯れと法面上部の低木層の枯死である。道路の上方の林縁では 50 cm~2 m の針葉樹の低木が枯れている。これよりも樹高の高い亜高木層以上の樹木、および草本層の幼樹は正常生育をしている(1977 年

A地点 10m×10m コドラート 北沢峠の長野側 海拔 1890 m  
W向斜面 V=4/5

種 名	Density (本)	Height (m)	Cover (%)
シ ラ ビ ソ	4	25	
ダ ケ カ ン パ	1	25	
シ ラ ビ ソ	6	1 ~ 4	
シ ラ ビ ソ	38	0.5 以下	
コ ケ	—		80
ミツバオウレン	—		+
カエデ (幼)	—		+
針葉樹 (幼)	1,500		

B地点 10m×10m コドラート 北沢峠の長野側林道付近 海拔 1900 m

種 名	Density (本)	Height (m)	Cover (%)
シ ラ ビ ソ	3	20	
シ ラ ビ ソ	4	12	
シ ラ ビ ソ	4	5	
H 層 省 略			

C地点 10m×10m コドラート 北沢橋の上流 海拔 1800 m  
W向斜面 傾斜 30°

種 名	Density (本)	Height (m)	Cover (%)
シ ラ ビ ソ	13	20 以上	
ダ ケ カ ン パ	2	20	
シ ラ ビ ソ	11	8 ~ 4	
ブ ナ	2	6	
シ ラ ビ ソ	10	1 以上	
シ ラ ビ ソ	15	1 以下	
シ ラ ビ ソ	1,500	0.2 以下	

表—2 南ア・林道付近の植生 (1975年8月)

11月現在)。低木の枯れている幅は林縁より林内に向かって5m範囲内であり、これより奥の林内では正常生育をしている。林縁の微気候的な環境の変化が原因と考えられる。従って今後林道ぞいの植物の生育障害が予想される。

#### 4. 南ア・林道と長谷村

南ア・林道が通過する山麓の村はどのような問題をかかえており、南ア・林道がどのように位置づけられているかを、長野県長谷村の例をあげて考察する。以下は生井貞行、中村恵子の報告(1978)に基づいている。

長谷村は長野県の東南部、伊那盆地の東部にあり、海拔760~3032mに至る南アルプス北部山岳地帯を含む、山間地の村である。村の総面積320.2km<sup>2</sup>のうち全適住地および耕地は1.6%にすぎず、他は山林原野である。

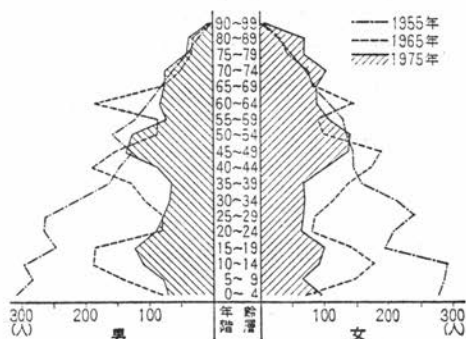
長谷村はかつての製炭地帯で、製炭の最盛期(1947年頃)における製炭生産高は年間

## 山岳と山村の変貌



長谷村における人口の推移

資料：「長野県の人口」(異動報告結果年報)より作成(中村, 生井 1978)



長谷村における男女別年齢階層別人口の推移

資料：「長谷村村勢要覧」より作成(中村, 生井 1978)

図-12

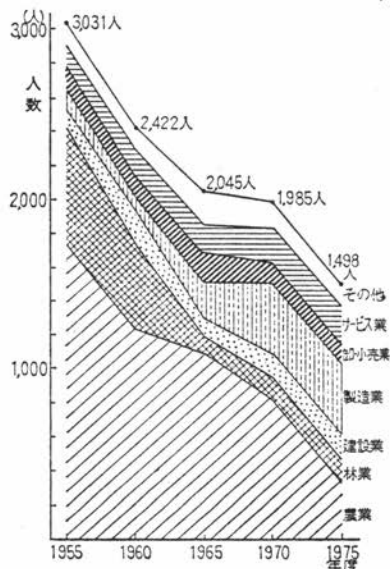


図-13 長谷村における産業別就業人口の推移

資料：各年「国勢調査」より作成(中村, 生井 1978)

30万俵を越え、郡下では第1位を占めていた。しかし1955年頃からの、いわゆる「エネルギー革命」の進行によって、製炭業は大きな打撃を受けた。そして、長谷村における産業の核であった製炭業の衰退により、長谷村の人口は減少し、長谷村は過疎化の道をたどったのである。長谷村における人口減少は1955年頃から急激に生じ、とくに20~30歳層の減少が著しい(図-12)。そして過疎化の進行に並行して長谷村の産業構成は変化した。それを就業人口の面から見ると、1955年において就業人口のほとんどが農林業従事者であったが、1955~65年にかけてそれが大幅に減少した。1965年以降、農業従事者の減少が続く一方、製造業従事者が増加し、全体として長谷村の産業は農林業から製造業へその比重は移行した(図-13)。

林野庁は南ア・林道の開通はこれを利用した林業開発を中心に、地域の振興をはかることを目的とする、としている。そこで長谷村の林業のようすについて触れる。

長谷村における森林面積は総面積320.2km<sup>2</sup>のうち、91.4%にあたる292.7km<sup>2</sup>である。その内訳は国有林が189.5km<sup>2</sup>、公有林23.4km<sup>2</sup>であり国有林が全体の64.7%を占めている。林家の保有山林規模をみると、1970年度においては、20ha以下の林家

表-3 林業収入への依存度別林家数  
(中村, 生井 1978)

単位: 戸<%>

総数	まったく依存しない	2割未満依存している	2~5割依存している	5割以上依存している
524	333	162	25	4
<100>	<63.5>	<30.9>	<4.8>	<0.8>

資料: 「1970年農林業センサス」より

は全体の 97.3% で零細林家がほとんどである。また各林家の林業収入に依存する割合は低く、まったく依存しない林家は全体の 63.5% に達している(表-3)。

次に森林組合従事者についてみると、森林組合の職員は 10 名(うち 1 名は臨時職員)である。

また森林作業におもに従事する労務班員の年齢についてみると、すべて 30 歳以上であり、なかでも 50~60 歳の年齢層が最も多く、労務班は高年齢者中心である(表-4)。

以上述べた長谷村の実態から、林野庁が指摘する南ア・林道の効果を検討してみる。

第一に林道の開通によって「林業経営条件の向上が図られる」と指摘されている。しかし長谷村の林業は衰退の道をたどっており、また若年労働者が流出しているとともに、林業従事者の高年齢化が著しい。それらのことは林業発達を現実化させる内的条件が整っていない事を意味し、それゆえに南ア・林道の長谷村林業に与える効果は、林野庁の期待どおりにはいかないと言える。また南ア・林道の利用できる期間は 5 月から 10 月の半年間だけで、道路としては不十分な機能しかもたず、したがって林道を利用した「広域的・計画的な施業」の実現は困難であろう。

第二に「森林管理、治山等が容易となる」と指摘し、さらに「……本地域の地質構造の特殊性から治山事業が重要であるが、この林道の開設により、効率的な事業実施ができる」と説明している。しかし、地形および地質構造上問題があるからこそ、むしろ林道を通してはならないのである。林道の建設によって、森林管理はおろか、治山そのものまで危うくなり、それは林道管理主体である長谷村の財政を窮迫することになるだろう。

第三に「森林レクリエーションの途が開ける」と指摘はしているが、具体的に計画が立案されていない。むしろ林道の建設は森林破壊を促進して、観光資源としての森林の価値を低下させることになるだろう。

第四に「地域の振興に大きな手がかりとなる」と指摘されている。図-1 に見るように山奥の村にとってこの林道の開通は新しい入口(出口)を意味している。しかし実際の村の経済、社会を分析してみれば、過疎脱出という夢を与えるだけにすぎないのではないか。

表-4 年齢階層別労務班員数ならびに職員数  
(中村, 生井 1978)

年齢階層	労務班員数		職員数	
	人数	構成比	人数	構成比
70才以上	2	2.8	—	—
60~70	6	8.5	—	—
50~60	35	49.3	2	20.0
40~50	22	31.0	2	20.0
30~40	4	5.6	5	50.0
20~30	—	—	1	10.0
20才未満	—	—	—	—
不明	2	2.8	—	—
計	71	100.0	10	100.0

資料: 森林組合「労務班員名簿」より  
(1977.8.1 現在)



日本経済の高度成長は、結果の一つとして日本各地の山村から若年層を大量に奪いとり日本の林業の不振をもたらした。長谷村もこの過程において過疎化が進行し、住民の生活は困窮したのである。このような大状況の下での南ア・林道の建設は長谷村の復興には役立たぬであろうと考察の結果、考えるものである。

### III. 南ア・林道の開通

1978年、自然環境保全審議会は「もし、この道路計画が現時点であらたに提起されたものであれば、開通を肯定しがたいものである」という共通の意見をもちながらも、ここで工事を中止すると行政上の一貫性を欠き、「国の行政に対する不信を招く」という、訳の解らない理由、ないしは特定の人々だけを対象にしたような見解を示し、林道開通に関する賛否両論を併記した意見書を環境庁に提出した。つまり林道を開通させることはまちがいであるが、行政のメンツを立てなければならぬ、という本心をそのまま吐露して、開通に事実上「go」のサインを出したのである。かくして1979年11月、国立公園第一種特別地域を貫く総工費48億8,400万円をかけた南ア・林道全道が完成し、1980年6月、開通のテープを切った。このことによって北沢峠から登る仙丈岳、甲斐駒ヶ岳の登山は、夏の間は、バスで気軽に？1日で往復できる身近な山となった。幸い現在のところ特にゴミが多く散乱するという事もなく、登山者によって特に以前より目立って山が荒されているという事も無いように思う。

国立公園第一種特別地域を含む、北沢峠の周辺についていえば、計画もかなり縮小され、林道工事の工法も変えられた。道幅は3.5mに縮小され、工事の残土は谷へ落とされず、下に運ばれている。道路の周囲の樹木は伐採されることなく低木にいたるまで生育状態は良好である。しかし、このような工法は他の山岳道路と比較すれば例外的で、他の「騒がれなかった」山岳道路に多くの問題を残していることを忘れてはならない。また、南ア・林道についても、このような処理がなされたのは、重なる反対運動により工事が凍結された北沢峠周辺だけに限られており、ここより下の97%の林道は以前にも増して惨憺たる状態である。自然破壊反対運動の対象となったのは林道の全体であり、北沢峠の第一種特別地域だけではなかったはずである。どうも焦点をはぐらかされた思いは禁じえない。

北沢峠付近の森林破壊については筆者等が開通前に懸念していたような亜高山帯林の立ち枯れ現象は今のところ起こっていない。立ち枯れ現象は、富士山のような露出度の高い孤立峰において、より卓越するのかもしれない。ところがこれに対して、南ア・林道には、まったく別種の森林破壊の型が現われている。すなわち道路の建設にともなって生じる地形性の崩壊、詳しくは道路の法面の上へ上へとのびる斜面崩壊に伴う、上部斜面上の植生の破壊である。図-5のように、斜面を切りとって建設された道路の法面は、道路の幅の分だけ傾斜が増す。この法面は標高の高いところでは冬季の凍結、融解作用によって風化が進み、雨や雪が降った後崩壊する。網をかぶせたり、コンクリートの吹きつけ、植物の種子の吹きつけなどによって保護しても表面の保護施設ごとパッサ

り崩壊している。それによって上部斜面の植生は土ごところろ落ち、道路上に、或いは下の谷斜面にまで落下する。谷には大木が根こそぎ倒れている。

また道路建設の段階で道路下の斜面上の植生は削り取った土砂をそのまま下に落とし、倒木となったり立ち枯れているのは、前に述べたが、上の法面の崩壊がこれに追いついてきているのである。このように地形性崩壊に伴う植生の破壊は、北沢峠のすぐ下（山梨県側）から、北沢橋までの間で最も頻繁に起っており、崩壊の地点数を数えられない程である（図-14）。このような地形崩壊に伴う、植生破壊は地盤に問題のある南ア・林道に代表されるような型であると言ってよく、先の富士パルラインの「立枯れ型」に対して、南ア・林道の「地盤崩壊型」の植生破壊と名づけてよいだろう。河床には押し出された砂レキと共に、樹木の幹が白々と埋まっているのがみられる。

南ア・林道全通後におこった最も大きな災害は、当時マスコミで報道されたように台風によるものであった。1980年に開通して以来、主なものだけでも1981年の台風15号、1982年の10号、18号、1983年の5号などであり、これらの台風のたびに林道は文字どうりズタズタに崩壊したのである。いうまでもなく台風と南ア・林道に直接の対応関係はないが、日常の破壊が着々と進む中で台風がくればどのようにそれが進むかを実験結果を見るように誰もが注目した。

台風による豪雨とそれによる被害について南ア・林道関係者は次のように弁明しなければならなかった。1981年の15号台風に関しては「予期で

きない自然災害」（堀口茂八、山梨県南ア・林道管理事務所長談話。1981年9月1日朝日新聞）であると。筆者は1978年6月3日付朝日新聞の論壇で「(すでに)山梨県側に限っても、178カ所におよぶ山くずれが生じている。——降水量の多いこの地方では、土石流による災害が心配される——この林道は、国立公園を破壊し、天災を招き、しかも地元民に利益をもたらさない。——」と述べておいた。台風の日本への上陸は平年で3回程度。1981年は3回で平年なみ、82年は4回と多かった。その中で最も大きな被害をもたらした1982年の10号台風にしても日本に上陸した時は大型で並の勢力となっており、この程度の台風は今後もこの地域を襲う可能性があるだろう（表-5, 6）。



図-14 広河原、北沢峠間の路面損壊箇所  
1984年8月（岡沢修一）

表-5 1982年台風10号による北沢峠の降水量

7月31日	8月1日	8月2日	8月3日
29.0 mm	551.0 mm	100.0 mm	52.0 mm

表-6 1982年台風18号による北沢峠の降水量

9月8日	9月9日	9月10日	9月11日	9月12日
54.0 mm	29.0 mm	50.0 mm	164.0 mm	202.0 mm

このような災害が起こることを、林道管理者や林道開発推進論者は予期していなかっただろうか。

南ア・林道推進協議会長である伊那市長三沢功博氏は1978年6月17日付朝日新聞の論壇で私の意見に対する反論として「——私達はこの地方に生まれ——この自然の有難さも、またその反対の恐ろしさも知っているつもりである。——林道着工以来、大きな災害がみられない。林道が災害を起し、貴重な自然を破壊するならば、地元民が率先して反対するはずである」と述べている。しかし山をよく知っているはずの長谷村が経営する仙流荘も、1982年台風10号の際に黒川の豪流をうけて半壊流失した。

1981年の台風15号の後で、山梨県南ア・林道管理事務所長（前出）は、一方では「予期できない自然災害」といいながら、他方「雨量のわりには被害は少ない方だ。倒木や落石は山岳道路の場合、ある程度やむを得ない」と矛盾したことを言っている。この発言からうかがわれるのは、おそらく林道建設、維持の専門家には、豪雨がくれば崩れることはわかっていたにちがいない。

南ア・林道の最新の状況を調べる為の調査を1984年8月23～24日に岡沢修一が実施した。以下はその報告である。

1976年夏と8年後の'84年夏に同一地点からとった写真比較により、戸台川、野呂川とも河床はかなり上昇していることがわかる。河床には、押し流され、半分埋まった木や、コンクリートの防護壁、橋脚などが多数ころがっている。礫の移動を阻止するための砂防堰堤には砂礫や木がいっぱいにつき、堰堤上流は既に埋積されている。山梨県側の崩壊した林道の工事箇所は52カ所と発表されているが、この報告は隣あった崩壊地点をまとめて1カ所としている。例えば広河原—北沢峠間は22カ所と報告されているが実際には約100地点の崩壊がある（図-14参照）。林道付近の斜面崩壊は、①林道およびその下方斜面の崩壊、②上部法面の崩壊、③林道にかかる支谷の崩壊、④橋などの建造物の破壊、①②の全体が崩壊したものなどがある。広河原のつり橋は「へ」の字に折れ曲がり大樺沢との合流地点では道路はえぐり取られて、地形が完全に変わっている。山梨県側、長野県側とも昨年、一昨年の災害の復旧工事が現在も続けられており、この調子でゆくと、無雪期には永遠に工事を続けなければ維持できない林道になりそうである。破壊の程度から言えば山梨県側がよりはなはだしい。

台風の度に大きな崩壊が起こってマスコミを販わしているが、標高の高いこの地域では、むしろ日常的に凍結融解が起こり、植生をはがされた林道付近では常に礫が生産さ

れていると考えるべきである。これが集中豪雨や台風の際に一気に押し出してくるために、被害が大きくなるのである。被害は道路、河川、山林にわたり、工事も林野庁、建設省、県、村など各方面から発注されることになる。その費用は厩大である。恐らく今後も崩壊は続き、川の埋積、河床の上昇、土砂崩れや出水などの災害が続くと予想される。

#### IV. 南ア・林道開通後の村の状況

南ア・林道が開通して以来、長谷村はどのように変化したであろうか。1984年8月22～23日の調査に基づいた資料と、グループのディスカッションの結果を述べる。尚詳細については生井貞行が整理中である。

南ア・林道の開通にとりわけ期待をしていたといわれる長野県側の長谷村は、北沢峠の開通によって目的を達したであろうか。美和湖に沿う長谷村の道路は整備が進み、度重なる台風の被害にもかかわらず、道路は再びつけ直され、流された仙流荘は再建され、護岸工事は更に補強されている。村営バスは長谷村黒川の基地から出て、北沢峠で折り返す路線を往復している。一般車両の通行はできず、したがってこの林道は村への入口にも出口にもなることはできなかった。山梨県側でも、同様に広河原から北沢峠までの間を往復運行している。正直なところ、筆者はこのバスに悪い印象を持たなかった。バスのターミナルは清潔で工夫をこらしてあり、村の職員は親切な応対をしている。バスの運転をするのも地元の山好きな青年で、単に客を運ぶだけでなく、山の案内、咲いている花の解説、林道開通までの話などしてくれる。写真を撮る人の為に停車するなど心をこめた応対がある。観光施設や商店を造るだけで終わっている観光地が多いなかで、心の対応について配慮しているのは、観光によって村を活性化させるために、一歩先んじた考えをもとうという努力の表われだ(注4)と思う。

長谷村にとって最も深刻な過疎などの村の社会問題についてはどうであろうか。長谷

表一 長谷村の財政(一部) 長谷村村勢要覧(1983年)より

		昭和55年度決算	100分比	昭和57年度決算	100分比
歳入	総額	1,290,596 千円	100.0 %	2,077,029 千円	100.0 %
	村税	142,780	11.1	150,243	7.2
	地方交付税	599,891	46.5	741,020	35.7
	国県支出金	187,324	14.5	708,661	34.1
歳出	総額	1,257,375	100.0	2,039,544	100.0
	総務費	252,365	20.1	291,943	14.3
	民生費	93,041	7.4	100,519	4.9
	災害復旧費	12,509	1.0	505,402	24.8

村の人口は林道開通後も1979年2,755名から1983年2,635名へと相変わらず漸減している。深刻な過疎に悩む山奥の浦部落も7世帯が5世帯になり、部落でただ1人の坊さんも部落を下りてしまった。今年1984年の5月より国鉄バスも浦への路線を廃止して今は自家用車に頼るしかない。林道の開通によって森林施業が活発化する(南アルプス林道推進協議会)はずであったが、林業組合の労務班員は81名(1979年)から53名(1984年)へと減少し、しかも年齢構成が老齢化しているというのが実情である。林道が長谷村産業対策に大きな変化をもたらしたとは、今のところいえないようである。その一方で長谷村の財政は1980年度と1982年度を比較すると、総額が大幅に増加している(表-7)。その内訳は歳出中に占める災害復旧費の大幅な増加である。そして総務費などを切りつめていることが解る。しかし歳入の中では国県支出金が大幅に増加されて災害復旧費に充てているのであるから、村の財布はあまり痛んでいないという事になるであろう。

## V. 南ア・林道が残した教訓

スーパー林道と呼ばれる、特定森林地域開発林道、すなわち山岳の多目的林道は、全国で25カ所計画され、また進行中である。その多くは南ア・林道と同じ理由をもって建設が開始されたものである。山形・新潟県の朝日、栃木・群馬県の奥鬼怒、群馬県御荷鉢、静岡県得天竜、和歌山県の和田川松根、徳島県の剣山、大分県の奥日田などが一部開通、又は建設中である。南ア・林道の建設と現在までの結果が示した教訓を生かして、スーパー林道のもつ意味を明らかにし、スーパー林道に対する考えを示すことが総括となろう。

① 林道と名はついているけれど、高山帯や亜高山帯を通る林道は実際には林業生産成立の高度限界を越えており、林業の振興に貢献する事はあまりない。② 観光について言えば、日本には既に秘境と呼べるような所はない。道路を作って観光地を便利に、行き易くすることは観光としての潜在資源を逆に食い荒しているようなものである。南ア・林道は村人の工夫を生かした村営バスを走らせているが、それも峠への往復運行をしているので、峠まで道路を通す理由は何もなかったのである。産業化が進み、環境問題が社会問題として定着した現代では、国立公園を「(すぐれた自然)の利用の増進を図り、もって国民の保健休養及び教化に資することを目的とする」と定義する自然公園法オンクブネアリの概念を再検討し、国立公園は総合的な自然の聖地として、手つけずにおこうとするような時代にあった意識の変革が必要である。③ 構造線や、多雨、地震などによる崩壊頻度の高い南アルプスはもとより、標高の高い山岳や深い谷、火山、高緯度地方ではもともと稜の生産が多く、崩壊の危機に晒されている。そこに一度人為的破壊を行えば崩壊を生み、崩壊は更に森林を破壊する。従来より治山治水に心を砕いてきた歴史を我々はもっと尊重すべきであろう。とはいっても山村から人口が流出し、山を守る者がなくなってしまえばもとよりそれは不可能になる。④ 林道を建設して以来、絶えることのない災害復旧工事が続いている。その費用の多くは国や県の災害助成金、つまり税金

である。毎年災害を起こす林道を造ることは税金食いの怪物を飼っているようなものである。しかし復旧工事の多くは地元土建会社に発注され、地元の人に雇用の機会を与えている。これは問題を自らが作り出し自らが解決するという型の公共投資である。あるいは国家の過疎対策というものがけっきょくこの程度のものでしかないともいえる——長期的展望にたった政策などはもとよりないのである。経済政策、林業政策、村の自立の努力、厚生や文化の問題など総合的な対策が検討されなければならない。スーパー林道計画は山村や山岳地域の特性を無視した机上の計画と一部の企業の利益の為に、地元にとっても、日本の自然環境にとっても大きすぎる犠牲を払うことになったと考えざるを得ない。

(注 1) 南ア・スーパー林道開通までの経過

- 1952~1962 山梨県が野呂川林道を建設する(桃の木—広河原間)。
- 1964. 6 南アルプス国立公園が指定される。
- 1967.11 森林開発公団が「南アルプス・スーパー林道概略」を発表する。
- 1967.12 農林大臣が計画を認可、長野、山梨両県から着工。
- 1970 このころより南ア・スーパー林道開発の問題が出される。
- 1971. 8 南アルプスの自然を守る会が南ア・スーパー林道工事の現地調査。
- 1971 大石環境庁長官は計画の再検討を約束する。
- 1971 森林開発公団は調査期間として2年間工事を中止する。
- 1972 各種自然保護団体の反対運動活発となる。
- 1973. 5 長野県自然保護の会が南ア・スーパー林道建設中止を決議。
- 1973.11 北沢峠 1.6 km の区間の工事中断を三木武夫環境庁長官が決定。
- 1974. 6 衆議院において「スーパー林道建設中止を求める請願」が採択される。
- 1974. 6 森林開発公団は最終区間をオープンカット方式で進める計画にして、実施計画書を環境庁に提出。
- 1974.10 毛利環境庁長官が現地を視察する。
- 1975. 3 環境庁が自然環境保全審議会に意見を求める。
- 1976.12 森林開発公団は北沢峠付近のルート・規模の設計変更案を環境庁に提出。
- 1978. 4 自然環境保全審議会は賛否両論併記を答申する。
- 1978. 9 マイカー規制などを条件に工事再開。
- 1979.11 全道工事終了。
- 1980. 6 全道開通、名称を南アルプス林道とする。

(注 2) 山岳雑誌に代表させた一般登山者の南ア・林道への対応は次のようである。

岳人 160 (1961) :〈野呂川林道が完成したら〉 岳人 238 (1967) :〈南アルプス未来図、スーパー林道が完成したら〉この二編はともにバラ色の夢が書いてあり、林道建設への疑問や反対はまったくない。ところが1970年代初めの自然保護の動きに対応して、山と溪谷(1972-1)は「自然保護」の大特集号を出した。岳人も1973年の310号から「自然保護レポート」を連載した。南ア・林道凍結後の記事は、ややつっ込んで問題を追っている。山と溪谷(1974-7) :〈どうなる? 南ア・スーパー林道の行方〉 岳人 340 (1975) :〈南アルプススーパー林道に行く、なぜ工事中止したまま、北沢峠 1.56 キロをめぐる攻防戦〉

日本山岳会会報『山』にも1977年11月・12月号に「どこまで壊せば気がすむのか」(389号)「原生林の北沢峠は守れるか」(390号)が載っている。しかし、開通後の南ア・林道に関する直接の記事はなく、登山者の関心は、この林道に関しては、遠のいていったように見える。

日本自然保護協会では、この問題をどう扱っているか。『自然保護』の記事から追ってみると、1970年8月(99号)に、森林地域を“未開発資源”とみなす林道開削の例としてとりあげている。次に、地元反対派の堅実な意見が載り(156号)、75年8月(159号)は「南アルプス・スーパー林道特集」となった。さらに、信州大のグループが中心となって「公開質問状」(176号)を載せている。186号と191号で再論。230号(81年7月)では「山岳地帯における道路建設と自然破壊」をテーマとするシンポジウムを紹介している。245号(82年10月)では、その年の8月の台風10号による惨状の緊急レポートとなる。この記事の文末には、次のように記されている。「南ア林道は、自然からも人間からも離れて、一人歩きを始めたように思えてならない」。以後『自然保護』にも見はなされている。

- (注3) 明治大学エコロジー研究会。調査の参加者(五十音順、調査時の姓) 石川まり子, 岩瀬厚, 上本進二, 岡沢修一, 小川雅弘, 奥富孝夫, 金子由紀, 叶内敦子, 児玉茂, 小山富見男, 斉藤岳己, 酒本多美子, 佐藤一雄, 下川和夫, 早田勉, 染谷弘子, 田中真一, 中村恵子, 生井貞行, 肥後高志, 菱沼よし江, 細田浩, 松永和子, 村田正博, 壺昭吉, 森田郁子, 横山秀司。

- (注4) 筆者は次のような論考によって地域再生の方法を考えてみた。

1983: 地域計画への景観生態学の寄与(二)—長野県立科町の町づくり—, 地理28-9

1984: 立科町(白樺高原地区)観光整備計画報告書 立科町観光商工課(共著, 非売)

#### 参考文献

- (1) 北沢秋司: 地質と山地崩壊からみた南アルプス・スーパー林道の問題点  
南アルプス・スーパー林道の建設中止と現状凍結を訴える—資料—南アルプス自然保護連合, 伊藤精悟, 他(1975)
- (2) 近田文弘編(1979): 南アルプスの森林植生, 静岡大学理学部生物学教室
- (3) 気象庁監修(1982): 気象年鑑1982年版
- (4) " (1983): 同 1983年版
- (5) " (1984): 同 1984年版
- (6) 式正英(1961): 赤石山地北部の地形について, 辻村先生古希記念論文集
- (7) 自然研究紀要編集委員会(1982): 理科検索表—伊那谷版—, 秀文社
- (8) 下川和夫(1981): 南アルプス・スーパー林道, 中二 challenge, 福武書店
- (9) 中村恵子, 生井貞行(1978): 南アルプス・スーパー林道と長谷村, 地理23-6
- (10) 長野気象台(1976): 気象月報1月~12月
- (11) 長谷川力(1970): 本邦の山岳における気温の特性, 地球科学24-1
- (12) " (1974): 本邦における気温遞減率について(補足), 地球科学28-1
- (13) " (1978): 長野県内の山地における夏季の気温遞減率について, 地球科学32-1
- (14) 長谷村(1983): 長谷村村勢要覧
- (15) 南アルプス林道推進協議会: 南アルプス林道早期完成の訴え

## 日本人による遠征・登攀ノート

### 編集委員会編

#### ネパール

1983年1月

#### テント・ピーク (Tent Peak) 5663 m

南面 5120 m で断念

都城山岳会創立 25 周年記念ヒマラヤ遠征隊

隊長 福森利明 隊員 4 名

1月1日, テントピーク・ベースキャンプ着。  
2日, 4600 m 地点にキャンプ1建設。3日,  
5120 m 地点まで登り, 登頂を断念。4日, フ  
ルーテッド・ピークの末端にあたるラクシピー  
ク (5380 m) に長友, 吉住の2名が登頂する。  
寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Annapurna Himal, Nepal

Attempt : Tent Peak, 5663 m, via the S  
face, to a maximum altitude of  
5120 m in January.

Personnel : Toshiaki Fukumori & 4 members

1983年12月

#### カングルー (Kang Guru) 7010 m

南面 登頂 (冬期初)

1983年電電山岳同志会ヒマラヤ登山隊

隊長 加藤功一 隊員 3名

12月5日, 3800 m 地点にベースキャンプ建  
設。6~9日にかけてピサン・ピークの 5800 m  
を往復して高所順応トレーニングする。11日,  
5200 m 地点にキャンプ1建設。13日, 5800 m  
地点にキャンプ2建設。17日, 馬場単独で頂上  
アタックへ。6200 m でビヴァーク後18日, 頂  
上に立つ。6250 m で再度ビヴァークし, 19日  
ベースキャンプへもどった。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Annapurna Himal, Nepal

Ascent : Kang Guru, 7010 m, via the S face,  
summit reached on December 18  
by Hiroyuki Baba (the first  
winter ascent.)

Personnel : Koichi Kato & 3 members

1983年4月~5月

#### フルーテッド・ピーク (Fluted Peak)

6501 m

南面 ロッシュ・ピーク (5640 m) で断念

田川山の会フルーテッド・ピーク遠征隊

北喜代志, 日浅俊二

4月21日, アンナプルナ・ベースキャンプ  
(4050 m) 着。26日, フルーテッドピーク・ベ  
ースキャンプ (4650 m) 建設。29日, 5200 m に  
キャンプ1建設。30日, ロッシュピーク (5640  
m) に登頂。5月2日, 再度ロッシュピークに  
立つが, 時間切れでアタックを断念。3日, テ  
ントピーク (5500 m) に登頂。  
寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Annapurna Himal, Nepal

Attempt : Fluted Peak, 6501 m, via the S  
face, to a maximum altitude of  
5640 m (Rosh Peak) in May

Personnel : Kiyoshi Kita & Shunji Hiasa

1983年4月~5月

#### ツクチェ・ピーク (Tukuche Peak) 6920 m

北稜 登頂

1983年ツクチェ・ピーク登山隊

隊長 山本久子 隊員 5名

4月26日, 北稜末端, リトル・ツクチェ氷  
河のモレーン上にベースキャンプ建設。30日,  
5400 m 地点にキャンプ1建設。5月4日, 6100  
m 地点にキャンプ2建設。7日, 6500 m にキ  
ャンプ3建設。9日, 5名登頂。

寄稿 岳人 1983年10月号, Bergsteiger 1984  
年4月号

報告書 ツクチェ・ピーク, 1983年春

Area : Dhaulagiri Himal, Nepal

Ascent : Tukuche Peak, 6920 m, via the  
N ridge, summit reached on May  
9 by Fumie Shimamura, Kazuyo  
Fujikura, Kiyomi Kurita, Emiko  
Maki & Nawan Yonden (Sherpa)

Personnel : Hisako Yamamoto & 5 members



1983年4月～5月

**チャマル (Chamar) 7177 m**

東稜 7050 m で断念

慶応義塾大学ヒマラヤ登山隊 1983

隊長 宮代良治 隊員9名(ネパール隊員3名)

4月24日, サルブ氷河上 4150 m にベースキャンプ建設。5月1日, 氷河源頭の 4900 m 地点にキャンプ1建設。5日, 東稜の北斜面 5700 m 地点にキャンプ2建設。14日, 東稜の 6300 m 地点にキャンプ3建設。23日, キャンプ3より原田, 赤尾, ドルチェ, ミンマ・ツリンの4名が頂上攻撃したが, 7050 m 地点で断念。同日, キャンプ2で碇隊員が雪崩のため死亡。29日, ベースキャンプを撤収。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

報告 登高会会報 登高行 18号

Area : Manaslu Himal, Nepal

Attempt : Chamar, 7177 m, via the E ridge, to a maximum altitude of 7050 m in May

Personnel : Yoshiharu Miyashiro & 9 members (3 Nepalese)

1983年11月～12月

**ヌンブール (Numbur) 6959 m**

南面より南西稜 登頂 (冬期初)

高崎経済大学山岳部OB会ヒマラヤ登山隊

隊長 菊地建介 隊員4名

11月23日, ドウードクンド・コーラ 4730 m の支溪地点にベースキャンプを建設。12月1日, 支尾根と大雪原を越え, ヌンブール南西稜基部にキャンプ1建設。5日, 南西稜から派生する支稜をルートにとりて登り, 南西稜 5800 m 地点にキャンプ2を建設。斜度 50～60 度の困難な氷壁を登り, 10日, 6300 m 地点にキャンプ3 (雪洞) を建設。11日, 8時出発。三角岩を右から回り込み, スタカットで頂稜へ。13時 23分, 真下, 山田, アンツェリンの3名が登頂。12日, 2次隊として常陸, ニマ・オンチューの2名が登頂する。

寄稿 岳人 1984年5月号, 山と仲間 1984年6月号, Himalayan Journal 40

Area : Khumbu Himal, Nepal

Ascent : Numbur, 6959 m, via the SW ridge, summit reached on December 11 by Tomio Mashimo, Naoki

Yamada & Ang Tuering and on 12 by Tamio Hitachi & Nima Ongchue (the first winter ascent)

Personnel : Sukesue Kikuchi & 4 members

1983年9月～11月

**ダウラギリ I 峰 (Dhaulagiri) 8167 m**

北壁および北東稜 北壁は中止, 北東稜も 7600 m で断念

ウータンクラブ・ダウラギリ I 峰登山隊 1983

隊長 長谷川恒男 隊員 14名

9月26日, ミヤングディ氷河の 4700 m 地点にベースキャンプ建設。10月8日, 北東コル (5700 m) にキャンプ1を建設。20日, 6600 m 地点にキャンプ2建設。31日, 7500 m 地点にキャンプ3建設。11月3日, 長谷川隊長と石井隊員が頂上アタックに向ったが, 強風のため 7600 m で断念。帰路キャラバンで, 隊員1名が急性心不全のため死亡。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Dhaulagiri Himal, Nepal

Attempt : Dhaulagiri I, 8167 m, via the NE ridge, to a maximum altitude of 7600 m in November

Personnel : Tsuneo Hasegawa & 14 members

1983年2月～3月

**フルーテッド・ピーク (Fluted Pk.) 6501 m**

東京雲稜会ネパール遠征隊

隊長 今井吉伸 隊員2名

2月25日, マチャブチャレ・ベースキャンプに入る。28日, 南アンナプルナ氷河の小台地にキャンプ1建設。3月1日, 4760 m 地点にキャンプ2建設。3日, 5240 m 地点までロープを固定する。4日, 降雪のため, トレースも消え, 登頂を断念する。

寄稿 岩と雪 98号, 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Annapurna Himal, Nepal

Attempt : Tent Peak, 5663 m, via the S face, in March to a maximum altitude of 5240 m

Personnel : Yoshinobu Imai & 2 members

1983年9月～10月

**ヒマルチュリ (Himalchuri) 7893 m**

南西面ドルディ・コーラより南西壁 事故の為

6300 m で断念

香川県勤労者山岳連盟ヒマルチュリ登山隊

1983

隊長 高林久蔵 隊員 8名

9月14日、3800 m 地点にベースキャンプ建設。21日、4800 m にキャンプ1建設。30日、5600 m にキャンプ2建設。10月6日、キャンプ3建設のため、4名づつ2隊に分かれて前進中、9時15分 6300 m 地点で先行の金沢、藤田、森里、長谷隊が滑落。長谷・藤田2名が死亡。金沢・森里2名が重傷。7～8日で金沢・森里をキャンプ1まで下す。9日、ヘリコプターで2名をカトマンズへ送る。10～12日、悪天のため遺体収容を断念。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Manaslu Himal, Nepal

Attempt : Himalchuri, 7893 m, via the SW face, in October to a maximum altitude of 6300 m

Personnel : Hisatoshi Takabayashi & 8 members

1983年3月～5月

ヒムルン・ヒマール (Himlung Himal)

7126 m

仙台市役所山岳会ネパール合同ヒマラヤ登山隊  
1983

隊長 吉野慎造 隊員 14名 ネパール隊員3名

3月17日、4050 m 地点にベースキャンプ建設。19日、4320 m の右氷河上に前進ベースキャンプを建設。26日、右氷河を横断し、「くの字クローアル」入口に仮キャンプ1(4620 m)を建設。30日、「くの字クローアル」を抜けてクローアル本流との分岐にキャンプ1(5080 m)を建設。4月5日、クローアル本流を抜けて中央岩稜の稜線に出た。12日、6日よりの連日の降雪の中でルート工作に手こづっていたが、中央岩稜7峰の肩(5660 m)に達する。13～16日は降雪のため停滞。17日、7峰の肩にキャンプ2建設。19日、中央岩稜のルート工作をするが、困難となって退却する。21日、中央岩稜8峰を右氷河側へ迂回して、8,9のCOLを抜け左氷河側の雪田に出る。25日、この地点(5960 m)にキャンプ3を建設。27日、左氷河アイスフォール帯を抜けて東稜COL直下までルート工作。5月3日、東稜COLに達す。4日、東稜コ

ルにキャンプ4(6190 m)を建設。5日、COLより東稜にルート工作を進めるが、予想以上に困難なため 6310 m 地点で退却する。7日、北面に別ルートを探査し、登路の可能性を見い出したが、時間切れのため断念する。14日、ベースキャンプを撤収し、帰路のキャラバンへ向う。寄稿 岩と雪 95号、岩と雪山岳年鑑 '84  
報告書 ヒムルン・ヒマール登山報告書(仙台市役所山岳会創立 50周年記念事業実行委員会編)

Area : Annapurna Himal, Nepal

Attempt : Himlung Himal, 7126 m, via the SE ridge, to a maximum altitude of 6518 m in May

Personnel : Teizo Yoshino & 17 members (3 Nepalese)

1983年10月

クスム・カングル (Kusum Kanguru)

6369 m

南東壁 登頂

関西学生山岳連盟(AAVK)OB会サンナビキ  
同人隊 '83 ポストモンスーン山行

隊長 岡本正人 隊員 6名

10月6日、南東面の Tangnag よりアプローチして 4900 m 地点にベースキャンプ建設。7日、3名でクスカン氷河終了点(5400 m)まで偵察荷上げ。8日、高度順化のできている乃村・堀江の2名(マッシュャブルム遠征後合流)が、アルパイン・スタイルを目指し先発し、5600 m のアドヴァンスド・キャンプで暮営。残り5名は 5500 m まで荷上げ。9日、悪天候のため2名はベースキャンプへもどる。10日、5名は 5600 m へ。2名は停滞。11日、両隊とも停滞。12日、5名はデポ品の回収。13日、乃村・堀江の2名が登ってきて高塚・峯本・藤山の3名とともに上部ルートの偵察に出るが、5800 m からのトラバースが新雪で不安定なため、装備をデポし、5名ともアドヴァンスド・キャンプにもどる。14日、高塚、乃村、堀江、大村の4名で出発。5800 m よりトラバースし、おにぎり岩から南東壁を登り、6196 m のCOLでビヴァーク。15日、アタック隊はビヴァーク地より雪田・北稜をたどり北峰から主峰に登頂し、アドヴァンスド・キャンプへもどる。岡本・峯本・藤山の3名も出発。6000 m 付近のルンゼで下降する4名とすれちがう。ルンゼ左

のセラック上でピヴァーク。16日、3名は北峰登頂(15時)、ピヴァーク地にもどった。18日、全員ベースキャンプに集結。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Khumbu Himal, Nepal  
Ascent : Kusum Kanguru, 6369 m, via the SE face, summit reached on October 15 by Yasuji Takatsuka, Masahiro Nomura, Yoshiaki Horie & Tatsuya Ohmura

Personnel : Masato Okamoto & 6 members

## インド

1983年6月~7月

ヌン(Nun) 7135 m

西稜(センチック氷河より) 6050 mで断念  
秋田高校山岳部会 OB インド ヒマラヤ登山隊  
1983(AIE '83)

隊長 平沢建治 隊員5名

6月16日、ベースキャンプ(4150 m)着。19日、4900 mにキャンプ1建設。24日、5250 mにキャンプ2建設。7月1日、5800 mにキャンプ3建設。7月4日、6050 mまで偵察したが、悪天のため登頂を断念し、下山する。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Kashmir, India  
Attempt : Nun, 7135 m, via the W ridge, to a maximum altitude of 6050 m in July

Personnel : Kenji Hirasawa & 5 members

1983年7月~8月

ヌン(Nun) 7135 m

西稜 登頂

日本ヒマラヤ協会カシミールヒマラヤ遠征隊  
1983年

隊長 飛田和夫 隊員6名

7月31日、タンゴールから入って峠を越えて4100 mにベースキャンプ建設。8月1日、センチック氷河の4900 mにキャンプ建設。6日、スノープラトローを横断し、5400 m キャンプ2建設。8日、5900 mの岩峰を越えてルート作業を進め、6300 mのキャンプ3建設。16日、亀田、細貝、熊田の3名が南稜を登り、南西面をトラバースして西稜に出て登頂する。

Area : Kashmir, India  
Ascent : Nun, 7135 m, via the W ridge from the Sentik Gl.

Personnel : Kazuo Tobita & 6 members

1983年8月~9月

キャシードラル(Cathedral) 6400 m

北稜 登頂

慶応義塾大学理工学部山岳部キャシードラル遠征隊

隊長 斎藤恵志 隊員7名

8月12日、バラ・シグリ氷河出合にベースキャンプ建設。15日、バラ・シグリ氷河のモレーン帯、ホワイト・セイルのアイス・フォール出合4200 mに前進ベースキャンプ建設。20日、バラ・シグリ主氷河上4800 mにキャンプ1建設。22日、キャシードラル氷河5100 mにキャンプ2建設。3本のアイス・フォールのうち左端のものをルートにとり、350 mのロープ作業する。26日、キャシードラル東壁直下5600 mにキャンプ3建設。キャシードラルとチャプターハウスの間に位置するアイス・パス(5800 m)より北稜上へさらに150 mのロープ作業を進める。9月1日、中田、梅村、坂元、高塚の4名が登頂。2日にも井上、宮坂の2名が登頂する。  
寄稿 岩と雪 101号

Area : Kulu, India  
Ascent : Cathedral, 6400 m, via the N ridge, summit reached on September 1 by Masafumi Nakada, Katsuya Umemura, Michiie Sakamoto & Sadao Takatsuka and on 2 by Yoriaki Inoue & Kenichi Miyasaka

Personnel : Keishi Saito & 7 members

1983年9月

KR 4, 6340 m & KR 5, 6258 m

北面より登頂

1983年東京農業大学探検部インドヒマラヤ遠征隊

隊長 豊田茂美 隊員3名

9月7日、4980 mの峠にベースキャンプ建設。9日、KR 5の登山活動開始。10日、5050 mに前進ベースキャンプ建設。13日、5520 mにキャンプ1建設。15日、5950 mにキャンプ2建設。18日、KR 5に全員登頂。20日~24

日本人による遠征・登攀ノート

日は休養と停滞にあてる。25日, KR 4 の登山活動開始。26日, 5820m にアタック・キャンプを建設。27日, 豊田, 鈴木の2名が登頂。  
寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Central Lahoul, India  
Ascent : KR 5, 6258 m, via the N face, summit reached on September 18 by Shigemi Toyoda, Takamasa Tsukamoto, Kazumi Suzuki & Akira Ohta  
KR 4, 6340 m, via the N face, summit reached on September 27 by S. Toyoda & K. Suzuki  
Personnel : S. Toyoda & 3 members

パキスタン

1983年7月~8月

ナンガ・バルバット (Nanga Parbat) 8125 m

北面ラクオト側北東稜 敗退

パンジャブ・ヒマラヤ川崎市教員登山隊

隊長 坂原忠清 隊員4名

7月28日, 3967m 地点にベースキャンプ建設。29日, 4500m にキャンプ1建設。8月3日, 5040m キャンプ2建設。9日, 5820m にキャンプ3建設。10日, 6100m にキャンプ4建設。14日, 坂原, 松井の2名でチョンラ南峰(6448m) に立つ。16日, 釣部も単独でチョンラ南峰に立つ。18日, 松井, 鈴木の2名がモーレンコップにキャンプ5建設。19日, 吹雪のためアタック断念する。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Pakistan  
Attempt : Nanga Parbat, 8125 m, via the NE ridge (Buhl-route), to a maximum altitude of 7070 m in August  
Personnel : Tadakiyo Sakahara & 4 members

1983年5月~7月

ナンガ・バルバット (Nanga Parbat) 8125 m

ルバル側南西稜 事故のため失敗

福岡ナンガ・バルバート登山隊 1983

隊長 新貝 勲 隊員16名

5月19日, 3600m 地点にベースキャンプ建設。24日, 5050m にキャンプ1建設。27日,

5400m までルート工作して 登歩渓流会のルートと合流。31日, 6000m にキャンプ2建設。14日, 6500m にキャンプ3建設。17日, キャンプ3上部の雪面で雪崩が発生し, 登歩渓会隊と行動していた隊員2名が巻込まれて負傷する。7月1日, 7300m にキャンプを建設。10日, 7500m にキャンプ5を建設。11日, 悪天と時間切れのため登山中止とする。この翌日, キャンプ3上部で大雪崩が発生し, 3名を失なう。

寄稿 岩と雪山岳年鑑 '84

Area : Pakistan  
Attempt : Nanga Parbat, 8125 m, via the SW ridge from Rupal Side, to a maximum altitude of 7500 m in July, three members were killed by an avalanche  
Personnel : Isao Shinkai & 16 members

カラコルム/パキスタン

1983年8月

Pt. 6885 m

南西稜(ククアール氷河より) 失敗

京都府高校登山部顧問団カラコルム登山隊

1983

隊長 塚本圭一 隊員14名

8月2日, ククアール氷河より入り, 氷河左岸の3950m にベースキャンプ建設。6日, キャンプ1を4350m 建設。アイス・フォール通過に手間どり, 9日, 4700m にキャンプ2を建設。さらに4日を要して, 13日に5350m にキャンプ3建設。15日, バトゥラ・コル(5740m) に達した。翌16日, 4隊員が6250m 地点まで到達するも, 時間切れで断念した。

Area : Karakorum, Pakistan  
Attempt : Pt. 6885, via the SW ridge from the Kukuar Gl., to a maximum altitude of 6250 m in August  
Personnel : Keiichi Tsukamoto & 14 members

ブータン

1983年4月~5月

ジチュダケ (Jichudrake) 6935 m

東稜 断念

ジチュダケ日本女子登山隊

隊長 田部井淳子 隊員 11 名

4月29日、リンシ谷をつめた所にある湖の湖岸 4300m 地点にベースキャンプ建設。5月1日 4600m にキャンプ1建設。3日、5100m にキャンプ2建設。ここから岩峰の連なる稜となる。8日、第3岩峰に到達(5300m地点)。10日、第3岩峰にキャンプ3建設。11日、第4岩峰を巻いて第5岩峰のコルを見下ろす地点まで前進したが、ロープ不足のためここで断念する。ベースキャンプ撤収後、帰路キャラバン中にある 5000m 峰への登頂許可を得て、セプチェカンに向った。20日および21日に5200m のこの峰に 11名の隊員とガイド2名が立つ。寄稿 山と溪谷 1983年8月号, 集英社「LEE」1983年9月号

Area : Bhutan

Attempt : Jichudrake, 6935 m, via the E ridge, to a maximum altitude of 5300 m

Personnel : Junko Tabei & 11 members

## ソ連/パミール

1983年7月

レーニン峰 (Pik Lenin), 7134 m および

北稜スクラトフ・ルート 登頂

ビバノ パミール 30日間体験の旅

隊長 黒沢孝夫 隊員3名

7月17日、ベースキャンプ着。22日、スクラトフ取付(4100m)まで4時間20分。23日、5100m まで5時間。24日、小ピークを越えて核心部の雪壁岩稜に50mのロープを固定して5900m まで6時間半。25日、テントを5500m まで下してベースキャンプへ戻る。7時間半。休養のあと、28日、5500m のテントへ、6時間20分。29日、東稜とのジャンクション(6500m)へ、7時間15分。30日、頂上往復後、5500m のコルまで、8時間半。31日、ベースキャンプへ、8時間半。

寄稿 クライミング・ジャーナル8号

Area : Pamir, USSR

Ascent : Pik Lenin, 7134 m, via the N ridge (Skuzlatove route), summit reached on July 30 by Takao Kurosawa, Isao Obinata & Ki-

ichiro Endo

Personnel : Takao Kurosawa & 3 members

1983年7月~8月

レーニン峰 (Pik Lenin) 7134 m

ラズジェリナヤ・ルートより登頂

コルジュネフスカヤ峰 (Pik Korzenerskaja), 7000 m

ツェトリン・ルートより登頂

1983年高所研究所パミール学術登山隊

隊長 駒宮博男 隊員 11 名

7月17日、アチク・タシのベースキャンプに入る。20日より26日にかけてラズジェリナヤ・ルートにルート工作し、キャンプを3つ建設する。28日~30日、ベースキャンプにて休養する。8月1日、上栗、寺沢、橋本の3名、2日に駒宮、坂上、堀口、東樹、二階、降矢の6名が登頂した。

4日、モスクヴィン・ベースキャンプへ移動する。7日、ツェトリン・ルートより上栗、二階、田中の3名が登頂した。

寄稿 山と仲間 1983年11月号

Area : Pamir, USSR

Ascent : Pik Lenin, 7134 m, via the W ridge, Razdelinaya route, summit reached on August 1 by Yuichi Kamiguri, Masayuki Terasawa & Hisashi Hashimoto and on 2 by Hiroo Komamiya, Toshiaki Sakaue, Hiroshi Horiguchi, Yoshio Toju, Sumito Nikai, Kimikatsu Furuya

Pik. Korzenevskaja, 7105 m, summit reached on August 7 by Y. Kamiguri, S. Nikai & K. Furuya

Personnel : H. Komamiya & 11 members

1983年7月~8月

レーニン峰 (Pik Lenin) 7134 m

ラズジェリナヤ・ルートより登頂

'83 関西パミール・チーム

隊長 石川龍彦 隊員3名

7月17日、アチク・タシのベースキャンプへ入る。18日、4090m 地点往復、20日、4370m 地点往復、21日、ベトログスキー峰(4749m) 往復。23日、キャンプ2(5200m) 往復。25日

## 日本人による遠征・登攀ノート

～26日はベースキャンプで休養。29日、キャンプ3(6000m)往復。31日、キャンプ1(4380m)で休養。2日、石川龍彦、井波美保、石川昌の3名で登頂する。  
寄稿 岩と雪 100号

Area : Pamir, USSR  
Ascent : Pik Lenin, 7134m, via the Razdelinaya route, summit reached on August 2 by Tatsuhiko Ishikawa, Miho Inami & Akira Ishikawa  
Personnel : T. Ishikawa & 3 members

## トルコ

1983年8月

アララット(Ararat) 5165m  
一般ルートより 登頂  
もんだにゆ会 1983年アララット山遠征隊  
隊長 青柳 健 隊員 12名  
8月6日、ドゥバヤズットよりトラックでエリ村に入る。アタック隊4名がトルコ山岳会の1名とともに出発。3200mのベースキャンプを越え3700mのアタック・キャンプまで登る。7日、4時出発。熔岩の砕けた不安定な大石の連続する所を登り、4300mあたりから雪渓となる。5000m地点で尾根を登り切り、頂上へ続く氷河上の緩斜面となる。10時45分登頂。  
寄稿 岳人 1983年11月号、

Area : Turkey  
Ascent : Ararat, 5165m, via the normal route, summit reached on August 7 by Akira Setogawa, Shinji Matsumoto, Seiki Nasuno & Masami Emori  
Personnel : Ken Aoyagi & 12 members

## アンデス

1983年6月

イエルバハー(Yerupaja) 6634m  
西壁 頂上直下50mで断念  
山猫同人隊  
隊長 川嶋保幸 隊員4名  
6月13日、ハウアコーチャ氷河湖畔4000mにベースキャンプ建設。15日、雪線手前の5000

mにキャンプ1建設。17日、西壁基部5600mの氷河上にキャンプ2建設。キャンプ2への荷上げを完了し、ベースキャンプへ戻って休養をとる。キャンプ2より西壁のコル(稜線上)まで高度差900mの氷壁登攀に対し、2組の登攀パーティーとする。一次隊(川嶋・早川)、二次隊(千田、和氣島)。24日、一次隊出発。西壁中間部にあるクレバス突破が困難で、右に回り込んで氷塊下の雪壁でビヴァーク(6000m)。25日、23ピッチで西壁を抜けて稜線に達する。6400mのコルで2回目のビヴァーク。26日、稜線上の不安定な雪をラッセルして主峰へ向かうが、悪い雪に危険を感じ、頂上直下50mで断念する。尚二次隊は西壁6200mにて高山病のため敗退する。  
寄稿 岩と雪 100号

Area : Cordillera Huayhuash, Andes, Peru  
Attempt : Yerupaja, 6634m, via the W face, they gave up the summit at the point (6580m) merely 50m under the peak because of feeling the danger of threading through snow cornice  
Personnel : Yasuyuki Kawashima & 4 members

## アラスカ

1983年6月

マッキンリー(Mt. Mckinley) 6194m  
ウェストパットレス 事故のため敗退  
グレイシャー同人マッキンリー登山隊  
隊長 山上幹夫 隊員4名  
6月2日、4300mにベースキャンプ建設。9日、5200mにアタックキャンプ建設。10日、千葉、渡部の2名が頂上へ向かうが、アーチデーカンズ・タワー直下5900mの地点で滑落負傷する。これによって登山活動は放棄された。

Area : Alaska  
Attempt : Mt. Mckinley, 6194m, via the W Buttress, however they gave up their attempt at 5900m because of sustaining injuries by slipping and falling accident  
Personnel : Mikio Yamakami & 4 members



**Mizuno**  
THE WORLD OF SPORTS

からだは曲線で囲まれている

だから結論は、曲線ザック

# MIZUNO ATTACK SACK

インナーフレームタイプの曲線ザック2タイプ

19RA-5021 ¥22,000

60×70cm 45ℓ ナイロン・レザースタック

19RA-5031 ¥21,500

55×60cm 30ℓ ナイロン・レザースタック



人の体のシルエットに沿わせ  
たボディ曲線でザックの新しい  
カタチを示した曲線ザック  
インナーフレームタイプも登  
場して、ラインアップ増々充実。  
背中のカーブに合わせた  
アルミ製曲線フレームにより、  
重心位置を背中側に移動。  
体感重量を軽減し、さらに  
背負いやすさを極めました。



# 山と旅の本



山のパンセ

●A5変型判/1500円  
串田孫一

若き日の山

●A5変型判/1500円  
串田孫一

心の歌う山

●A5変型判/1800円  
串田孫一

山と別れる峠

串田孫一  
●A5変型判/1600円

日記

1943年/1946年  
●四六判/2300円  
串田孫一

きたぐにの動物たち

本多勝一  
●A5変型判/1200円

山を考える

●四六判/1200円  
本多勝一

冒険と日本人

本多勝一  
●四六判/1200円

常念の見える町

蜂谷 緑  
●四六判/1380円  
—安曇野抄—

アルプス青春記

朝比奈菊雄  
●A5変型判/1600円

山の博物誌

●A5変型判/1500円  
西丸震哉

山の動物誌

●小B6判/1000円  
西丸震哉

花よりワイン

小島直記  
●小B6判/1000円

東京付近の山

ブルーガイド編  
●A5変型判/1800円

東京付近の散歩道

田中 伸/毛利好彰  
●A5変型判/1600円

ブルーガイド海外版⑬

●880円  
ヨーロッパ・アルプス

ブルーガイド海外版⑭ネパール・パキスタン

●1380円  
ヒマラヤ・トレッキング

ブルーガイド海外版⑮

●880円  
アラスカ

ブルーガイド海外版⑯

●930円  
ニュージージーランド

ベランのパノラマ

H・C・ベラン  
●B4判/23000円

スイス・パノラマ

E・シユルテス  
●B4横長変型判/26000円

# 信頼されて50年

## 山とスキー用品専門店



### 山友社 **たかはし**

四谷本店 〒160新宿区三栄町3番地 TEL (351)7432-1912  
八重洲口店 〒103中央区八重洲1-5-11 TEL (271)1560-8575  
新宿店 〒160マイシティ5番街 TEL (352)6564



## 山と山スキーの専門店

クレッターザック  
キスリング  
夏冬用テント  
門田ピッケル  
// アイゼン

# 片桐

東京都文京区湯島3-38-9  
☎113 片桐盛之助

電話 東京(831) { 1794番  
6680番

トレッキングから

エクスペディションまで

# 世界の山旅



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯へのツアーやインフォメーションも用意しております。

トレッキングのパッケージはもとより遠征隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業490号・日本旅行業協会正会員・ロイヤルネバール航空代理店



## アルパインツアーサービス株式会社

東京/〒105 東京都港区新橋2-2-2(川志満ビル7階)

☎ 03(503)1911(代表)

大阪/〒541 大阪市東区備後町5-15(東洋ビル4階)

☎ 06(227)5194(代表)

名古屋/〒450 名古屋市中村区名駅3-23-2(第3千福ビル3階)

☎ 052(581)3211(代表)

福岡/〒810 福岡市中央区大名2-9-25(わこうビル3階)

☎ 092(715)1557(代表)

ハード・フリーから沢登りまで  
本邦初のバリエーション・ルート・ガイドの集大成！

# 日本登山大系 全10巻

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編 各A5判

- |    |                |      |         |
|----|----------------|------|---------|
| 1  | 北海道・東北の山       | 三八八頁 | 定価三二〇〇円 |
| 2  | 南会津・越後の山       | 三七〇頁 | 定価三二〇〇円 |
| 3  | 谷川岳・奥利根        | 二七六頁 | 定価二六〇〇円 |
| 4  | 東京近郊の山         | 二五八頁 | 定価二五〇〇円 |
| 5  | 剣岳・黒部・立山       | 二九二頁 | 定価二八〇〇円 |
| 6  | 後立山・明星山・海谷・戸隠  | 二九六頁 | 定価二八〇〇円 |
| 7  | 槍ヶ岳・穂高岳        | 三〇六頁 | 定価二八〇〇円 |
| 8  | 八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス | 三二六頁 | 定価二八〇〇円 |
| 9  | 南アルプス          | 三二六頁 | 定価二八〇〇円 |
| 10 | 関西・中国・四国・九州の山  | 四六二頁 | 定価三九〇〇円 |

## ヒマラヤ文献目録

薬師義美編

ヒマラヤ、チベット、中央アジアの登山と探検に関する内外の  
図書・パンフレット・地図等をくまなく網羅した世界に類のない  
文献目録。欧文図書三七五〇点余、邦文図書八五〇点余を収録。  
B5判 七五九頁 定価一九〇〇〇円

リカルド・カシン著 水野 勉訳

## 大岩壁の五十年

四六判 写真二頁  
本文二七八頁  
定価一九〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町三―二四  
振替東京九―三三三二八／電測一七八―一  
白水社

貸ギャラリー予約受付中!!

(3F)

ギャラリー



壁面延長27.7m  
壁面高さ2.42m

山岳写真展などにもご利用下さい

東京・神田 悠久堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町1-3

TEL. 03-291-0773

至水道橋駅

至お茶の水駅



# 本の

# 購入・販売

## 山岳書、動・植物書

山岳名著選集

●各巻A5判

# ナンガ・バルバート回想

カール・ヘルリッヒコフアー●著

岡沢 祐吉●訳

■定価1900円

戦前から難攻不落の畏峰として多くの人命を奪ってきたナンガ・バルバートへの挑戦と征服の記録。ドイツ隊のたび重なる悲劇をはじめ、過去この魔の山に挑んだすべてのパーティーの克明な登山記録など貴重な資料もつけられている。日本隊の遭難も伝えられる昨今、この山への関心が急速に高まっている。

プモ・リ世界で最も美しい山

ゲルハルト・レンザー著/橋本徳也訳・定価2500円

冬のアイガー北壁初登攀

トニー・ヒーペラー著/横川文雄訳・定価1200円

エヴェレスト登頂記

J・アルマン著/丹部節雄訳・定価2500円

遙か天山 [天山に魅せられた探  
なる天山 [険家セミヨーノフ伝]

A・セミヨーノフ著/田村俊介訳・定価2500円

アムネマチン初登頂

上越山岳協会編・定価2400円

北アルプス白馬讃歌

大谷定雄著・定価1900円

"遠い頂" ヌプツェ

登歩溪流会 編・著・定価2500円

ダウラギリ登頂

M・アイゼリン著/横川文雄訳・定価1500円

パミール [シルクロードの城塞]

田村俊介編・著・定価2500円

中央ア高峯 [パミール速攻日本  
ジアの高峯 [山岳会隊の記録]

原 真/田村俊介編・定価2500円

スイスの山々 [SAC山案内  
人の体験談]

オレル・フュスリー社編/岡沢祐吉訳・定価1900円

豪華写真集 アムネマチン

●上越山岳協会 編

●A4 変型判上製

●定価4800円

中国登山ハンドブック ●上越山岳協会 編

●A5判/定価1800円

登山ハンドブック・シリーズ 全6巻

山岳研究会 編 ●A5判

各巻 ●定価980円

1 登山教本 2 登山技術 3 世界の山岳  
4 山の心 5 山の自然科学 6 山の資料



BASEBALL MAGAZINE SHA

株式会社

ベースボール・マガジン社

〒101 東京都千代田区神田錦町3-10-10



雨宮 節 登山とスキーの店

代々木

山幸

〒151 東京都渋谷区代々木1-21-9

☎ 03(370)1100

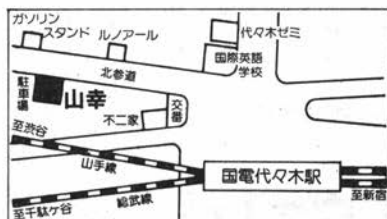
●年中無休 AM11:00~PM9:00(日・祭日PM8:00) (下車徒歩3分、駐車場もあります。)

●初心者への山案内

常設登山相談室

〈山幸登山学校〉

年間を通じての登山教室を開講いたします。  
新緑の頃の親子参加のキャンプ教室、清流の沢登り、植物観察山行、アルプスの夏山教室、岩登り、新雪の雪山教室等を企画しています。又、ガイド付きのコース案内もいたしますのでご相談下さい。



よりよきテントの最高峰を  
めざす吉田テント!

- 1978年 植村直己北極点単独旅行
- 1978年 日本大学北極点遠征隊
- 1980年 植村直己アコンカグア登山隊
- 1981年 北海道大学バルンツェ登山隊
- 1981年 植村直己冬期エベレスト登山隊
- 1981年 明治大学エベレスト登山隊
- 1981年 早稲田大学K2登山隊



夏山用テント

冬山用テント

テントの専門メーカー

小さな店の大きな自信! 吉田テント 〒167 東京都杉並区桃井1-3-3  
☎(399)2548・夜間(398)8469

登山家待望の『山の総合事典』

# 岳人事典

編集委員 徳久球雄 塚本珪一 湯浅道男 雁部貞夫

山を愛する人なら、誰もが実感する、山と人との一体感。その山と人との深い関わりを重点を置きながら、山の全体像を解明した画期的な事典。いま、引く事典から、読んで楽しむ事典への山岳愛好家必備の、山の大百科。

【主な内容】  
日本人名編 国内の名クライマー150人を網羅  
外国人名編 若手を含め世界の名クライマーを紹介  
概論編 現代山岳界最高の執筆陣による多彩な構成  
一般用語・用具 技術編 六〇項目にわたり解説  
資料 内外山名一覧、登山年表ほか



登山の知識と技術をシリーズで徹底網羅。

## 新岳人講座 全九巻

監修 徳久球雄 塚本珪一 湯浅道男 雁部貞夫

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 第一巻 アルピニズムⅠ | 第六巻 世界の山Ⅰ |
| 第二巻 アルピニズムⅡ | 第七巻 世界の山Ⅱ |
| 第三巻 技術と用具Ⅰ  | 第八巻 山と文学  |
| 第四巻 技術と用具Ⅱ  | 第九巻 山の科学  |
| 第五巻 日本の山    |           |

体裁 A5判上製本  
箱入り464頁  
定価5000円(税別)350  
好評発売中

大好評 東京新聞の山岳書

関東ぶらり山歩き

岳人編集部編  
定価8000円

関西ぶらり山歩き

岳人編集部編  
定価8000円

山の雑学ノート

岳人編集部編  
定価6800円

登山三三三百科

兵人編集部編  
定価6800円

実戦現代山スキー

佐伯邦夫著  
定価16000円

「実戦」山岳写真

川口邦雄著  
定価24000円

山の天気を知る法

飯田睦治郎著  
定価13000円

岩場ルート図集

小森康行監修  
定価23000円

日本の岩場

小森康行著  
定価32000円

ヨーロッパの岩場

小森康行著  
定価38000円

登山の医学

J・A・ウィルカーソン編  
東大スキー山岳部医学部OB・訳  
定価20000円

40歳からの山歩き

岳人編集部編  
熟年世代の入門コース精選60関東編定価8000円

# 豊かな

# 生活環境を築きあげる……………

## (建 材)

- カーテンウォール
- サッシドア
- 取替サッシ
- 用途別サッシドア
- 各種間仕切
- アルミ発色NKカラー

## (機 器)

- 工業用フィルター
- 水処理装置
- 熱交換器
- フィンチューブ
- 真空凍結乾燥装置
- 各種精密金型

## (電 機)

- 電気洗濯機
- 衣類乾燥機
- ウォータークーラ
- 冷凍・冷蔵ショーケース
- 各種ショーケース
- アイスクリームストッカー

# 日本建鐵株式会社

取締役相談役 早川 種三

東京都千代田区大手町2-6-2 〒100

TEL 東京 (03) 270-6511(大代表)

# 飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部  
品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橋エンジニアリング

名古屋市中区橋一丁目27番8号

〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)





ジャパンゴアテックス株式会社



制  
覇

の  
条  
件。

1. 鍛えぬかれた肉体 2. 強靱な精神 3. 極限に耐えぬく装備

ゴアテックス®ファブリス——優れた防水機能と完璧な防風機能、そして抜群の透湿機能と類を見ない対汚染機能を同時に合わせもつ理想のアウター・ウェア素材。時として、人間の肉体と精神を否定するかのような極限状況をも完璧に克服する。まぎれもなく、制覇の条件のひとつ——ゴアテックス®ファブリス。

ゴアテックス®ファブリスの秘密を詳説したゴアテックス・ブックをさしあげます。——住所、氏名、年齢、職業、掲載誌名を明記して、〒156 東京都世田谷区赤堤1-42-5 ジャパンゴアテックス株式会社マーケティング本部広報・宣伝グループまでご請求ください。☎03-327-0011(代表)



GORE-TEX®

# 山岳宗教史研究叢書

●好評重版 取揃え販売中

山は魂のかえりゆく原郷であり、再生の場であった。煩惱にあえぐ人間の死と隣合せた滅罪苦行がそこにはあった。本叢書は、東北から九州にわたる無数の信仰の山々をとりあげ、日本人の精神文化の根底に挑む新たな光明である。

- 17 18 修験道史料集 II 東日本篇
- 16 修験道の伝承文化 II・I
- 14 15 修験道の美術・芸能・文学 II・I
- 13 英彦山と九州の修験道
- 12 大山・石鎚と西国修験道
- 11 近畿霊山と修験道
- 10 白山・立山と北陸修験道
- 9 富士・御嶽と中部霊山
- 8 日光山と関東の修験道
- 7 東北霊山と修験道
- 6 山岳宗教と民間信仰の研究
- 5 出羽三山と東北修験の研究
- 4 吉野・熊野信仰の研究
- 3 高野山と真言密教の研究
- 2 比叡山と天台仏教の研究
- 1 山岳宗教の成立と展開

II I 五	五	中野	宮	五	高瀬	鈴木	宮田	月光	桜井	戸川	五	五	村山	和歌森
¥125800	来重編 ¥6800	野幡能編 ¥5800	来準編 ¥5800	来重編 ¥5800	来重編 ¥5800	昭英編 ¥5800	登他編 ¥5800	善弘編 ¥4800	徳太郎編 ¥4500	安室編 ¥4500	来重編 ¥4500	来重編 ¥4500	修一編 ¥4500	太郎編 ¥4000

名著出版

◎詳細内容見本ご希望の方は名著出版営業部まで  
〒112 東京都文京区小石川3-10-5 TEL(815)1270

ニッチの

## 登山・ハイキングシリーズ

定評ある著者陣容！  
全56巻  
定価各500円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- |              |                |               |
|--------------|----------------|---------------|
| ① 奥武蔵 武甲・雲取  | ② 蔵王連峰         | ③ 金剛山 葛城・岩湧山  |
| ② 奥多摩 大菩薩    | ④ 八幡平 岩手山・駒ヶ岳  | ④ 六甲・摩耶       |
| ③ 奥秩父        | ⑤ 霧ヶ峰 白樺湖・夢科山  | ④ 比良連山        |
| ④ 陣馬・高尾 秋川溪谷 | ⑥ 雲ノ平          | ⑥ 大峰・吉野       |
| ⑤ 丹沢山塊       | ⑦ 妙高・戸隠 野尻湖・黒姫 | ⑦ 大台ヶ原 大杉谷    |
| ⑥ 富士・五湖 ミッ時  | ⑧ 南アルプス北部      | ⑧ 赤目・青山 室生寺   |
| ⑦ 箱根 熱海・湯河原  | ⑧ 中央アルプス       | ⑧ 鈴鹿連峰 御在所・伊吹 |
| ⑧ 奥日光 奥鬼怒    | ⑧ 南アルプス南部      | ⑧ 大山・蒜山       |
| ⑨ 尾瀬 銀山湖     | ⑧ 北アルプス        | ⑧ 三瓶山 帝釈峽     |
| ⑩ 軽井沢 妙義山    | ⑧ 加賀白山 白川郷     | ⑧ 秋吉台 三段峽     |
| ⑪ 伊豆半島 大島    | ⑧ 飯豊・朝日        | ⑧ 九重山 久住高原    |
| ⑪ 三浦半島 鎌倉    | ⑧ 大雪山 鷹雲峽・然別湖  | ⑧ 英彦山 耶馬溪     |
| ⑫ 美ヶ原 霧ヶ峰    | ⑧ 槍・穂高 アルプス銀座  | ⑧ 阿蘇山         |
| ⑫ 谷川岳        | ⑧ 立山・剣 黒部溪谷    |               |
| ⑫ 八ヶ岳 夢科山    | ⑧ 東海自然歩道 I     |               |
| ⑫ 那須・塩原 鬼怒川  | ⑧ 東海自然歩道 II    |               |
| ⑫ 磐梯・吾妻 安達太良 | ⑧ 東海自然歩道 III   |               |
| ⑫ 志賀高原 草津白根  | ⑧ 入笠山 守屋山・高遠   |               |
| ⑫ 上高地 乗鞍岳    | ⑧ 苗場・鳥甲 清津峽    |               |
| ⑫ 黒部・白馬 鹿島槍  | ⑧ 越後三山 奥只見・巻機山 |               |
| ⑫ 房総半島       | ⑧ 御岳 木曾路       |               |
| ⑫ 浅間・菅平      |                |               |



※保存用には  
日本登山地図集

改訂版進行中！

お待ちください。

地図の 日地出版

本社 東京都千代田区西神田2-2-15  
東京 03 (261)5126  
支店 大阪市南区南船場 2-11-23  
大阪 06 (252)7421

# 電話で届くヤマケイの本!

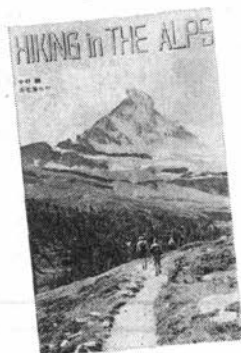
★テレフォン・オーダー・システム ☎03(436)4021

土・日・祝日を除く AM9:30~PM5:30、ご希望の書名と書店名をテレフォン・オーダー係宛ご指示下さい

白き神々の座を仰ぎながら、ビスタリ、ビスタリ歩いてみませんか!

## TREKKING in NEPAL

ネパール・ヒマラヤ・トレッキング案内



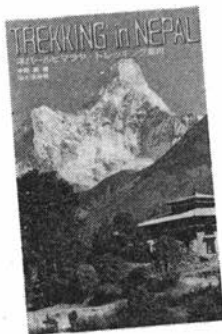
中野 融/著 B5スリム判/264頁 ●定価3900円

親切なシェルパたちのガイドでビスタリ(のんびり)ムードで楽しむヒマラヤの山と人——。東のカンチェンジュンガ山群から西のアビ・ナンパ山群まで、代表的トレッキング・ルート30コースをフルカラーの写真と最新情報でご案内します。

憧れの本場アルプスをオールカラーで紹介!

## HIKING in THE ALPS

ヨーロッパ・アルプス登山ハイキング案内



中野 融/著 B5スリム判/240頁 ●定価3900円

天を突く針峰群や優美な白い女神たちへの登頂、そして山麓の花園と牧場を訪ねるハイキング——。アルプス中央のモン・ブラン山群、ヴァリス、ベルナー・オーバーラントの各山域から展望台14カ所、登山8コース、ハイキング19コースを紹介。

〒105 東京都  
港区芝大門1-1-33



山と溪谷社

☎03(436)4021  
振替・東京8-60249

# パープル・ストーブ

話題沸騰。あの灯油式バーナーが選んできたのです！予熱器装備で着火80秒、内蔵針でススをワンタッチクリーニング、安全弁・油圧メーター付、そして火力は水1ℓが沸騰4分。しかも調理、暖房、照明に大活躍！圧倒的に安くて安全な「灯油」が、今話題の中心。これはマニアチックなスグレモノだ！

## 話題集中の 灯油式!!

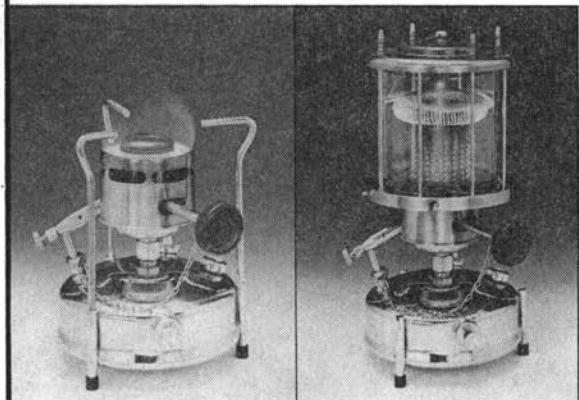
●キャンプ  
●ハイキング●釣り  
●ドライブのお供に

**携帯用  
1台3役**

調理、暖房、照明に大活躍!

燃料：灯油  
タンク容量：0.7ℓ  
燃焼時間：3時間

セット重量：1.5kg  
本体重量：1.0kg



バーナー本体価格  
(標準小売価格)  
¥13,800

セット価格  
(標準小売価格)  
¥19,800

**武井バーナー製造株式会社**  
〒124東京都葛飾区奥戸7-2-10 TEL.03(697)4751

## ジョージ・マロリー

D・ロバートソン 夏川道子訳／マロリーの残した手紙や手記、友人らの回想などをていねいに集めて彼の生涯を詳細に描いた労作。

B 6判 定価二五〇〇円 送料三〇〇円

## ロストワールドをめざして

H・マキニス 長野きよみ訳／コナン・ドイルの名作『失われた世界』のモデル南米ロライマ山に挑んだ登山家たちの異色の探検記。

B 6判 定価二七〇〇円 送料三〇〇円

## 高山病

ふせぎ方・なおし方

P・ハケット 栗山喬之訳／急性高山病の症状や予防法、治療法を医学のしろうとにも分かりやすく解説した便利なフィールド・ガイド。  
新書判 定価九五〇円 送料一七〇円

### ■近刊■

C・ハウストン 中島道郎訳

## ゴイング・ハイ

〈高所への挑戦の物語〉

J・ハント 肘井直樹訳

## ジョン・ハント自伝

〈山そして人との出会い〉

**山洋社**

◎お近くの書店に「地方・小出版流通センター扱い」といってご注文ください。  
〒168東京都杉並区下高井戸1-7-7-418 ☎(03)324-9678 振替 東京7-65227



## 苛酷な条件を克服する。 大自然にやすらぎと快適さを運ぶモンベル

四季おりおりに、美しき姿を見せてくれる我が国の山々。氷雪の王国アルプス、そして人間の限界に挑戦するヒマラヤの高峰。

私達は、大自然の中で人間の能力を最大限に発揮できるよう、機能的デザインと科学的な保温効果の追求から防寒衣料を作り出しています。また、雨の多い日本の気候を研究して作り出したレインギア、ムーンライトテントや、ダクロン/スリーピングバックなど、本当に必要な物を作り続けています。



本社 ● 大阪市西区新町1-34-5 ☎(06)531-4761代 / 〒550  
東京営業所 ● 東京都港区芝大門1-16-4 高山ビル ☎(03)437-9391代 / 〒105

棚田真輔(神戸)表孟宏(松蔭)神吉賢一(神戸)共著  
 プレイランド **六甲山史** 定価 一、八〇〇円

日本ゴルフの黎明期に活躍したグルルトをはじめとする外人・日本人たちのゴルフと山への情熱を語りつつ、六甲の歴史を生き生きと活写する。往時の貴重な写真三〇〇余葉を添えて興趣倍増。ゴルフと山を愛する多くの方々の座右に贈る。学校・自治体より申込殺到中。もより書店にご用命ください。

国鉄山岳連盟編

**駅から登れる山**

新聞・週刊誌  
 絶讃

国鉄山岳連盟が、全国の二百三十四の駅から手近な山を選び、写真コース、イラストなどを盛り込んだ、山岳ハンドブックの決定版。

四六変型版 定価 九八〇円

高橋定昌

日本山岳協会・顧問、元日本山岳連盟・理事長

**日本岳連史**

— 山岳集団  
 50年の歩み —

都道府県岳連が、今日に至るまで、歩んできた歴史を略載し、その中でおこってきたいろいろな事件、エピソードなど。永く山岳集団の中にあつて、その歩みをもつめてきた著者のユニークな編・著書

新書判・上製函入・総頁五〇〇・定価 二、二〇〇円

東京都千代田区神田小川町2-3-2  
 TEL (03) 233-3241

(株) 出版科学総合研究所

待望のクライミング・ガイド・シリーズ、配本開始!

**CLIMBING GUIDE BOOKS**

●全12冊 ●B6判平均240頁 ●定価1,200円 ●ルート図、写真多数掲載

1 北海道・東北	未刊	7 剣岳・黒部	未刊
2 谷川岳	未刊	8 明星山・海谷	未刊
3 奥秩父	未刊	9 関西周辺	60年春
4 関東周辺	60年春	10 中国・九州	未刊
5 甲斐駒ヶ岳・北岳・宝剣岳	未刊	11 アイスクライミング	発売中
6 穂高岳	未刊	12 冬期クライミング	60年秋

**CLIMBING JOURNAL** クライミング ジャーナル 偶数月15日発売 680円

**Fall Number** フォール・ナンバー 〈沢登りと溪流釣り〉 年5回刊 380円

白山書房

〒153 東京都目黒区駒場4-7-8 振替/東京2-29488 ☎03(485)1309

# 山の本 茗溪堂

☎一〇一  
電話〇三—二九一—九四四二  
振替東京八—二四七二三  
東京都千代田区神田駿河台二—一

## 山なみ帖

小谷隆一 3,200円

わが登高山 上巻 3,800円  
三田幸夫 下巻 4,500円

静かなる山 正篇 1,700円  
川崎精雄ほか 続篇 1,800円

## 登山史の周辺

山崎安治 3,800円

## 登山史の発掘

山崎安治 2,500円

## 快晴の山

織内信彦 2,500円

## 森林・草原・氷河

加藤泰安 2,500円

## 山に忘れたパイプ

藤島敏男 3,200円

## 折々の山

望月達夫 1,900円

## 山を見る日

川崎精雄 2,900円

## 山は満員

渡辺公平 2,200円

## 山・人・本

島田 巽 2,400円

## すこし昔の話

初見一雄 1,200円

## 我がスキーシュプール

麻生武治 3,400円

## 小さな頂

一原有徳 2,900円

## 北の山 続編

伊藤秀五郎 2,700円

## 詩集 山の風物詩

伊藤秀五郎 1,400円

## 日高山脈

北大山の会 2,400円

## わたしの草と木の絵本

坂本直行 1,200円

## 山日記 昭和60年

日本山岳会編 1,400円

## 原野から見た山 画文集

坂本直行 4,200円

## 山・原野・牧場

坂本直行 1,500円

## 雪原の足あと 画文集

坂本直行 3,800円

## 坂本直行 淡彩画絵はがき

1集、2集、3集 各300円

4集 400円

## ランタン紀行

エーデルワイス・クラブ 1,500円

## ナンダ・デヴィ縦走1976

ナンダデヴィ登山隊 3,900円

## マナスル1974

日本女性マナスル隊 3,400円

## 登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進 900円

## 遙かなる未踏の尾根

日本山岳会東海支部 4,800円

## グリンデルヴァルトの山案内人

ブラーヴァン 3,800円

## 続ブータン感傷旅行

小方全弘 1,500円

## いつまでも一山

礫石鑲吉 1,400円

## 出岳 日本山岳会

62年、64年、65年各2,000円

63年2,200円、66年2,300円

67年、69年各2,500円

68年、71・72年合併号、73年

74年、75年、76年各3,000円

77年3,500円、78年3,500円

山岳総索引 1,000円

(第26年第1号から第60年まで)

## 低山高蹠

神谷恭遺稿と追悼 2,900円

## 山ひとすじ

中村謙遺稿と追悼 3,400円

## 編集後記

「山岳」をどういう性格のものにするか。この問題が編者の頭からずつとはなれなかった。四年前に編集を引受けてからいつも考えていたことで、毎年の「編集後記」でそのことにふれてきたが、未だに明確な方針を樹立するに至らなかった。

「山岳」は明らかに日本山岳会の機関誌である。したがって、本会の活動がそのまま反映されるものでなければならぬ。「追悼」や「会務報告」などはそのいい例であろう。問題はその他の「記録」「図書紹介」「研究」などの記事であろう。これらを会員だけのものに限定するのが良いのだろうか。この点については編者は保守的である。創刊以来、「山岳」は会員以外にも広く解放して来た。日本山岳会が日本を代表する山岳会であり、「山岳」が日本を代表する山岳雑誌だからであった。編者は今でもそうありたいと願っている。だから、「山岳」は日本の登山についての主な記録や書評や研究をその内容としたと思う。

けれども、編者の頭の中をいささかの疑念がよぎる。現在では、記録や書評を掲載する場が他にも存在するようになった。現実、年刊の「山岳」より早く記録その他が発表されてしまう。「山岳」はいつも後追いである。新鮮な記事が少ないという批判が起きるのも当然であろう。「日本山岳会」ではなく「日本の山岳界」という広い分野を対象としている限り、これはどうしようもないことである。また日本山岳会に限定しても、会の遠征登山ですら、そのパーティによって他の雑誌にいち早く記録が発表されてしまうのが現実

である。もし「山岳」に新鮮さを求めるならば、もはや「山岳」から記録を削除する以外にはない。編者にはその勇氣はない。

現在、記録については次のように考えている。ジャーナリスト的な立場をはなれて、客観的にすぐれた登山活動についてまとめること。したがって記録としてすでに発表されたものでも掲載する。また、文章としてもすぐれた紀行を掲載する。という風に考えての編集だが、この方法が現実にもまくいつているかどうかというと、編者自身いささか疑問を持つ。しかしながら、あるべき姿としてはこう考えざるを得ないのである。

記録には新鮮味がないという批判と同時に、記録の内容が海外の登山に片寄りすぎ、日本の山の記事がないという批判のあることも承知している。しかし、国内における登山が、現代の登山とどう結びつけるかというのがたいへんむずかしい。登山に対する哲学的思考あるいは新しい方法を経ないで、国内の登山を扱うわけにはいかないのである。登山は常に困難を克服しておこなわれてきたから、そのような登山史の流れとは別な方法をみつけなければ、国内の登山を扱うわけにはいかないであろう。山に関わり方にもいろいろの方法がある。各人が好きなように関わりを持ってばよろしいのであるが、それが他の人あるいは社会と関わる場合には、他の人びとを納得させ得るものでなければならぬ。国内の登山においても未だ残された分野が多いと思うが、海外登山ほど問題を把握するのが容易ではない。そして、これは編者だけの問題というよりは会員あるいは広く日本の山岳界全体の問題であろう。多くのすぐれた登山家は各人各様に自分の神話を創造してきたのだと思う。「山岳」こそこ



の問題をつきつめて考えるべき場所のように思う。

今号についていえば、もう少し早く発行できるはずであったが、いろいろな理由で遅れてしまった。そのうえ、当然掲載されるべき記事を載せることもできなかった。ごかんべん願いたいと思う。今号についても多くの人びとの御協力を仰いだ、特に、ハロルド・ソロモン氏および広羽清氏には編集上で御世話になった。四年にわたって各方面で御協力いただいた方々に対して、心から感謝する次第である。そしてまた、苦勞の多い編集という仕事にたずさわる将来の編者に対しても、御協力いただくようお願いする。(水野)

編集委員

水野 勉・堀内 章雄  
児玉 茂・高野 啓介  
森 幸順

山岳 第七十九年(通卷一三七号)

一九八四年十二月一日発行

価三五〇〇円

発行所

社団法人

日本山岳会

東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

(〒一〇二)

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

発行人 佐々保雄

編集人 水野勉

印刷所 株式会社 技報堂

発売所 株式会社 茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台二一一  
電話 東京二九一局九四四二番  
振替口座 東京八一二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

# 山岳テントの結論、ダンロップ。



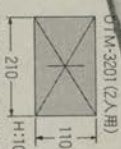
2人用 3人用

OTM-3201 ¥37,000

OTM-3301 ¥45,000

●重量/約2.4kg (ポール、フライシート付)  
●色/ベージュ(本体)、コン(フライシート)

●重量/約2.6kg (ポール、フライシート付)  
●色/ベージュ(本体)、コン(フライシート)



## 冬用外張

2人用外張

OTM-3200S

¥20,000

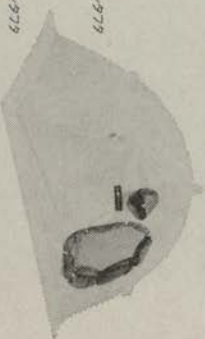
3人用外張

OTM-3300S

¥22,000

●重量/約1.1kg ●素材/ナイロンタフタ

●重量/約1.2kg ●素材/ナイロンタフタ



# DUNLOP

株式会社日本ダンロップ 〒662 西宮市浜旗甲1番29号 ☎0798(35)8447

The Journal of  
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. 79

1984